
真・恋姫†無双 ～ナナシ編～

そばつゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～ナナシ編～

【Nコード】

N37310

【作者名】

そばつゆ

【あらすじ】

とある事件で死んでしまった主人公。その後無理矢理『真恋』の世界に転生され、自分の正義を信じて乱世を駆け抜ける……予定（苦笑）

なかなか駄文+ご都合

も構わない！という人はどうぞお進み下さい
また、後付け設定等も多く、多々読みにくい箇所があります

祝 PV2000000突破！&お気に入り登録800件突破！

皆さん、ありがとうございます！

プロローグ（前書き）

初っ端から御都合主義ッス

寛大な心で見てもらえると嬉しいッス

これ処女作ですので、誤字脱字等の指摘やコメントとかしてもらえると助かるッス

プロローグ

「知らない天井だな…」

そうベッドの上で呟いた

「それはそうでしょう候。寧ろ知っていたら不思議なのネ」

…なんかもうツッコミ所満載なのが出てきたぞ？

「どうしたアルカ？鳩が対戦専用ミサイルでもくらったような顔してるよ？」

「や、もうどつからツッコめばいいかわかんないけど、とりあえずあんた誰？そしてここはドコ？なんで口調が一定してないの？あと鳩がミサイルくらってたら鳩跡形もなくなってるからね？」

…言いきつた…。全部言いきつたぜ…。やゝ、もう人間その気になれば何でもできるもんだねゝ

「んゝ？ああ、この口調はキャラ立てツスよ。今の時代キャラ薄いとすぐ消えちゃうツスからねゝ。それと自分一応死神で、ここは自分の書齋みたいなものツスよ」

…そしてこいつも言いきつたよ。全部言つたよ。

…えっ？っーか今こいつ…

「死神？何ソレ？そーゆー設定の遊び？っーか俺はいつここに連れてこられたんだ？」

俺はこの自称死神という女性に今の状況を知る為の質問をただけだったハズなんだが…

「はあ！？あんたマジで言ってるの！？ありえないんだけど、何なのこいつ。覚えてないの？こっちの有り金トバしといて？…ああ、思い出したらムカついてきたし。折角忘れていたっつーのに」

……なんかさつきまでの態度がウソな様にめっちゃ怒ってらっしやるのですが？俺が一体何をしたんだよ…

「だー、もういいよ。何があつたか思い出させてやるから、そしてら私に謝れ」

そう言うつと自称死神は俺の頭に手を翳してきた

~~~~~

「アンデットの殲滅？討伐じゃなくて？」

今俺は依頼したい事があるとの伝言があり、ギルドに入っている酒場に来ていた

俺はとあるギルドパーティーの隊長をやっていて、そこそこ名も知れていて、王宮等からも何度か直接依頼を受けた事もある。だから今回のようにギルドを通さずに依頼された事も何回かある。だが、今回ののは今までのとは少しばかり違うようだ

アンデットは戦闘力は小さいが、再生力が強くまた群れる為、ハンター達からはあまり相手にしたくない魔物である

ちなみに殲滅と討伐の違いはこの場合、討伐は普通の依頼で使われる言葉で、依頼達成の証拠となるモノ（その都度違う）を何かしらギルドに持ち帰る事で、殲滅とは対象となるモノを滅ぼし、後に証拠となるモノや形跡を一切残さない事  
もちろん殲滅の方が依頼料も高くなるし、その分危険も多い。相当な実力者でないと殲滅依頼は引き受けない

「ああ、そうだ。殲滅だ。実はある事業の為に使いたい土地だったんだが、何処からかアンデット達が住み着いて、手が出せなくてなアンデット達の数は確認できただけで、凡そ100体程。とてもじゃないが討伐できる数字じゃない。そこで君達のパーティーのウワサを聞いて、やってもらおうと思ひ、依頼したワケだ」

そこまで言うと言は一旦言葉を切り、運ばれてきたコーヒーにミルクを入れて飲んだ

「だけど、俺達にはアンデット100体も殲滅できるだけの装備は無いぞ？そこら辺どうすんだ？」

俺達は基本的に少人数できる依頼を中心にやっていて、今回のような大規模な依頼はあまり無い為、それ用の装備も常備していなかった

「そこは問題ない。こちらで特別仕様で製造したナパーム弾を手配する」

「特別仕様？威力でも上げてあるのか？」

「いや、そんなちゃつちい物ではない。確かに威力向上もしたが、それ以上に効果範囲の拡張と遠隔操作で爆破できるようにした」

「へえ……。でも遠隔操作なんて付けなくて飛行機使って、上空から

「ナパーム落とせばいいんじゃないか？」

俺は尤もな事を言ったが、

「いや、どうもパイロット達が揃いも揃って、アンデット達のいる地域の上空を飛びたくないと言って、飛行してくれないんだ」

つまり上空からが無理だから歩兵で行くしかなく、それもできるヤツ等が限られていて、そこで俺達に白羽の矢が立ったワケだ

「もちろんそれなりの報酬は出す。お願いできないかね？」

そう言っただけで提示してきた額はリスクを考えても十分魅力的なものだった

「わかりました。この依頼俺達で受けましょう」

~~~~~

「ああ、そうだった、そうだった。そんな感じだったんだよな、で？なんで俺がここにいる事に繋がるんだ？」

「ああ、そこら辺はメンドイんで（作者がそろそろ本編入りしたいなら）簡単に言うけど、あんた達その男に騙されて、現場近くでナパーム爆破されて木っ端微塵になったんだよ。チョーウケるし、
www」

「…えっ？いやいやいや。ウケるポイントが全然わかんないんです

けどっ!？」

え〜っと?つまりはあの男はアンチ俺側の人間で、俺の命がホントの目的だったと?

どんな世界のどんな国でも個人が巨大な力を持てば、快く思わない人間も出てくる。もちろん　もそういった輩には注意していたが、まさか自分が被害に遭うとは想像もしていなかったんだろう。

「…オイ。今俺の名前が黒く塗り潰された気がするんだが?」

「気のせいでしょ。それより自分のしでしかした罪がわかった?わかったなら謝罪と私の金を返してくれない?」

「や、金とか謝罪とか全く身に覚えが無いんですけどっ!？」

「あゝ、あの時あんたを視てたら友達が来てさ、

「ねえ?あの彼が依頼を無事に達成できるか賭けない?賭け金は今の持ち金全部で」

とか宣ってきたワケよ。こっちはあんたの死期が視えるから楽勝だと思ったらあんたあっさり死ぬしさ。なんで死ぬのよ?それから頭キタからあの男は殺して、あんたは魂の輪廻弄って私のトコに連れしてきた

これでおK?何か質問ある?無いならさっさと金払え」

「いや…、そんな事言われても困る……っつーか思いつきり私念じ

「やねえか！」

「まあ、もうそこはいいわよ。これからあなたには私の腹いせで、『真・恋姫十無双』という世界に行ってもらおうし」

「……………はい？」

「ちよつち待つて。今なんつった。真・恋姫十無双？何、その世界」

「んー？ああ、あなたの知らない他のとある世界ではそこそこ有名なゲームよ」

「いや、なんぼゲームの世界なんかには飛ばされなあかねん。普通に次の輪廻に転生でええねん」

「いかん。ビックリし過ぎて口調がおかしくなった」

「だあかああ、腹いせよ。腹いせ。じゃあ、そゆ事で」

「えっ…？あつ、オイ！」

「叫んだ時には遅かった」

「もう既に自分の足元の床は無くなり、体は暗闇の穴に吸い込まれていった……………」

プロローグ（後書き）

やゝ、御都合主義でしたッスね

まあ、こんな感じで進んでいく予定ですので、これからも宜しくお
願いします

第1話（前書き）

いや〜、勢いで書き始めたはいいいんですけど、この執筆システムが全然わかんないツス：orz

あつ、遅くなりました

自分『そばつゆ』と言います

たまたまこのサイトを見付け、皆さんの作品を読んでいる内に自分も…と思い、投稿させてもらっています（日本語変（笑））

駄文なりに頑張っていきたいので、よろしく願います

第1話

「知らない天」：いや、天井ですらないな。何処だココ？」

周りには何も無い

雲ひとつ無い青空が広がっているのみ

しかもなんか体が自由に動かないっつーか、自分の体じゃないみたいだし

「あつ、やっと起きたの？遅いぞ」

「うわっ！？ビックリした…。なんだあんたか。さっきのアレで終わりじゃなかったのかよ？」

と、声のした方に顔を向け立ち上がろうとするが、やっぱり体は思うように動かない

「なによ、そのつれない態度は。折角寝起きにカワイイ女の子が隣にいるっのに」

「いや、なんかそんな事よりも体が動かないんだが？今俺ってどうなってるんだ？」

「んー？まずはそこから説明しないと。今あんたは赤ん坊になっついて、だから体が上手く動かせないんだと思うよ」

「……ぱーどん？」

「だから、今。あんたは。赤ん坊。おK？」

「……りありー？」

「リアリーリアリー」

……ダメだ。さっきのやり取りで意味不明な事態には慣れたつもりだったが、これはホントに意味不明過ぎる…

「あもう、なんでこうなってるのか理由をお教え願えますか？」

そして何故か敬語になる俺

「とりあえず、私があんたの輪廻弄つたのは説明したわよね？それが上司にバレて、こっ酷く説教受けて減俸12ヶ月くらって、尚且つあんたのこの世界での面倒を見るように言われたの。ここまでおK？」

俺は首を縦に振り相槌を打つ

だが、まだこの状況（赤ん坊）には理解できない

「で、あんたを『真・恋姫十無双』の世界に転生させたのは確定してたから、上司でもそこは変更できないらしく、とりあえずサービス付けたワケ。その一つがコレ、『前世の記憶を持って、次の輪廻に行く』なのよ」

「なあ、それはサービスなのか？」

「もちろんよ。その記憶を持って今世で無双できるもの。あんたの戦闘力も継承するし、これであんたは神童と呼ばれるわね。私に感謝してもいいわよ？」

「……………」

何も言えねえってのはこの事か…
まさか謝罪ならともかく、感謝の言葉を請求されるとは思わなかったわ……………」

「あつ、そついや結局聞けてないんだが、ココはどういった世界なんだ？」

「ああ、ココ？ここは三国志っていうあんたとは違う世界の歴史の一部を舞台にした、ゲームの中よ。日本という国ではわりとメジャ―よ？」

「日本？聞いた事ない国だな。三国志ってのはどんな歴史なんだ？」
「当たり前よ。あんたのいた世界とはまた違う世界だもの。三国志ってのは、とある大陸の主導権を巡って色んな王達が争うっていう感じよ」

「へえ〜。で、俺はこれからどうするんだ？」

「この後、孔という家の夫婦があなたを拾うの。その後は簡単よ。あんたには自分の思うままにやってもらって構わないわよ」

「つまり、ホントに第2の人生って事か。なあ、そうすると俺の武器ってどうなってる？あいつ等が無いと話にならないんだが…」

「ああ、あのククリ刀と大太刀？アレならそのうちあんたのトコに戻ってくるから、気にしなくていいわよ。それとそろそろ孔夫婦が

来るわよ」

「了解した。じゃあ、これでとりあえずはさよならだな。

…なあ、最後に名前教えてくれないか？折角知り合ったのに名前も知らないなんて寂しいじゃんか。知ってるかもしんないけど、俺はナナシ。これからどんな名前が付くかわかんないけどな（苦笑）」

「…っ！？／／／（こっ、こいつ赤ん坊の癖になんて顔するのよ！）

わっ、私は天使よ。^{あまつか}天使つて書いて天使よ。^{あまつか}滑稽でしょ？笑えばいいじゃない死神なのに天使よ？」

そういうと、^{あまつか}天使は自嘲するように笑いだした

「んー、別にいいんじゃない？カワイイ名前じゃねえか。そんな事いっつたら、俺なんてなんてナナシだけ？名前有るのに名無し（ナナシ）なんてギャグにもならねえっての。それに名前なんて所詮その人を指す記号だろ？大事なものは名前じゃなくて、お前の中身じゃねえか」

「……っ！？／／／」

「まあ、お前の場合はこれまでの過程がもうマイナスだけだな（笑）」

ちよっとおどけてそんな事を言った

だつてあんなクサイ台詞恥ずかしいじゃねえか

「あつ、あんたはもう！何なn…「おつと、来たみたいだな」えっ？ええ、そうね。じゃあ、私も消えるわ。それじゃあね」

「ああ、またな」

~~~~~

SIDE 孔夫婦

「や、長かったわね、今回の旅は」

「そうだな。まあ、その分稼げたからいいじゃないか」

「にしても、そろそろ子供が欲しいわね」

「なんだ、唐突に。もう諦めたのではなかったのか？あの医者も言っていただろう」

そう、彼女…私の妻だが、昔医者に子供は作れない体だと言われ、  
当時は酷く落ち込んだものだ

「まあ、確かに諦めたんだけどね？それでも諦めきれないのが女  
てもんだよ」

「そんなものなのか…。すまん、配慮が足りなかった」

昔からそうだが、妻の言う事は…いや、女の気持ちは中々わからないものだな

「ん？なんだアレは？」

そんな事を考えていると、妻が道に何かを発見したようだ

「何か見付けたのか？」

「あつ、ああああ……」

「あ？」

妻は突然奇声を発した

「赤ん坊だよっ！？赤ん坊がこんなトコに落ちてるよ！これはもう、私達に育てろって言ってるようなものだねっ！！」

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

…… オイ

あの母親（に多分これからなるだろう）、なんかぶっ飛んだ事言い出したぞ？大丈夫なのか？俺は今だって話進んでねえし……
とりあえず進めるか……

「おぎゃ〜っ、おぎゃ〜っ」

うわっ、何コレ……

めっちゃ羞恥プレイなんすけど？多分今までで一番恥ずかしいぞ？
どうすんだよ、このモヤモヤ…

「ああ〜よしよし。大丈夫でちゅか〜？母ですよ〜 怖くないですよ〜」

……しかもこいつまだ話纏まってないのに母親面しやがったぞ？

「おいおい…まだウチで育てるとは決まっ…t…」

「あんたには血も涙もないのかいつ！？こんなカワイイ赤ん坊が一人でこんなトコに捨てられているんだよ？捨ててあげずに何が仁義ですか！あんたの血の色は何色だい？」

……俺はこの夫婦に拾われていいのだろうか？

そんな感想を抱きつつ、もう全てを諦めた（投げたとも言っ）

第1話（後書き）

第1話終わってまだ現在キャラがでない…

そつ、そんなもんツスよね？

第2話（前書き）

なんか親指が良く動くんで、連続投稿ツス

この話でナナシとナナシにできる新しい家族の姓、名、字、真名は実在した人物からとったり、その場の流れでテキトーに考えたりしたものツス

あんまり深く追求しないでもらえると助かるツス

あと、ようやくナナシさんの武器登場ツス

なので、武器説明を入れたいと思います

武器説明

・ククリ刀×2刀

名前はそれぞれ紅龍、蒼龍

刃渡りはそれぞれ約50cm程

腰のベルトにクロスになるように装着

イメージとしてはバオ？ののアスミみたいな感じ

・大太刀×1刀

名前は紅蓮

刃渡りは約6尺（約182cm）

全長は約8尺（約240cm）かなりでかい

イメージとしては 剣の相 左之助の斬馬刀みたいな感じ

第2話

そして月日は流れに流れた…

あれから17年……

えっ？その間の出来事？あ後は暫く羞恥プレイが続いたよ？

……もうあんま思い出させんといて？

マジお願いッス…

S I D E 〱 ナナシ：あの頃編〱

1歳になり、そろそろいいかと思って、喋り始めたら両親ぶっ倒れたよ

母親なんてそのまま死ぬんじゃないかってぐらい派手に倒れた
そんな時に初めて両親の名前を聞いた（そりゃそうだ）

母親

姓…孔こう
名…勾く
字…崔羅さいら
真名…由ゆう

父親

姓…孔こう
名…宙ちゆう
字…江弥えいや
真名…筑ちく

というらしい

俺は

姓…孔こう
名…融ゆう
字…文拳ぶんきよ
真名…ナナシ

となつた

この時初めて真名つてものを教えてもらった
なんでも、親しい相手や自分が認めた相手でない、呼んではいけ
ないらしい
うつかりでも呼んでしまつたら、首ちよんぱでも文句言えないらしい
…オイ天使あまつか、真名なんて初耳だぞ？もしかしたら俺ソツコー第2の
人生終わつてたかもしんねえんだぜ？

俺の真名はなんでも母さんが寝てる時、死神とか名乗る変な神様の
お告あまつかげしたかららしい
天使初あまつかめてGJ

その後、物凄い勢いでこの世界の知識を吸収していった。この時には俺はもう、周りから神童扱いされた

商人であった読み書きのできる両親が文字を教え、俺はそれをスポンジが水を吸水するかのようにならしていった

まあ、元々ギルドパーティーでトップだったんだ。このぐらいは余裕である

そんな感じで第2の人生も二桁になったある日、両親から大事な話があると言われ、現在居間のような場所で向かい合っていた

「大事な話とは何ですか？」

父さんは何かを決意した、少し…いや、いつもよりも緊張した表情で母さんは俯き、今にも泣きそうな顔で

「ああ、ナナシよ、お前は聡い。ならば遠回しに言うよりも単刀直入に言おう

お前はホントは私達の子供ではないんだ」

(……やっぱりね。その類の話だとは思ってたし、事実も知ってたよ。…だけど、やっぱり言われるところ、なんか辛いものがあるよな……)

「……そうですか。あまり実感が湧かないですね」

「その割には随分と落ち着いているように見えるが？」

「薄々はそうなのではないかと思っていました。……母さんがあま

りにも自分に過保護過ぎるので、『何故、母さんは自分にここまで過保護なのか？』と、村の他の人にも聞いた所、皆曖昧に目を逸らすばかり。ならば、そうなるような自分の立ち位置を考えればいい」

ここまで話した時、ついに母さんは泣き出した

「うう、っ……っ」

「最初は自分が非凡であるからなのかと思った。でも、それでは何か違う。母さんの自分を見る目にはそんな色眼鏡…自分に付いている付加価値で注いでいる愛情ではないものを感じました。後は勘でしたが」

「…そうか。それでお前はこれからどうする？このままココにいるか？お前の能力なら世界を見に行っても通用するぞ？」

「いえ、自分は過程はどうあれ、孔融です。孔家の人間です。もうしばらく母さん達の元で恩返しさせてください」

そう、前世では両親の記憶のない俺にとって、この人達は初めての家族だ

できる事は何でもしたい

「母さん」

ビクッ…！！

「母さんは母さんです。血の繋がっていなくても、自分の母さんに変わりないです。だから、笑ってください。自分は母さんの笑顔が好きなんですよ？」

「うつ…つわあああああ…つ！！」

この日、俺は家族三人で『川の字』になって寝た

翌日、俺は二人に村の倉庫に連れていかれた
その道中

「なあ、ナナシよ。お前ホントは違う言葉使いじゃないのか？」

「えっ？とつ、父さん？何の事でしょう？」

「そうね。隠さなくてもいいわよ。というか、昨日私達の秘密全部
言ったんだから、隠し事は禁止ね」

……この人達には敵わないな、ホントに
まあ、転生以外なら大丈夫だしいいか

「じゃあ、かなり変わるけど、これが俺の口調だから、よろしく。
それと……昨日はホントにありがとう」

そう言うと、二人はニッコリと親の笑顔をくれた

「さあ、着いたぞ」

「そついえばなんでココに？」

「ああ、あんたを拾った日に村に三ヶの武器と見慣れない漆黒の服が落ちてきてね。何かの縁だろうと、あんたが成人するかこの村を出る時に渡そうと思っていたんだ。で、昨日のあの話だよ。もし、あの話の後に違った反応してたら今日のこれはなかったよ」

……武器と服？

もしかして、いや、もしかしなくても紅蓮と紅龍と蒼龍だな
こんなトコにあったのか。まさか外套まであるとは思ってなかった
が…

「どこにしまったかな〜っと。ああ、あったコレだコレ。でもこんな重いなんて持てないぞ？」

「父さん、見せてくれ」

父さんは横に避けて俺が見やすいようにしてくれた

「……………っ！！」

久しぶりにみた俺の相棒達は錆びる事なく、ただそこにあった

天使め、相棒達の収納用ベルト付きなんて、粹な真似をしてくれる…

「ナナシ？」

俺は紅蓮を掴み、そしてそのまま持ち上げた

「ナ、ナナシ！？」「」

両親の驚いた声がハモるが、そんな事気にしていられない

(……ただいま紅蓮……)

そのまま表に紅蓮を置き、両龍の入っているベルトを腰に装着し、
外套を持って紅蓮と共に置く

(……ただいま紅龍……蒼龍……)

両龍を装備したまま両親に向き、そして……

「これは俺が貰っても？」

二人ともまだビックリしたままだが、

「ああ！」

と言って、父さんが力強い返事をくれた

これが今から7年前

俺はその日から毎日鍛練した

鍛練と言うには生温い程に

10年……

あの頃の間を失うには十分な時間

もし天使あまつかの言っていたような乱世に身を投じるなら今のままでは
ぐに死ぬ

俺はまだ死にたくない

同じ失敗はしない

だから、可能性があるのならその可能性を極限まで削って、少しで
もたくさんの人達が笑っていられるように……！！

第2話（後書き）

ようやく次で村出て原作キャラ出てくる……

なんか色々穴だらけの気がしますが…orz
あの秘密打ち明けるシーンとか…

不自然な文章とかありましたらガンガン教えて欲しいツス

それできっと駄文を卒業できると信じてるツス！

第3話（前書き）

ようやく原作キャラ出せた…

程イクの『イク』が漢字無いので、『程イク』でいかせてもらいます

今回、作者初めての戦闘描写入りました

めっちゃ難しいツス…orz

アドバイスとかあると嬉しいツス…

あと、分かりにくい主人公ですけど設定は近々投稿するので、それまで暖かい目で待っていてもらえると嬉しいツス…

第3話

17歳のある日、俺はとうとう決意した

……

……

…

居間で家事や商品の整理をしていた両親を呼び止めた

「母さん、父さん」

忙しい中わざわざ手を止めて聞いてくれる

ホントに自分は両親に恵まれたと思う

「俺、そろそろ大陸を見て廻りたい」

乱世の世はいつやってくるのか？俺は考えた

あまつが

天使は無意味な時代に俺を送らないだろう

ならば、俺が乱世に揉まれずに駆け抜けるだけの力を手に入れる頃に事は起こる、そう思った

俺が一番力が付くならこのくらいの歳だろう事はあの7年前の日から予想していた

だから、今の内に…乱世が始まる前の大陸を見て廻りたい

自分は誰に仕えるのか、誰ならこの人達の笑顔を守れるのかそれを自分で見極めたい

「ああ、もう行くんだね。あんたはホントに良くできた息子だよ。私には勿体ないぐらいのね」

「私は7年前のあの時こそ、ああは言ったが、ホントは行って欲しくなかった。それが今ではお前の姿が眩しくてな。早く大陸中の皆に見てもらいたいぐらいだよ」

『どうだ！俺の…俺達の自慢の息子は！』

ってね

ナナシよ。お前は昔から良くも悪くも普通とは違ってた。最初に言葉を発してから色んなトコで才を見せてもらい、しまいにはあの大人二人掛かりでようやく運べる程の重量を持つ大太刀を振り回す。あまつさえ、その後さらに武を磨いてきた。村が盗賊に襲われた時もお前のお陰で村は無事だった。お前は私達の誇りだよ」

父さんの少し涙混じりの声に、俺は何も言えずにいた
母さんと父さんの俺に対する深い愛情を今まで以上に感じた

「……………じゃ、俺行ってくるよ。またいつかちゃんと帰ってくるから」

俺はくしゃくしゃの顔を見られたくなく、俯いてそう呟くと走って家の前に繋いであった馬に跨がり、最後にもう一度…今度は村の皆に向かって…

「皆！今までホントにありがとう！また…またいつか帰ってくるから！だから、そしたらまた皆、よろしくな…！」

そう叫んで今度こそ第一歩駆け出した

~~~~~

SIDE 〱 筑

「行っちゃったな」

「ええ」

言いたい事はもつとある  
一緒にしたい事ももつとあつた  
でも今はこれだけで十分だろう

「元気でな。いつでも帰ってこい、ナナシ」

そう、もう見えなくなる息子に呟いた

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ

「…困った」

…これはマズイぞ？

「淒く困った」

大事だから二回言った
どうしたのかというと…

「町が何処にあるかもわからんのに食料が切れた…」

しかも…

「……腹減った」

ああ…、天使あまつがが見えてきたかもしれぬ…

…いや、それは嫌だな

やっぱりもう少し頑張ってm……

~~~~~

SIDE~~~~~

「おおー？星ちゃん、前方に行き倒れのような人がいるのですよ」

「ふむ。危険かもしれぬから風と稟は下がっておれ。私が様子を見てこよう」

「了解しましたですよー。ほらほら稟ちゃんも妄想してないでこっちにおいでーですよ」

「…星殿が見知らぬ行き倒れの男に無理矢理……………ぶはっ!？」

「はい。そんな唐突過ぎ妄想してないで……………、トントンしますよ」

……………中々愉快的な三人組のようだ

「ふむ…。これは……………」

と、そこで行き倒れの男を視ていた星と呼ばれていた少女は連れ二人を呼ぶ

「二人共！私達の食料は余っていたか？」

「はいはい。少しならありますよー」

「どうやらこの者は賊ではなく、普通に行き倒れのようだ。少し分けても大丈夫か？」

「大丈夫ですよー」

このやり取りの間、稟と呼ばれた少女はずっとトリップしていた

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

何か良い匂いがする

これはまさか…

「メシかつ!?!」

ガバツ

とても先程まで倒れていた人間の動きとは思えぬ速度で跳ね起きる
ナナシ

「「「……………」」」

いきなりの事に周りにいた三人は固まる
トリップ中だった稟ですら固まる程

「……………アレ?誰?」

現在の空気掴めない俺

…一体、何がどうなってこつなつた?

〱 説明中 〱

……………

……………

30分後

「皆さん方、ありがとうございます」

ここにいる皆さんは、行き倒れていた俺を介抱してくれたのだという

「やゝ、ホントにありがとうございます

皆さんは命の恩人ですよ

あつ、俺の名前は孔融。姓が孔、名が融、字は文举。できれば命の恩人の皆さんには真名のナナシで呼んでもらいたい」

「いや、そんな畏まらないでくれ。私達はたまたま見付けたからであつて、そんなに感謝されても少し困る

ああ、私は趙雲。姓が趙、名は雲。字が子龍。以後、お見知りおきを」

「風は程イクといえます。姓が程で名がイク。字は仲徳ですよ。よろしくです、お兄さん」

「私は訳あつて戯志才と名乗っております。偽名で申し訳ないですが、よろしく願います」

「ああ、改めてよれしく。皆はこれから何処へ？」

「私達はこれから南に一刻程行った所に町があれなので、そこに向かっている所だ」

「じゃあ、悪いんだが、俺も一緒に付いて行っていいか？先程説明した通り地理には疎くて…」

「はい。別に構いませんよ、孔融殿」

「いや、ナナシで構わないですって（苦笑）」

「ところで、ナナシ殿。背中の大太刀と2刀の小振りな剣。戦闘はそこそこできるとお見受けしますが？」

と、趙雲が俺に『』 こんな口でニマニマしながら問うた

「んー、まあ、そこそこでいいならいけますよ？」

キュピーン

…趙雲からこんな効果音が聞こえた気がするぞ？

あんまり良い予感はない
むしろ悪い予感しかない

この手の予感は古今東西当たるものだ
今こそ回h…

「ナナシ殿よ、手合わせ願えないかな？」

……遅かった

だが、俺は嫌な事は断る人間だ

「嫌d…」

「私達は命の恩人であるというのに……」

なんかわざとらしく泣き出したぞ？ヨヨヨとか言ってるし。でもそれ出されると弱いんだよね…

「……はあ。わかりました。手合わせ受けましょう」

「うむ。流石はナナシ殿。そう言ってくれると信じていたぞ」

半ば強制ってか、脅迫だったけど…

まあ、メンドイけど、これもこの時代の戦力調査と割り切るか…

「じゃあ、場所はココ、時間は今でいいか？」

「ああ、構わない」

「なら、やるか」

そう言つと、俺は腰の紅龍と蒼龍を抜く

「おや？背中の大太刀は使わないので？」

「いや、こいつは基本的に対多の時用。普段の戦闘はこいつを使う。不満ですか？」

「いや、そんな事はありません。では、参ります

はああああーっ！！

「

趙雲の武器は槍

間合いを考えればあちらが有利。だが、内に入れば十分俺でも勝てる…ハズなんだが……

「なっ!?!」

趙雲の槍は俺の想像よりも速い。戻しも速い為、かい潜って内にくのはかなり骨が折れるだろう

「そらどうしたっ! 避けるばかりではっ! 私には勝てんぞっ!」

そう喋りながらも鋭い突きや薙ぎを放ってくる

「だが、それだけだ」

俺はもっと速い攻撃を受けた事もある。それこそ前世なんかでは魔法だって飛びかっていた

それに比べればこのぐらいの槍はE A S Y M O D Eだ

……

今心の中でちょっとだけカツコイイと思ってしまいました。ゴメンなさいです

「さあ、反撃タイムだ。祈りは済んだか?」

…… ちょっと試してみただけなんです。反省しています。ゴメンなさい

「たいむ? 何だ、それ……はっ!?!」

俺は瞬動に近い速度で間合いを詰め、趙雲がビックリして反応するまでの間に、ほぼ零距离…拳の届くくらいの間合いで震脚を放つ。俺の震脚は地面を割り、俺諸共趙雲の足元を破壊した

「なっ!?!くっ…!」

それでも趙雲は体のバランスを保とうとするが…

「俺の勝ちかな」

趙雲が体勢を立て直した時には、俺がもう趙雲の首に紅龍を当てていた

あつ、もちろん峰部分っすよ?手合わせでも女性に刃を向けるなんてできないし

「…っ!?!」

…ああ、どうやら私の負けのようだ」

最初、ビックリした顔でこちらを見た後、ふうっと息を吐き負けを認めた

「いやしかし、ナナシ殿は強いな。一体どうやってたら脚で地面を割れるのだ?」

「………気合いかな?」

「ぶっ…ぶくく…っ」

俺のその超テキトーな答えに趙雲は笑う

だって、しょうがないだろ？ホントは地面が揺れるくらいでスキを作るつもりが、なんか地面割れちまったんだから

「いや、ナナシ殿は面白いな。よろしければ私の真名を預かってもらえないか？」

真名を星と言う。ダメですか？」

「いいのか？じゃ、またまた改めてよろしくな、星」

俺はなんだか可笑しくなり笑いながらだが、ちゃんと星と呼んだ

その後、何故か程イクと戯志才（本名は郭嘉と言つらしい）にも真名で呼んで欲しいと言われ、風と凜の真名を預かった

こうして俺達は町を目指していった

第3話（後書き）

作者は星と恋が大好きなのです！

言ってみたかっただけッス…

稟ファンの皆さん、ゴメンなさい。作者の予定ではこれから筆×墨
とかでも妄想する娘になります
だから、早めに謝っておきます
ゴメンなさい
でも、後悔はしてないです

主人公設定（前書き）

なんか次の話が浮かばないので、繋ぎで主人公設定を

なんかこれも穴だらけな気がする…

これは今後も書き足すかもしれません

主人公設定

（主人公設定）

名前

姓…孔こう

名…融ゆう

字…文拳ぶんきょ

真名…ナナシ

ナナシは前世の時、本名だったが、その名で呼ばれた事は無かったという

身長／体重

172cm / 63kg

体格

中肉中背

武器

ククリ刀×2

それぞれ

名前

・紅龍

・蒼龍

刃渡り

約50cm程

大太刀×1

名前

・紅蓮

刃渡り

約6尺（約182cm程）

全長

約8尺（約240cm程）

武器は漆黒の外套（お気に入り）の上から腰にベルトを巻き、ベルトにクロスさせククリ刀を収納
大太刀はその上から袈裟懸けに背負う

武器のイメージとしては

ククリ刀 バオ？のアスの持っているようなの

大太刀 　　る　　劍の相　　左之助の斬馬刀みたいなやつ

戦闘スタイル

基本的に何でもそこそこ戦える

ククリ刀を使う時は力よりも速さを重視し、あまり重い攻撃を受け止めたりはできない

大太刀を使う時は基本的に対多

ただ、力加減のコントロールができない為、使った時は人間台風と化し、周りには何も残らない

肉弾戦はかなりの我流

拳技最強の二重の極み（だと作者は思っている。異論は認める）や、零距离の震脚等、使える技は何でも取り込む

性格

面倒な事が嫌いで、面白い事が好き
事なかれ主義

座右の銘は自由奔放

主人公設定（後書き）

なんかPVとかユニークが思ってた以上にたくさんあって、めっちゃ嬉しいツス、（＜ ＞）ノ

もうちょっと数増えてキリ良くなったら、スペシャル話みたいなのをやりたいと思う次第です

皆さんこんな駄文に本当にありがとうございます

第4話（前書き）

昨日初めて感想頂きました

作者一人では気付かない事、わからない事、矛盾している事等、皆さんの意見を参考にしより良い文章にしていく事ができます

もちろん皆さんに読んでいただくだけでも、作者は嬉しいです

皆さんありがとうございます

宝ケイもでない…

第4話

SIDE 風

それにしてもお兄さんの武には驚かされました。星は決して弱いわけではなく…、むしろとても強いのですのに

「宝ケイはどう思いますか？」

「オウオウ、そんな事を俺にきかれてもわかるワケねえだろ」

「ですよー。ではお兄さんの武以外ではどうですかー？」

「それ」

「風殿……。一体何をやっているのですか……」

「ぐう」

「いきなり寝るなっ！ー全く、ナナシ殿の事で相談したい事があったて来てみれば……クドクド」

「や、つい、うとうととですねー」

それよりも稟ちゃんがお兄さんの事で相談とは…ニヤニヤ」

「なっ、なんて事を言っんですかっ！？私はただナナシ殿の……ぶはっ！？」

「はーい。トントントンするですよー」

……でも、ホントにお兄さんの弱点ってあるのでしょうか？
武は文句なし、人柄はまあ悪くないですし。知はわかりませんが、
なんでかそつなくこなしそうですねー
直接聞いてみますかー

にしても稟ちゃんには、少し自重してほしいですよ。周りが惨劇（
稟の鼻血）になっているですよ

~~~~~

SIDE（ナナシ）

「と、言う事でお兄さん。お兄さんって弱点あるのですかー？」

「オウ兄ちゃん。正直に全部ゲロっちゃえて」

いきなり脈絡無く、風達（？）が目の前にやってきてあの台詞だ

「どうした？急に。俺にだって苦手なモノぐらいあるし、できない  
事だってあるさ」

「ほう……。それは実に興味深い話で。もちろん私達にも話してくれ  
るのでしょうか？」

「確かに。ナナシ殿の苦手なモノなど、私達には想像もできません

から

……アレ？なんか増えてる？

「あの…、稟さん？星さん？なんでいるのですか？」

「これはこれは、なんとも心外であるぞ？ナナシ殿。私達は短い間とは仲間ではないか」

…星はわざと俺が逃げにくいような言い回しをする  
なんで？

「わっ、私は知的好奇心というものからくるものであり、決してナナシ殿の事を……ブツブツ」

……「っちはこっちでトリップしてるし……」

「……ぶはっ」

あっ、ぶっ倒れた

「……ナナシ殿は、実は受けで……ブツブツ……」

………しかもかなりとんでもない妄想してるぞ？なんだ、俺が受け  
って……

どんな展開になったらその妄想にたどり着くんだよ

「はい。トントんしますよー。…トントん」

「では、早速教えてもらいますぞ、ナナシ殿」

……はあ。これは、諦めて言うしかないか…

「実は…」

「ふむ」「はい」「じー」

…さっきまで自由行動だったのに、急に団体行動になったぞ？

まあ、いいか

気にしたら負けだ

ちなみに上の相槌は左から、星、稟、風

どうでもいいですね、はい

「実は、ここらで一杯おち…」

「お茶が怖いとか、饅頭怖いとか言うワケないですよ？ ナナシ殿？」

……今は稟さんめっちゃ怖いッス…

っーかなんで知ってるんスか…

「…はあ。実は俺、人斬った事ないんだ。それも理由が人を斬るのが嫌だからっー超個人的理由」

そうなのだ

俺は前世も含め、人を斬った事はなかった

まあ、もつとも亜人とかは何度かはある。それでも気分は良いものではなかったが

「このご時世、武を嗜む者がそんな事じゃいけないのはわかってはいるんだけど、嫌なものは嫌なんだからしょうがない」

「ナナシ殿、それは武を侮辱しているようなものですぞ？」

そんな事百も承知だ

「俺はただ、平和に、のんびり、ゆるゆる、周りの大切な人達と過ごしたいだけなんだよ」

前世でだって、荒稼ぎなんかしてない

パーティーメンバーの食いぶち分+ ぐらいだ

…… ああ、そういうえば昔パーティー集会ん時、

『俺は金なんかよりお前等と笑顔で過ごす日常のが大事だ！』

とか叫んでた気がする……

…… 黒歴史だ…… 鬱だ、死のう……

嘘だけど。死なないけど

「ですが、賊と交戦した事ぐらいあるでは？」

稟の言う通り、確かにあるよ

あるけどそんな時は、

「あつたけど、そんな時はコイツブンブン振り回して、追っ払った。まあ、賊もこんなデカイの振り回す奴なんかとやりたくなかったんだろ。こっちとしては助かったけどな」

そう言って、背中 of 紅蓮を指差した

「ナ、ナナシ殿の大きいのをっ！？振り回すっ！？……ぶはっ」

……稟。空気嫁…間違った。空気読め  
今はシリアルな空気なんだよ！…間違った。シリアスな空気なんだ  
よ！

……はあ  
もうグダグダじゃんか…

「もちろん俺もこんな人を殺す処か、斬る事もできない状態でいい  
とは思ってないさ。これじゃ手合わせならともかく、戦で役立たず  
だからな」

「ならば、どうなさるのです？まさか、人を斬って慣れるとは申さ  
ないでしょう？」

「それを考えねえとな…  
どうすつかね…」

闘わないで勝つか撤退させるのが一番…なんだけど  
仮に俺がどつかの諸侯に入るならまず軍対軍。そうなると撤退させ  
るだけ为目的にしても、武力を見せないといけない  
やっぱり何かしら考えとかねえとな…

(おーい。ナナシ…。覚えてる…?)

「なっ！？なんだ？」

「お兄さん？どうしたんですか？」



「や、今声が聞こえなかったか？……あつ、いや…何でもない」

「？変なお兄さんですね」

何だ？今の声は

何処かで聞いた事あった気がするんだが…

（あつ、気付きました？私ですよ。天使あまつかですよ）

「はあ？…ホントに天使あまつかなのか？」

このタイミングでなんだ？

「？」

風が思案顔で見ってくるが、とりあえず置いておく

その内風は興味を失ったのか、星達の会話に加わる

（あゝ…。とりあえず声出さずに頭で考えるだけで意思疎通できるから、そうしたら？まあ、いきなり虚空に話しかける痛い人に見られていいなら別だけど）

（あ、ああ、わかった。だけどこのタイミングで何の用だ？）

（それなんだけど、さっき会計してた時に気付いたのが、実はあんたにあげたのはサービスだけじゃなかったっばいのよ）

（はあ？）

(つまり長所と一緒ギブに短所アンドもセットテイクになっているわけよ)

(…初めて聞いたが?)

(初めて言ったもの)

(……………)

(……………)

(…で、記憶つつーギブに対して付いてきたテイクは何だ?)

(あんたには記憶ともうひとつ、武力がギブされているの。武器のみホントのサービスよ)

(なんで武力もなんだ?)

(元々孔融つてのは武より知の優れた人物なの。それをあんたに合わせる為に武の力を高めたの。ここまでOK?)

(ああ、大丈夫だ。要は文官の体に本来は武官であるはずの俺を入れたが、それでは俺の武は役立たず。そこで文官を無理矢理武官にした。そこにギブが適用された。こんな感じだろ?)

(そゆ事。で、あんたにテイクしてもらうのは、『打たれ強さ』と『抵抗力』よ)

(…?)

(ああ、もう！打たれ強さはわかる？今回ののはあんたの武に対する

耐久力。前世では何でもないような攻撃でも、今のあんたが受けたら即死の可能性すら出てくるわ)

(……なあ、ギブアンドテイクってのは等価交換じゃね？テイクのレートおかしくね？)

(知らないわよ。当たらないように頑張ればいいでしょ？)

で、次に抵抗力だけど、これは主に毒とかに対する耐久力。食中毒程度の細菌でも、即死の可能性もあるわ)

(つまり俺は記憶と武力の為に防御力が壊滅的に低下したって事なのか？)

(そゆ事)

(何そのレート……  
どんな詐欺だよ……)

(まあ、その分追加能力UPもあったから)

(期待しねえ……絶対期待しねえ……。…何の能力UPしたんだ？)

(気力と根性と度胸と断固たる決意力)

(………鬱だ……死のう……)

(じゃ、私は帰るから)。また何か発見したら来るから、よろしく。バイニ)

ようやく町が見えたが、心には希望と期待……そんな前向きなものは何一つなかった……いや、なくなっていた

## 第4話（後書き）

今回色々な要素をぶち込んだ結果、こんな文章になりました

……結構酷いな……

## 第5話（前書き）

今更ながら、キャラの口調が怪しい…

このキャラの口調は違つとあねば、指摘お願いします

## 第5話

町はそこそこの賑わいだっただ

そんなに治安が良くない事も考えれば、上々だろう

……俺のテンションは加速度的に下落中だがな

町に来る途中、ナナシは懐かしの天使と再会（あまつか念話、テレパシーのみだが）し衝撃の事実を知らされた

『ナナシの前世の記憶と武力を与えるかわりに、防御力を紙にさせてもらいました』

これは、ナナシにとって絶望を感じずにはいられなかった  
考えてみてほしい

どんなに強くとも、戦闘をすれば怪我ぐらいするだろう

或は、普通に生活していても転んだり、料理中に火傷したりと、些細な事で怪我はする

普通なら大した事はない

その程度の怪我なんて、すぐに治るだろう

普通の人にとって、そんな些細な怪我がナナシにとっては死活問題になる

しかも更にナナシが頭を抱える理由が

『前世の武力は継承したが、その武力だけでは無双できない』

これは、確かにある程度の武は約束されているが、例えば星のよう

な使い手が数人掛かりならば、あっさり負けるだろう  
つまり、『防御力が弱いなら圧倒的な攻撃力で相手の戦意喪失を狙  
う』ができないのだ

ナナシは激怒した

「呆れたレートだ。生かしておけぬ」

はあ……。虚しいな

「はあ……。マジで何か考えないと死ぬぞ、コレ」

そして考えに考えて…

「ナナシ殿。どういたしました？先程から様子が変わりますぞ？」

考え……

「いや、何でもない

それよりも、この町は誰が治めてんだ？このご時世こんだけ賑わっ  
てる町は珍しいじゃないか」

放置した

まあ、今考えてどうにかなる話でもないからな

「ここは確か董卓という者だったかと記憶しています」

……………稟。真面目にも喋られるんだね…

「ふむ。では、一旦自由行動にして日が落ちる前にまたココに集合という事でよろしいかな？」

「いいんだけど、宿はどうすんだ？」

「それはさっきお兄さんがブツブツ言ってた時に決めておきました。部屋は私と星ちゃん、お兄さんと稟ちゃんの二部屋ですー」

ああ、あの若干トリップしてた時ね

「ナ、ナナナナシ殿とっ！？二人部屋っ！？」

あつ……ああ……だ、ダメです、ナナシ殿。そんな所舐めて……ぶはっ

「おおー！？稟ちゃん、記録更新ですよー。あつ、先程の部屋割り  
は冗談で、ホントはお兄さんと女性陣ですので。…寂しいですか？」

「いや、そんな言われても困るから。主に稟の鼻血の後始末とか  
後始末とか

まあ、それは置いておいて、宿については言う事はなくなった。じ  
ゃあ、時間はさっき星の言った通りで」

「了解ですー。はい、では稟ちゃんは風と一緒にいきますよー」

「私も美味しいメンマの店を探しますぞ」

「行ってら〜」



三人を送り出す俺

「おや、ナナシ殿は私達に付いてこないのですかな？」

「俺ちょっと考えたい事があるから。この辺にはいると思っつから、気にしないで行ってきな」

~~~~~

SIDE 星

「おや、ナナシ殿は私達に付いてこないのですかな？」

一緒に美味しいメンマの店で、もっとナナシ殿の話を知りたいと思っつていたのだが…

「俺ちょっと考えたい事があるから。この辺にはいると思っつから、気にしないで行ってきな」

考えたい事が…

ナナシ殿の考え事となると私達では到底わからぬ事だろうな

はてさて…、ナナシ殿は何を思っているのやら

~~~~~

SIDE ナナシ

三人を送り出した後、じゃあ、そろそろ移動するか座って考えたいしなと、近くの食事処に行こうとした時に

(朗報よ、朗報)

(…いきなり話しかけないでくれ。ビックリして耳がでかくなっちゃうんだろ)

(じゃあ、大きくなってみなさいよ)

(ウソだよ。で、朗報ってなんだ?)

(なんか、私の上司と会社の取締役とお得意様が会談して、なんか今のおんた視ていて面白いから、天界と死神界でドキュメンタリー番組みたいになってるのよ)

(……オイ。なんだその人のプライバシー完全無視な連中は。出るトコ出るぞ? 何処が朗報なんだ?)

(まあ、それのお陰で私の減俸がなくなっただから、朗報じゃない)

(……(#^ ^))

(…まあ、そこは冗談よ。真面目な話、あんたにギブアンドテイクの契約が殺到したのよ)

(はぁ?)

(つまり、あんたはギブを買う事ができるようになったの。だけど、注意してほしいのが、レートは今までみたいにあんたに厳しいし、一度買ったギブは返品できないし、テイクはこっちが決めるからあんたじゃ選べない。おK?)

(おK。じゃあ、例えばこの世界で無双できる力が欲しいとかもできるのか?)

(あつ、その辺の『最強系』は無理らしいわよ。なんでも会談で、『最強系等のゲームバランス崩れるような願いは無理にしよう。その方が必死になる姿が視れて面白い』とかで決まったようね)

(責任者出てこい!マジで一回話しさせる)

(まあ、もう決まった事だし)

(チクシヨ…。じゃあ、今お前の知恵だけ貸してくれ)

(んー、めんどくないなら?)

(実は…斯く斯く然々)

先程の考えていた事を話した

(うわっ、めっちゃはしょりんぐ)。作者の怠慢だ)

(…うつさい。あと、作者とか言うなで、どうだ?)

(んー、確かに今のままじゃ大変よね) 私じゃ、どうもできないわよ)

(そうか。まあ、そりゃそーだわな)

(じゃあ、私まだ仕事残ってるから、またね)

ああ、マジでどうしょ…

とりあえず、立ち回りに気をつけていくしかねえか…

と、今後の大まかな予定を立てた所で…

「大変だー！！黄巾党だー！！」

戦乱の世になるきっかけが、始まった

## 第5話（後書き）

なんか段々作者の手を離れていく気がする今日のこの頃

## 第6話（前書き）

なんとか今日の内に投稿できた…

先程キャラの口調がおかしいとご指摘を受け、修正しました

こんな駄文ですが、これからもよろしくお願いします

## 第6話

「黄巾党だー!!!」

この叫び声に俺達四人はすぐに落ち合った

「『ナナシ殿! (お兄さん!)』」

「みんな!」

「黄巾党か…。風殿、稟殿。主らならどうする?」

「まずは敵兵の数の確認ですね。作戦はそれからになりますかねー」

「私も同意見です。でも、とりあえず今の内から義勇兵を募りましよう」

「ふむ、ではそれでいこう。では、私と稟殿とナナシ殿で義勇兵を募りにいこう。風殿は間諜の下に行き、数を聞いてきてくれ」

「『はい! (了解ですー)』」

「ナナシ殿?」

「それだけじゃ、弱い

みんなは兵を募っておいてくれ

俺は今から町長のトコ行って、頼み事してくる」

駆け出しかけた時、

「何をするつもりですか？」

皆はよくわかっていないような顔をしていて、星が代表して問いてきた

「ここは董卓つてのが、治めてんだろ？そんでこんだけ町は賑わつてて、町の人達も董卓の事慕ってるんだろ？なら、助けを求めて、ちゃんとした軍にきてもらうんだよ  
俺達はそれまでの時間稼ぎができれば上々」

「」「」…！」「」

「つー事で、俺の用事はすぐに終わる。そしたらみんなに合流するつて事でいいか？」

「わかりましたー。では、お兄さん、そちらはお願いしますー」

「おう、任せる」

~~~~~

SIDE〜風〜

やっぱりお兄さんは凄いですねー。自分達で手に余るなら、援軍を呼べばいい

基本的な事ですが、風達でも混乱して気付かなかつた事をすぐに気

付き、実行する

「やっぱりお兄さんは凄いですねー」

「そうですね。これだけ町人に慕われている董卓殿ならば、すぐに駆け付けてくれるだろう

さあ、私達は私達の仕事をしよう」

星さんがそう言って風達は自分の成すべき事の為に動き出した

~~~~~

SIDE ナナシ

～説明中～

「と、言う事で董卓の所まで行って、事情を話して援軍を呼んでももらえないか？」

「わかりました。では、それはこちらで何とかしましょう」

「助かる。じゃあ、よれしくー」

~~~~~

SIDE 〱 稟

「集められるだけ集めてみましたが、ざっと300人。黄巾党の数にもよりますが、これでは正直厳しいかと思えます」

私と星殿とで頑張つてはみたものの、あまり大きくはない町。相応の数しか集まらなかった

「そうですね。私とナナシ殿が前線で奮闘すれば、或は…」

と、そこへ風がやってきました。黄巾党の数がわかったのでしょうか。一体どれだけ差があるのか…

「黄巾党はですね…。…ぐう…」

「「寝るなっ！」」

私と星殿の突っ込みが被る
まったく、この非常時にありえないでしょう

「おお！？ついウトウトと…」

「風殿、それで黄巾党は如何程ですか？」

星殿が風殿を先に促す

「はい。黄巾党は凡そ1000人。二刻後に到着します。こちらは何人集まりました？」

「300人だ。防衛目的でも流石に厳しいぞ？」

星殿の言う通りである。なんせ黄巾党はこちらの三倍

……一体どれだけ持つものか……

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

風達の報告を聞いて、目の前が真っ暗になった

正直、今の俺のステータスではこの状況を切り抜けられない  
いっその事、ギブアンドテイクするか？……いや、それはないな。不  
確定要素なんて今はいら  
ない  
しやーねえか。腹括るか

「なあ、皆。話は聞いた。俺に案がある」

三人共注目した所で、

「まず俺が敵本体がここにくる前に接触。暴れる。ある程度暴れたら、俺は引いてそこで籠城する。まず、単騎で相手の虚を突いて混乱させる。頃合いを見て籠城戦にして時間を稼ぐ」

「しかし、それではナナシ殿が危険に……」

そう稟が言うが……

「他に有効策がねえ  
それに相手は真つ直ぐ町の入口を目指してる  
だから、単騎ならば奇襲をかけやすい」

「し、しかしっ！」

稟は尚も食い下がるが

「それにお前等には義勇兵と一緒にやってもらいたい事と用意して  
欲しい物がある」

そう言つて、俺はニヤリとイタズラする子供のような顔をした  
めっちゃガクブルしている内心をおくびにも出さないようにして

~~~~~

SIDE 〱 黄巾党

よーし。もうすぐ町だ

今回も略奪の限りを尽くしてくれろ…！

そして……張角様達に……っ！

「申し上げます…！」

ん？

「なんだ、どうした？」

部下が何やら慌ててやってきた

「武官のような者が一人町の前に立ってます。どうしますか？」

「いつも通りだ。警告して消えなければ殺せばいい」

「了解しました」

「さて、今回はどれぐらいで落ちるかな…」

~~~~~

SIDE ～ ナナシ ～

うわ…

マジでたくさんいるよ…

アレに単騎で突っ込むとか何の罰ゲームだよ…

でもまあ、やるしかないんだから…

「前世の俺と今世の俺の頑張り具合と、自身の悪運を信じるしかないか…」

よし

一度覚悟を決めてしまえば

あとは自分を信じて

やり切るだけ

「聞けえ！黄巾党を名乗る賊共！」

己が持てるありったけの能力と

「俺は死神だつ！お前等の命、俺が貰い受ける」

なけなしの勇気を振り絞り、

「死にたくないやつは、消え失せる！！」

例え今まで人を斬れなかったとしても、

今この時からは、できなきやならねえ

「いざ、参るっ！！」

そして俺は、これから始まる巨大な運命に身を投げ出した

## 第6話（後書き）

最近『〜ッス』とか言っていない気がする…

まあ、だからどうしたという話ですが…

PVとか結構な数になってきて、そろそろ番外編とか考えておかいと…ッス

## 第7話（前書き）

一応毎日1話ずつぐらいは投稿したいと思っている次第でございます

また、今回も結構な都合主義になっています

それでもモーニングタイムという優しい皆さん、第7話です。どうぞ



## 第7話

はい。皆さん、おはよう又はこんにちは、或はこんばんは

約1000人の黄巾党に死神とかタンカ切ったナナシです

人を殺す所か、斬った事もないのに自分でハードル上げたナナシです

まあ、一応策はあるんだけど、その為には前提条件として、最低一人は殺す必要があるワケで…

俺コレ終わったら吐くな、絶対

俺は黄巾党の先鋒で突っ込んできた奴等を、紅蓮の一薙ぎで殺し、その内の一人の首を落とし、遠くまで見えるように高くに掲げ、滴る血を睨るように見せ付け、言った

「俺は今血に飢えている！さあ、次に俺の食事となるのはだあれだあ？」

そう、死神というよりも寧ろ悪魔の笑みを浮かべた

我ながら上手く演技できてたと思う

自分の体には返り血がベツトリな為、実際血を飲んでいなくとも顔は血でベタバタである

もつと言えば、黄巾党本体はまだここから距離がある為、実際に血を口に入れているかは見えない

要は、いかにそれっぽく見えているか。遠くから見たらどう見えるか、である

そして上手く演技ができた証拠に、黄巾党本体には混乱と恐怖が芽

生えていた

……あつ、やべっ

めっちゃ吐き気してきた…

早く帰らねえと、ココで吐く…

そしたらハツタリが意味なくなる…

だから、もう一芝居、頑張んねえと

「なんだ？この程度で怖じけづいたか？呆れたな  
興が逸れた。じゃあな、臆病者共」

そう言つて、傍らにある肉の塊に唾を吐き、馬に乗って町に戻つて  
いった

もちろん全速力で

ただ、この時俺が変な軌道を通つていった意味を、わかる者が何人  
いるのか

~~~~~

S I D E 〱 黄巾党 〱

なんだ、あいつはっ!？

あんな巨大剣を振り回し、しかも死神と名乗り同志の血を飲んでい
たぞ？

……ヤバイヤバイヤバイ

奴はヤバイ

本能がそう警告している

奴には近付いてはいけない

と、そう感じていたが奴は興が逸れたと言って町に入ってしまった

…好機！

「今こそ好機！あの得体の知れない死神とやらが消えた今！この好機を逃す利はない」

皆の士気は下がっているが、それを盛り上げるのもこの部隊を任せられた俺の仕事だ

「さあ、狩り尽くせっ！！」

~~~~~

S I D E 〱 星

今ナナシ殿が賊の先鋒部隊と衝突した

しただが…、

アレは本当にナナシ殿なのか？そう疑ってしまう光景だった

事前に策を聞いていても、アレは本当に血を啜っているかのように

見える

しかし私達は知っている

ナナシ殿は本当は争いを好まない、優しい人であると

帰ってきたなら、暖かく迎えてあげよう

ナナシ殿はきつと心が相当参っているだろうから

おっと？ナナシ殿がこちらに向かって来るな

という事は後は私達の仕事だ

「義勇の兵達よ！ナナシ殿が戻って来る！次は私達の番だ！恐れるな！既に奴等は私達の策の中。ならば、負ける理由はない！」

そう

ならば、

「いくぞーっ！！」

「「「「おあーっ！！」」」」

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

吐いた

帰ってきて皆から色々言われたが、覚えていない
もうとにかく人気の無い所に行って吐いた

殺した事は後悔もしていないし、罪悪感もない
殺らなければ殺られていた

そこは割り切れていた

でも、人を殺し、首を落とす、演技とはいえその血を啜ったのだ
いくら正常…いや、正常だからこそ耐えられない、この気持ち悪さ…
いつそ、狂人ならば楽なのだろうが、それは俺が俺でなくなるから
却下だ

……ふう

少しは落ち着いた

今頃星達が兵を指揮しているのだろう

この防衛戦は俺達の勝ちだな

俺はこの戦に策を三つ用いた

一つは董卓軍に援軍を求める事

一つはさっきの俺の演技

そして最後は…

「なっ、なんだこれーっ!？」

「うわっ、落とし穴だ！」

「今だ、弓兵達よ！矢を放てえっ！」

…これだ

相手が真っ直ぐ正面からのみ攻めてきたからこそできる策だが、効果は抜群である

つまり、穴は深くなくていいから、とにかく数と範囲に重点を置いた、その名も『作戦名：落とし穴』

…これと言った時の皆の視線はブリザード級だったな……

内容はこうだ

深くはないが、広範囲に設置された落とし穴に黄巾党達はさっきの俺の演技もあり、かなりのパニックになる

そこを弓兵達の矢で射っていく

黄巾党といっても、元々は農民達ばかりなので、これでもう士気はかなり下がる

後は、董卓の援軍を待っていればいい

~~~~~

S I D E ~ ~ ~ ? ? ? ~ ~ ~

私達の許に、つい先程ある町の町長さんがやってきました

町長さんは、町が黄巾党に襲われているから助けて欲しいと要望してきました

私はすぐに詠ちゃんと霞ちゃんを呼んで、軍議を開きました  
皆、私と同じで町の人達を助けたいと思っていたみたいで、すぐに  
出発の準備を整えて…  
それで、町に向かって今に至ります

「もう少しや。皆！もう少しで町に着くで」

霞さんは兵の皆さんの士気を上げています

「まだ…、ボク達が着くまで持つててよ…」

詠ちゃんは町の人が無事であることを祈っています

「町が見えたぞーっ！ー！華雄隊、この私に続けえーっ！ー！」

華雄さんは気合い十分です

「……………」

「恋殿！ねね達も急ぎますぞ」

「……………（コクッ）」

恋さんとねねちゃんも華雄さん達と同じです

皆町の人達の為に、皆が笑顔でいられるように頑張ってくれています  
もちろん、私も…

~~~~~

SIDE 〱 呂布

……… 凄い

恋達が町に着いた時には、もう黄巾党達は撤退を始めていた……

町長さんの話では、黄巾党は約1000人で町の人達は300人程度

三倍以上の差があるのに……

それなのに黄巾党達は撤退していく

「…………… 凄い」

思わずそう呟いた

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ

さあ、吐くだけ吐いた

もうあとほんのちよっと少しぐらいならやれるだろう



と、星達の所に行こうとした時に待ち侘びたものは聞こえた

~~~~~

SIDE 星

流石に数の差は厳しい…

厳しい…が、ナナシ殿の策が嵌まりに嵌まって、黄巾党は撤退し始めていた

「よし、賊共は撤退し始めているぞ！ここが正念場だ！気を抜くなよ！」

もう少しだ…

そう自分に言い聞かせ、再び戦場に目を向けた時、

『呂』、『張』、『華』

待ち望んでいた援軍の牙門旗

「華雄隊！止まるな！そのまま敵本陣に突撃ーっ！」

「あほっ！猪！…ああ、もう！勝手に突っ込むなっ！」

「……………」

…ふう

どうやら町長殿は間に合ったようだ
後は董卓殿達に任せよう。今回は私も些か疲れた。ナナシ殿達と合
流して少し休もう

そして私は近くに腰掛けた

第7話（後書き）

今日はもう投稿できないかな？

にしても、霞の口調（細かいトコとか）と恋の口調&考え方とか難しいッス…

華雄姉さん視点の話ばっかにすれば楽できるのにな

…いつそ、そうしちまつか…？

嘘です

頑張ります

第8話(前書き)

キャラが変わってる…

月が…

第8話

~~~~~

S I D E 町長

董卓軍の援軍が到着してすぐに黄巾党は鎮まった

元々撤退し始めていた事もあり、あまり被害は出ずに終わった

そして現在はすっかり日も落ち、本来なら町は静かな夜になっているはずが、今日だけは違った

家族や友人を亡くした者もいるだろうが、皆の顔には悲しみの表情ではなく、笑顔が溢れていた

これにはきつと皆で町を守ったという実感と、その後皆の周りを駆け巡ったナナシ達や董卓達の姿や、皆の為の必死な言葉のお陰だろう

彼は…ナナシ殿は、家族や友人を失った人達に涙混じりにこう言っていた

『悲しむのはいつでもできる。だけど、今は笑わないといけねえ。』

それは生き残った者達の義務だからだ

知人、友人、恋人に家族。失った人達もいるだろう。だけど、それはお前等だけじゃねえ

今この大陸では、今日みたいな事が毎日起こってる。  
それはまだまだ治まる気配をみせねえが、治まるように頑張ってる  
奴等がいる。それが俺や趙雲達だったり、今日助けに来てくれた董  
卓達とかだ。他にもそういう諸侯はある  
だから、今は耐えて空元気でいいから笑っていてくれ。本当の平和  
がくるまで笑っていてくれ  
死んだ人達はもう戻ってこないけど、俺達はまだ生きてて、笑って  
泣いて、悲しんで、子供を作ったり、何でもできる  
だから、俺達は生きなきゃいけない。死んだ人達が悔しがるぐらい  
幸せになる義務がある』

こんな事をまだ青年ぐらいの少年が言っていたのです  
絶望していた人達にもう一度、希望という、未来という灯を付けた  
のです  
これからの世の中を治める『王』とは彼のような人の事を言うので  
しょう

~~~~~

S I D E 〱 賈 馮 〱

あの、ナナシとかいう奴の言葉で、なんでボク達が来るまで町の人
達が持った所か、撤退させるまでになったのかわかった気がした
あれだけ重みのある言葉を発せられる人物
そして何より、町の皆の彼を見る目…
それを見ればあいつがどれだけ慕われ、頼れるか…

……あれ？恋と霞があいつの所に向かっていた……？
ああっ！月までっ！！？

陳宮さんと華雄さんは炊き出しでこの場にはいない

~~~~~

SIDE ナナシ

い、今起こった事をありのまま話すぜ？  
俺だってこんな事信じらんねえんだ

……や、まあ、そんな大した事じゃないんだが  
今、董卓軍の武将とかいう人達が俺のトコに来てるんだよ

「初めまして。私は董卓といます。姓は董、名は卓、字は仲穎で  
す」

「ウチは張遼。姓は張、名は遼、字は文遠。よろしゅうな」

「……………呂布」

董卓……………

キタ (。 。 ) ! !

や、特に意味はない  
なんかまさかの董卓本人登場にビックリし過ぎて、ちょっとおかしくなっただけ

「はあ。俺は孔融。姓は孔、名は融、字は文举。こっちこそよろしくな

で、なんであんた達みたいな大物が俺なんかの所に？」

まあ、予想ついてるけど、面倒なの嫌いだからハズレていますように…

「町の皆さんが言ってました。あなた達のお陰でこの町を守れたと。あなた達には感謝してもしきれません」

「そつや。せやけど、どうやって黄巾党達を撤退させたん？」

「……(コクコク)」

……何このコクコクしてる可愛い生き物

前世と合わせて久しぶりに胸キュンしたわ…

（詳しく説明中）

（決して作者の怠慢ではありません。同じ事を何度も説明すると、くどいと思ったからです）



「そんな大した事してないよ  
相手混乱させて、落とし穴に嵌めて、矢で射っただけ」

「いえ。あなたは本当は人を斬った事がない優しい人。そんなあなたがあれだけの覚悟を持って人を殺めた。それだけで十分大した事です」

不覚にもドキツとしてしまった

それは目の前の可憐な少女、董卓に対して……ではなく、凜とした……王の目を持つ瞳にだ

……アレ？

俺が人斬った事ないのをなんで知ってんだ？

「誰から聞いて？」

「趙雲さんからです」

あんのスカポントンめ……  
必要ない事を喋りやがって

「まあ、それはあれだあれ

……はい。そうです、その通りですよ。しかも戻ってきてから吐いたし、俺

笑えよ、おかしいだろ？こんな人を殺したただけで吐くような軟弱な奴が町の英雄とか言われてるんだぜ？」

目の前の少女達なら絶対に笑ったりしないだろう  
寧ろ慰めとかしてくれるだろう

そんな事はわかってる。わかってはいるが、自嘲せずにはいられない  
多分俺はそこまで追い詰められてんだろう…  
でも、

「私は、私達はそんな事で笑ったりしません

私はあなたの事を凄いと思いました

町や皆を助ける為に、自分を削ってまで頑張ってくれた人達を、どうすれば笑えるんですかっ!？」

「そうやで。それにウチらかて人斬るんは慣れてないし、慣れちゃいけない」

「……………(コクコク)」

ほうら。みんなだよってかたって優しくしゃがって泣くぞ?こんなに追い詰めやがってさ

「なあ、董卓」

「月です。月って呼んでください」

「じゃあ、俺もナナシでいいよ

月、少しだけ胸貸してくれ」

「はい」

俺は今世に生まれて初めて、自分より小さな女の子の胸で泣いた

## 第8話（後書き）

今日はもう1話投稿したいと思う次第でございます

## 第9話（前書き）

昨日投稿できなくてすいませんッス

ネオチって怖いッスね〜

## 第9話

泣いた

そりゃあ、思いっきり泣いた

完膚なきまでに泣いた

恥ずかしかつたけど、その分結構落ち着いた

にしても無理な注文だよな

人を斬って殺すのを、慣れなきやいけねえのに、慣れたら人として終わるって…

まあ、今はあんま考えないで、その時々で判断して行動すればいいか

とか、考えてたのがちょっと前

今は董卓…月達や星達と自己紹介兼夕飯ってトコ

「なんで、あんたが月の真名呼んでるわけっ!?!」

で、俺が董卓の真名を呼んだ瞬間に賈馱さんに怒られた…

「詠ちゃん、いいんだよ。ナナシさんには私が自分で真名預けたんだから」

「ほな、ウチの真名も受けとってえな。ウチは霞ゆうんよ。改めてよろしくな」

「……………恋」

「ぬぬぬ……………恋殿が預けるならねねも預けるです。ねねは陳宮。姓は陳、名は宮、字は公台。真名は音々音なのです。特別にねねと呼ぶ事を許すのです」

「私は華雄。姓は華、名は雄。わけあって、真名は言えないが、よろしく頼む」

「ほら、後は詠ちゃんだけだよ？」

「くっ…、ゆ、月に言われたから預けるんだからね！そこんとこ勘違いしないでよねっ!？」

ボクの名前は賈馱。姓が賈で名は馱。字は文和で真名は詠よ。でも、気安く呼ばないでよね！」

「ああ、改めて俺は孔融。姓は孔、名は融。字が文挙で真名はナナシ。これからよろしくな、月、霞、恋、ねね、華雄、賈馱」

「ちよつとっ!？なんでボクだけ真名じゃないの？侮辱してるわけ？」

「…どないせいつちゅーねん」

とまあ、こんな感じで星達も続き、真名交換は進んでいった

宴もたけなわ、もう周りにある光は、ここら一帯となり今日はもう遅いから泊まっていく事になった、月達

そして皆寝静まった頃、俺も寝ようと思いい、自分の宛がわれた部屋

に向かつていった  
ふと、月の暖かさを思い出したのは秘密だ

だが、この時俺は翌日があんな事になるとは思ってもいなかった

~~~~~

SIDE〜霞〜

「なあ、恋。ナナシって、強そうやない？」

ウチは寝る前に恋の部屋に来ていた

「……………(コクッ)」

ああ〜、恋はめっちゃ可愛いなあ〜

「だから、明日朝一で手合わせしにいかへん？」

「……………行く」

そんな陰謀…というよりナナシの死亡フラグが立っていた時、当の本人はかなり幸せそうな寝顔だったそうだ

~~~~~

SIDE ナナシ

どうしてこうなった？

俺は嫌だ、やりたくないと言ったハズ…

ここは言葉が通じないのか？

いや、昨日はちゃんと談笑してたじゃないか

「さあ、ちゃっちゃっ構えんか」

はい、その通りです

現在俺と霞は向かい合って武器を持っている

まあ、手合わせですね。わかります

しかもこの後、恋ともやる事になっていて…

昨日宴の時に星達に聞いた話だと、恋は武ではめっちゃ有名な武将らしく、文字通り『一騎当千』の將軍なのだそうだから

くわばらくわばら…

君子危うきに近づかず

手合わせなんか頼まれたら絶対俺が死ぬ。比喻ではなくホントにだから、ちよつと距離おいておこう

とか、昨日は思ってたワケなんだが…

まあ、手合わせするハメになるんですよね

や、ホント人生って何があるかわからんね

以上現実逃避でした



「俺なんかと手合わせしても大して面白いとも思いませんよ?」

それでも…それでも俺は悪あがきを…

「何ゆうとんねん。ナナシ、めっちゃ強いやる?強い奴と手合わせしたいんは武人の性や」

…即答ですか

「まあ、じゃ、やりますか。お先どうぞ?」

そう言つて俺は紅龍、蒼龍(以下両龍と省略)を構える

「そやな、ほな行くでえーっ!!」

言葉と同時に霞は駆け出し、自身の二つ名、神速の如く突きを繰り出してきた

…速いっ

でも、このぐらいならまだ見えるっ!!

俺は両龍で一撃一撃を確実に落とし、反らし、時には受けとめ、凌いでいった

「やるやないか!ナナシ、自分謙遜はあかんって」

「でも結構ギリッスよ?」

いや、マジで

速さとかはまだ若干ながら余裕があるが、力がヤバイ  
っ！か、神速のくせにパワーファイターってどうよ？

俺の武器、大層な名前付いてるけど、あんまり頑丈じゃないからね？

「そうか？でも、なんか余裕ありそうやし、ウチの本気行くで？

いや〜、恋以外で本気出せる相手なんて久しぶりやわ〜」

まだ本気じゃなかったの！？

俺マジで死ぬかも…

「ほな、行くで

神速の張文遠。参る」

参らなくてもいいですよ〜？

まあ、もちろんちゃんと受けませんが

「くっ……重くなった」

「それでもちゃんと受けられるんや。流石やな」

でも…、くっ…

このまま防衛してたら負ける

やっぱり俺も男であるワケで、勝負と名の付くものは負けたくない  
ワケなのですよ

「じゃ、俺もいくぞ。霞」

そう言っと、俺は一旦間合いをとり、

そして一気に、

詰める！！

「なっ…！？確かに速いけど、そのぐらい…っ、はぁあ！」

袈裟懸けにくる飛龍偃月刀（使いたかった）

でも、俺はその軌道よりも低く

落ちる

「なぁっ…！？」

今度こそ霞の顔は驚愕に染まる

当たり前だ

霞視点じゃ、目の前の人間がいきなり消えたようなもの  
実際は霞の間合いに入る直前に体全体の力を抜き、倒れるように下に落ち、地面に着く瞬間に足に力を込めて、全力ダツシユ。まあ、  
一步、二歩の距離だけだ

で、霞が槍を戻す前に槍と体の中に入り、蒼龍（別に蒼龍である意味はない）を向けた。もちろん峰の方ですよ？

「俺の勝ちで」

「はぁ…、負けてもうたか

けど、最後のアレめっちゃ速かったで。まるで消えたみたいだった

わ。アレどうやったん？」

ええ、アレ俺の数少ない武器なんだけどな

まあ、教えたトコで一朝一夕で、できるもんでもないからいつか

「人間つてのはヘタに力加えるよりも、力を抜いた方が速く動けるんよ。で、それを利用してのが今の

今まで目の前にいた奴が急に視界の外に行くと、普通は反応できねえべ？現に霞だつて反応する処か、軽く混乱してただろ？その隙に自分の間合いに入って、相手の武器を無効化した結果が今さっき俺がやたやつ」

口で言うのは簡単だが、実践するのは俺でさえ今世になってようやくだ

理解できても習得すんのはまだまだ当分先だろう

「ほお。凄いな！ウチビックリしたで。いや、まだまだ鍛練が足りんな」

さて、今日はもう朝っぱらから疲れた  
昼寝でもす」

「次は恋」

ああああああ〜っ！！  
忘れたかったのにい〜

「次は恋」

はいはい、そうですね。わかりましたよ

「…はあ。どうしても？」

それでもお！俺は諦めん…

「（コクコク）」

…撃沈しました

「…わかったよ。それじゃ、やるか」

こうして俺は恋と手合わせする事になった

気分はまるで死刑囚

ドナドナ

あれ？違ったっけ？

第9話（後書き）

次はいよいよ対恋だ

…とじしとよ…orn

第10話(前書き)

うわ〜  
…

またご都合主義ハンザイな感じになってる〜

## 第10話

~~~~~

SIDE〜星〜

凄まじいな

まさか、神速の張文遠にまで勝ってしまうとは…
しかもまだ余力があると見える

「……もう一度手合わせ願いたいものだ」

今度はあの時のようにはならぬ
そしていつかなナシ殿の本気を出させてみせる…

~~~~~

SIDE〜風〜

「お兄さん凄いですねー」

知もあってあれだけの武もある  
もしかして完璧超人じゃないでしょうか？



「……もう一度手合わせ願いたいものだ」

星さんはそう言って、何やら目標の高さを喜んでいるかのような目を向けています

風も負けていられないですよー

文官としてお兄さんにも負けないような知を蓄えておかないと

~~~~~

SIDE〜恋〜

……ナナシは強い
霞にも勝った

あれだけだとわからないけど、恋も本気出さないと危ない

……頑張る

~~~~~

SIDE〜ナナシ〜

うわゝ…

マジヤバイって

恋なんか、かなり本気の目してない？

…俺死ぬって

「なあ、恋さんや。なんでそんなにやる気なん？」

「……ナナシ強い」

あるえゝ？

なんでそんなに評価されてるん？おかしくない？

「いやゝ、さつき霞に勝ったのはたまたまですよ？」

「（フルフル）」

はあ、聞く耳持たずですか…

じゃあまあ、それならやりますか…

「うし。覚悟は決まった。恋、やるか」

「…（コクッ）」

動作は可愛いんだけどなゝ

でも、目茶苦茶怖えんだよ…

「……いく」

んなっ！？

キーーーーーン!

は、はええ…

しかも、

「……重い!」

両龍クロスで受けでこの重みかよ…っ!?

くっ、無理だ

一旦距離置く

が、

はあ!?

シュツ!ガツーン!

嘘だろ?アレ詰めて追撃できんのかよ?

なら、これで、どうだっ?

「はあああ!」

震脚!

これで恋の足場を崩すっ…ええっ!?!何だっ?ふざけんな!

足場崩したらその勢いのまま跳んだぞ?

いくら飛將軍っていつても反則過ぎじゃね?

飛ぶなよっ!

「はああ！」

しかも空中から攻撃してきましたよ？

くっ……

転がって、何とか避けたが…

「ねえ、恋めっちゃ強くな？」

「（フルフル）…ナシも強い」

いや、あんたの強さ異常だよ…

震脚すら効かないってどんだけだよ

まあ、だからこそ俺もやる気が上がるってもんだけどさ…

「えっ！？何あいつ？霞に勝っただけじゃなく、恋とあれだけやり合えるの？てゆうか強くない？」

と、詠が心底有り得えないと発言した

詠、失礼だぞ？

「そうですよ。ナシ殿は強いんです」

…稟。久々の発言なのに、しかも何で俺な事でそんなに自慢げなん？

まあ、いいや

「なあ、次は俺から攻めてもいいか？」

「（コクッ）」

よーし

「じゃあ、とっておきを見せてやる

…構える」

力なら確実に絶対勝てないが、速さなら自信はある

俺は何の小細工も無しに単純にトップスピードで間合いを詰める

「……………っ！」

それに反応する恋

すかさず零距离からの震脚……

「ふっ…！」

その時には恋は震脚の間合いを外れ、自分の間合いからの一撃を放っていた

…が、それが囷

震脚の構えをしたが、その足は地面を砕く為ではなく蹴る為の足  
そのまま強く地面を蹴り、ロケットスタートのように間合いを詰める  
もちろん迫る方天画戟（使いたかった）を両龍で受け止め……

ガキーン！パリーン

……（。；）

「はっ!？」

割れた?というより砕けた?

そりゃまあ、確かに10年も倉庫の中でそれから大してメンテもしてなかったけどさ…

「うをつ…!?!恋!ちよつとタンマ!」

「ああゝあ。あれはもう使えないんじゃない?」

や、もう普通に使えんよ…

……相棒さらば

。。。／（。。）ノ。。

「そうですねー。でもお兄さんはきつと素手でも強いですよ?」

ちよつと風さん!?!何勝手な事言ってるんですか?確かに素手でもそこそこ戦えるけど、恋と戦える程強くないですよ?

「で?ナナシはどうするん?普通なら、これで終わりやけど」

つまり、俺は既に普通じゃないと?

「いや、俺は普通なんでここでおわ」…」

「ナナシ殿がここで終わるわけないであろう。ここからが本領発揮。

そつであるつっ。」

ち、ちょっと星さん？何、そのフォロー

しかも何自分良い仕事しました的な笑顔してるんですか！？

「…………じゃ、やる」

しかも恋までやる気になってるー？

「マジで？」

「（コクコク）」

「俺素手だと、ソッコー負ける自信あるよっ。」

「（フルフル）」

どうやら、続きやる事は確定らしい

仕方ないか

「じゃ、続き行くぞ」

俺は素手、恋は武器

両者の違いはそこで、リーチは恋のが広い  
でも、逆に言えばこっちの間合いに入れば、武器の引きまでのラグ  
で決めれる…

…まあ、恋はその引きも速いんだよね。しかも懐入るのも難しい  
っつて…

じゃ、とりあえず武器なんかするか

「恋殿ー！むこうは恋殿にびびってますぞー。余裕ですぞー」

あのチビっ子…いや、ねねめ…

こちら素手だからなんとか隙探さないとやられるっつーのに、迂闊に突っ込めるか！

ダッ！

隙が無いなら作ればいい

とりあえずさつきと同じで突っ込む

もちろん恋も同じように迎撃するが、

今度は横薙ぎかよっ!？

迷う時間は無い

咄嗟に俺は左からくる横薙ぎを、一步踏み出し、柄を狙って

拳で迎え撃つ

「……………二重の極み!」

「……………っ!？」

だが、流石は恋

槍は飛ばされたが放さなかった

一緒に流れた体ごとすぐ引こうとするが、



「くっ…ふうっ！」

「もらったぁ！」

俺にはその隙があれば、十分だった

恋が引ききる前に間合いを詰め、拳を恋のお腹に当て、

「俺の勝ちで」

と言った

第10話（後書き）

今更ながら、なんでジャンルコメディーにしたんだろ…

めっちゃ変えてえ…

## 第11話（前書き）

今日は連続投稿いけたぜ…

作者は地名とか全くもってちんぷんかんぷんなので、地名関係は結構あやふやかもツス…

許容してもらえるとチヨー嬉しいツス

## 第11話

~~~~~

SIDE ねね

恋殿が負けた…？

しかも素手相手に？

これは何かの間違いなのです

「や、やり直しを要求しますぞ。恋殿があんなのに負けるわけないので。」

そうです

これは間違いなのです

「（フルフル）……ナナシ強い」

「恋殿」…」

~~~~~

SIDE 詠

嘘…でしょ？

全力本気の恋が負けるなんて、関羽や張飛に夏侯惇、それに霞が束  
になってようやく勝てるぐらいなのよ？

しかも素手？何なのあいつ

とんでもない奴もいたものね…

~~~~~

SIDE〜霞〜

な、何者なんや、ナナシって

手合わせして強いと確かにわかったけど、素手で恋に勝てるなんて
強過ぎやろ…

~~~~~

SIDE〜恋〜

やっぱりナナシ強い

負けたけど、楽しかった…

「ぐう…」

あつ、

「なんだ恋腹減ったのか？」

「……（コク）」

少し恥ずかしい

「まあ、朝メシもまだだったしな。メシにすつか」

「（コクコク）」

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

まあ、とりあえず勝てたからよかったか
結構引き出し見せちまった気もするが、どうせマネなんてできない
だろう

それよりも今はメシにしよう
丁度恋も腹減ったみたいだし

~~~~~

S I D E 月

先程、朝食の時に昼過ぎには私達が帰る事を伝えました  
その時にナナシさんが

「今回の件は助かった

月達が来なかったら、俺はもちろん、町の皆も危なかった。だから  
次は俺の番だ

月達に何かあれば何を置いてでも助けに行く。だから、また会おう  
な！」

と、そう言ってくれました

へう…。凄く恥ずかしかったですけど、とても嬉しかったです

だからまたナナシさん達と会って、楽しくご飯食べたりしたいと思  
いました

~~~~~

S I D E ナナシ

「よし。俺達もそろそろ行くっぜ？」

「行くのはよろしいのですが、何処向かうのですか？」

あつ…

「まあ、風の向くまま気の向くままに行こう！」

「はあ…。無計画で旅をするとは、流石はナナシ殿といった所ですか？」

「まあな！」

「いや、褒めてるわけではありませんぬよ」

知ってます

…にしても、今回は月達が来てくれたから助かったけど、やっぱり戦い方考えないとな

…両龍も破壊されたし…

つか、恋ホントに強過ぎだよ

前世の世界でも十分やっていけるだろ…

とりあえず早めに考えとかなないと、マジヤバイな…

手軽にパワーアップするには天使あまつかに頼ればいいけど、リスクがでかいから却下

じゃあ、簡単な所で投石とかか？それもなんかイマイチぱっとしねえんだよな…

一応マックス200k/hはでるんだけどね…

なら、石じゃなくて指弾とか…

ダメだ、弾どうしよ…

うっん…

その辺の応用で考えとくとして、近接戦はどうすっか

震脚効かない相手も……ありや恋ぐらいか
とりあえず暫くは素手になるかな……

とか考えて数日後、町が見えてきたんだが……

「様子がおかしいな……」

「ええ……。とりあえず町に入りましょう」

~~~~~

S I D E ？ ？ ？

マズイな……

この町もいくら彼女達がいても、次に襲われたら流石に飲まれるか  
もしれないな……

……おや？

「そのの者達。何しにこの町に来た？この町は今黄巾党の襲撃を受  
けている。早々に立ち去るのが賢明だぞ？」

「いや、俺等旅の者なんだけど、町が見えたからとりあえず入っ  
てみるか、って話になって来たんだよ」

この時期に旅？

「失礼だが、名前を聞いても良いか？」

「ああ、やっぱり怪しい？」

……この男

私達全員をさつと確認して、力量を視ようとしたくせにいけしゃあしゃあと…

「お兄さん、そんなに喧嘩腰にならないでくださいよー」

「そうだぜ兄ちゃん。ここは穏便にいった方が良くと思うぜ？」

「ほら、宝ケイもそう言ってますしー」

なんだ…？この小さい子は？

腹話術？

「まあ、そこはいいよ。で、俺等の名前だっけ？俺の名前は孔融。姓が孔、名が融。字が文举。よろしく」

…この男は油断できない雰囲気を持っている  
華琳様とはまた違う何かを感じる…

「風は程イクといえます！。姓が程、名がイクです！。それでこちらが宝ケイですー」

「おう。姉ちゃん、よろしくな！」

この子はよくわからないな…

「私は郭嘉。姓が郭、名は嘉。よろしくお願いします」

桂花と同じ感じがするな…

「我が名は趙雲。姓は趙、名は雲。以後お見知りおきを」

こやつは……できるな

「なんだよ、皆。字言ったの俺だけかよ？一人だけ疎外感感じるんだけど？」

「「特に意味はない（です・ですよ）」」

…仲が良いのだな

「私も名乗ろう。私は夏侯淵。姓が夏侯、名が淵。字は妙才。よろしく」

と、私に続き、

「僕は許緒。姓が許、名は緒。よろしくね！」

季衣は天真爛漫に

「私は楽進です。姓が楽、名は進。よろしくお願いします」

楽進は真面目に

「ウチは李典や。姓が李、名が典。よろしゅうな」

李典は軽く

「沙和は于禁なの。姓が于、名が禁。よろしくなの」

于禁は元気に

それぞれ挨拶していた

「で、早速だけどなんでこんななってるんだ？」

「ああ、それはな……」

私は彼等にどうしてこうなっているかを話した

黄巾党がこの町を襲っていた事、それを聞いた華琳様が部隊を編成したが、間に合わない為に先行部隊として私達が来た事、そして既に楽進、李典、于禁達が頑張っていた事、あとのぐらいで味方の援軍が来るのかを

確かにまだ怪しいが、今はここを切り抜ける事を優先しよう  
彼等にも協力してもらおう

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

つまりこの町は黄巾党に襲われてて、非常に危ない状況らしい

うわっ…来る時期間違えた…
つか、協力するの確定で話進んでるし…
いいんだけどね…

「つまり東西南の出入口に兵固めて、時間稼ぎ。で、曹操からの援軍を待つ。こんな感じか？」

なんか前にもあったような…

「ああ、その通りだ。あとは各場所の配置なんだが…」

「ナナシ殿に任せてみては如何かな？」

ちよつと星さん！？

何言ってるの！？

「ふむ、自信があるのか。では、任せてみよう」

そして夏侯淵さんも納得しないでえー！！

「さあ、折角見せ場を作つてあげたのですぞ？頑張らないと、男が廃るというものですぞ？」

しかも全部わかつて言いやがったな…
諦めよう

星のアレは病気だと割り切ろう

「じゃあ、決める前に防護柵とか、兵の数、それと賊の数と何処が一番狙われそうなのかを教えてください」

「随分と細かい情報を…
いいだろう。こちらの兵数は約1000人で、一番防護柵が弱いのが東だ。そこだけ柵が二つしかない。あと二つはそれぞれ四つずつあり、大して変わらない。賊の数は凡そ3000〜3500人だという話だ。恐らく東を狙ってくるだろうな」

ふむ…

「じゃあ、東に俺、風、許緒。兵は200人でいい。あと西に夏侯淵、稟、星。南に楽進、李典、于禁。兵数はそれぞれ400人ずつ。配置はこんなもんだ」

「なっ!? 何故そんなに東が少ないのだ? それでは突破されてしま
うではないか!」

「んー、大丈夫大丈夫。そんなし、みんなに用意して欲しいものがある」

俺がそう言つと、

俺を知る者達は期待と底意地の悪い顔を混ぜたような笑顔で

知らない者達は不安と疑いを混ぜたような視線を向けてきた

「まあ、俺に任せただ。だったら俺はこれが一番効率が良いと思
う作戦を考えた

じゃあ、皆に用意して欲しい物だが、手の平ぐらいのサイズ…大き
さの石を大量に
あればあるだけ勝率が上がる」

そう言って決戦前の会議は終わり、解散となった

さて、頑張ってピッチャーやりますか…

第11話（後書き）

ああ
…

次話はかなりご都合主義になる予感…

第12話(前書き)

キャラの口調難しいッス

今回も結構なご都合主義

許容してもらえたと助かるッス

第12話

「敵襲だー！！」

明け方、敵襲を知らせを伝えるドラがなる…

「おいでなすったか」

皆！俺が昨日言った配置に急げ！」

さあて、実験開始といくか…

「風、許緒。行くぞ。しつかり兵を頼む」

まあ、賊があんまり広範囲に広がってなきや大丈夫だけどな

~~~~~

SIDE 星

やれやれ…

ナナシ殿はまた面白い事をするんだらうな

凄く見たい

まあ、彼はいつも我々の想像のつかない策で、結果を得てきてる  
最初の手合わせから始まり、ついには素手で恋にまで勝ってしまう

ほう…

…やはり見れないのはおしいな

~~~~~

S I D E 夏侯淵

何故皆あんな目茶苦茶な策を支持するのだ？
わからない

「なあ、趙雲よ。何故孔融の案に何の疑問もない？」

「ふむ。信じられぬかもしれぬが、先日洛陽近くのとある町が賊に襲われてな。たまたまいた我々が迎撃の指揮をとったのだが、その時ナナシ殿の策によりこちらの被害は最小限で決着が着いた。そして援軍でやってきた董卓達により、賊は討伐
ナナシ殿の策でなければ、援軍が来るまでもたなかった
これだけでも信用に値するが…」

と、ここでいったん言葉を切り、まだ賊が近接していない事を確認し、

「その後、張遼と呂布と手合わせをしたのだが、その両名共に勝った。しかも呂布には素手でだ」

…はあっ!?

あの呂奉先に素手で勝つ？

どんな化け物なのだ？孔融は

「ナナシ殿に全てを任せられる理由がわかりましたかな？」

「ああ、十分過ぎる程にな…」

「丁度話が終わった所で、賊がきました。迎え撃ちます
星殿は前線で、夏侯淵殿は後方から弓で支援を」

そして西門での戦闘が始まった

~~~~~

S I D E 楽進

凄い数だ…

だが、これぐらいならまだ問題はない

「沙和！真桜！援護を頼む

私は前線にて迎え撃つ」

東が心配だ

早く片付けて、援護いかなければ…

しかし何故彼は一番不利な東に最小の数しか兵を置かなかったのだ  
ろうか…

~~~~~

SIDE ナナシ

野球って楽しいな！

や、まあ、ピッチャーしかやってないんだが…

「……ピッチャー、俺」

俺は石を掴むと、押し寄せてきた賊に向かって、
投げる！

ピピッ

ストレート

183k/h

まあ、そこそこかな

ちなみに速度こそ、このぐらいだが、飛距離は400mぐらい飛ぶ

一人に当たって、その勢いのまま後ろ数人を巻き込んだ

「よし、出だしは好調だな」

このまま連続で投げ続ければ、何とかなるかな？

「次の石！さくさく持ってきてくれ

許緒はこっちきた奴等を迎撃してくれ」

「あつ、う、うん」

ん？なんか兵達と許緒の様子がおかしいぞ？

…あつ、こんな（ピッチャー）事やってるからか？

まあ、今は気にしてる時間が惜しい

じゃんじゃん投げるぜ

次はカーブいく！

「ふんっ！…曲がれ！！」

東門

ナナシが余裕で無双中

~~~~~

SIDE〜楽進〜

「弓兵！放てっ！」

くっ…、押されてきた…

このままだとマズイぞ

と、そんな余計な事を考えたのがいけなかった

賊が数人掛かりで体当たりしてきた  
それをまともにくらい地面に倒れる楽進

「いつまでも暴れまわって、邪魔なんだよ！死ねえ！」

このままだと、やられる！

咄嗟に気を練るが、

「なっ！？」

いつの間にか両腕を取り押さえられていた

「な、風ー！？」

「風ちやーん！？」

友人達の声も聞こえるが、あそこからは間に合わない

くっ…、死を覚悟し、楽進は目を閉じたが…

予想していた痛みはいつまでたってもこなかった

見上げれば、さっきまで目の前で剣を構えていた男は消えていた

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ 〱

あつぶねえ…

もうちよつと遅なかつたら楽進やられてじゃんか…

まあ、でも間に合つてよかつた

「楽進ー！援護するからそのまま前線頑張つてくれ！」

「兄ちゃん？東はどないしたんや？」

李典が聞いてくる

「ああ、この石をつ！投げてつ！潰してきた」

李典と話しながらでも石を投げるのを止めない

「……なんやねん、それ」

「ん？石投げ。こいつで東終わったから援護しにきた」

「だって、まだ二刻も経つてないやんか」

んー、でも終わったもんは終わったしな

「まあ、半分ぐらい潰した時、結構逃亡しちまったけどな」

「んな、アホな…」

「まあ、一応風残してきたから大丈夫だよ。許緒には星達の方に行つてもらつた」


~~~~~

S I D E 〱 夏侯淵

「秋蘭様〱。お手伝いに来ました」

「なっ！？季衣？お前、東はどうした？」

季衣に限ってほつたらかしてきたわけではないだろうが…

「……うん。なんか、あつという間に兄ちゃんが石投げて終わらせちゃった」

「はあ！？」

「夏侯淵さん。あまり深く考えてはダメです  
ナナシ殿はああいう人だと考えなければ」

「頭が痛くなってきた…」

「つまり、彼の事は深く考えるだけ無駄だと？」

「ええ。ですから今は目の前の事に集中しましょう」

「申し上げます！」

「なんだっ！？」

今度は何なんだ？

「北東より砂塵を確認しました。旗は夏侯、曹、典、荀を確認しました。援軍です」

「本当かつ！？」

皆の者！援軍で曹操様が参られた！我等の勝利は目前だぞ！」

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

それから間もなくして、賊は討伐された

そして現在、町の復興作業中…

のはずなのだが……

「ねえ、なんで俺こんな席にいるの？」

そう

俺は現在かなりVIPな席にいる
とある天蓋の中、いるのは

俺、曹操、夏侯惇、夏侯淵、荀イク

……ナニコレ？
俺、炊き出しとか行きたいんだけど……

第12話（後書き）

もうすぐでお気に入りが3ヶタッス

皆さんのお陰ッス

ホントにありがとうございませッス

厚かましい事も言えば、感想ももらえらるともって嬉しいッス

第13話(前書き)

最近気付きました

作者は戦闘の時の方が指が進みます

第13話

俺は今ある意味今世の最大のピンチにいる

「まずは、お礼と自己紹介ね

私は曹操。姓は曹、名は操。字は孟徳

秋蘭達から報告は聞いたわ

貴方達がいなければ秋蘭達はどうなっていたか、わからないわ
ありがとう」

うわっ…

大国のトップが俺に頭下げてるよ…

「いや、そんな頭下げんといってくださいえ

自分何もしてへんがな」

やべっ…

思わず言葉が変わった

っーか、変過ぎだろ…

「貴様！！なんだ、その華琳様に対する口の聞き方は！斬ってやる
！」

ええ〜っ!?!?

「ち、ちよつと待って!?!?おかしくね?俺ちよつちテンパっただけ
だよ?」

「問答無用!!」

に、逃げるか…？
と、腰を浮かした時…

「春蘭！止めなさい」

「し、しかし…」

「私は構わないわ

それとも私の言う事が聞けないのかしら？」

「わ、わかりました」

ほっ…

とりあえず当面のピンチは脱したか？

「では、二人共。自己紹介しなさい」

「では、私からいこう

私は夏侯惇。姓が夏侯、名が惇。字は元讓。次華琳様に無礼な事したら斬る」

「私は筍イクよ。姓が筍、名がイク。字は文若よ。気安く話しかけたら殺すわよ」

……………アレ？

俺何もやってないのに嫌われている！？

ナメられたら負けだ

ガンバレ俺！強気でいくんだ！

「あつ、自分孔融と言います。姓が孔、名が融。字は文舉っていいです。よろしくお願いします」

つて、ダメじゃん！俺

「あら？そんなに畏まる必要はないわ。私はちょっと話をしたいだけよ」

このメンツ相手にそりゃ酷つてもんだろ…

「じゃあ、話し方戻していい？そっちのが話し易い」

「構わないわ」

「でも、いきなり斬られたりとかは？」

「春蘭。私は構わないから何もしない事」

「はっ！」

「これで？」

「ああ、わかった
で、早速本題だが何を聞きたいんだ？まあ、予想はなんとなくつく
が」

まあ、多分戦闘の事だろうな

星も余計な事話してそうだから、もしかすると恋に勝った事まで知られてるかもな

「話が早くて助かるわ
あなたがどうやって賊を倒したのか、あと手合わせで呂奉先に勝っ
たそうだけど、その事を詳しく話さない」

思った通りめんどくせえ…

「拒否権は？」

「無しよ」

やれやれ…

「賊やったのは大した事じゃねえよ

手の平ぐらいの大きさの石を投げまくった

まあ、普通じゃ考えらんねえぐらいの速さでだが

まあ、その辺は許緒にでも聞いてくれ」

「ふーん。では、呂布に勝ったのは？」

この話題になった瞬間、夏侯惇と荀イクも全てを聞こうと、耳を澄
ました

どうやら注目されてるらしい

「んー、めんどくせえ

とりあえず手合わせでだけど、本気出したって本人は言ってたから、
本気の恋…呂布には一応素手で勝ったよ

これはホントの事」

「…そう」

うわっ……

なんかハンターの目しているよ
めっちゃ怖えよ…

「ねえ、貴方達みんな私の所にこない？」

「「華琳様!？」」

夏侯惇と荀イクがなんか驚いているが、それよりも…

「具体的には誰だ？」

「あなたと、あなたの連れの三人と外の楽進達三人よ」

「六人には今から話してみる

俺は却下だが」

そう言った瞬間、夏侯惇が剣を持ち出した

「貴様!華琳様の申し出を断るとは、覚悟はできているんだろうな
?」

ああ、無理だ

我慢できねえかも

…はあ、ホントにめんどくせ

「いいか、夏侯惇

誰の申し出だろうと、嫌なもんは嫌だから断る

あんたが曹操の事を溺愛してるのもわかるが、世の中の人間が皆そ

うだと思つなよ?」

…ふう

あああああ…

言つちまつたよ…

我慢しようと思つてたのに…

だってあいつ自分勝手過ぎるんだもん

…我ながらキモいな

つーか、これから殺される!?

流石にそれは嫌だな…

とか、プチテンパつてると、

「ほう…貴様、相当命がいらならしいな…

この夏侯元讓にケンカを売るとは…」

かなり怒つてらっしゃる!?

「…そこに直れ」

イヤー!?

「春蘭!止めなさい!」

よし、ナイスだ!曹操

「し、しかし…」

「今は食い下がるよりも、何故嫌なのかを聞く事が先よ

で？もちろん理由は教えてくれるのでしょうか？」

だ、ダメだ

曹操も怖え…

「理由は二つ

一つは、俺は俺の意志で主君を決める

一つは、お前に付いて行っても面白くないからだ」

「一つ目はともかく、二つ目の理由を聞いてもいいかしら？」

「まず、お前は頭が良い。それはここまでの会話でわかった。そして、多分だが戦闘もそこそこできる。少なくとも武官と同じレベルで違つか？」

「ええ。そうよ」

「で、それにさらにお前のカリス…威光があれば、優秀な人材も集まり、国もでかくなる

いずれ大陸を制するなら、他のでかい国ともぶつかるようになる

もしそうになったら、優秀な人材のいるお前のトコが有利だ

確かに他の国にも優秀なのはいくだろうが、多分お前のトコに一番多くいくんじゃないかと思う」

「理由は？」

「お前がそうやって今みたいに抜け目なく、人材確保しようとした点

他の国は知らないが、少なくとも俺はお前程抜け目なく、狡猾な奴を見た事がない」

「ち、ちよつと、あんた！今華琳様に向かつて…」

「桂花、いいわよ。失礼、続けてくれる？」

「以上の理由により、他の諸侯よりも一步有利
そこに俺が入ったら、お前等が大陸制するのが確定になって面白くない
以上だ」

「あら、あなたが入るだけで大陸が手に入るなんて、大した自信ね？」

「恋…呂布に勝ったからじゃないが、一対一の手合わせならまず俺は負けねえ」

まだまだ隠し玉はあるしな

「手合わせ？実践ではなく？それに実践では一対一の状況なんてそう都合良く作れないわよ？」

「手合わせなのは、俺はできるだけ人を攻撃したくないから。甘いのは自覚してるけど、こればかりは急には変えらんねえよ
それと、都合良く作れないんなら自分で無理矢理作る
それぐらいの力量はあるつもりだ」

「へえ…言っわね」

「まあね」

「それじゃ春蘭と一戦やってもらおうかしら」

…ほわつと!?!?

「…何故?」

「だって、一対一なら誰にでも勝てる自信があるのでしょうか?」

「却下。手の内まで見せて俺に何の利点が?」

「なんで、この先敵になるような相手に手の内晒さないといけないんだよ」

「あら、もしかして負けるのが怖いのかしら?」

「んな見えすいた挑発すんなって。俺さっきの話、皆にしてくるわ」

~~~~~

SIDE〜曹操〜

私の誘いを断る処か、あそこまで言うとは……

実際に武は見えてないけれど、きつと言葉通り自信はあるのでしょうかね  
それに頭も良いわね

あれだけの情報であそこまで言えるなんて、この大陸中探した所で  
他にいるかどうか……

文武両方ともこなせるなんて、しかもどちらもあるまで高いなんて…

ホントに惜しい逸材ね…

私のもにならないかしら？

### 第13話(後書き)

ああ  
…

もうすぐ番外編も書き始めないと…

読者の皆…!!

作者に文才と感想を…!!



## 番外編 1 (前書き)

タグに載せていた言葉で、作者の勘違いがあり、読者の皆さんにご迷惑をおかけした事をお詫びします

申し訳ありませんでした

以後このような事のないようにしていきますので、今後ともよろしくお願いします

さて、今回の話なのですが、閑話みたいなものなので、飛ばしてもらっても大丈夫です

## 番外編 1

とある村

ここはナナシが育った村である

ここにナナシの両親と…

何故か曹操&夏侯惇&夏侯淵&董卓&賈馱&呂布が来ていた

これは本編とは全く関係ない、作者が勝手に読者サービスを狙って書いた番外編1である

なお、作者の都合上（メンドイ為）視点変更は無しでいきます  
そして天使とか普通あまつかに受け入れられてますが、気にしない報告でお願いします

「率直に言うわ。孔融を私に出来ないかしら？」

と、曹操は開口一番孔両親に言った

「この小娘は一体何を言ってるんだい？その言い方だとまるで、あたしの可愛いナナシを婿に貰うみたいに聞こえるんだけど？」

孔句は曹操相手に不機嫌を隠そうともせずと言う

「貴様！！華琳様に向かつて、なんだその態度は！！！」

「やれやれ……」

小娘は自分の部下も御せないのかい？」

「春蘭！」

申し訳ないわね

で、孔融の事だけど、殆どそのような意味で構わないわ」

「ちょっと、どういう事？ナナシはボク達の所にくるのよ！」

と、曹操に食ってかかる賈馱

「……………恋達の」

孔句は溜め息をついて、

「はあ、だからナナシはあんたらになんかあげないよ！」

カオスとなる孔家

と、そこへ……

「はい。じゃあ、みんなで勝負しましょう！」

あまつか  
天使登場

「……………天使！？」  
あまつか

みんなノリ良く乗ったという事をお願いします

「丁度、メンツも8人いる事ですし、董卓達と孔宙、曹操達と孔句で麻雀やりましょう！」

「いいわね、異議はないわ」

と、曹操に続いて春蘭、秋蘭も頷き、

「ボク達だって望む所よ！」

賈馱を始めとした董卓達も頷く

かくして、董卓&曹操VS孔両親の麻雀バトルが始まった…

続け…いや、続く

番外編 1 (後書き)

……続く、かなあ？

第14話(前書き)

まあ、また駄文ツスね

## 第14話

「皆！話がある」

俺は天蓋から出て…いや、逃げ出して外で炊き出しやら復興作業している皆にさっきの曹操が皆を欲しがっている事を説明した

「ほう、稟、風。ならば丁度よかったではないか」

「ん？星、どゆ事？」

「言っでなかつたか？稟と風は陳留に良い主君がいると聞いて、向かっていた所なのだよ」

へえ〜

初耳ですよ〜

「って事は、曹操ん所？」

「うむ」

「いや、風も若干アレだが、稟なんて大丈夫なのか？」

「気持ちはわかるが、風と二人で丁度良いのだろう」

ああ〜…

納得だわ…

「じゃあ、風と稟はそれに行くのね？星は？」

「私は公孫贄が治めてる幽州という所を見てみようかと」

……ハム？

特に意味はない

強いて言えば、神（作者的な何か）からの電波

「何でそんな所に？」

「面白そうだからに決まっているではないか」

さよけ……

きつと星はどこまでいっても星なんだろうな

「じゃ、わかった。楽進達はとうする？」

「わ、私は孔融様に付いていきたいと思えます！」

……なにやら怖いオーラが出てるんすけど？

「じゃあ、沙和もそれに一緒なのー」

おい

「ほんなら、ウチもやな」

おいおい

「おいおいおいおい……」



俺は風の向くまま気の向くままあつちに分ら分ら、こつちに分ら分ら旅してるんだぜ?」

(はい、恥ずかしいセリフ頂きました!)

(……いきなりできて何なんだ?)

(やゝ、あなたの恥ずかしいセリフを記録してって、そのうち番外編使って発表しようって、お偉方からの指示でして)

(なっ!?!ふざけんなっ!?!何?そのお偉方。バカなの?何なの?死ぬの?)

(まあ、減るもんじゃないし?いいんじゃないの?じゃあ、私も忙しいから、もう行くね?

あでゅ)

(ちよっ!?!おまつ!ふざけんなっ!戻ってこい!)

「私はそれでも付いていきたいです  
それと、私の真名をもらっていただけませんか?」

「あつ、凧ちゃんズルイの!沙和も預けたいの!」

「なら、ウチのも受け取らん理由がないな」

…なんだこれ

ちよっち話聞いてなかったらこんな状況に…

絶対楽進とかさっき助けた事、気にしてんだろ

まあ、俺も別に渋るものでもないか

と、三人と真名交換しようとした時、背後から殺気を感じた  
俺は恐る恐る肩越しに後ろを見た。見てしまったんだ  
そこには金髪ツイン小ドリルをダブルでお持ちになっている、曹孟  
徳という名の鬼が立っていた…  
その目はこう言っていた

『あなた、私の所に来ないのはしょうがないとして、彼女達も持つ  
ていくつもり？いい度胸してるわね？』

と

超無理ツス！

自分めっちゃ怖いツス！！

「ああ、わかった。交換しよう

俺はナナシ。よろしく」

「私は凧です。こちらこそ、これからよろしくお願いします」

これからって…

「沙和は沙和なのー。凧ちゃん共々よろしくなの」

だから…

「ウチは真桜。兄ちゃん、これからよろしゅうな」

……………ばっ！！！！

俺は何も言わずに土下座をし、急な事に呆気にとられている三人に頭を下げ、

「頼む！俺の為にも付いてこないでくれ！もし、俺に付いていくと言うなら、俺はある事情により死ぬかもしれない  
だから、頼む。それだけは勘弁してくれ」

…見事なヘタレっぷりだった

~~~~~

S I D E 〱 曹操

まったく、あの男は何を考えているのかしら？

私の所に来ないのはしょうがないとして、彼女達も持っていくつもりなんて、この曹孟徳に喧嘩売っているのかしら？

と、そこへ

「おい、華琳ー！こっちは大体終わったから、今撤収作業始めたぞ」

こっちの男もアレだし…

はあ、能力ある分、孔融の方がマシかしら？

「一刀、じゃあ、楽進達を私の天蓋まで連れてきてちょうだい」

「りょーかい」

そう言つて一刀は楽進達を呼びにいった

さて、どうやって楽進達を引き込もうかしら…？

曹操はこれからの事を考えながら、自分の天蓋に戻つていった

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

ふう…

なんとか命の危険は去つたみたいだ…

ん？あれはもしかして…

「もしもし？今ちよつと大丈夫ですか？」

視線の先にいた華琳と話していた男に話し掛けた

「はい？」

「俺は孔融。ちよつと話さないか？」

「あつ、俺は北郷一刀。まあ、大丈夫ですけど」

やっぱり、一刀で合ってたか  
じゃあ…

「じゃあ、ちょっと付いて来てもらえる？」

そう言つて、人気のない所に…

や、自分ノーマルですからね？  
男に発情とかありえませんか

「最初に、口調悪いかもしないけど、気にしないでくれ。元々こ  
んなんだから  
で、話なんだけど、お前が天の御遣いでいいのか？」

突然のお前発言に面食らった一刀だが、慣れているのかすぐに答え  
てくれた

「まあ、一応そう言われてはいるな」

よし、間違い無し  
なら…

「三国志ってどんな歴史だ？」

「なっ…！？」

驚愕してる

まあ、わざとそついう風に言っただがな

「これからの事は他言無用で頼む」

「……………ああ」

「詳しくはわからないが、俺はどうやら前世の記憶を持っている。でも、その前世には三国志とかはなくて、これからの事がわからないんだ。だから、ちょっと教えてくれ」

「じゃあ、なんで三国志って知ってるんだ？」

「あちゃー…」

「以外と鋭いのね…」

「ああ、それはなんか神様（笑）が次いく世界は三国志云々言っただんだよ」

「あながち嘘じゃない」

「まあ、所々嘘であるがな」

「……………お前はどこまで知ってるんだ？」

「ありゃ？」

「警戒強くしちゃったかな？」

「んー、そんなに知らないよ？さっき言った事ぐらいだから、情報が欲しいんだよ」

「……………わかった」

「俺が知ってる限りでいいなら」

「ああ、頼む」

そして俺は一刀から情報を貰い、かわりに

「サンキュー」

あっ、俺の真名はナナシだから、そう呼んでくれ

これからまた会うかもだけど、その時は気軽に声かけてくれよ  
いや、久々に気兼ねなく横文字話せるから嬉しいな」

「それは同意見だな

やっぱり、そっちもそれなりに苦労してんの？」

と、まあ、世間話をしつつ俺は一刀と親睦を深めていった…

「じゃあ、結局風達は曹操といくん？」

「はい。ナナシ様もいつでもいらしてください」

……それはお前が許可していいのか？

「もちろん、私も歓迎するわ」

曹操さん、目がマジッス…

「…まあ、風が向いたらね」

（はい。また頂きました！）

……しまった忘れてた

やっちまった〜

「…じゃあ、皆またどっかで会う事があればな！  
星、途中まで一緒に行こうぜ」

「うむ。では、風、稟。また何処かで！」

そして俺と星は幽州に向けて歩き出した



第14話(後書き)

ああ…平和だとネタがない…

## 第15話(前書き)

今回かなりカオスかも…

感想に書きましたが、

作者は原作キャラを死なせません

まあ、頑張るのは主に物語のキャラ達なのですが…

## 第15話

今日も今日とて星と一緒に幽州に向かって馬でパカパカ歩いている  
今日のこの頃

「星…ヒマだ」

俺は絶賛ヒマックスだった

「…ナナシ殿。それ、何回目でありますか」

ちなみに馬はちゃんと二頭だ

ちよつと残念とか思っただけなんだからねっ!?

ああ…これ俺のキャラじゃねえよ

「だって遠過ぎだろ!!俺はヒマだと死んでしまっ生き物なんだ」

「はあ…。とても呂布に勝ち、二つも町を救った人には見えませ  
んな」

「しゃーなし

あつ、そうだ。星、ちよつち相談乗ってくんね?」

「おや?ナナシ殿が相談とは珍しい  
私でできる事でしたら構いませぬが?」

「じゃあ、頼む

実はもう少しでも強くなりたいんだよ

何かないか？」

「おやおや〜？」

私などよりも遙かに強い者から出る相談とは思えませんな〜」

「ああ、ちやうねん

武じゃなくて心だよ

どんなに武が強くても、それを奮うのはその人間だから

例えば義の為に力を奮うなら、その結果は義という思いに近い形なるだろう。凶ならば、その武に賛同する人間は殆ど出ない

だけどそもそも俺は武を戦場で奮えない。奮いたくない

これでは思いを持っていても意味がない

言い方悪いかもしれないけど、どうやったら人を斬れるようになる？」

「ふむ。私は割り切る事にしていますぞ

やらねばやられる。だから、斬って、その結果殺してしまっても後

悔はしない

後悔してしまえば、それは殺した相手に対しての冒瀆であるからな」

いつの間にか二人の馬は止まっていた

「星はそれだけで割り切れているのか？」

「いや、そんな事はないぞ。だが、この世の中ではそんな事も言っ  
てられんからな

それに私には殺した人達の方も生きる義務がある

そう思えば、少しは気分も楽になるだろう？」

「義務か…」

そうだな。俺の両肩には今まで殺した人達の『生きたかった』という想いが乗っている…

確かにそう思えば幾分楽にはなるな

星、ありがとな」

「いえいえ。なんせ、ナナシ殿の悩み事など滅多になさそうであるからな」

これが無ければ星はホントに良い奴なんだがな…  
まあ、これを引つくるめてこそ星なんだがな

「おや？幽州が見えましたぞ  
さあ、後少しですぞ」

「幽州に着いて、公孫贄の所までどのくらいあるんだ？」

そう、幽州が目的地ではない

あくまで公孫贄に会いに行くのが目的である

「さあ？二日もあれば十分かと思いませんぞ」

「……………ル　ラかキ　ラの翼が欲しい……………」

「……………」

「いや、何でもない……………」

そんなこんなで公孫贄の所に向かっていましたとさ

~~~~~

S I D E 〱 公孫贇

ああ〜もう！忙しい！
ただでさえ人が少ないのに

「失礼します」

「どうした？」

それでも部下には当たらないこの対応
これが太守たる者の器だ！

忙しくてヤケクソ気味のハム

「城門の所に公孫贇様に会いたいという者が来ています」

私に会いたい？

「通してくれ」

どんな用事だかわからないが、兵の口調からして、民ではないだろう
誰かが士官しにきてくれたのかな？

公孫贇の想像は半分当たりで半分外れだった

~~~~~

SIDE 〱 畢

「と、いう訳であなたに会いにきたが…」

これはまあなんと…

「地味っつーか、普通っつーか…」

…私が言いたくとも言えなかった言葉を言ってしまうナナシ殿  
流石としか言えないな

「…あんたら言いたい放題言っちゃってるけど、名前も名乗らず失  
礼だと思わないのか？」

名乗ればいいのか…？

「おっと、悪い

俺は孔融。字が文举。よろしくな」

ナナシはあまり悪いとは思ってないような…

「私は趙雲。字は子龍。先程はすまないな」

私はしつかり謝るぞ？

「私が公孫贇だ。字は伯珪。地味だが一応ここ幽州の太守やってる。よろしく」

そして根に持っている伯珪殿…

「これがのちに幽州の三鬼神と呼ばれる三人の出会いだった…」

「なあ、星？盛り上がりそうなのトコ悪いんだが、勝手な事言わないで欲しいと思ったりする」

まあ、少し誇張が過ぎたか…

「こんな地味つ子が俺と並ぶワケないだろ？俺と並べるのは星！お前しかいない！」

「……えっ！？／＼／＼」

「星！」

「ナナシ殿！」

ガシッ

そして二人は互いに駆け寄り抱き合った

「なあ？また失礼な事言われている気がするが、お前達はどうしたの？私に用事があったのではないか？」

「公孫贇よ…」



もう少し空気読んでこの茶番に付き合ってくれてもいいんじゃないか？」

…ナナシ殿、茶番って言ってますぞ

「まあ、そんな普通の反応しかできないからこそ、伯珪殿なのだろう」

「お前達帰れよ……」

おやおや

伯珪殿が呆れてしまったではないか

まあ、ここまでやってそれで済むねだから、やはり伯珪殿は優しいのだろうな

「いやなに、実は客将という形ではあるが、ここに士官しようと思っただけ」

だからこそ一緒にいても良いだろうと思う

「何、星？ここに士官するのか？」

「ああ、客将という形で伯珪殿が良いのならばな」

「…はあ。子龍と言ったか？今ここには仕事量に対し、圧倒的に人が足りない」

だから、来てもらうのは助かるが、何ができるんだ？」

疑うという事を知らないのか、悪人ではないと見抜いているのかはわからんが、いきなり採用か…

まあ、後者ならば伯珪殿の所においても存外面白いのかもしれんな

「私は何でもできますぞ？文官、武官どちらでもこなせますぞ」

「そうか。じゃあ、そっちの文拳だったかな？お前は？」

ふむ。ナナシ殿か…

武官としては一流である。知も高いのはわかるが、文官としてはどうなのだろうか？

興味あるな…

「あつ、俺は士官しないんで」

「「えっ!？」」「

だが、ナナシ殿の言葉は否定であった…

## 第15話（後書き）

昨日寝る前にネタ欲しいと祈っていたら、バイオの世界に呂布と夏侯惇がいて、ゾンビ相手に無双すりというカオスな夢を見た

きっと夜中録画で見たバイオ？のせいだ…

**番外編 2 (前書き)**

ネタが無い…

そっだ！番外編の続きを書こう！

## 番外編 2

〽 前回のあらすじ

孔融の今後の進路（？）を巡って、孔句、孔宙VS曹操達、董卓達の麻雀バトルが（本人の意思関係なく）始まった

「それじゃあ、確認するわね  
持ち点は一人25000から  
飛ぶのは無しで、超過分は別で計算しておく事

卓は  
曹操、夏侯惇、夏侯淵、孔句と  
董卓、賈馱、呂布、孔宙  
の二卓

回数は半雀を一回  
孔両親の点数を最終的に誰か一人でも抜いていたら、そこに孔融を嫁がせる

孔両親がどちらにも勝ってしまったら、両軍は負けた点数の合計をお金に換算して支払う  
もし、孔両親が負けてしまったら、曹操、董卓から代表二人を出してまた半雀  
ここまでで、何か？」

と天使はあまつかルール説明をした

「特に無いわ。さあ、始めましょうっ?」

と曹操が言えば

「ボク達だって大丈夫よ。皆、勝つわよ！」

賈馱も負けじと喝を入れる

「ふん。近隣の町という町の雀荘という雀荘から、出入りを禁止された私達に挑もうなんて、自分達の愚かさを知りなさい」

と孔句は言った

「「えっ!?!」」

曹操と賈馱の声が八モる

さあ、次回ナナシの運命を（勝手に）賭けた戦いが始まる

こつこつ期待！

期待させちゃっていいのかなあ…

番外編2（後書き）

まあ、まだ引つ張ります…

番外編〈麻雀バトル編〉は多分あと2話で終わる予定

## 主人公設定追加（前書き）

感想でも指摘されました主人公設定の矛盾点について天使あまつかが説明する

今回はそんな話



## 主人公設定追加

ナナシ達が公孫贖の所に着く頃、天使あまつかにちょっとした問題が降り懸かっていた

それは…

私は天使あまつか。こんな名前だけど、立派な死神なのです

「のう、天使あまつか? ワシが言うのもなんじゃが、ナナシの設定、矛盾してないか?」

と、私の上司である第2死神長が言い出した

「でも、これって長達皆で決めてこうなったんじゃないか? たでしたっけ?」

「そうなのじゃがな? 耐久が壊滅的だというテイク、これじゃと自分の攻撃、特に震脚等使っていれば、足が壊れてしまうのではないかね?」

「ああ、それは明細書見ると、『この度、テイクさせていただいた耐久力の件

この耐久力とは、『外部からナナシに害意のある攻撃に対して』である。例えば、ナナシが壁を殴るとしよう。その時、拳から出る力が壁に当たり、作用反作用の法則により、壁から反作用した力が拳に伝わる。もし耐久力を全てテイクするならば、この力により拳が壊れる。しかし、それではコップも掴めなくなって為、このような

処置に至った』と書かれていますよ」

「つまり、日常生活がままならなくなるから『外部からナナシに害意のある攻撃に対して』のみの耐久力をテイクしたと?」

「そんな所です」

「では、毒に対する抵抗力については?

本来人間というのは少なからず、『毒』があり、だからこそそれら毒や菌に対する抵抗力というのを持つておる。しかし、それに対して何もないのでは、すぐ病気になるったりして死んでしまうのではなからうか?」

「はい、それも明細書では

『てへっ 設定ミスった(笑)』

ゴメンネ 後付け設定よろぴく 設定決まったら、教えてちょこ  
つちで修正しとく…かもかも(笑)』だそうです」

「「……………」」

「つまり、(作者の)後始末をワシ等にやれと?」

そう言つて、明細書をピラピラする

「そつみたいですね…」

どうしますか?」

「ワシは頭が痛くなつてきた…」

あまつが  
天使に任せる」

「じゃあ、誹謗中傷はこいつ（作者ですね、わかります）に全部受けてもらうとして、毒関係の抵抗としては『日常生活に必要な毒や菌のみ普通の人間と同じ。それ以外は今までの設定通り』という事でどうでしょうか？」

「まあ、そんなもんじゃろつな

もう少し計画性を持ってギブアンドテイクをしてもらいたいものじやよ」

こうして天使達あまつがにより、ナナシの矛盾を少し消化した

## 主人公設定追加（後書き）

近々ナナシに新しい武器を作りたいと思います

そこでできれば読者の皆さんに名前を決めて頂ければと思います

武器は全長5 m程の六角柱の鉄の棒

闘い方はとりあえず振り回したり、槍に近い使い方を予定しています

沢山候補が来ると嬉しかったりします

## 第16話(前書き)

多分今までで一番長いかも…

あつ、ちなみに第 話とかで意味はないッス

テキストにこのぐらいの分量かな?ってだけなんで

## 第16話

「あつ、俺は士官しないんで」

こう言った瞬間に周りの空気が固まった…

「「えっ!?!」」

「や、だって俺士官するなんて言ってないじゃんか」

「た、確かにそうだけどさ!?!」

「俺は嫌な事は嫌と言える人間だ。あつ、でも勘違いしないでほしいのが、俺は別に公孫贖が嫌いなワケじゃないぞ?まだ何処にも士官したくないだけ」

「しかし、それではこの後どうするのです?」

「ああ、しばらくこの町に住む事にした」

「……それではあまり変わらないのでは?」

星の言う事は尤もだろう  
だが、考えてもみてほしい

「なあ、俺って自分の村以外で何処かに長く滞在した事ってないんだよ。行き倒れの俺を発見した星ならわかるだろ?」

「ふむ。確かに」

「つまり俺も少し休憩したいワケなのよ  
城だと、なんか客違って感じがして嫌なんよ」

「まあ、確かにわからなくもないが…」

「あと、俺牙門旗と100人でいいから兵が欲しいんよ  
城で客将だと、折角兵に志願してきた連中も、結局公孫贇のものに  
なっちゃうだろ？」

「……唐突だな、そして牙門旗の次に兵なのか  
流石はナナシ殿だな…  
何故、牙門旗と兵を？」

「んー？牙門旗ってカツコイイじゃんか！恋の牙門旗なんて『深紅  
の呂旗』とか言われてんだろ？チョーカツコよくね？  
兵は牙門旗作るならやっぱり欲しいと思ったんよ」

「ナナシ殿らしい理由だな…」

褒めんなって〜  
褒めてないか…

「だったらできれば城で働いて欲しいな…  
目茶苦茶人手不足だから、文官武官問わず手伝って欲しいんだ  
武官として、兵の訓練とかお願いできないか？  
内100人程ならお前のトコに持って行って構わないから」

「ええ〜…」

「頼むっ！！」

今にも土下座せん勢いだ…

「ああ…もう！わかりましたよ！

じゃあ、とりあえず部屋の準備しといてくれ  
俺は先にどの程度の練度なのか見てくるから  
場所は何処？」

「ああ、それならあいつを連れて行くといい  
案内させる」

そう言っつて扉前にいた兵を指差した

「りょーかい。じゃあ、俺行ってくるわ  
牙門旗と兵の件、よろしく」

~~~~~

S I D E 〱 公孫贇

「りょーかい。じゃあ、俺行ってくるわ
牙門旗と兵の件、よろしく」

そう言っつて彼は行っつてしまった

「不思議な男だな…」

私は誰ともなしに呟く

「ナナシ殿はきつと風なのだろう。付き合いある私ですら掴めないのだから」

それを子龍が拾う

「なあ、子龍？

彼は強いのか？」

私は凄く今更ながら、彼の武について質問をした

「ほう。それを聞かずに何故兵の訓練を任せたのか…

まあ、強いが弱いかなら、強い

それもそこいらの武官では齒が立たない程にな

何なら、今から見に行くか？」

「そこまでなのか？」

私も武に経験を持つ者

興味が無いといえは嘘である

「呂奉先に素手で勝つ程だ」

……………？

「ずまない。最近激務で少々疲れているようだ
もう一回お願いできるか？」

「呂奉先に素手で勝つ程だ」

……聞き間違いではなかった

「はあ！？あの飛將軍に素手？あいつ何者なんだ？っていつより、それおかしいんじゃないか？」

流石にそれはおかし過ぎる…

何かの間違いだろうと思っていたが…

「なあに。実際見れば良くわかるだろう」

そう言って調練をやっているだろう中庭に向かった…

~~~~~

SIDE ナナシ

ほう

まあ、そこそこ人数いて悪くはないかな

俺は城壁の上からそんな感想を抱いた

「よし、じゃ行くか」

そう言っていきなり城壁から中庭に飛んだ

「ええっ!?!」

一緒に来た兵の方が驚きの声を上げる

まあ、このくらいの高さなら何の問題もなく着地できる

「死神の降臨だあー!!」

ちよつちテンションハイになつて俺はいらん事を叫びながら着地する

訓練していた兵達は、いきなり空から大太刀背負った男が叫びながら降りてきたのを見て、ア然とするしかなかった

「俺が今日から少しの期間だが、お前等を訓練する事になった  
孔融…孔文挙だ。夜露死苦!」

俺はよくわからないテンションで挨拶した

当然挨拶された兵達は皆、

「」「」「」……………(ポカーン)「」「」

こんな反応である

それを見てようやく正気に戻ったナナシは、

(ああ…、また俺はやつちまったのか…?)

めっちゃ後悔してた

~~~~~

S I D E 〱 公孫贇

あいつ、今何処から飛び降りた？高いなんてもんじゃないぞ？
なのに子龍は

「ナナシ殿は何をしても飽きさせないな
実に面白い」

とか言つて笑つてる
日常茶飯事なのだろうか？

「よし！お前等並べ！男女男女男女男女で交互に並べ！」

と、孔融が調練を始めた声が聞こえてきた

…あの並び方は？

「あのおく、色々聞きたい声があるのですが、あなたは何処の誰？
なんであなたが調練を見るのか？あと、その並び方は？」

兵の一人が怖ず怖ずと尋ねる

「俺は今日ここに、公孫贇に会いにやってきた孔融。姓が孔、名が融。字が文举。調練見るのは公孫贇に手伝ってくれと言われたから。この並び方には意味はない

以上。他には？」

「俺達の訓練を見るって事は、そこそこは強いんだろうな？」

一人のガラの悪い新兵が孔融に突っ掛かる

「ああゝあ。あの新兵死んだかもしれんぞ」

と、子龍

…えっ!?

「ああ、強いぞ

少なくとも、呂布には勝てるからな」

その一言で場に緊張が走る…

「はあ？てめっ、パチこいてんじゃねえよ？呂布といえば、俺でもわかる程の猛将だぜ？」

新兵は私にわからない言葉でさらに孔融に突っ掛かる

…パチ？

というよりあんなの良く新兵にしたな…

これも人手不足の弊害か…

「…ふう。

じゃあ、かかってこいよ。俺に一撃でも入れたら何でもしてやるよ」

「俺等新兵ですよ？もうちょっと条件不利してくださいよ」

「ふむ。そうか、じゃあ、俺に対して何かしら思いつ事があるやつ皆でかかってこいよ
それで文句はないだろ？」

なっ！？何だそれ！？

「まあ、それでもナナシ殿が余裕で勝つだろうな
というより、新兵達では間合いにすら入れまい」

「あの大太刀か？」

「いや、素手でだ」

「規格外過ぎるな……」

「んじゃ、俺達が勝つたらあんた俺達の言う事なんでもきけよ」

…あいつはこの後クビにしよう
あんな兵がいると軍は潰れる
早くなんとかしないと…

と、心に決めていると

「じゃあ、俺が勝つたらお前等全員俺の奴隷な
とりあえず俺は人間の言葉は話させないから、よろしく」

「はん！御託はいいから早く始めようぜ」

そして孔融対新兵の闘いが始まった

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

奴等はバカなのか？一人ずつなんてのは論外だが、全員でくるもの  
ないぞ？

まあ、俺としては楽になったからいいけど

一斉にかかってきた新兵達の攻撃が当たるかどうかの時、俺は震脚  
で吹っ飛ばし、一番近くにいた奴を蹴飛ばし、腕の届くトコにいた  
奴を掴み、ジャイアントスイングよろしく振り回す  
そして俺に向かってくる奴等に当て、投げる

「さて、他にまだやる奴は？」

まあ、結構無理したけど、死んではいないだろう

「いないなら、さっき俺に文句付けた奴等、お前等皆俺の奴隷な？  
とりあえず返事はワンしか認めないんで、返事は？」

「………ワン!?!」「」「」「」

何処の世界でも不良共の教育には恐怖政治が効くようだ  
皆めっちゃビビってるし

「そんな怖がるなつて  
お前等はとりあえず俺が新しく作る隊の兵になってもらう  
…いいか？公孫贇？」

後半は星と見に来てた公孫贇に言った

「…ああ、そいつらで構わないんなら」

と、許可を貰う

「よし、じゃあ、お前等は俺の奴隷兼隊員な？」

「じゃあ、とりあえずお前等は今から俺に付いて来い  
星！ちよつち他の新兵の事頼むわ」

そう言つて、中庭の端に集めた

「やれやれ、ナナシ殿は人使いが荒い…」

星はボソツと呟く

聞こえてるぞ？

「ええと？今ココには何人ぐらいいるんだ？答えるクソ犬」

先頭にいたさつき俺に文句かました奴に言う

「はあ？72人だよ！つーか、なんで犬扱いなんだ？ふっざけんな  
！」

はあ…。こいつら…



「お前は自分の立場をわかってないな

いいか？お前等は皆俺の奴隷であり、隊員なんだ。つまり現在俺に口答えする事は許されていない

……が、お前等にとって悪い話だけじゃねえよ

「……？」

皆わかってない様子

まあ、前世でコレやった時も皆わかってなかったしな

「今から俺の調練という名のシバきに耐えてもらう。正直死ぬ程辛いんで覚悟しとけよ？」

…あつ、逃げるなら今の内だぞ？臆病者の口だけ野郎共はいない方がいいから。つーか、邪魔になるだけしちなみに途中退隊は認めないんで、よろしく」

「はあ？誰が臆病者だあ？逃げるか！」

ホントにこつこつ手合いはやりやすい…

「まあ、その分お前等にも良い事はある

とりあえず、俺の調練をキツチりこなせば、普通の武官じゃあ相手にならないくらいの強さにしてやる」

「「「「「…！？」」「」「」

皆ビックリしてるよ

まあ、何処の誰でもビックリするわな

「まあ、流石に恋…呂布とか相手するなら数合持てばいいぐらいに

しかならんが…」

「……!?」「」「」「」

新兵達は驚愕した

この男についていけば、呂奉先に負けはするものの、数合は持つだけの力を貰える

それはつまり猛将と同義である

そんな力を手に入れられるならば、この扱いでも我慢できる！

そう新兵達は思ったが…

「ああ、ちなみにお前等にはまず精神修業からやってもらって、考え方から色々変えていくつもりなんで、武力もらってハイサヨナラーみたいなのはできないから、よろしく」

「………えっ!?」「」「」「」

## 第16話(後書き)

明日は投稿できないかも…

あっ、武器の名前、感想とかで沢山送って貰えると嬉しいッス

### 番外編3 (前書き)

投稿遅くなり申し訳ありません

現在作者は風邪を引いており、熱はそうでもないのですが鼻がヤバイです

しかし、これは作者がバカではない証拠なので、甘んじて受けようと思う次第です

今回は番外編「麻雀」孔宙VS董卓達です

まあ、あまり麻雀詳しくないので、生暖かい憐れみの目で見守って下さると嬉しかったです

### 番外編3

「こちら天使あまつか」

現在、孔宙VS董卓&賈馱&呂布の仕合が始まるうとしています  
外来語とかまざっっちゃってるけど、気にしたら負けよ！意味は通じ  
るわ！

卓の順番は東南西北の順番で、賈馱、孔宙、呂布、董卓です」

「じゃあ、ボクの親からだね」

カコッ、コトッ

「私はこれを捨てようかな」

コトッ

「ポン！」

賈馱が孔宙の捨てた『撥』をポンする

「おや？いきなり鳴くのですか？まだ東場一巡目ですよ？」

「ふんっ！安い手でも連続で親やれば負けないのよ」

「軍師らしい考え方ですね」

そしてそんな会話をしている間に呂布は…

「……………ダブ立直」

「「…ええ!?!」」

「へう…流石恋ちゃんです…」

「……………オープン」

「…!?!?ああ!?!?しかも呂布選手、オープン立直だあ!」

「なんですつってえ?!一巡目でいきなりのダブ立直オープンって、頭おかしいんじゃない!?!」

「……………しかも、待ちが多い」

と、孔宙

呂布の待ちは萬子の『二・五・八』  
所謂三面待ち(こんな言い方だっけ?)

「へう…なら、これは安牌ですう…」

董卓は筒子を捨て、続く賈馱、孔宙も捨てていく

「まさかの一発自摸なるか!?!」

「…!」  
「うるさい!天使!あまつか!そうご都合展開なんてあるわけないでしょうが」

「……………ツモ和了」

……ダブ立直オープンー発自摸平和ドラ2  
……倍満、……6000オール」

「「「「「……「「「「」

あまつが  
天使含め、4人は固まった

「……まさにチートだな」

孔宙はそう力無く呟き、賈馱は余りの事に放心状態、董卓は呂布を何故か褒めていた

〈見学席〉

「おやおや、あの娘やるねえ

これは筑も本気出さないとマズイわね」

「華琳様？今のそんなに凄いですか？」

「姉者……（まさか麻雀もわからないのか？）」

「春蘭……あなた少し勉強ね

あれはもはや天命ね

それよりも孔句？孔宙は強いのかしら？そこそこ程度ならこのまま  
呂布の一人勝ちよ？」

まあ、わかると思いますが、上から孔句、夏侯惇、夏侯淵、曹操ッス

「本気ならあたしでも飛ばされるね  
今回こそ呂布のお嬢ちゃんに速攻決められたけど、筑は堅実に点を  
取る満貫辺りを連発して、気付いたら相当点数持っていてるっ  
てスタイルなのよ。しかも親の時にやるから夕チが悪い……」

「連続で満貫なんて、どれだけ引き強いのよ……」

卓

と、観戦席でそんな会話がされてた頃

「自摸！門断平ドラ3

跳ね満です。私も6000オール」

「なっ!?!」

「へう……」

「……………」

「おつと!?!まさかの親つ跳ねキター……!!  
これは巻き返したか……っ!?!」

「流石は我が夫だな」

「……………もう、何でも有りね……」

上から孔宙、賈馱、董卓、呂布、天使、あまつか孔句、曹操



曹操も流石に呆れるしかない程の卓だったそうなの

……

……

…

そしてついに勝負はラス南

現在点数

|    |   |   |   |   |   |   |   |
|----|---|---|---|---|---|---|---|
| 賈馱 | … | - | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 孔宙 | … | + | 4 | 9 | 9 | 0 | 0 |
| 呂布 | … | + | 3 | 6 | 5 | 0 | 0 |
| 董卓 | … | + | 2 | 6 | 8 | 0 | 0 |

「おっとつと！？まさかの軍師がマイナスだあー？」

「うっさい！ボクだってね！！」

「アッ」

「……あつ、ロン和了」

「……えっ！？」

「おや、呂布さん？それでは私を捲けませんよ？」

「……しょうがない（フルフル）」

「はい。これで半雀終了ー！  
それでは結果発表です

|     |             |
|-----|-------------|
| 賈馱… | - 1 5 9 0 0 |
| 孔宙… | + 4 9 9 0 0 |
| 呂布… | + 4 0 4 0 0 |
| 董卓… | + 2 6 8 0 0 |

いや〜、見事に軍師以外は持ち点よりプラスになっているー！  
さあ、軍師さん？今の気持ちをどうぞ？」

「うるさいうるさいうるさい！！！！！！」

「はい、ツン頂きました

では、孔宙VS董卓&呂布&賈馱は孔宙の勝ちで決着着きました！  
董卓さん達は計27300点分のお金を払って下さいね？

次は孔宙VS曹操&夏侯淵&夏侯惇だ！  
さあ、夏侯惇は期待に応えてくれるのか？  
アディオース！」

「あつ、ちよつと待て！私が何だと言うんだ！？」

と、夏侯惇

しかし彼女の言葉は誰にも聞き入れられず、舞台は次の仕合に移っていった

続く！

### 番外編3（後書き）

アンケートについて思った

5mってデカ過ぎじゃね？

と

変更して3mにしようと思った今日のこの頃

できれば本編次の次ぐらいに名前を出したいと思ったり思わなかったり…

作者のセンスでは無理なので、読者の皆様のご協力をお願い申し上げます

## 第17話(前書き)

まずは昨日投稿できなくて申し訳ありませんッス  
しかも今日もこんな時間に…

まあ、こんな時もあるッス!!

ガンバレ俺!

## 第17話

あれから一週間：

現在調練場ではナナシのナナシによるナナシの為の調練が行われていた…

「死ぬ覚悟よりも！殺す覚悟よりも！生き残る覚悟を持って！」

「…………死ぬ覚悟よりも！殺す覚悟よりも！生き残る覚悟を持って！…………」

「作戦その1。ガンガンいこうぜ！」

「…………作戦その1。ガンガンいこうぜ！…………」

「作戦その2。いろいろやろうぜ！」

「…………作戦その2。いろいろやろうぜ！…………」

「作戦その3。命を大事に！」

「…………作戦その3。命を大事に！…………」

そう、俺はまず武力よりも隊全体の団結力、纏まりを鍛えているこれにより、武を教えるもその力に溺れる事なく、正しい力の使い方覚えてもらう

「よし！じゃあ、次！兎と亀いくぞ！範囲は城壁周り、一人5周を3回やってこい！時間は昼まで！昼過ぎた場合、午後の調練が倍に

なる！いけ！」

そう言うと城壁まで皆、一目散に駆けていった

ちなみに兎と亀というのは、決められたコースを列に並び一定スピードでランニング。合図をしたら一番前の人ダッシュでそのコースを走り、列の後ろまでいく。後ろに着いたらまた一番前的人是ダッシュで後ろまでいく。で、一人5周を3回つてのは、一人5周分はダッシュをする。それを3セットやってこいつて事  
場所により多少呼び方やルールは違うが、今やらせているのはこんなやつ

と、走って行くのを眺めていると後ろから声かけられた

「よ、ナナシ。相変わらず目茶苦茶な調練やらせてるな  
今では流石に慣れたが、最初はビックリしたぞ？」

白蓮がいた

ちなみに真名はこの一週間に交換した  
なんかそんな時めっちゃ喜んでたけど、なんでだ？

「まあ、あのぐらいやらないとゴロツキもどきは武官ぐらいに変身  
できないしね」

「ホントに武官ぐらいまで強くなるのか？」

「一応はね

ただし、俺が教えるのは主に防御とか受け流し方

俺はあいつらに死んでほしくない。だから攻撃より防御、そして生きる覚悟を教えるワケ」

「でもそれじゃ納得しないんじゃないか？」

白蓮の疑問は尤もだ

「確かに

でも、俺の教え通りにできないなら今すぐ消えろって言うてあるから問題ない」

「うわっ…」

白蓮は顔をしかめる

「まあ、強くなる事には変わりはないんだ。あんま目くじら立てんなって

それよりも、牙門旗の事お願いな？」

俺は今現在一番気になっていた事を口にする

「それに関しては問題ない

町で一番の職人を手配しよう

だが、肝心の意匠がわからないんだが？」

「アレ？教えてなかったっけ？

まあ、いいや。じゃあ、今言っわ。

漆黒の旗に真っ白な『孔』の字  
なるだけ印象的な頼むわ」

「また中々に難しい注文だな…」

わかった。それについては任せてくれ



……あと、他の新兵にもちゃんと訓練してくれよ?」

後半は念を押すかのような言葉だった

「……まあ、大丈夫よ?」

「その間がもの凄い気になるよ……」

~~~~~

SIDE 星

やゝ、あれですな

「……ヒマ過ぎる。どこかに面白いものでも落ちてないか?」

そう、私こと星は現在絶賛ヒマであった

こういう時はナナシ殿か伯珪殿でも弄るに限るな

「おや?」

そう思ってた矢先に伯珪殿を見付けたではないか
しばらくはこれでヒマ潰しでもできるかな

「やあ、伯珪殿。奇遇であるな。これから一杯どうかな?」

おちよこをクイツとする仕草をしながら言う

「子龍…。頼んだ仕事はどうしたんだ？」

「もちろん終わらせたに決まっておろう？」

だからこそヒマなのだ

ちなみに真名は交換しているが、前作？の意志とやらでこの呼び方をしている

詳しくは気にしてはいかんだろ

「そうか…。だが、私はこれから仕事があるんだ
すまないが一人で吞んでくれ」

「つれないな」

ならば私が手伝ってしんぜようか？それならば終わるのも早い」

「…………何を企んでいる？」

伯珪殿は有り得ないものを見る目を向けてきた

…………まあ、少しは仕事に悪戯してやろうと思ってはいたが…

「ヨヨヨ…………。伯珪殿が私を信じてくれない

趙子龍は悲しいですぞ！」

「…………はあ。まあ、お前が何か企んでいるのはいつもの事が」

…私は普段、そう見られていたのか…

「仕事つてのナナシから牙門旗制作の依頼

で、今はどんな意匠なのかを聞いてきたところだ」

「おお！ナナシ殿もついに牙門旗を作るのか！

なあ、伯珪殿？どんな意匠なのか聞いてもよいか？」

「ああ、構わないぞ

なんでも、漆黒の旗に真っ白な『孔』の字、それを踏まえ印象的に
だつてさ

これは職人さんが作るの苦労しそつだよ」

「相変わらずナナシ殿は無理難題を言うのか

流石としか言えないな」

「子龍はやつぱり、ナナシのあの無茶苦茶さには慣れているのか？」

「それはな。やはり伊達に付き合いが長いわけではないぞ？」

まあ、数ヶ月ぐらいかな？」

「ならば、しょうがない。ナナシ殿の所にも行くかな」

「ナナシは今調練中だぞ？酒はできないと思うぞ？」

「なに、ナナシ殿の近くにいれば、良い酒の肴には困らないのでな

ホントに何をしても楽しませてくれる人だ

「…なあ？子龍は…その、ナナシに恋愛的感情を持っていたりする
のか？」

おや？

「何故かな？」

伯珪殿は少し言い難いのか、言い淀みながら

「いや！な、なんだ…、大した理由はないんだが、いつも子龍はナシと一緒にいるような気がしてな…」

そんなに一緒にいるか…？

まあ、結構一緒にいるな

だが、ナナシ殿に恋愛感情か…

「今はそんな感情は無いな

…だが、一緒にいると何故か安心してしまふ事も事情やれやれ、これが恋愛感情というものなのか…」

伯珪殿にこんな事を言って、私は何しているんだろうな…
…らしくないな

やはりナナシ殿を意識してるのは間違いないな

だが、ここで伯珪殿にこんな事言ってしまったのは不覚

だから…

「それよりも…、そんな事聞くとは…伯珪殿はナナシ殿に好意を抱いているのかな？」

伯珪殿を弄る事にした

「ば、ばばばば馬鹿な事言っつなよっ！？私はただ純粹に……云々」

おや？おやおや？

これは意外なトコから意外な掘り出し物が

「わ、私はただナナシは好きだけで……云々」

ホントに人生とは面白いものだな…

第17話（後書き）

ああ
…

次の投稿で武器の名前出る（予定）なのに、決まらない…orz

きつと読んでくださる読者の方々が名前を感想にでも書いてくれる
と信じて！

人はそれを他力本願といふ

第18話(前書き)

一日一話なんて難しいッスよ…

まあ、そんな根性無しの作者ッス

今回初登場の劉備のキャラがおかしい事になってます

なんでこうなった？

第18話

SIDE 白蓮

ナナシと子龍が来てもう一ヶ月がたった

だからと言って特別何かあったワケではないけどな

仕事を楽しんだり、新しく友と呼べる人ができたり…

はい！強がりました！目茶苦茶嬉しかったです！！

新兵も大分使えるようになった

最初はあるな生意気な連中で大丈夫かと思ったが、ナナシが引き取って訓練してるお陰で、防御だけなら子龍相手でも防げるようになってるし

……どうせ私は何もかもが普通で、特別コレってものはありませんよ……（泣）

「公孫贇様、お客様が城門前に来ております
お通ししますか？」

ちよっと…、少しだけ自分の世界に飛んでたら警備兵が来てそんな事を言った

私に客？

「名前は何て？」

「劉備と言えば分かると…」

桃香か!!

久しぶりじゃないか

「すぐに通してくれ」

「御意」

警備兵は言つとすぐに行った

「にしても桃香、久しぶりだな…」

私は久しぶりの友の訪問に懐かしい気持ちになっていた

……

……

…

「桃香！久しぶりじゃないか！あれからどうしていたんだ？」

間もなく玉座の間に通された桃香と久しぶりの挨拶を交わす

「白蓮ちゃん、久しぶり」

私はずっと愛紗ちゃんと鈴々ちゃんと一緒に色んな所に人助けしたりしてたよ」

ん？後ろの二人の事か？

「あつ、紹介するね！こっちの黒い長い髪の子が…」

と、桃香が二人を紹介しようとした時に…

「おや？伯珪殿？何やら面白そうな事になっているではないか
そういう時は私も混ぜて欲しいですな」

…子龍がやってきた

「白蓮ちゃん？その人誰かな？かな？」

桃香も紹介中断して子龍の事きいてきたし

……あれ？今桃香の後ろに鉈持った女の人が見えたけど、なんでだ？

「？」

桃香を見たが気のせいのようだ

「あつ、こいつは今ここで客将として士官してる…」

「そこからは私が

我が名は趙雲。姓が趙、名が雲。字が子龍。以後お見知りおきを」

「あつ、私は劉備。姓が劉、名が備。字は玄德だよ。よろしくね
で、こっちの二人が…」

さっき紹介されようとしていた黒髪の女性が、

「私は関羽。姓が関、名が羽。字は雲長。よろしく」

しつかり者なのかな？

なんか委員長って感じがする…

…ん？なんだ今の思考

もう一人の小さい子が、

「鈴々は張飛なのだ。姓が張、名が飛。字が翼徳。よろしくなのだ」

元気だ

まさに天真爛漫って感じがする

「うむ。三人共よろしく」

「ああ、よろしくな

で、桃香はどうしてここに？」

ただなんとなく来たなんてないだろう

「…うん。実はね…」

………

………

………

話はわかった

要はたくさんの人を救う為には、戦闘できるのが関羽と張飛だけでは少な過ぎる

だから、義勇兵が欲しい
よって私の所にきた

なんか色々はしよったが、大体はこんな感じ

「おや、それならばナナシ殿の管轄ではないか？」

ふむ。確かにこれならナナシに聞けばいいか

「あの…、その…」

ん？ああ、

「桃香、ナナシというのは真名だ。名前は孔融という」

「…じゃあ、その孔融さんって、どんな人？」

桃香がナナシに興味を？

ああ、単純にどんな奴なのか興味あるのか

「ナナシ殿なら中庭にいるはずだから、見に行ってみればどうかな？直接見ればどんな人となりかわかるであろう？」

「確かに

じゃあ、皆で中庭に行くか」

「もし、私の白蓮ちゃんに手を出したら…私の白蓮ちゃんに手を出したら…ブツブツ」

なんか後ろで桃香から呪詛のような声が聞こえてきた気がしたが、まあ、多分気のせいだろう

~~~~~

S I D E ｾﾞ ナ ナ シ ｾﾞ

白蓮のトコ…っか、ここに来て一ヶ月がたった

いい加減新兵達もそれなりに強くはなった

具体的には星相手に数合は持つぐらい

攻撃に関してはまだザルだ

まあ、何にも教えていないから当然っちゃ当然か

「孔融様！兎と亀、終わりました！次は組み手でよろしいですか？」

亮が報告と確認をしてきた

亮はるかつてのは最初俺にやたら突っ掛かってきたDQNの真名。名前は羽延はえん。字は元瑜げんゆ

ちなみに武器は大きな十字の剣

刃は漆黒で、なんでも家の家宝だとか

最初は一番敵意バリバリだったが、今では少しずつでも強くなって

きたのを感じてか、丸くなり雰囲気も変わってきた

「おう。よろしくな」

「御意に」

そう言つて駆け行つた

昔は72人いた孔融隊も、今は半分以下の30人しか残っていない  
消えた兵はどうやら俺の扱きに堪えられず、泣きながら隊退を申し  
出てきた

そんな事があつたが、まあ、今残つてるこの30人だけでも十分だ  
ろう

と、感慨に耽つていたら、白蓮と星、それと見知らぬ三人組がやつ  
てきた

む？

あの黒髪とちつこいのはできるな…

「おーい！ナナシー！ちよつと今いいかー？」

んー？何の用だろ？

あの三人が士官してくるからその紹介とか？

「ういっういっなんざんしょ？」

「私の古い友人とその友達が義勇兵を募つててな、それならお前の  
管轄だろ？」

「んー、つまり俺は手伝いすりゃいいんか？」

「はい、お願いしますね」

私は白蓮ちゃんのお・と・も・だ・ちの劉備です。字は玄德。よろしくね。……………白蓮ちゃんは渡さないよ(ボソッ)「

こ、怖っ!!!

これが巷で流行りのYANDEREというやつか

…何処の巷だかわからんが

……………アレ？

劉備ってどっかで聞いた事あるような…

「我が名は関羽。字は雲長。よろしく」

次に黒髪の女の子が挨拶をしたんだが…

……………うん

間違いなく委員長キャラだ

や、これ( )は宇宙(作者)からの意志が流れてきた

「鈴々は張飛！字は翼徳！よろしくなのだ！」

最後にちびっこが挨拶

おおー、元気だね

天真爛漫ってゆーの？マスコットキャラだね

「俺は孔融。字は文挙」

俺は白蓮の客将でも何でもないんだが、まあ、色々あって兵の訓練

をやってる  
よろしく」

もちろん俺も挨拶する

……が、なんか白蓮って言った瞬間劉備の目が凄い事になった  
きつと、気にしたら負けなんだろう

「へえ〜…孔融さんって、白蓮ちゃんと真名交換してるんだ？そん  
なに親しいのかな？かな？」

怖ええよ！？めっちゃ怖ええよ！

何？何なのこの子！？真名交換だけでそんなに怒るような事なん！？

「まあまあ、桃香様

で、あなたが兵の訓練を？とても訓練できるような人には見えませ  
んが？」

言外に俺はそんなに強く見えないうて、言ってるんですね、わかり  
ます。

まあ、俺も普段はできるだけサボって楽しようとしてるから、周り  
からは昼行灯に見えてもしやーなしだな

別にそれで困らないし、面倒事は極力ゴメンだし

「おやおや、相手の力量も見抜けないとは、流石はかの関雲長です  
な〜」

……とか思ってた時期が私にもありました  
こういう時はやっぱり皆の星さんですね！



チクシヨー！…

「……ほう？そこまで自信があるのか？…孔融？」

俺何も言っていないッス…

「怖いのか？何なら張飛と二人掛かりでも良いぞ？」

星さーん！？

「………ほう。じゃあ、孔融？鈴々と二人でご教授お願いしようかな？」

「鈴々も賛成なのだ！」

二人共ー！！？

こうして俺はまたも強制的に戦闘フラグを立てられました

## 第18話（後書き）

劉備については異論も反論も認める

何せ、作者自身ですらなんでヤンデレになったのかわからないぐら  
いだ

きっと彼女は公孫賛と……

感想の返信でも書きましたが、主人公の追加設定、アレは時間がで  
きた時にちゃんと本文に入れる予定でございます

読者の皆さん、読み難いとは思いますが、よろしく願います

第19話（前書き）

引き続き劉備はアレです（笑）

そして星がトラブルメーカー過ぎます（笑）

はいはい。作者が一人で（笑）とかやってるだけですよ

どーせ他の作者の皆さんみたく、上手く書けませんよーだ

## 第19話

はい。という事で絶賛ピンチ中のナナシです

まあ、星が余計な事しなければ問題なかったんだけどな！

抗議の目を星に向けても…

「ナナシ殿？そんなに見詰めないでください  
妊娠してしまつではないか／＼／」

と、照れる始末

……もう諦めましたよ

「では孔融、いくぞ  
関雲長！いざ参る！！」

「張翼徳も参るのだ！！」

「……いや、参らなくてもいいツスよ？」

「では、両者構えて……はじめっ！！」

俺の言葉はやっぱりスルーされるんですね、もうわかってたよ  
チクシヨー…

「では、ご教授願おうか？孔融？」

「鈴々は真つ直ぐいくのだ！」

……関羽さん、めっちゃ怖いッスよ

目が『殺す』って言ってるッス

本気と書いて、真剣と書いて『マジ』と読むぐらいマジッスよ……

まあ、とりあえずストレートにきた張飛の攻撃はバックステップで避け、真横からきた関羽の横薙ぎを這いつくばる様に避ける

スキができたトコを張飛が見逃すハズもなく、放った縦の斬撃をさらに転がり回避

そして関羽が追撃する前に立ち上がり構える

……つてか二人共寸止めとかしないで振り切っちゃってますよ？  
自分死んじゃいますよ？

「ふむ。今ナナシ殿の気持ちちを代弁するならば……

『はん！遅過ぎるぜ？その程度で人助け？ちゃんちゃらおかしいな

』！

だそつですぞ

ちよ、ちよーっ！と！？星さーんっ！？

しかもご丁寧に声音まで真似てますよっ！？

そんなに俺に死亡フラグ立てたいんですかーっ！？

「……ほ、ほほう？そんなに余裕あるのか、孔融様は？」

ほ、ほら関羽さんがもう、目の端ピクピクしてますよ？

アレ、絶対めっちゃキレてますよね？

「むー。孔融お兄ちゃん、全然当たらないのだ」



また張飛が真っ直ぐ、そして関羽が後ろに回り、二人で挟み込むように斬り掛かってきた

……つか、どうやって避けんだよ？コレ

まあ、避けらんないなら迎撃すればいいだけか  
あんまり目立つ事はしたくはないんだがな…

「はあっ！吹っ飛べえ！！」

結論から言うと、震脚は効いてなかった

いや、正確には震脚は地面を砕き、二人の足場を崩したが、その後僅かに残った足場を蹴り、跳び蹴りならぬ跳び斬りの形で斬り掛かってきた

ちなみにこの間、約0.5秒程

………凄い執念ツスね？そんなに俺を斬りたいんスか？

「いいぞー、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、殺っちゃえ」

………オイ、劉備がなんか危険な事言ってるぞ？  
しかも絶対字違うし

つか、なんでこの速さが見えるんですか？あなた明らか戦闘できない人でしょ？

二人の攻撃はすぐ間近まで迫っていたが、何故かそんな事を考えるだけの余裕が……ありませんね、はい

とりあえず目の前の張飛の槍の柄の部分を掴み、思いっきり引き後ろに飛ばす

「うわぁっ!?!」

「なっ!?!」

上が張飛、下が関羽

幸い、関羽がすぐ真後ろにいてくれたお陰で、張飛を当てて、結果攻撃を回避する事ができたが、もし関羽が斜め後ろとかにいたらと思うと……ガクブルガクブル

「いや〜、危ねえ〜」

お二人共、寸止めとか考えてます?」

「考えているわけがなからう

本来なら、武とはぶつけ合うモノであり、回避という行為はありえない

そして何より今はかの孔融様にご教授してもらっている  
それで寸止め等と軟弱な事、できるわけがないであろう?」

…なんかちょっと良い事言ってる気がしないでもないが、今も目が『殺』の文字になってると、説得力ないツスからね?

「鈴々は孔融お兄ちゃんなら大丈夫かなって、思ったからなのだ?」

…信頼されてるって考えればいいのかもしないけど、なんで最後疑問符なのか、そこだけ不安なナナシさんです

「御託はいいから、もうさっさと来いよ?」

ちよ、ちよーっ!?!?星さーっ!?!?またですかーっ!?!?!?」



「言われなくとも…」

「…いくのだ！」

…もう、贅沢言わないから誰か俺の話聞いて…

…とりあえず、張飛の攻撃を横にスウエーして躲しつつ、柄を持ち槍を引けなくして距離を詰め、張飛の右腕を右手で掴み、背中を向け、自分の後方に投げた

まあ、所謂背負い投げ（一本背負いだっけ？）というヤツですよ  
しかし、流石に今回は飛んできた張飛を避けて、俺に斬り掛かる関羽さん

「はあああつー！」

殺気バリバリッス…

関羽さんの殺気の籠ったわりと本気の袈裟懸けの斬撃を、バックステップで避け、『さあて』と反撃に出る前に、関羽さんの攻撃後の体勢から放たれた突きに出鼻を挫かれ、断念  
もう一度距離をとり、様子を見る

…いや、なんかもう勝ち目なくね？気迫からして違うし

と、ここで今まで空気だった白蓮が口を開く

「なあ、皆。そろそろ飯食いに行かないか？」

俺はマジでこの時白蓮が女神に見えたね！

「うん！そうだね、白蓮ちゃん  
愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、ご飯食べに行こー」

「桃香：はい、わかりました」

「ぶー、まだやりたかったのにー」

劉備がそう言うと、関羽と張飛もなんだかんだでそれに従うように  
武器を収める

…っつか張飛さん、起きてたんすね

~~~~~

S I D E ～ 関羽 ～

孔融か…

あの挑発の言葉にはカチンときたが、中々どうして口だけの男では
ないようだな

避ける時もギリギリだと見せかけて、実は結構余裕そうだった

何よりヤツは背中の大剣を抜かずにこの関雲長と張翼徳の二人の攻
撃をいなしていた

しかも私達二人の挟撃を二度も防いでいる

これはヤツにとって偶然ではなく必然なのだろう

それだけに腹が立った

そこまでの武を持つのに、こちらに一切攻撃という攻撃をしてこなかったヤツに…

そして易々とヤツの挑発に乗ってしまう自分の未熟さに…

そして関羽達はナナシを残して城の食堂に向かった

ナナシは城で働いているワケではない為、城の食堂を使う事はできません

第19話（後書き）

今日は全ての（例外を除き）国民にとって避けては通れない日である

それは……

月曜日！！

や、特に意味はありません

皆さん、いつも「愛読（？）」ありがとうございます

番外編4（前書き）

さあ、今回で番外編「ナナシを巡って麻雀バトル」（今テキストに命名）が終了となります

今回はやっぱり夏侯惇が色々やらかします（笑）

番外編 4

〜前回のあらすじ〜

前回の麻雀バトルの孔宙VS董卓軍は孔宙の勝利
今回は孔宙VS曹操軍の麻雀バトルになります

「そ・し・てえ、今日も司会進行を勤めるのは皆のアイドル、ET
ERNAL17の称号を欲しいままにしている、天使あまつかでえ〜すよ
ろびく〜

あつ、ちなみに前回の呂布の最初の倍満の時に得点発表ミスっちや
った〜 てへっ ゴメ〜ンネ？

正確には8000/4000でした〜

今回の卓は東南西北で、以下の様になりました〜

東…夏侯惇

南…夏侯淵

西…孔句

北…曹操

これはいきなり夏侯惇がやらかすオチが見えてしまったぞ！？
さあ、どうする曹操軍？

そして夏侯淵と曹操に挟まれた孔句は一体どうするのかあ！？」

「ねえ、誰かあの五月蠅いゴミを黙らせてくれないかしら？」

「ならば、この春蘭にお任せを！華琳様」

「あつ、わ、私に手を出したら錯和ちよんぼとるわよ!? 錯和は6000才
ールなんだからね!?!」

「はあ…」

春蘭、いいわ止めなさい」

「華琳様あゝ…」

「まあ、いいから早く始めようじゃないか
夏侯惇とやら、麻雀は覚えてきたのかい?」

と、孔句が現状一番気になる事を聞いた

「ふん!この私にかければ役満なんで、思いのままよ!」

「…曹操?あの子は大丈夫なのかい?」

「私も不安なのよ…」

「ああ…、根拠もないのにあんなに自信満々な姉者も可愛いな」

それぞれの思いを交錯させ、いざ尋常に麻雀バトルが始まった…

「はっはっ!私にこんなのはいらん!」

「トッ」

「春蘭!?!それドラよ!?!」

「流石は姉者だ……そんなトコも可愛いな」

「まさかの東一でドラ切りとは……
ある意味神のようなプレイングだな……」

「おおーっと！？夏侯惇選手、いきなりのドラ切りだあ！これはやらかしてくれたぞー！」

「……ドラ？なんだそれ？しゅーらん、ドラって何だ？」

「「……………」」

流石の夏侯淵と曹操といえど、頭を抱えざるを得なかったそうな

「……曹操、夏侯淵、同情するよ」

思わず敵である孔句ですら同情する程である……

「……まあ、姉者の事はとりあえず置いておいて次は私の番だな」

コトツ

と、何でも無いような九萬を捨てる

「おっ！？秋蘭、それはロンできるぞ！」

「「「えっ！？」「」「」

突然の春蘭のロン和了りに、曹操、夏侯淵、孔句、あまつか天使の4人は絶句する

「な、何が起こったー!?
では、夏侯惇選手の牌を見てみましょう!」

持ち牌は萬子の…

一一一二三四五六七八九九九

「……純正九連宝灯!!!?」「……」

つまり夏侯惇は東一で純正九連宝灯をテンパイしていた事になる

「なっ………」

夏侯淵は開いた口が塞がらないようだ

まあ、それは他のメンツも同じ事であるか…

「春蘭?この際、九連で和了った事は置いておくわ
なんであなたが九連宝灯なんて役を知っていたのかしら?」

確かに、あの夏侯惇が役満という、しかも特殊な形の九連宝灯なん
ていう役を知っていたんだ
不思議に思わない方がおかしい

「はい、華琳様!私にはチマチマと点数を稼ぐなんて向いてないの
で、役満でどかーんと覚えましたっ!」

「……つまり役満の形だけ覚えたワケね…
…にしても、確か純正九連宝灯ってダブル役満ではなかったかしら

「秋蘭？」

「……はい

姉者は親なので私から96000点ですね……」

「これはいきなり夏侯惇の優勝で決まったかー！？」

「はーはっはっ！流石は私だな！」

だが、この後夏侯惇は他の三人から集中砲火を浴びた
まあ、唯一の麻雀素人なのだから予想して然るべき事である
スジもわからない素人が振り込まないはずがない

…そしてあっという間に南一

現在点数は…

| | |
|------|-------------|
| 夏侯惇… | + 4 9 0 0 0 |
| 夏侯淵… | - 2 4 5 0 0 |
| 孔句… | + 3 8 1 0 0 |
| 曹操… | + 3 7 0 0 0 |

まだギリでトップの夏侯惇だが、孔句、曹操の満貫直撃で捲られて
しまう

そして夏侯惇はここ一番の大事な時にやらかしてしまっ…

「だあーっ、もう！全然役満こないではないか！」

と、そんなワケワカラン事を言いながら…

「これとこれとこれ、あとこれは交換するのだ」

とかも言っつて山の牌と手持ちの牌を交換し始めた
あまりに自然で周りは全く反応できなかつた

「はいはい 夏侯惇選手、堂々と錯和ですよ
じゃあ、流局して、夏侯惇選手は6000オールですよ」

「なあっ!?!」

南二局

「姉者、それはロンだ
ふむ、高い方が乗つたな

立直一通翻牌ドラ3、跳ね満だ」

「ああ〜っ!?!」

「連荘だな」

南三局

「おや、今度は私が自摸したね
んー、この牌だと…

立直自摸三暗刻翻牌2、跳ね満だな」

そんなこんなでとうとう南四局

現在の点数は

夏侯惇： - 3 2 5 0 0

夏侯淵： + 7 0 0 0

孔句： + 5 1 3 0 0

曹操： + 7 4 5 0 0

「さあさあさあ、現在点数はご覧の通り

曹操圧倒的リード！しかもその曹操が親だあ！

次点の孔句は捲るには最低でも跳ね満直撃しかない！これはもう詰みかあーっ!？」

「あら、これで孔融は私のモノね、孔句？」

「なあに、跳ね満で良いならまだわからんさ」

「さあ、ここで孔宙さんに聞いてみよう！

孔宙さん、この状況どう思いますか？」

「言う事は無い

私は妻を信じるさ」

「カツコイイ台詞頂きましたっ！」

「おお！流石は華琳様！な？秋蘭！」

「ふっ、そうだな」

そして、とうとう孔融の運命を（勝手に）賭けた麻雀バトルのオラスが始まった……………

「では、いくわよ」

コトツ

「お？おおーっ！！凄いぞ！ロンだ！

これって確か人和というヤツだよなっ！？秋蘭？」

「「「「……………」」」」

「……………秋蘭？華琳様？」

他のメンツ + 天使あまつかは沈黙

そして……………

「お前は一体何してくれてんのーっ！？

何なの？この適当に流していい時に人和とか！馬鹿なの？死ぬの？

ねえ！答えなさいよおー！！」

……………曹操が壊れた

まあ、気持ちは分かる。凄くわかる

跳ね満直撃なんて普通警戒すればくらわないから、安牌のみ捨てていけば自ずと曹操が勝って、孔融を貰えたのだ

だが、ここにきて夏侯惇の幻の役満 Part 2 によってオジャンになっただ

曹操でなくともキレる

あつ、ちなみにこのルールでは人和を役満扱いしていますが、所により満貫扱いの所ともありますので、皆さんは始める前に確認しておくのが吉でしょう

そして点数発表……

| | | | | | | | |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| 夏侯惇 | … | - | 5 | 0 | 0 | | |
| 夏侯淵 | … | + | 7 | 0 | 0 | 0 | |
| 孔句 | … | + | 5 | 1 | 3 | 0 | 0 |
| 曹操 | … | + | 4 | 2 | 5 | 0 | 0 |

「なんと！絶望的かと思われた孔句選手が見事トップになりましたっ！！

孔句選手、今のお気持ちは？」

「最後は正直夏侯惇に救われた
配牌は悪くはなかったが、跳ね満いくには運も必要だった」

「はい、ありがとうございました」

次は曹操選手に話を聞こうと思いましたが、現在夏侯淵選手と二人で夏侯惇選手にお説教中との事なので、インタビューはこれにて終了となります

尚、孔夫妻には曹操軍から合計30500点分のお金が貰えます
ではでは、皆さんあでゅ」

こうして孔融の（勝手な）ピンチは去った
だが、これで全てが終わったワケではない！
孔融の知らない所でまだまだバトルは続く！

くおまけ的な何か

その後、董卓達は何のトラブルも無く帰っていったが、曹操達は夏侯惇にお仕置きとして今後しばらく会話をしないと、という罰を与え、それに夏侯惇が泣きつくという大変騒がしく帰っていったとさ

めでたしめでたし

番外編4（後書き）

これで一応最初の番外編は終わります

もし、好評であれば次も考えておきます

つまり！読者皆様からの反応が何も無ければ、次は無い！

なんて怠惰ぶりでしょう…

流石はダメ作者、マダオの名を欲しいままにしているだけの事はあります

ゴメンなさい

ウソツス

できれば次も何か考えたいツス

こんな作者の作品ですが、皆様暖かい目で見守っていてください

第20話(前書き)

一応言っておく

劉備の属性は変更しようとした
でも劉備は俺が制御できない程のじゃじゃ馬だったようだ…

第20話

あの星による関羽&張飛との強制バトルイベントから一週間が経った

どうでもいいが、関羽達はあの挑発を俺のやったものだと思ってる
っない

……はあ

そして俺はイソイソと幽州を出る準備をしていた…

「りょー！準備はどうか？」

「はっ！ほぼできております」

何故幽州を出るのか

それはあの事件からの劉備の態度が理由であった

……
……
……

～ある日の事～

「へえ、愛紗ちゃん達に勝つなんて凄く強いんだね」

褒められてるのに寒気しかしないのも珍しいと思うナナシであります

「その武で白蓮ちゃんを誑かしたのかな？かな？」

……誰かこの子なんとかして……

だが、多分俺には神はいないのだろう
今ナナシの周りには誰もいないのだから

実は劉備が根回ししたからなのだが、今のナナシには知る由もなかつた

「ねえ〜？どうなのお〜？」

凄い妖艶な笑顔で、甘い声で、品を作り、呟くのはイイ！凄くクル
ものがある

……だけど、その背中に隠しても隠しきれない巨大な鉈は何？

俺死ぬの？

この時、俺は関羽&張飛を相手にする時より死を感じた

もちろん俺は後ろに向かって全速力でダッシュした

チキンと言われても、何と言われようとアレには関わってはいけ
ない

そう本能が告げていた

まあ、そんな事があつたから余計に早く準備を進めてきた
流石に俺も命は大事だ

……アレは最早兵器レベルだよ
しかも俺が男だから余計に星以上に警戒してるらしいし…

「亮、明日の早朝には大丈夫か？」

「はっ！問題ありません

現在他の者達が公孫贄様の隊に引き継ぎを行っております」

…にしてもこいつホントにキャラ変わったよな

「りょーかい

じゃあ、引き続き作業に当たってくれ
俺はちょっと白蓮んトコ行ってくる」

………
…

で、なんでこんな事になってんだ？

現在俺は白蓮んトコに行こうとして、何故が関羽&張飛&星に追いかけられ、必死に逃げた所で劉備様に捕まり、彼女の客室に監禁されていた

具体的には椅子に身体を縄で縛られて

「あのおく？自分何かしましたでしょうか？」

今一つ状況が理解できない俺

それをニコニコ黒い笑顔で見詰める劉備 With NATA

……俺ホントに何かやりましたか？

「なぐんでえ、孔融さんがあ、こゝんな所にいるの？かな？かな？」

……自分生まれ変わったら鉈で斬っても死なないモノになりたいッス……

「や、自分これから白……公孫賛んトコ行って、出発前に引き継ぎの確認をしようかと……」

「えっ！？つて事は孔融さんいなくなっちゃうのお？残念だな」

ホントに残念なら頼むから鉈撫でながら言わないでくれ……

「あつ！じゃあ、私白蓮ちゃんにこの事伝えに行ってくるね！」

そんな事を言つて、劉備は走って行ってしまった

……俺の縄は？

~~~~~

SIDE 星

今日も今日とて面白いものを探していると…

「ナナシ殿？何をしているのだ？」

ナナシ殿が椅子に縛られていた

……面白い事発見！

「り、劉備様に……」

ああ、桃香殿は彼をかなり敵視していたからな…

ちなみに私はこの前桃香殿達と真名交換をした

どうやら私は桃香殿に警戒されてないようだ

「それはそれは…

このまま放置して帰るといふ選択肢はどうか？」

「……勘弁ッス」

ホントに参っているようだ

「そういえば、ここを出ると聞いたが？」

そう、ナナシ殿は明日幽州を発つと伯珪殿から聞いた

はたしてそれは誠かどうか…

「ああ、ホントだよ

俺はまだまだこの大陸の『王』達を知らないからな」

そういえば、そんな事も言っていた気もするな

「ならば、満足いくまで見て回るといい

次会う時は敵かもしれんが、それもまた天命  
では、またいつの日か」

そう言つて私はナナシ殿の元を離れる

縄？面白いからそのままだ

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

星からちよつと良い話を聞いて、暫くしてから縄そのままなのに気
付き、大声で叫んでいたら亮が見付けて助けてくれた

…そして明朝

「さあ！これから俺達は江東、呉の孫策の元に向かう！目的は俺が
孫策を見ておきたいから！嫌なら来なくても構わない！
だが！俺は宣言、そして約束しよう！

これから戦乱の世になり、各諸侯はその乱世を駆け巡る！

俺はその時にドロが一番俺達の生存率が高くしてくれるかを見ておきたい！

そして皆生きて乱世の先の……

平和な時代に行こう！

だから、俺に付いて来てくれ！」

そう、俺は昨日劉備に縛られ思い出した（なんで縛られて思い出したんだ、俺は…）

三国志の概要を

これからの乱世の最期には…

『魏の曹操』

『蜀の劉備』

『呉の孫策』

この三国の三つ巴になる

その時俺はドロに行けばいいのか？

俺はその決断の為に残り最後の孫策を見ておく必要がある

これには俺だけでなく、俺の家族と孔融隊の為に必要な事

だから絶対に手抜きはできない

「皆！行くぞ！出発だーっ！」

そうして俺は江東の呉に向けて旅立った


~~~~~

SIDE 孫策

あれ？なんか面白い事が起こる気がする

理由？勘よ、カ・ン

じゃあ、お酒でも飲みますか！

「めーりーん！なんか良い事起こる気がするから、お酒飲みましょーっ！」

その勘は数日後には現実となるが、まだまだ先のお話のようだ

~~~~~

SIDE ナナシ

今俺達は森で休憩している

多分今日はここで野宿かな？

皆慣れない遠出で疲れているみたいだし

「よし、今日はここで野宿にするぞ
各自水と携帯食の蓄えを用意しておく事。解散」

皆散り散りになって自らの目的の為に動く

俺もどうしようかな、と腰を上げた所で…

(アーアー、只今マイクのテスト中)

(……今度はどうした?)

(んー、もうちょっとノリ良い方が好感度アップかな)

(ほう……。やっぱり初回でいきなりキレてたヤツは言っ事が違うな…
で、ホントに何の用なんだ?)

(ぶーぶー。まあ、いいんだけどね

今回はプレゼントのお知らせだよ)

(プレゼント?)

(Yes! Present for you by Amatsu
ka)

(何故英語!?)

(気分よ!)

(気分かよ!

で、モノは何?)

(アソパソマソ！新しい武器よ！)

(武器かよ！しかもア パ マ じゃねえのかよ！)

(ツッコミお疲れ)

(……………はあ)

で、どんな武器？俺もそろそろ疲れたから早く言ってくれ)

(じゃーん！)

とか口で効果音を言って取り出したのは、長さが約3m程、直径約5cm程の六角柱の鉄の棒

(ナニコレ？)

(ん？鉄の棒だよ？)

(見りゃわかるよ)

まさかただの棒ってワケじゃないんだろ？)

流石にそれは俺知らないし、キレルよ？

(素材は純度100%のオリハルコンで、重さは約1.5kgで…)

(待った待って！オリハルコン？今オリハルコン言ったか？なんでそんなもん使ってたんだ？)

俺の記憶が確かなら、前世界で一番の強度、硬度を持つ金属で、手

に入れるのはもちろん、加工なんて難易度激高の超金属である
まあ、神とかならそのくらい造作も無いだろうが、なんで俺にそんなモノを……アレ？

(……いや、それよりも何故俺にプレゼントを？)

(やく、劉備&関羽&張飛の三人との戦闘と絡みは上層部から与えられた試験みたいなので、それをパスしたご褒美みたいなモノだつてさ)

(…ホントにエンターテイメントなんだな)

(まあ、それはしょうがないんじゃないかな？

それが運命になるように、私変えちゃったし
具体的には盆と正月、クリスマスに誕生日、仏滅と厄日、女難に死相をかけて足して二乗した感じかな？)

(………ジーザス)

(アレ？キレないの？いつもならぶちギレると思ったんだけど)

(もう諦めたよ………)

(まあ、じゃあ、という事でその武器はあげるね？
大事に使いなさいよ？バイニ〜)

そして俺は体力も気力も精神力もごっそり削られ、床についた
もちろん飯なんて食ってない

ああ、俺どうんだろう………

第20話（後書き）

最後の方、かなり駆け足になってしまいました

そこはまあ、許してもらえると嬉しい作者ツス

ああ〜…

次に武器の名前書くのにまだ決まっていない…orz

どうしよう…

第21話(前書き)

これは昨日の分！そして！これがナナシの文だぁーっ！！

今回何かワケワカランネタが出てきた

何がしたかったんだろ…？

第21話

あれから数日後、現在俺達は江東近くまで来ていた

ああ、もう少しで三国志最後の王に会える

先の二人は色々アレだったから、次はまともな人だと思っています
にしても、あの時は大変だった

俺は天使あまじかからこの『自称純オリハルコン製 武器』を買った時の事を思い出していた

……
……
……

これどうすんだよ……

俺はつい先程、天使あまつかから武器なるモノを買いました
武器といっても見た目は六角柱の鉄の棒
普通と違つとすれば素材がオリハルコンっただけだ
つまり、武器としては欠陥品も同然で、刃がついてないのだ
まあ、だからこそ俺専用って感じがしていいんだけどな

「そついや、なんて名前なんだろう？」

武器に名前があるのは、その武器に魂を込めるのと同義

そして、名前の無い武器は三流と言われている

ん〜、何にしようかな〜

ギ 太？……ボツだろ

エリザ ス……ボツだな

……いや、そろそろ自重しよう

つーかなんでけ おん！なんだよ！

これも天使あまつがからの電波のせいだな

あとは、

ロングヌス……微妙か？

ゲイボルグ……青い人？

グングニール……ん〜、あんまり使えないな〜

ブリューナク……制限カード

トリシューラ……これも制限カード

あ〜ああ、また逸れた

つーかこの時代に横文字は合わないだろ……

所々変なの混じってるし

物干し竿……見た目そうだけど、そっちは武器の方じゃないし、何より名前ダサイ

三代鬼 ……刀あと二本必要か？

和 一文字……特に形見じゃないよ

黒刀……亮の武器の名前だったと思う

……いや、横文字じゃなければいってワケじゃないだろ

つか、なんで俺の知らない知識まであるんだよ！

とか一人でどうでもいい理由で悶々としていると、

「あれ？孔融様？どうしたんですか？」

亮がやってきた

ちなみに俺は真名を教えているのだが、亮は何があっても呼んでくれない

なんでも昔の自分に対するケジメなんだとよ

「ん……ああ、何でもないよ」

と言った

これはごまかす為では無く、ホントに何でもなかったからだ
なのに亮は何を勘違いしたのか

「ああーっ！？その手に持ってるのって、天の世界から贈られると
言われている『朧月』」

孔融様、とうとう天からの贈り物される程になったのですか！？」

え……何ソレ？

そんな大層なお話が伝わってるん？

自分知らないツスよ！？」

「ま、まあ、亮？ちよっち落ち着いて？」

俺は元々シャイボーイなんだ
それにどちらかと言えばこんな注目のされ方は嫌いなんだ
どうせならスポットライトの下でアイドルのような事やって注目されたい!

ちなみにアイドルって、働いてないとかそんな意味なんだぜ

いや、また話が逸れた

つまり俺はあまり目立ちたくないんだ

だから、ここであんまり亮に騒がれると困るワケで…

「亮? あんま皆には言わんといて? 頼むよ?」

「わかりました!」

だから、こうお願いするワケですよ

亮も弁えたもので、即答でおKしてくれた

だが、ここで安心させてもらえないのがこの世界での俺クオリティ
…らしい

「皆ーっ!! 孔融様が、天からの贈り物を貰ったぞー!! 今日皆
でお祝いだー!!」

「っつて、おーーいつ!?!」

そして皆に伝わり、30人皆が集まってくる

……お前等野宿準備しろよ…

そしてそんな事が有り、俺の羞恥プレイと引き換えに新しい武器の名前が決まった

……割に合わねえ……

……

……

……

「なあ？もう着いたか？」

「いいえ、まだです

これ何回目ですか……？」

……そして俺は飽きていた

だってこの時代って、何も娯楽がないんだよ
やっぱり何かしら娯楽を開発するか？

乱世後の平和な時代には必要だしな

んー、双六とか？いや、シンプルにオセロとか？
うーむ。夢が広がリング

……キモッ

とかまたもや一人脳内遊びをしていたら、

「孔融様！前方に『孫』の牙門旗が！」

おっ？噂をすればなんとやってか？

「他に牙門旗は？」

「他には『甘』の牙門旗が見えます」

甘？誰ぞんしょ？

まあ、一刀からはあの三人の名前しか教えてもらってないから、きつと部下の将かなんかなんだろうと思う

まあ、とりあえず…

「亮！斥候を出して戦闘の意思が無い事と、俺が単身で話したい事があるから、話し合いの場を設けてもらえないかを伝えさせる
他の関係無いヤツ等はここで待機しろ！」

「御意っ！」

はてさて…

どうなる事やら

~~~~~

SIDE 孫権

前方に砂塵が見える  
賊だろうか？

「思春！」

「はっ！規模は凡そ30人前後、賊ではないかと」

思春は本当に優秀だ

私が何も言わなくても色々やってくれる

だからつい頼ってしまっけど、それじゃ孫呉の王としてダメだ  
少しずつ直していこう

「何故そう思う？」

だから、皆の前では『孫呉の王である私』でないと

「むこうの斥候が来ております

あちらに戦闘の意思は無く、話があるそうです  
如何なさいますか？」

「そういう事なら構わないわ

思春、天蓋を準備しなさい」

「はっ！」

思春は行ってしまった

賊でないのなら、一体何なのかしら？

まあ、何にしてもここで孫呉の王たる態度でいないとね…

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

斥候の話ではこちらの提案は受け入れられたようだ

そして俺は現在一人で相手の用意した天蓋に向かっていた

「貴様が代表か？」

なんかおっかない人が出てきた

「ああ、そうツス」

思わず縮こまる俺

「ならばこちらに來い

あの天蓋で貴様の話を聞いてやる」

………何この人？

俺めっちゃ怖いツス…

………そして天蓋にて

「まずは自己紹介から

俺は孔融。姓を孔、名を融。字は文举。よろしく」

まあ、普通にしますよ

「私は孫権。姓が孫、名が権。字は仲謀。よろしく」

孫策じゃないのか…

まあ、血縁者なのは確かだからいいか

「我が名は甘寧。姓が甘、名が寧。字は興覇」

まあ、さつき案内してくれた人ツスね

頼むから睨まないで…

「それで？話って何？」

そう孫権が聞いてきた

さあて、これからが俺の腕の見せ所

何とか孫策の人と成を知る事ができるような会話運びをしないと
いけない…

頑張れ、俺

まあ、これが孫家の人間とのファーストコンタクトだった

俺は後に最初に会うのが孫権でよかったと語ったそうなの

第21話（後書き）

はあ……

今日の分を頑張って書かないと……

第22話(前書き)

読者の皆さん、更新遅れて申し訳ありません

しかし言い訳します

作者は学生で、学生には『テスト』やら『レポート』等の通過儀礼があります

以上言い訳でした

第22話

~~~~~

SIDE 孫権

「さて、話とは？」

私と思春は今孔融と名乗る謎の男と対面している

何やら話があるらしいのだが、全く予想がつかない

思春は思春で何故か

『奴の行動には注意して下さい  
並の武ではありません』

とか言ってくる

思春にそこまで言われる程強いのだろうか？

「まあ、いきなりで突拍子も無いとは思うのだが、孫策について教えてほしい。できる事ならば会いたい」

と言ってきた

はあ！？

「貴様！何を…っ！」

「思春！抑えなさい」

思春を窘めるが、私だって何で雪蓮姉様に会いたいのか、意味がわからない

「まあ、だから突拍子も無いって言ったろ？」

いいか？これからこの大陸は乱世の世となる。俺はその時に俺が付いて行っても良いと思える王を探してる

んで、その王候補に孫策がいるから、孫策の人と成を知りたい。できれば会って直接話したい」

なるほど…

話はわかった。それならば、姉様に会いたいという理由にはなる

だが…

「だが……そんな理由で姉様に合わせるわけにはいかん  
お引き取り願おうか」

こんな、こんな…姉様を試すような事をする奴に大事な姉様を会わせられない

…まあ、尤も今は袁術のせいで会う事すらできないのだが…

今雪蓮姉様は袁術によって、不本意ながら客将にされている

いつか必ず報復してやる…

「理由は……孫策を品定めするような奴は信用ならないから、か？」

「ええ、そうよ。よくわかっているじゃない」

雪蓮姉様は私にとっても孫呉にとってもなくてはならない存在だから、あなたのような者に会わせるわけにはいかない」

「そうか。じゃあ、俺は帰るよ  
邪魔したな」

そう言っつて彼は帰って行った

~~~~~

S I D E 〱 甘寧 〱

奴は一体何者なんだ？

最初に見た時はかなりの猛将、そして蓮華様との会話を聞いた後には私は奴の正体がわからなくなっていた

誰がこの黄巾党を殲滅後に乱世の世になると予想できる？

確かに考えの一つとしては思い浮かぶだろうが、可能性は高くはない
なのに奴はほぼそうなると断言した

この大陸に乱世が訪れる、と

蓮華様の考えは全てにおいて賛成だが、もしかしたら今回に限っては失敗かもしれん

奴がもし孫呉に士官してくれるのならば、孫呉は乱世の世も立ち止まらずに駆け抜けられるだろう

根拠は無いが何故かそんな気がする…

~~~~~

S I D E ｝ ナ ナ シ ｝

俺は今亮達がいる所に戻ってく途中だ

孫権……… 思ってた以上に頭が固くて、直情的な性格だった…

そして… 自分にすっかり芯を持っている感じを受けた

だから、あの性格は嫌いじゃないんだよな

甘寧……… 多分関羽クラスの使い手だろうな

孫権以外の事なら冷静沈着

さつきも俺の事ずつと観察してたぐらいだ

こいつがいるから孫権は直情的になっても、大事なトコで判断を違えないのだろう

総合評価……… 孫策の事はわからんが、孫権は付いて行っても大丈夫と判断

孫権ぐらい自分にすっかり芯を持っていれば、下についたとしても安心できる

今回はこれが分かったただけでもよしとするか

「りよー！今帰った」

「孔融様、ご無事でしたか!？」

亮に引き続き他の隊員も寄ってくる

「ああ、問題ない

孫策には会えなかったが、孫権と宿将甘寧と話をしてきた  
その結果俺は孫権なら合格判断をした」

「ならば、すぐに孫権殿に仕えるので？」

「いや、まだドコにいつ仕えるかは保留中だ  
全ては今の黄巾の乱を終わらせた後だ」

そう、今決めるのは早計だ

今はまだ決断する時ではなく、観察する時だ

まあ、すぐに決断の時はくるだろうがな…

「よし、聞けっ！これから俺達は黄巾党狩りを行う！まずはこのま  
ま西に向かう！意味は特にない！とりあえずだ！何か文句のある奴  
はいるか？」

誰も何も言わない

とりあえず納得しているらしい

「ならば、このまま西に行く！荷を纏めて出発だ！」

そしてナナシ達は黄巾党狩りを行った

僅か31人で各地の黄巾党を討伐していったナナシ達はそのうちに『死神隊』『バケモノ隊』等と呼ばれ、賊達から恐れられるようになるのだが、それは数ヶ月先の話である

さらに言えば、ナナシは『俺は何故また中二的な事を…』と自己嫌悪する事になるのだが、それもまた先のお話

第22話(後書き)

今回短いッスね…



## 第23話(前書き)

駆け足になった…

まあ、作者はここからが一番書きたかったワケでして…

多目に見てもらえると助かるッス…

## 第23話

あれから数ヶ月：

俺達は各地で黄巾党狩りをしていた

そんなある日、風の噂で曹操が黄巾党の首謀者を討ち取ったと聞いた

まあ、曹操なら驚く程じゃないと思った

寧ろ、曹操以外でそんな事できる力があるのは月達ぐらいだろう

月達は恋や霞といった猛將に加え、何よりも兵数が多い

ならば、將、兵共に質の高い曹操達に並べるだろう

……え？華雄？あいつは猪過ぎて猛將とは言えんだろ

見てて面白いキャラではあるがな（笑）

ここ最近はそんな日常を過ごしていた

……だが、そんな東の間の平和は唐突に終わりを告げた

袁紹とかいう奴の出したとある文によって……

今俺達は洛陽に向かっていた

その文には詳しい内容なんぞ忘れたが、董卓が圧政をしていて民が苦しんでいるから、董卓を討ち取る為に皆で力を合わせようとか書いてあった

月が圧政？ふざけんなっ！あれだけ心優しい女の子が民を苦しめる政をするワケないだろうがっ！

だから俺達は月達を助ける為に洛陽に向かっている

「孔融様！洛陽よりも泗水関に向かった方がよろしいかと」

そう、孔融隊皆でだ

最初はこれは俺の個人的な用事だと言ったのだが、亮が

『孔融隊は孔融様に何処までも、いつまでも付いて行きます  
例えそれが死地だとわかっていても、私達は孔融様と共に！』

とか言つて、さらに他の孔融隊の皆も亮と同じ意見らしく、一緒に  
行く気満々だったし

俺は不覚にもその時涙してしまった

まあ、そんな経緯があつて孔融隊皆で洛陽に行く事になった

「なんで洛陽でなく泗水関なんだ？」

「『なんちゃって迷家（笑）』の袁紹は数日前に文を各緒侯を出し  
ました

そしてその袁紹は洛陽までの最短距離である泗水関、虎牢関の道を  
使うかと思えます」

「つまり今から直接泗水関に向かえば、そこで連合軍と交戦できる  
と？」

「はい」

「ならば、俺達は泗水関を目指すぞ」

俺達は目的地を洛陽から泗水関に移し、移動を続けた

~~~~~

SIDE 月

ナナシが袁紹の文の事を知る数日前……

昨日私達が圧政をしいて民達を苦しめているという
事実無根だというのに……

私はすぐに詠ちゃんと相談して軍議を開きました

……

……

……

「ふざけんじゃないわよっ！」

開口一番詠ちゃんが叫びました

「まあ、相手が袁紹（笑）ならしゃーないんちゃうか？」

霞さん……

本当の事ですけど、（笑）って…

「詠ちゃん…」

何とかならないの…？

そんな願いを込めて詠ちゃんを見る

「あの袁紹の性格なら、泗水関、虎牢関からここ洛陽に来るわ
泗水関と虎牢関で籠城して連合軍の兵糧切れを狙う作戦でいきたい
のだけれど、何かあるかしら？」

「よし、ならば私が泗水関で連合軍を迎え撃とう！」

「華雄！？話聞いている！？私達は籠城して兵糧切れを狙うのよっ！
？なんで迎撃しなきゃいけないのよっ！？」

「なにっ！？籠城などして勝てるわけがないだろう！」

「……………（フルフル）」

華雄には何言っても無駄」

恋さん……

いくら本当の事でも…

「……………はあ。じゃあ、霞？悪いけど華雄の抑え役お願いね」

「でえええっ！？なんでウチがそんな事せなあかんねん」

「ボク達の中でその猪を抑えられる武官は霞だけなのよ」

そう言つて、華雄を指差す詠ちゃん

「はあ……」

絶対抑えられるとは限らへんからな？」

「ええ、そうなつたら華雄は捨てても構わないわ
華雄もそのつもりでいなさいよ？」

「つまり、私が全てを決めてしまつてもいいのだな」

そして華雄さんは何もわかつていない……

そんな事があり、泗水関には華雄さんと霞さん、虎牢関にはねねち
やんと恋さんが着く事になりました

「皆、ありがとう……」

~~~~~

SIDE 華雄

現在、華雄、霞は泗水関で待機していた

そう、『していた』…過去形である

猪華雄が連合の挑発に乗り、関から出て迎え撃ってでた

「華雄隊、この私に続けえ！」

武人を馬鹿にする連合の奴等に目に物見せてやれ！」

あの連中め！よりもよって私の武を馬鹿にしたのだ。許せん！

「おらおらおらおら〜っ！」

この華雄に敵う者はおらんのか！」

はっはっはっ

圧倒的だな、我が隊は

なぜ張遼は迎え撃つのを反対したのかわからんぞ

「貴様が華雄か？」

我が名は関雲長！いざ、尋常に勝負！」

ほう、関雲長…

噂に聞く猛将だな。相手にとって不足なし！

「その勝負、この華雄が受けた！」

そして華雄VS関羽の戦闘が始まった

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

さつき斥候の奴が泗水関で戦闘が始まった事を伝えてくれた

何故？何故だ？何故月は籠城していない？
そもそも泗水関には誰が着いているのだ？

くそっ！情報が足りな過ぎる

頼む、到着するまであと半刻程、持ってきてくれ……

~~~~~

S I D E 〱 関羽 〱

袁紹（笑）に先鋒を任された時はどうなるかと思っただが、朱里の策  
のお陰で何とかかなりそつだ

「おらおらおらおら〜っ！

この華雄に敵う者はおらんのか！」

む？奴がここの将の一人、華雄か！？

「貴様が華雄か？」



我が名は関雲長！いざ、尋常に勝負」

ならば、ここで討ち取るのみ！

「その勝負、この華雄が受けた！」

……

……

…

数合後…

華雄、確かに噂に違わぬ勇将だ

だが、それだけでは私には勝てんぞ！

「はぁあああ〜っ！！」

華雄の武器を払い…

「…くっ！？」

…これで終わりだ

「華雄の首、この劉備が一の家来、関雲長が貰ったあ！！」

## 第23話(後書き)

毎日連続投稿してる作者の皆様、マジ尊敬しますッス…

## 第24話（前書き）

なんか気付いたら、お気に入りとかPVが凄い事に…あわわあわわ

作者はぶっちゃけここら辺の話が書きたくて、この駄文を始めました  
今までで一番力込めて書いてるつもりッス

まあ、所詮は駄文の中でなんですけどね

## 第24話

「華雄の首、この劉備が一の家来、関雲長が貰ったあ!!」

俺が泗水関に着いたその時、そんな声が戦場に響き渡った

華雄!?間に合うか!?

そして戦場を視界に収めた時、今正に華雄が関羽に首を取られるトコだった

「亮!お前は俺に付いて来い

他は華雄隊の援護に回れ!そして虎牢関まで下がれ!いいな!!」

「御意!」

俺は孔融隊に指示を出しながら、臙月を槍投げのよつに構え…

「ゲイ……ボルグ!!」

…放った

目標は華雄と関羽の間。距離は凡そ200m程。10秒だけ時間が稼げれば良い

そして、放った臙月は振り下ろされた関羽の青龍堰月刀を止めた

~~~~~

SIDE 関羽

「なっ!？」

華雄を仕留めるはずだった青龍堰月刀は、しかし私と華雄の間に刺さった金属の棒によって阻止された

棒の飛んできた方を見ようとした時、

「孔融以下孔融隊、ワケあって董卓軍に助力の為に推参した」

…孔融？孔融がきたというのか!？

私は再び孔融と交えられる事に喜びと、前回の雪辱を晴らす機会をくれた天に感謝をした

そして目の前に前回は見る事が叶わなかった、背中の大剣を構えた孔融が現れた

~~~~~

SIDE ナナシ

「華雄、無事かつ!？」

なんとか間に合った

俺は紅蓮を構え、華雄と関羽の間に入った

「あ、ああ、なんとか無事だ。助かった」

よし、見たトコ大きな外傷はないな

「華雄、後でなんでこんな事になったのかしつかり説明してもらおうからな？」

亮、華雄を連れて虎牢関まで下がれ。絶対華雄を連れてけよ」

「ま、待て！私はまだ戦え」「御意!」「」

「頼むぞ、亮

華雄、今お前には発言権はない

じゃあ、行けっ!」

そしてこの場にいるのは俺と関羽と、関羽の兵のみとなった

「何故貴殿が董卓側にいるのか気にはなる。気にはなるが、それよりも……」

私はこの時をどれ程待ったか……

天に感謝するぞ、再び貴殿と交えられる事、そして雪辱を晴らす機会を与えてくれた天に」

バトルマニアかよ……

「そいつはどーも

こっちも急ぎなんでね、ガチでいくぞ」

そう言う俺は構えた紅蓮を真っ直ぐ関羽に向かい振り下ろした  
真っ直ぐと言っても、普通なら反応できない程のスピード。そして  
反応できたとしても、紅蓮の重量を考えれば受ける事などできるワ  
ケがない

関羽はその一撃を横に飛び回避

そのまま高速の横薙ぎの一撃を放つ  
俺はそれを堰月刀の柄を掴み止める

「なあっ!?!」

関羽は自分の得物を掴まれ動揺する

その隙を逃さず近接し大外狩りをかけ、関羽をダウンさせる  
関羽が起き上がる前に青龍堰月刀で関羽の服と地面を縫い付ける

「今お前に構ってるヒマはねえ  
悪いが、少しそこで休んでろ」

周りには孔融隊の皆は見えねえ  
多分もう虎牢関まで引いたんだろう

「ならば後は俺が引くだけだな」

そう言って紅蓮を振り回し、虎牢関まで戻っていった

~~~~~

S I D E 関羽

助かった…？

いや、アレは単に私の首なんかに興味なかっただけだ

しかもまた手加減された…

「……………うっうう…うわあああああああ」

無性に悲しくなり

私は初めて、戦場で泣いた

…悔しくて

…情けなくて

…余りにも無力で

関雲長は戦場で恥も外聞も関係なく泣いた

多分この戦は関雲長の生涯の中で、決して忘れられないものになる
だろう

~~~~~



S I D E 〱 霞

今日の前に右腕に包帯を巻いた華雄と、ナナシがいた

ここは虎牢関、洛陽までの最後の砦だ

「よっ、霞。久しぶり」

ナナシは軽快に挨拶するが

「ホンマにさっきの話ホンマなんやろな？」

そんな事よりも、ウチはさっきの話が気になってしょーもなかった

「挨拶ぐらい返そうぜ……」

まあ、ホントの事だよ

俺と孔融隊は今回の戦、月側に付く」

「おおー！！それは嬉しいわ」

……で？華雄？わかってるよな？」

「……ああ」

はあ……

「まあ、もつええわ

次からホンマに気いつけてや」

「ああ！」

ホンマにわかってんのかいな…

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ

「とりあえず華雄は孔融隊と一緒に洛陽まで戻れ
俺と霞と恋とねねはここで連合軍を迎え撃つ」

「待て、私はまだ戦えるぞ！」

「却下だ」

お前は一回洛陽まで戻って反省しろ」

「……そんな」

華雄は無視だ

後は…

「すまんが、今言うものをありったけ関の上に用意してくれ
亮は洛陽で今から今ものを、やっぱりありったけ用意してくれ」

さあ、久々にナナシ最強設定だ

………

…
…

ナナシが虎牢関に着いてから数日が経った

関の前には金の鎧を着たやたらと派手な部隊、そして袁の牙門旗

…袁紹だ

そして多分真桜が造ったんだろうと思われる対城兵器……巨大な丸太を、これまた巨大な台車に乗せ、門を力技で無理矢理こじ開ける代物だ

あれなら何の邪魔もなければ、一刻も持たずに虎牢関は開門するだろう

…そう、何の邪魔もなければな

~~~~~

SIDE〜曹操〜

孔融が泗水関に現れたと聞いたけど…

間違いなく、ここにいるわよね

静か過ぎて嫌な予感がするわ…

そう、まるで嵐の前の静けさのような…

まあ、それでも私の霸道は阻めないという事を教えてあげるわ……

……それにしても真桜には少し無理をさせ過ぎたかしら？

ちなみにその頃真桜と李典隊は完徹二日に対城兵器を造っていた為、  
槍が降っても起きない程の爆睡状態だったそう

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

「よし、各員定位に付け！」

叫んだ瞬間に戦いのドラが鳴り、件の対城兵器が前に出てきた

「弓兵部隊は梯子を使って登ってくる連中を撃ち落とせ！」

ちなみになんで指揮とっているのかというと、霞と恋に推薦された
から

そして俺は対城兵器の周りにいる連中に向かって、用意してもらった
拳大の石を投げる

「琉球王国のハンカチ王子、島袋のピッチングをとくと見よ！」

セリフ？あまつか 天使に言えつて言われた気がしたから言った
なんか色々違うらしいよ？

あつという間に対城兵器の周りの人間はいなくなった

後は、あの丸太を消せばいい

俺は火矢を用意させ、丸太に向かって数矢撃つ

本来、守る側が火矢なんぞ用いないのだが、今回は兵器を燃やす為、
少量撃てば良い

結果、兵器は燃え、使い物にならなくなった

「よし、皆！対城兵器は使えなくなった！後は俺達が頑張るだけだ
！気張れよ！」

こっちの士気は上がる一方で、良い調子だ

「申し上げます」

ん？問題でもあったか？

「なんだ？」

「董卓様が孔融様をお呼びです
できたら洛陽まで来て欲しいとの事です」

ふむ、今はこちらの押せ押せ状態だから行っても大丈夫だろう

「わかった。じゃあ、俺は洛陽まで一回行ってくる
霞、恋！俺は洛陽に行ってくるが、何かあればすぐに呼べ、いいな
」？」

「……………」（コクッ）「」

「おう！任せとき！」

そして俺は虎牢関を離れ、洛陽に向かった

曹操の企みに気付かずに…………

第24話（後書き）

突然ですが、

番外編を読みたい人ー！

いたら感想にどんなの読みたいか送ってくださいーい

これは随時募集中でーす

べっ、別に作者怠慢とかじゃないんだからねっ！？

いつもこんな駄文を読んで頂き、ありがとうございます

第25話(前書き)

とりあえず～作者はあ～ここのお～下りがあ～書きたかったあ～

第25話

そして俺は現在洛陽の玉座の間で、月、詠、華雄達と久々の再会の挨拶をしていた

「ういゝつす

久しぶりだな、月、詠

今回俺と孔融隊は董卓側に付くからよ
よろしくな」

「本当に…本当に私達を助けてくれるんですか？」

「しつげーぞ、月

俺は月に、ホントに世話になったんだ。これ（戦）ぐらいでしか役に立てないんだから、こういう時に恩返しさせてくれよ」

そっだ

俺はあの時に月がいなければ、罪悪感とか色々なものに押し潰されていただろう

「それでも！私のせいでナナシさんを！詠ちゃん、恋さん、ねねちゃん、霞さん、華雄さん、兵の皆さんを死地に向かわせてしまっんですー！」

兵数的には殆ど五分五分

だけど、将の質で連合軍が圧倒的だ
だけどな…

「俺は俺の意志でこの場に来た

だから月は心配すんな

それに、なんで俺達が死ぬ事前提なんだ？俺は死ぬつもりもないし、もちろんこの戦にだって負けるつもりはない
月は俺がいて負けるとでも？」

「（フルフル）」

ブンブン首を横に振る月

「じゃあ、俺に任せろよ、な？」

「……はいっ！」

そう笑顔になって返事してくれる月

これでまた負けられない理由が増えたな…

「もっ、申し上げます！」

何やら慌てた斥候らしき兵士がやってきた

「どうかしましたか？」

こんな時は得てして嫌な予感しかしないもので、さらにそれが当たるものだ

「虎牢関が、虎牢関が落ちましたっ！」

連合軍はあと数刻の内に洛陽に到着するかと…」

……虎牢関が落ちた？

「おい、そりゃ何かの間違いじゃないのか!？」

俺はその兵士に詰め寄る

「いえ、間違いではありません

……そして、良くない事がもう一つあるのですが」

悪い事は連鎖するってか？

「言ってみる」

少し語尾が強くなるのは許してほしい

俺だってトイレに行けば、屁だってする人間だ
動揺だってする

「呂布將軍、陳宮様、張遼様が連合軍側の緒侯に下りました」

「なあっ!？」

「……っ!？」

詠はあまりの事に驚愕、月が絶句して口を手で覆う

恋も霞もバカじゃない

投降したって事はそれなりに認めた緒侯があっただろう

……それよりも、何故虎牢関がこうも容易く落ちた？

恋も猪気味だが、華雄程じゃないし、霞もいる

普通に籠城作戦を貫くだろう

何があった？

「おい、虎牢関で一体何があったんだ？」

「はっ、孔融様が虎牢関を発ち約一刻後に曹操軍後方から現れた、投石機と不思議な形状の兵器により、虎牢関は開門寸前
我々は止めたのですが、呂布將軍と張遼様が表に出て時間を稼ぐ間に兵は洛陽に逃げよ、と自ら囹役になりそのまま……」

……そうか

「わかった

下がっていいぞ」

俺は必死に頭を回転させる

月達をどうすれば助けられるかを

……

……

……

……はあ

どんなに演算しても一番確率高いのはこれしか無いのか

(本当にその選択肢でいいの?)

(天使か…)

俺はこの選択肢でいいさ

でも、これをやると俺はほぼ死ぬだろうな

(まあ、神様演算で98%死ぬね)

(0%じゃないなら十分さ)

「よし、詠、亮を呼んでくれ」

「えっ?ええ」

……

……

…

今玉座の間には、俺、月、詠、華雄、亮の五人がいる

「今から月を生かす為の作戦を言っ」

俺は前置きも何もなく、そう言った

「月は、月は助かるのっ!?!」

詠が一番食いついてきた

まあ、そりゃそうか

「まずは華雄、お前は月と詠の傍から離れるな。
詠、お前等三人は町の裏通りとか目立たないような所にいる
それと、月と詠には董卓、賈馱の名前を捨て、今後『月』『詠』と
名乗ってもらおう
亮、お前は孔融隊と共に俺と一緒に来い
兵士達は皆一回俺に預けさせてもらおう
以上、解散！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！
それじゃ、どんな作戦かわからないじゃない！」

「いいんだよ、それで」

「いいわけないj…(トン)」

食いついてくる詠を手刀で強制的に眠らせる

「詠ちゃんっ!?!…(トン)」

月にも同じだ
眠ってもらおう

「おい！孔融貴様、何をっ…」

「華雄、二人を頼むぞ」

俺は華雄の話を途中で遮り、亮と共に孔融隊と兵士達のいる中庭ま
で行く

……
……
……

中庭行く途中で

「亮

「なんですか？」

「俺はこれから無茶な事を皆に命令する」

「……はい」

多分亮はもうわかっているのだろう

「でも、お前の協力がないと成功しない
だから、目茶苦茶でも無茶苦茶でも無理難題でも、成し遂げてくれ、
頼む」

自分がどんな役割なのかを

「……俺は数ヶ月前まではただのチンピラだった
兵士に志願したのだから、そっちのが金が入ると思ったからだし
……でも、あの時孔融様：ナナシ、あなたに会って変わった
ただのチンピラから一端の兵士になれた
しかも、今こうしてあなたの認めた『王』を守る為に大役を任せら
れる程に

俺はあなたにはいくら感謝してもしきれねえ

あのまま公孫贄んトコにいても、きつとその辺で野垂れ死にしてと
思う

だから、俺は何があっても、どんな時でもあんたに付いていく」

……亮、俺はこんな良い部下を持って幸せだな…

「亮、お前は劉備の顔はわかるな？ならば、お前は単身で劉備の元
に行き、

『月、詠、華雄、この三人を劉備の所で保護してくれ』
と、伝えてくれ

もしかしたら、殺されるかもしれないが、お前にしか頼めない
頼む！」

俺は土下座せん勢いで頭を下げる

「この羽延元瑜、その大役慎んでお請け致す」

……

……

…

中庭にて

「俺は今からお前等に無茶苦茶言う！」

付いていけないと思えば抜けもらって構わない！」

中庭には孔融隊と城の兵士約三万人がいた

中庭広いッスね…（笑）

「お前等はこれからこの数で連合軍を死ぬまで止めてもらおう！だが、死ぬな！危なくなったら連合軍に投降しろ！そうすれば命は助かるだろう！」

殆ど死ぬと言っているようなもののに、誰一人として逃げようとし
ない

「誰も抜けないか……バカな奴等め…

ならば、作戦概要を言う！

連合軍は間もなくここ洛陽に到着するだろう

俺達は董卓が逃げるまでの時間稼ぎとして、洛陽から出て、連合軍
を迎え撃つ

俺達が陣を構えた後、俺達の後方に孔融隊が用意したありったけの
油と木材に火を点け、炎の壁を作る

つまり、俺達は死ぬか降るか勝つしかない！逃げ道があるのは董卓
達のみだ

皆！出陣だあ！表にて陣を構えよ！」

さあ、連合軍…

俺の最初で（多分）最後の大戦…

派手に暴れてやるよ…

この、死神がな！

第25話（後書き）

ナナシよ…何故最後に中二的な思考をした…

次回、反董卓連合最後！……かなあ？

第26話(前書き)

投稿遅れてしまいゴメンなさい

第26話

~~~~~

SIDE 孫策

今日の前には陣を構えた董卓軍がいる  
その数凡そ三万人

そして、その先頭にいるのがきつと孔融文挙なのだろう

「最後の最後で死神の登場なのね…  
うふふっ…楽しくなってきた」

私は蓮華からの手紙（紙ではないが）を思い出していた

いつものように面倒な袁術ちゃんの命令を適当にこなしつつ、蓮華  
に愚痴や玉座は譲るだのの手紙を送っていた

そんなある時、蓮華の手紙に見知らぬ名前があった

『孔融文挙』

手紙を読めば、何でも、これから始まるだろう乱世の時代に、付い  
ていく王を選ぶ為に私に会いたいか言ってみた

まあ、私に目を付ける所は見る目あるわね

蓮華はそれを断つたらしいけど

ん、私は会ってみたかったかな

……あら？噂をすればその孔融が前に出てきたわね

舌戦でもするのかしら

~~~~~

S I D E ～ ナナシ～

俺は舌戦の為に隊の前から、さらに数歩歩み出る

…そして、今回の作戦を反芻する

今回の本当の作戦を知っているのは多分俺と亮だけだろう

表向きは月達を洛陽から逃がす為の時間稼ぎ

でも実際は月達を劉備の所に匿ってもらう為の作戦…

まず俺が舌戦、そしてその後俺と孔融隊、そして兵士約三万人でここで連合軍を足止めする

そう、俺達は所詮時間稼ぎ

本命は単身で劉備の元に行ってもらおう亮だ

亮に月達二人を匿ってもらえるように説得してもらおう

ここが一番大切なトコだ

亮には頑張ってもらわないとな…

そして時間稼ぎの俺達は亮が成功するまでどんな手段を持ってしても、ここで食い止めなければならぬ

……そう、どんな手段を用いてもな…

俺は予定していた位置までくると、牙門旗を掲げ声の限りに叫ぶ

俺達は時間稼ぎではなく、まるで本当にこの手勢で連合軍を倒すかのような……いや、倒すつもりで

「聞け！連合軍各緒侯の『王』達よ！」

そういえば、今までで防衛戦なんて、この世界来るまでなかったな…と、そんなどうでもいい事を思った

「俺の名は孔融文學！今は董卓軍の将の一人！」

そして、前世では『ナナシ』と呼ばれた事は数える程度しかなかった…と、ホントにどうでもいい事も思い出した

「董卓軍は残り僅か三万人程、俺達に勝ち目は無いだろう！」

……今なんか、

「おゝほっほっほっ」

とか聞こえてきたぞ？

「……とか、思ってたら大間違いだ！」

ダメだ……ここからはこの戦に集中しないと

「俺の二つ名は死神！『死を司る神』だ！貴様等の命、残らずこの死神が貰っていく！」

ここまで言った所で、後方で待機していた孔融隊が用意していた油と木材に火を点け、燃え上がる

それは連合軍側から見れば、まるで火の壁が現れたかのように見え

ただろっ

俺は右手に紅蓮、左手に朧月を構え…

「この死神に殺されたい奴はかかってこい！いくぞー！」

「「「「「おおーっ！！」「」「」

ナナシが駆け出し、それに続いて後方の孔融隊、兵士達も勝鬨のよ
うな咆哮をあげて駆け出す

こうして董卓軍対反董卓連合の最終戦が始まった

~~~~~

S I D E 〱 曹操 〱

死神………ね

それで私の覇道を止められるかしら？

「真桜、例のアレを持ってきなさい」

真桜にアレを持ってくるように命令する

アレは一刀の世界の武器で、『火炎瓶』というらしい

瓶の中に油や釘等を入れたもので、瓶の口に布を入れて火を点けて相手に投げる

すると、瓶が発火破裂し、中にある釘が周りに散乱する

これで周りを攻撃する

この火炎瓶を虎牢関でも使ったから、早めに決着が着いた

流石は天の武器ね

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

相手の兵達が火炎瓶のような物を持ち出した

なんでそんなのがあるんだ？

一刀か？……いや、そんなの今はどうでもいいな

俺は近くに投げられた火炎瓶を朧月で打ち返し、道を空ける

その間に前方からきた五人程の兵を紅蓮で一薙ぎする

「連合軍ってのはこの程度かあ!？」

一撃でももらえばほぼ即死の俺

気合いと勢いで連合軍の前線に食い込み、蹂躪していく

決して攻撃が当たらないように、手当たり次第、手の届く範囲の敵を薙ぎ倒しながら…

~~~~~

SIDE 〱 亮 〱

今私は単騎で劉備殿の元に向かっている

先程連合軍前線で何かの破裂音と、人が飛ぶのが見えた

多分孔融様が連合軍と接戦したのだろう

急がなければ……

亮、劉備のいる所まであと約1500m

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ

今俺は結構後悔していた

何せ、目の前の武将が…

「見つけたぞ、孔融！」

「孔融、久しいな」

「おつ、ナナシちゃん！さっきの舌戦、痺れたで〜」

「ふむ、確かにナナシ殿らしい豪快かつ大胆な舌戦でしたな」

「孔融！泗水関の借りを返させてもらっぞ！」

「鈴々もお兄ちゃんと戦いたいのだ！」

「……………（コクッ）」

「はあ〜い 貴方の探していた孫策伯符よ

こんなにたくさんいるのは正直ちょっと卑怯かもだけど、私の勳が
告げてるの 貴方は危険って」

「……………私もいくぞ、孔文挙！」

台詞は上から、夏侯惇、夏侯淵、霞、星、関羽、張飛、恋、孫策、甘寧

……アレ？今さらつと孫策とか名乗ってなかった？

……いや、マジ勘弁してくれって……

どこの武將がこの九人を同時に相手できんだよ……

~~~~~

S I D E 孫策

ん〜、さっきの舌戦からして相当強いのかなって思ったけど……

想像以上だったわね……

まさかこの九人の勇將、猛將を同時に相手にしようなんて……

それともただのバカなのかしら？

まあ、そんな事よりも冥琳にバレないうちにパツパと戦りたいわね……

~~~~~

S I D E 〱 曹操 〱

…孔融は正気かしら？

うちの春蘭、秋蘭相手にして更に他の緒侯の武将七人をも追加で相手にするなんて……

まあ、お手並み拝見ね

〱〱〱〱〱〱〱〱

S I D E 〱 劉備 〱

うふふふふ……

孔融さんはあゝ

また私と白蓮ちゃんとの仲をおゝ

邪魔するんだあゝ

うふふふふ……

後に三国志を代表する三国の王達は、それぞれの想いを胸に孔融の
戦闘を見詰める

……劉備だけは何か怖い事を言っているが…

羽延が劉備の元に到着するまであと700m

第26話（後書き）

今回視点変わり過ぎッスね…

読者の皆さんはどっかでしょっか？

見難いッスかね？

第27話(前書き)

やゝ、また投稿遅れました

まだ中途半端なんで、連続投稿したいと思ってたり、思っ
てなかつたり…

第27話

俺は呪った

神達を、天使を、あまつがそしてなんでこんなトコにいるかもわからないぐらい、固まっていた連合軍武將を……

「…ちいつ！？孔融、貴様避けるなっ！！」

夏侯惇が無茶苦茶言えば、

「桃香様の命にて貴様の首、必ず桃香様の前に…っ！」

関羽が俺を殺そうと堰月刀を奮い、

「……じゃあ、これも避けられるんかいなっ！！」

霞の神速が逃げ場を塞ぎ、

「………ナナシ、やっぱり強い」

恋が俺の隙を突くように、文字通り必殺の突きを放つ

そして、近接ばかり気にしては…

「…はあっ！」

夏侯淵の鋭い矢が飛んでくる

しかも、前線が崩れそうになれば…

「愛紗！交代なのだ！」

「夏侯惇殿、一旦交代ですぞ」

「私達も参戦しちゃうぞ

いくわよ、思春！」

「はっ！」

張飛、星、孫策、甘寧が絶妙なタイミングで交代し、追撃する余裕がない

……………アレ？

これ詰みじゃね？

なんで俺はこつちの世界来てから無理ゲーばつかなの？何なの？バカなの？死ぬの？

……………いや、これは普通に死ぬフラグですな…

「ねえっ！？…つちよっ！？待ってって！？少しお話しましょっ！？」

会話は人類最大の文化です

それを試みたナナシですが…

「つりゃりゃりゃりゃ〜っ！」

「はいはいはいいっつ！」

「あゝはっはっはっ」

超楽しい」

「はあゝ…せいっ！」

もちろん聞いてくれる人なんていないツスよね…

…っか、一人バトルジャンキーがいるし…

今はまだ何とか四人の攻撃を、避け、受け止め、時に迎撃し、凌いでいるが、結構ギリギリである

……亮、早くしてくれ…

~~~~~

SIDE〜曹操〜

あの九人を相手にしてもう一刻…

ホントにとんでもないわね、孔融は…

これはますます欲しいわね

孔融文學、この曹孟徳は諦めてはいないからね……

~~~~~

SIDE↳孫策↳

あゝはっはっはっ
超々楽しいわ

まさか、孔融がこんなに強かったなんてビックリしたわ

思春も予想外なんじゃないかしら？

ん、孫家に来てくれないかな

~~~~~

SIDE↳劉備↳

ん…、まだ孔融さんの首取れないのかなあ？

白蓮ちゃん、もうちょっとだけ待っててね…

もうちょっとで私達の邪魔者はいなくなるから

うふ、うふふふふ……

「申し上げます！孔融隊の羽延という者が劉備様に面会を求めたいです」

ふーん

孔融さんの部下がきたんだあ……

バラバラに解体しちゃってもいいんだよね？うふふ……

「それは一人で、ですか？」

隣にいた軍師朱里ちゃんが言いました

確認しなくてもバラしちやえばいいのに……

「はい、何でも交渉事があるとか」

「通しても大丈夫ですよ

何かあっても、何もなくても、バラしちやいますから」

そう、私と白蓮ちゃんの邪魔をする人は皆バラバラになっちゃえばいいんだ〜

「桃香さん！相手はあくまでお話と言っているんですからね？少し自重してくださいね？」

朱里ちゃんに怒られちゃった

~~~~~

SIDE 〱 亮 〱

今私は劉備殿の前にいる

だが、とても交渉などできる空気ではない

何故なら…

「なんでこんな所に羽延さんは来たのかな？かな？

バラす？ねえ、バラしていい？」

と、劉備殿がイッてる目で言い

「と、桃香さん！？」

それを諸葛亮殿が嗜める

……………と、こんな感じだからです

私はもう死を覚悟していると言っても過言ではないでしょう

なんせ、劉備殿の背中に巨大な鉞が見えてますしね……

「すみません、時間がないので簡潔に言います
董卓様達を匿ってもらえませんか？」

「「はい？」」

劉備殿と諸葛亮殿が被る

……

……

…

私はこの戦の背景、董卓様の境遇を孔融様に言われた通りに説明した

「つまり私達に董卓さん達を匿って、この戦を終わらせてほしい、と？」

「はい

正確には、匿ってさえ頂ければ後は孔融様が戦を終わらせるそうです」

説明後、諸葛亮殿はそう確認してきた

「……………わかりました

そういう事ならば董卓……………月さん達を預かりましょう」

きっと自分達の緒侯への利益等を計算していたのでしょうか
少しの間の後、諸葛亮殿はそう答えました

「お願いします

私は董卓様と孔融様にこの事を伝えに行きます故」

そう言って私は走り出した

全てが終わる為の鍵を握って…

~~~~~

SIDE 諸葛亮

ここで月さん達を仲間に入れる事は、今後の益を考えると有りでしょう

多分雛里ちゃんも同じ考えだと思います

それなら特に拒む必要はありません

「……………わかりました

そういう事ならば董卓……………月さん達を預かりましょう」

……………でも、孔融という人はよくこんな策を思い付き、そして実行しましたね…

こんなの普通は考えても実行しようとは思わないし、そもそも実行できませんよ…

一度直接話してみたいですね…

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

もう何刻打ち合っているのかわからない

でも…未だに戦線が維持できているのはわかる

俺がバケモノクラスの猛将の相手をし、孔融隊が他の武将や遊撃に当たっているからだ

今のままなら、あと二刻は持つと思うが、それは俺だけだろう

亮……早くしてくれ…っ！

そんな願いが通じたのか、空に朱い粉を撒き散らしながら数本の矢が見えた

亮からの作戦成功の合図

俺は作戦の総仕上げに入った

「てめえら！俺達の勝ちだ！
董卓達はもう逃げ切った！諦めろ！」

俺は表向きの作戦成功を告げた

後はこの場から脱出し、予め予定していた月達の避難場所に劉備が
関羽を連れて行けばいい

まあ、このまま関羽を連れて行くか…

「つー事で、てめえら消えろ！」

俺はより一層に武器を振り回し、武将全員から距離を取る

そして…

「関羽！てめえちよつとこつち来い」

「えっ！？ええっ！？ちよつ…っ！？」

関羽を抱え、その場をあとにした

「……………あつ、…あれえ！？」「……………」

その時、その場にいた八人全ての声が一つになった

第27話（後書き）

そろそろ番外編をやってもいいと思った作者です

……でも、番外編について何も感想とかがこないから、読者の皆さんは望んでいないのかも…

第28話(前書き)

最初に…

月ファンの皆さん、申し訳ございませんm(・)m

理由は本編にて

第28話

「関羽！てめえちよつとこつち来い」

俺は関羽を脇に抱え、洛陽のとある場所

…つまり集合予定地まで駆け出した

「えっ！？ええっ！？ちよつ…っ！？」

戸惑う関羽をスルーして、とにかく洛陽に向かった

その道中…

「関羽、話を聞け

さっきの朱い粉の矢は作戦成功の合図だが、本当の作戦は董卓の逃亡じゃねえ」

「……えっ？」

「この策の本当の目的は董卓を劉備達に匿ってもらえるように説得し、劉備の下に送る事だ」

「えっ？ええ！？」

かんづは、こんらんしている

「いいか、一度しか言わないからちゃんと聞けよ」

そう言っている間にも戦場を抜け、洛陽に入ろうかという所まできていた

「董卓は圧政なんかして、民を苦しめてなんていなかった。だから、今回の反董卓連合はおかしいんだよ
それで俺は董卓を逃がす事にした。劉備に匿ってもらおうという形だな」

元々頭の回転は悪くない関羽、少しずつだが、状況を把握してきたようだ

「つまり、さっきの朱い粉の矢は桃香様の説得成功というわけですか？」

「ああ、話が早くて助かる
色々言いたい事もあるかもしれんが、とりあえず董卓達と合流させてくれ」

「ああ」

今はもう洛陽の町の中

関羽は自分で走っている

~~~~~

SIDE 月

ナナシさん……」「無事でいてください…

私達は今、洛陽のとある裏通りに身を潜めていた

ついさっきまで、私と詠ちゃんは寝ていた

……いや、気絶させられていた

そして、起きた時華雄さんから聞いた

ナナシさんが今やっている事、やろうとしている事、そして、今後私達がどうなる予定なのかを…

「董卓、賈馱、先程作戦成功の合図である朱い矢を確認したもうすぐ全てが終わるぞ」

華雄さんはそう言いましたが、私にはそんな事よりも、ナナシさんが無事なのかどうか気がなります

「ナナシさん……」

「月……」

詠ちゃんが心配してくれていますが、それでもやっぱりナナシさんの事が……

最初に会った時は私に弱さを見せ、泣いたナナシさん

次に会った時は私達の味方だと言って、なんとか助けようと知恵を



絞ってくれたナナシさん

そして……私達を助ける為に自ら最も危ない役割を買って出たナナシさん

目を瞑れば色んなナナシさんが思い出せる

泣いた顔、照れた顔、困った顔、悩んでいる顔、

そして…笑った顔

私はもしかしたら……ううん、きっとナナシさんが好きなんだと思う

理屈でも何でもなく、いつも困っている時に助けに来てくれる

そんな英雄ヒーローみたいな人……

ヒーローって言葉はわからないけど、なんか頭に浮かんできた  
きつとナナシさんみたいな人の事をいうんだと思うから……

「あれ……?」

おかしいな……?

勝手に涙が出てきちゃう……

作戦とか私の事とかどうでもいいから、早く……

「早く会いたいよお……」

「月……」

これはもう、ナナシは次に会ったら処刑ね……」

詠ちゃんが何か言ってたけど、もう何も聞こえなかった

だって、だって今日の前からナナシがこっちに走ってくるのが見え  
たから……！

私は思わず駆け出した

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

おっ？あそこにいるのは月達じゃないか？

「おーい！……っ！？」

なんか呼んだら、走ってきた月に抱き着かれた

ありゃ？俺そんなフラグ立ててないよ？

っーか、寧ろ手刀とかして嫌われる要素作っちゃってましたよ？

……何故だ？

「ゆ、月さん……っ！……！？」

……い、今ありのままあった事話すぜ？俺だって何が起こっているの
か理解できねえんだ……

まあ、何が言いたいかと言うとだな…

なんかいきなり抱き着かれた月にキスされた
しかもマウス・トウ・マウス
つまり唇と唇のキスだな

ここでおさらいすると、俺ことナナシは前世今世含め、女性と付き
合った事もなければ手を繋いだ事もない
だから、キスなんてまるで想像の範囲外

はっ、破廉恥ですよっ!?

「ナナシさんのバカ!

なんで私達に黙ってこんな事をしたんですか!?

どれだけ私が…私達が心配したのか分かってますか!?!」

バカな妄想していた俺だが、月の口から出てきた言葉を聞いて、素
に戻る

「なんで、私達に何の相談もなく、こんな危ない事をするんですか
っ!?!? 本当に…本当にどれだけ心配したとっ…っ…っ…っ…っ…」

最後はもう言葉になっっていなかった

そんな月に俺は…

「ゴメンな?でも、こうでもしないと、月達が生き残る術はなかつ
たんだよ」

もうさっきのキスされた時の桃色空気は消えていた

何時ぞやの逆で、今度は俺の胸に月を抱いて、月が泣いていた

「関羽、とりあえずこいつ等の事よろしくな？」

俺はこれから色々裏工作しに行かなあかんねん」

やべっ、語尾が似非関西弁になっちった

「……………ああ、わかった

彼女達はこな関雲長が必ず桃香様の下へ連れて行こう」

「…えっ！？ナナシさんは私達と一緒に来ないんですか？」

月が泣きそうな顔で縋ってくる

……………いや、ホントにいつ月フラグを立てたんでしょうね？

「俺は今回で良くも悪くも目立ち過ぎた

月達だけならともかく、俺まで一緒ってなると、今回で俺に恨みを
持った緒侯とかが劉備達を攻める可能性だつてある

関羽、もしそうなった場合お前等何とかできるか？」

「孔融殿や孔融隊の事を考えましても、今我が軍は疲弊しきつてい
る為、話にもならないかと」

「まあ、そういう事だ

これから俺は傍で月達を守る事はできないけど、いつかまた会える
時期はくるぞ」

「嫌ですっ！！私は……………私はナナシさん、あなたの事が好きですっ

！だから…だから……っ！！」

そこで一旦俯く月

俺は抱きしめてあげたいのを必死に我慢する

きつとこれで、月の覚悟ができるはずだから

「なあ、月？」

「……ばい」

「俺はさ、今初めて誰かに好きって言われたんだ
めっちゃ嬉しかったぞ？」

もちろん俺も月の事が好きだぜ？

でもよ、だからこそ…好きだからこそ好きな奴に迷惑かけたくない
って思うのが普通だろ？

俺はずつと傍にいないけど、月が呼べばすぐ駆け付けるさ

だからこれは別れじゃなくて、再会を前提とした旅立ちなんだ」

「……ばい」

きつと言葉だけじゃ全部伝わってないかもしれないけど、月は俺の
言いたい事をわかってくれたに違いない
その証拠にほら…

「……はい！

私、待ってますから！いつかまたナナシさんと会える日を！」

俯いていた顔を上げた月の顔は、涙とか色々なモンでぐちゃぐちゃ

してたけど、今日一番……いや、多分俺が見た中で一番の笑顔をして
いた

第28話（後書き）

やゝ、思った以上に長くなった反董卓連合編

まあ、次の話の半分ぐらいからは次の舞台いけるかもかも？

つーか、俺は恋ルート書くつもりだったのに、何故月ルートに…？

月ルートについては異論も反論も認める

第29話(前書き)

ここでようやく反董卓連合編の完結だぜ……

第29話

月の覚悟もでき、俺は裏工作をする為にとある噂を流した

『孔融は戦利品として、関羽を犯そうと連れ去ったが、抵抗され逃げられた』

なんでこんな噂を流したかと言えば、あの時関羽を連れ去ったのは本当の作戦を知らない人達から見れば不自然だっただから、自然になるような理由を考えたんだが…

「うふふふふ」

孔融さんはあゝ 白蓮ちゃんだけじゃなくってえゝ 愛紗ちゃんにも手を出そうとしちゃったんだあゝ」

その噂を光の速度の如く聞き付けた劉備……いや、劉備様が両手の鉞をクルクル回しながら追い掛けてくる

こんな経験したウチ、もうホラー映画なんて怖ないで…

「アハハハ」

コウユウサ〜ン マッテヨ〜」

劉備様目の色が黒単色なんですが？

つーか、関羽からホントの事聞いてますよね…？

「りょー！劉備を頼む！合流場所は三日後、南にある森の中の小川の上流で！他の隊員にもヨロ〜！」

俺は亮に孔融隊の合流場所を伝え、その場を後にした

とういか逃げた

最後にチラッと見えた月の顔に涙の跡は無く、その顔にはこれからの未来への期待と、また必ず俺に会うという決意が混ざったような笑顔があった

~~~~~

SIDE 〱 曹操 〱

結局董卓には逃げられるし、孔融は捕まえられないし

「秋蘭、春蘭、孔融と戦って、何か感じた事は？何でもいいわ」

せめて孔融の戦闘雰囲気だけでも聞きたいと思い、秋蘭、春蘭に話を振るが、

「孟ちゃん、そりゃ聞かない方がええで…」

霞が横槍を入れてくる

「それは何故かしら？」

「自分の無力さを感じてしまうからや

ウチも恋も春蘭も関羽も、いずれも猛将と呼ばれ、各緒侯の武の代表つちゆうぐらいの實力者や

それが秋蘭の援護有りでかすり傷一つ付ける事もできへんかったもうこれは目標となる壁とかそんな差じゃあらへん

ウチらとナナシとの差は……蟻と雲や」

「そこまでなの？」

私は秋蘭、春蘭に聞く

「私は霞と同意見です」

「…ふんっ！私はまだまだやれました  
趙雲が邪魔をしなければ……ブツブツ」

つまり二人共霞と同意見と…

どうすれば孔融は私のものになるのかしら……？

曹操はまだナナシの事を諦めていなかった!!

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ 〱

あれから二日経った

今回は流石に危なかったが、なんとか生き残る事ができた

俺は今小川で生き残る事ができた喜びを水浴びしながら噛み締めていた

(ナナシちゃん 最近DO?)

「きゃーっ!?!」

思わず乙女のような悲鳴が俺の口から出た

っーか…

(いきなり話しかけんなっ!?!水浴びしてる事ぐらいわかんたろ!スカポンタン!)

(アタシ〜今お酒呑んでえ〜何もかも忘れたいキ・ブ・ン) (はあと)

(もう既に酔ってやがる…
そして話が噛み合ってねえ…)

(失礼なボーヤねえん)

(てめえ…気持ち悪いからさっさと用件言っつて消えろ…)

(とまあ、たまにはいつもと違った大人の女性を演じてみたあまつが天使ちゃんなのでした テヘッ)

(俺は今なら死神も殺せる自信あるわ…)

(あつ、それは無理ね
死神を殺せるのは死神だけだもの)

(いきなり素に戻るなーっ!!)

(まあ、今回はあなたにとって、良い事なんだから、そんなに邪険に扱わないでよ)

(……もう武器はいらないぞ?)

(んー、違うよ?)

前にあんたにギブアンドテイクの事は話したでしょ?)

(ああ…そんな事あったね)

(まあ、それも関係無いんだけどね
なんか上の方が、

『猛将九人との戦闘、見事であった

褒美に一日一回限り不死身になれる身体をプレゼントした』
つてさ)

(は?プレゼント?した?何それ?事後承諾なの?どんなんだかわからない不気味な能力を?ふざけんなっ!!)

(まあ、今回のホントに良い能力らしいよ?)

なんでも、一日24時間以内なら、どんな怪我、病気、毒、その他ありとあらゆるものから一回だけ回復させてくれるってさ

んで、それは毎日深夜0時にリセットしてくれるんだって
そんなかわし、その日の内、24時間以内にもう一回怪我とかしたら、
死ぬんだけどね、

キャハハ 何処の零時迷子のパクリだって話だよね、 チョーウケ
る、

(……………)

(ありや? どうしたん?)

(段々俺が人間じゃなくなっていく…)

(今さらですよ)

(……………で? とりあえず俺は何かする事あんの?)

(んにや。 特には必要ないよ
今回は私からの報告だけだから)

(ああ、そうかい)

じゃあ、さっさと消えろ)

(イヤ、ン 怒っちゃめーよ)

(うぜえ……………)

(まあまあ)

じゃあ、今日は私帰るね、)

(おう、じゃあな)

そんななんか軽いノリでナナシはとんでもない能力を手に入れた

天使の態度に疲れきっていたナナシは気付く事はなかったが…

~~~~~

S I D E 孫権

あの反董卓連合から三日が経った

私は今孔融について考えていた

初めて会った時の雪蓮姉様に会いたいと言っていた孔融

あの時はなんて無礼な奴だと思った

思春を感じた奴の強さも勘違いか何かだろうと思っていた

でも、先日の洛陽前での戦闘を見て自分が如何に人を見る力が足りないかを感じた

姉様や思春を含めた九人の猛将との戦闘、あまりに綺麗だった

本来、武とは演舞であり、美しく綺麗なものである

しかし、孔融のそれは今まで見た中でも最上級のものだった…

四人に周囲を囲まれ、遠くから夏侯淵の矢を受けても尚、全ての攻撃を受け、逸らし、流し、避け、そして時に迎撃する

私はそれを見た時、自分の成すべき事を忘れてしまった

そして私は孔融に対する認識を改めた…

「……はっ!？」

いけない

気付いたらまた孔融の事を考えていたみたいだ

どうやら私はあの武に一目惚れしてしまったらしい…

あくまで孔融自身ではなく、孔融の成す武に、だ

私は自分にそう言い聞かせたが、あまり説得力はなさそうだ…

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ 〱

昨日新しい能力を貰った

まあ、デメリットの有る能力じゃないから儲けと考えるか

「羽延以下、生き残った孔融隊、只今到着しました」

丁度亮達も来たようだ

「ご苦労様

で、今何人いる？」

「現在孔融隊は私を含め23人です」

7人が死んだか或はどっかの緒侯に投降したか…

まあ、そんな事は検索しても意味のない事だな

「じゃあ、全員黙祷！」

俺がそう言っと、隊員達は目を瞑り、いなくなった隊員達に黙祷を捧げた

『お前等の分まで、俺は…俺達は生きるから』

そんな気持ちを込めて…

…

…

…

黙祷も終わり、一休憩している時に俺は皆に言った

「なあ、これから孫策の所にいかないか？」

そして歴史は動き出す…

大陸の緒侯が残り三つになる…

『三国志』と呼ばれる…

『魏』『呉』『蜀』による、三つ巴の世界へ……………

第29話（後書き）

次話から新章突入だぜ、Yeah! Ha!

ですが、その前に番外編を書きたいと思います

理由は作者の怠慢です

もっというネタがなくなってしまったので、番外編で時間を稼ぎます

そこでアンケートを…

? また麻雀でよくね?

(メンツの希望等あればお願いします)

? ヤンデレ劉備と普通の白蓮の日常が見たい!

? 番外編つて事で、他の作品とクロスオーバーさせてみたら?

(これも希望の作品があればお願いします)

ただし、作者の知らない作品は流石に書く事ができません
申し訳ございません)

? 一刀はどうなってるの?

(あっ、これは原作通りなので、原作参照で)

?こんなんしかないのかよ!その他を希望するぜ!

(どんなのがいいか、希望をお願いします)

以上の中から選び、感想に数字を書いて貰えると作者は泣いて喜びます

番外編 くヤンデレ劉備と普通な公孫贇の日常編 その巻（前書き）

最初に

今回の話は前回の後書きのアンケートの『ヤンデレ劉備と普通な公孫贇編』になります

作者のノリと勢い、そしてインスピレーションのままに投降したもののなので、色々ツッコミ所満載ですが、スルーの方向でお願いします

そして、今回は番外編につきキャラや時間軸等がおかしくなっていますが、気にしないでください

基本的に本編とは関係ありません

番外編 ～ヤンテレ劉備と普通の公孫贄の日常編 そのき～

~~~~~

SIDE～白蓮～

やあ、私の名前は公孫贄、字は伯珪。真名は白蓮だ

私には無二の親友とも呼ぶべき友がいる

その友の名は劉備、字は玄德。真名を桃香という

私達はもちろん真名の交換をしていて、お互いを真名で呼び合う仲だ

……だが、最近再会した彼女は変わってしまった……

昔から兆候はあったが、今の彼女は完全な『Y A ・ N ・ D E ・ R E』  
だ

そして、それを目の当たりにしたのは、まだナナシが幽州にいた時に、ナナシと放課後ティータイムを満喫している時だった……

……

……

……

今私は昼食後のおやつタイムとして、中庭でナナシと放課後ティータイムを満喫していた

「ナナシく、お前ホントに私の所に士官するつもりないのか？」

「しつこいぞ、白蓮？風を操れると思うなよ？」

そしていつもの軽口をナナシと交わしていた

…その時だった！

「あれえく？白蓮ちゃんだあ！！ヤッホー！」

桃香が現れ、

「じゃあ、白蓮！俺はこれから用事ができたから！」

と言って、ナナシが何処かにダツシュで消えた

何故？

ああ、ナナシは桃香に嫌われているからな

「白蓮ちゃん 一人？ねえっ！？一人！？」

「えっ…いや、今ナナシもいっ…」

「私も一人だったんだよね

仲間だねっ」

まさかつ！？桃香にはナナシは見えてなかったとでもっ！？

「…桃香？桃香はナナシの…」

「白蓮ちゃん？ナナシって『何』かな？かな？」

…なんか『何』を強調された…？

「そんな事より！私白蓮ちゃんの為に！白蓮ちゃんの為に料理作  
ったんだよ

一緒に食べよ？」

何故二回言った？

そしてナナシの事はスルーのようだ

…ってか、ナナシと真名は交換していたのか……？

「私達はさつき昼食食べたよな？」

そうなのだ

さつき昼食を食べ、そして私に至ってはナナシとティータイム中だ  
つたのだ

そんなに食べられるワケがない

そうゆう意味の問い掛けだったのだが…

「………そっかそうなんだ白蓮ちゃんは誰とも知らない人の作った料  
理は食べれてナナシとかいう変な奴とティータイムは楽しめて私の  
料理は食べてくれないんだそっかそうなんだ私白蓮ちゃんの為にっ  
て一生懸命作ったのに白蓮ちゃんには迷惑だったのか私全然気付か  
なかったよゴメンね白蓮ちゃんあのナナシとかいうゴミ虫を殺して



白蓮ちゃんをあのゴミ虫の呪い解放するからそれまで待っててね？」

……やだ、何この子怖い……

「愛紗ちゃん！！」

唐突に愛紗を呼ぶ桃香

「お呼びですか？」

「……！！！！？」

そして当然のように私の背後から現れる愛紗

……やだ、何この子達怖い……

「ゴミ虫を消せ」

ゴミ虫って……もしかしてナナシの事なのか？そうなのか、桃香？

「方法に制限は？」

愛紗、お前もそんな事務的に流すなよ……

ってか、ゴミ虫が誰かわかっているのか？

「魔眼使用許可、十七分割希望」

……魔眼？十七分割？

「畏まりました、では」

そう言っつて愛紗は何処かに消えていった

忍者なのか？

「白蓮ちゃん、もう大丈夫だからね？」

「……っつて！何、ナナシを殺そうとしてんだよっ！」

「私達の仲を邪魔する奴なんか死んじゃえばいいんだ」

なんか恍惚とした表情で恐ろしい事言っつて……いや、イってますよっ！？

「（折角メインヒロインになったのに、ワケワカランオリキャラなんかが主人公とか有り得ないから！そんな不屈き者なんて死んじやえばいいんだ！）………ボソボソ」

「桃香？」

「うっん、なんでもないよ！」

白蓮ちゃん、今日はお祝いだねっ」

「えっ？や、だからなんで……」

「よーし、またお料理張り切っちゃうぞおー！」

ついに動き出した、桃香の桃香による桃香のためのナナシ暗殺計画！

ナナシは生き残れるのか！？

そして白蓮は桃香のヤンデレ暴走特急を回避できるのか！？

続く！！

番外編 くヤンデレ劉備と普通の公孫瓚の日常編 そのきき（後書き）

こんな感じでどうでしょうか？

ヤンデレっぽいッスかね？

それと、あのアンケートは随時募集中ッス！

番外編 くヤンデレ劉備と普通の公孫瓚の日常編 そのきく(前書き)

とりあえずこれで今回の番外編は終了ッス

あと、作者は学生です

学生には定期試験とがあります

今が丁度その時期です

つまり投降がしばらくできなくなるかもーもです

番外編 〱ヤンデレ劉備と普通の公孫賛の日常編 その巻

〱前回のあらすじ

ヤンデレ全開った劉備玄德によつて、刺客・関羽雲長を放たれたナシ…

しかし！ナシは刺客の存在に気付いていない！

全てを知り、止められるのは公孫賛伯珪のみ

ナシは無事に明日の朝日を拝めるのか？

そして公孫賛は劉備を説得できるのか！？

〱〱〱〱〱〱〱〱〱〱

SIDE 〱ナシ

俺ピンチ

理由… 関羽が青龍堰月刀を俺の首にセット中

その理由… とうやら劉備がヤン全開だと考察

結論……俺ピンチ

「……………関羽さん？」

呼びかけるが…

「弔毘八仙、無情に服す……………」

……………アレって直死の魔眼の人の決めゼリフじゃね？

「これが、モノを殺すと言うことだ……………!!」

そしてそのまま俺の首を撥ねるように堰月刀を…

…って、それ直死の魔眼関係なくね？

「こなくそっ!!」

気合いでそれを避ける

「……………いいだろう。さあ、殺し合おう」

……………目が、関羽さんの目が…

どうやら最近のヤンデレは感染するらしい

「ま、待て関羽！何故俺の命を狙う？」

「それが桃香様の願いだから」

「それが人を殺す願いでもお前は従うのか？」

「桃香様の願いを叶えれば、桃香様は喜んでくださる  
それ以上の理由は必要か？」

……これは戦うしかないのか？

と、その時この事件の主役が現れた

「愛紗！そこまでしておけて」

「白蓮（殿）！？」

女神再び降臨キタ (。。( ) !!

これで助か「…

「私のナナシに手を出すとは、いくら愛紗といえど、許されぬぞ！」

「………（ポカーン）」

……もう好きにして…

俺の座右の銘はきつと前途多難とかなんだろうな

個人的にはケセラセラも捨て難いが…

「白蓮殿！？まさかお主、このゴキブリが擬人化したようなゴキブリみたいなゴキブリに誑かされたのか？」



俺はドコにツッコめばいいん？

関羽にゴキブリって言われた事？それとも無駄にゴキブリ連呼された事？或は白蓮を誑したとか思われている事？

……もう何でもいいよ……

つてか、俺は泣いてもいいんだよね？

「関羽！それ以上私」の『ナナシへの狼藉、許すわけにはいかぬ！覚悟しろ！」

「やってみろ、公孫贄伯珪！」

……なんか知らないうちに関羽VS白蓮のバトルが勃発してるし……

カオス過ぎる……

「あーっ！！愛紗ちゃん！私の白蓮ちゃんに何をしてるの！」

「桃香様！止めないで下さい！これは私と白蓮殿の意地と意地の張り合い！もう何人たりとも止められはしません！」

劉備もやってきてさらにカオスになったし……

「桃香！私は『もうすでに』身も心もナナシの物だ！だから、お前の愛は受け取れない！」

……えっ！？

俺何もやってないよ？

「白蓮殿？私との闘いでよくそんな余裕があるな？」

「やっぱりまたナナシなんだ私よりもナナシなんかには『初めて』をあげちゃったんだ許さない赦さないナナシなんて殺してやる殺してやる私の白蓮ちゃんの全てを奪った罪はどんな罪よりも重いさあ生を謳歌しろ貴様のようなゴキブリ未満のボルボックスには上等過ぎる死を与えてやるう喜べ慶べ悦べ歡べ貴様の生皮爪体毛を生きたまま剥ぎ取り目玉熱した焼き鑊くわでくり抜き喉に燃え盛る程の熱湯を注ぎ込み体の内から火傷をしるそして錆びたノコギリで手足の指の間接から少しずつ少しずつ切って化膿するまで待つて化膿したらまた次の場所を切るの最後に首を一日一往復ずつノコギリで切っていくのサイコーでしょう？」

クキ、クキキ…クケケケケ……」

桃香様怖っ！！！！？

俺もうこんな生活嫌ッス！家に帰るッスよ！桃香様から逃げたいッス！！

そして数日後ナナシは本当に幽州を出ていく事になるのだが、それはもう少し先のお話

おしまい

番外編 くヤンデレ劉備と普通の公孫瓚の日常編 その巻く（後書き）

今回中途半端かなって思いましたが、これはこれで一つの可能性なので作者は有りだと思います

皆さんはどうでしょうか？

また、この番外編では劉備達のヤンがパワーアップしていますが、  
『番外編だからな』とお考え下さい

そしていつもの事ですが、番外編では時系列、キャラ、言語等おかしい部分があるかと思いますが、スルー方向でお願いします

第30話（前書き）

作者まだ試験中〜

しかも完徹三日目〜

だ〜か〜ら〜、おかしなテンションで書いております

作品としての質は下がってはいないかと……

### 第30話

孫策の所に行く途中でどうしても曹操の土地を通る事がわかった

それ以外の道もあるが、遠回りになり、隊員達が風水的にこちらの道の方が良いと言われて、こっちにした

どうか曹操さん達に会いませんように…

あつ、でも凧達には会いたいかもかも…？

しかしこれがあまつか天使の策略であると、バカな事を考えているナナシは知らなかった……

~~~~~

SIDE 劉備

「白蓮ちゃん！？どうしたの！」

あの反董卓連合から数週間、穏やかな日常は公孫贇の亡命にて崩された…

「袁紹（笑）にやられた…」

…あの後私は幽州に帰って内政に取り組んでいた。そしたらいきな

り宣戦布告と共に攻められた……」

「宣戦布告と同時ですか……」

……きつと計画されていたんですね」

「ああ、多分な

すまないが、私達をここに置いてくれないか？」

「それは大丈夫なのですが……」

白蓮ちゃんと朱里ちゃんが何か話をしてはいたが、私はもうそれを聞いていなかった

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん……今すぐ戦闘の準備をして……」

「桃香様！？まさか……」

「ええ……私の白蓮に何をしたのかわからせに行くの……」

私の腹の内には溶岩のように煮え繰り返っていた……

……ころすコロス殺す

「桃香さん！気持ちわかりますが、今は押さえてください」

「そうだぞ、桃香

それに袁紹（笑）は私達の五倍の戦力だったんだぞ！桃香達なら十倍ぐらいの差なんだぞ！？」

「……つまり、一人十人が目標だね」

「……………はあ…」

愛紗、桃香をちよつと黙らせてくれ。話が進まない」

「はっ！」

そして劉備は愛紗の手刀で落ちた…

~~~~~

SIDE〜白蓮〜

「愛紗、悪いな」

私は愛紗に謝る

「いや、こうでもしないと桃香様は止まらなかったただろつから、しようがない」

しかし……

「この後どうするか…」

袁紹（笑）は多分……」

「ああ、多分曹操が袁紹（笑）を攻め落とすだろつな」

「…はい。恐らく袁紹（笑）さんが曹操さんにちよつかいかけるで



しょうからね……」

私、愛紗、朱里で今後について話し合う

さて、もしこちらの思惑通りに進むなら、袁紹（笑）の次は私達が孫策達だろう……

どうなる事が……

事実、その数ヶ月後に袁紹（笑）は曹操にちよっかいかけ、劉備達に保護されるのだが、それはまた先のお話

~~~~~

公孫贇亡命より少し前

SIDE 曹操

「では、今のうちに袁紹と公孫贇両方を討て、と？」

今は軍議中

内容は、麗羽（笑）が公孫贇を攻めているという事について

反董卓連合からあまり日も経ってないのに、もう他の諸侯を攻めるとは……

流石麗羽（笑）としか言えないわね

「はい。今ならば、公孫賛、袁紹の両方を簡単に討つ事ができます」

稟はそう言い、桂花と風もそれに頷く

……いや、風は寝ていて船漕いでいるだけだった…

「風……起きなさい」

「…おおっ」

全く……

「それで、風も稟の意見と同じかしら？」

「風には何とも」

「というと？」

煮え切らない風に稟は先を促す

「天下を取るだけなら稟ちゃんの言う通りに、公孫賛さんと袁紹さんが争っている今攻めた方がいいですけど、華琳様は覇道を求めているのですよね？」

「ええ」

「だったら、稟ちゃんの意見では覇道とは言えないんじゃないかと」

だから風にはどちらとも言えません」

風に見えているのは大局だけではないよね
大局と同時に私の霸道まで見据えての静観、か…
ホントに良い拾い物したわね

「風の言う通りね

ただ天下を取るのは霸道にあらず

私が求めているのは霸道の先の天下よ

稟達が軍師として、私の為を思つての意見だとは理解しているわ
でも、我が霸道のやり方ではないわね」

「…華琳様がそう言うのであれば」

「二人共悪いわね、これは私の我が儘なの」

そう、これは私の我が儘

でもだからこそ曹孟徳の霸道というもの…

~~~~~

SIDE 袁紹

「おっっほっほっほっ」

|| || || ||  
。？

~~~~~

SIDE↳ナナシ↳

白蓮が袁紹（笑）に滅ぼされたらしい

もし白蓮が生きているなら荊州の劉備のトコに行くのかな…？

わからないが、なんだかんだで白蓮は生き残りそうだな…

なんつーか、華雄さんと違って折角真名もらえたんだから…

~~~~~

SIDE↳関羽↳

白蓮がここに来てから数ヶ月が経ったある日、それはやってきた

「も、申し上げます！」

今私達は軍議中だった

内容は袁紹（笑）の扱いについて

数週間前に袁紹（笑）が曹操に挑み、敗北、そして文醜、顔良を連れて荊州に隠れていたのを張飛が見付ける  
そして張飛によって劉備の前に連れてこられたが、袁紹（笑）を見た瞬間、劉備の纏うオーラが変わった…  
普段のふわふわした空気はなりを潜め、ホッケーマスクを顔に着け、右手に鉞、左手にチェンソーを持った竜宮 レナのようなオーラだったそう…

…どんなオーラやねん…

まあ、そこは皆の女神・公孫贇さんが劉備を宥め、なんとか『劉備による公開殺戮ショー』を回避したが…

そして今一度袁紹（笑）の処遇についての軍議中にこれだ

私や他の将達はいつもの通りでしたが、桃香様が少しイラだったのをここに居る将達は見逃さなかっただろう

「そ、曹操の軍勢が北方より確認されました！」

しかし、それも兵士の持ってきた情報により霧散する

「あわW…じゃなくて、はわわ…」

曹操さんはどのぐらいの数なんですか？」

朱里も混乱しているのだろう

なんせ、『あわわ』と『はわわ』を言い間違えるぐらいだ

ああ、可愛いなあ…

「そ、それが……」

兵士は何やら言い難そうに吃る

「構わない。言え」

私はその先を促す

どんな数だろうが今からではどうしようもできん  
ならば、さっさと敵軍勢の人数を知り、策を練らねばなるまい

「は、はっ！敵軍勢は約五十万です

あと二週間から三週間程でここに来るか……」

……だが現実とは、かくも無情だった

「五十万だとっ！？」

皆声に出していない者も同じ気持ちだろう

「今、私達の兵数が約三万程…

今から必死に集めても五万が限界です……」

朱里の出した結論に皆言葉を失った…

もはや策でどうにかなる問題ではない

これは文字通り桁が違つのだ…

「……くっ!!」

そう考えれば後はこれしかあるまい…

私はすぐに馬小屋に向かおうとしたが、星に腕を掴まれ止められる

「愛紗！何処に行くつもりだ！」

「決まっている！もはや、策云々でどうにかなる規模ではない！  
ならば…、ならばせめて最期に一矢報いなければ…っ！」

星、わかってくれっ!!

「愛紗、落ち着け！今捨て鉢になってはしょうがないぞ！」

しょうがない、だと!?

ならば…

「ならば、いつだ！いつ報いる機会があるというのだっ!?!それは  
今ではないのか！」

最早袁紹（笑）の事なんて誰の頭の中にもなかった

~~~~~

SIDE〜星〜

「ならば、いつだ！いつ報いる機会があるというのだっ！？それは今ではないのか！」

愛紗の悲痛な想いが玉座の間にこだまする…

……だが！ここで諦めてはいけない

「愛紗、落ち着け！私にも多少なりとも考えがある！」

私にはまだやり残した事が山のようにあるのだ…っ！！

「朱里！雛里と伯珪殿をここに

愛紗！お主は月達と恋達をここに連れてこい
いいな？」

…なんせまだナナシ殿との再戦の約束があるのだからな
私だってこんなトコで死ぬのはゴメンだ！

………

………

…

皆が集まったのはそれから約30分後

「………と、言うわけだ

…だが、私は必ずしも今曹操とぶつかる必要は無いと思う」

「」「」「えっ！？」「」「」

軍師四人は驚きの声を上げる

「つまり……ん」

「逃げちゃおっか」

台詞取られた……

第30話（後書き）

オメガ眠いかもかも……

今までより質下がりましたか？

もしそうなら今後試験中は書かないようにします

あつ、今までが質下がりそうにないぐらいのレベルだったとしても、それはそれで別問題としてお願いしますッス

あゝ…眠い

第31話(前書き)

ようやく試験終わったぜー!!

今話もおかしなテンションが混じっているかもーも？

第31話

~~~~~

SIDE 華雄

ふははは！

ついに！ついに私視点で物語が進むぞ！

これはきつと天命だったのだ！必然だ！当然だ！

そう！これは『三国志』ではなく、『三国对华雄』なのだ！！

そのうち、『真・恋姫十無双 修正版』がネットの公式サイトにアップされ、私にも個別ルートと真名の追加、そしてファンディスク、『真・華雄十無双 萌将伝』が出るに違いない！

きたきたきたきたきたキタ (。。( ) !!

私の時代が来たのだ！

(あゝ…読者の皆さん、すみませんッス

華雄さんが作者の制止を振り切って暴挙に出たッス

編集カットができなかったので、とりあえず見なかった事にしてくださいませ

……多分前話で星うちに名前を呼ばれなかったのが、こういった形で空想具現化したのかと思われます  
ちなみに今話は番外編ではありませんが、華雄暴走の為何故か横文字とか使っちゃってます

以上、ETERNAL 17あまつか天使でした

~~~~~

SIDE 星

む？

何か失礼な事をしてしまった気がする…

……なかつた事にしよう！

どーも、前話で桃香様に最後の最後で台詞を取られた趙雲子龍だ

前話のあの話はどついう事かというところ…

『もし戦闘になるのならば…いや、戦闘ではなく蹂躪されるのだからな…』

まあ、つまり曹操の軍勢を相手にできない。ならば、ここを捨て戦略的撤退をしようという話だ

もちろん、桃香様や愛紗は反対したが、軍師三人（朱里と雛里と詠だ。残念ながらねねは気付かなかったようだ）と恋はその意図に気付いた

そして…

・曹操ならば、民を徒に傷付ける事はあるまい
・南西の方に蜀と呼ばれる土地があり、その太守は本当に民に圧政を強いて、自分勝手な政治を行っている

・あと太守は『なんで公孫贇って真になって人気上がったの？意味わかんない。あんな普通に地味子ちゃんなのに』とか言っていた』

と、上記のような事を私は補足説明した

まあ、最後のは私も意味わからなかったが

すると、桃香様がもの凄い勢いで蜀行きを支持しだした

そして軍師三人が細かい所を一日で煮詰め、その間に桃香と愛紗で長老さん達に話をしに行った

結果、曹操の襲撃を知って僅か4日でここを発つ事ができた

約二万人の村人達も一緒に

どうやら彼らは知らぬ曹操よりも劉備と共にいたいと思ったようだ

彼らが我々にとっての財産なのだ

必ず守っていかねばな…

~~~~~

SIDE↳曹操↳

「全軍、徐州入り完了しました」

稟がそう報告する

「」苦勞様」

そう短く労う

……おかしい

「稟、風、桂花、これをどう思うかしら？」

「……劉備達の動きが見えない事ですか？」

桂花が答える

そう、いくらなんでもあまりに愚鈍過ぎないかしら？

「ああ……きっと華琳様があまりにも美し過ぎて劉備は動くに動けないのですね……」

桂花がそんな事を言っていたが、真面目な話、あまりにもおかし過ぎる……

途中の関所にすら人がいなかった……

……

「秋蘭、春蘭、季衣はいるかしら？」

「お傍に」

「はいっ！」

「はい！」

「先行して彭城に向かいなさい

あなた達は劉備の動向を探ってもらいたいの」

「はっ！」

「はい！」

「道々の拠点の排除は、華琳にお任せしてもよろしいですか？」

「当然よ」

「御意

季衣、半刻で出る。部隊を纏めといてくれ」

「はい！」

……………季衣の台詞が同じものしかない  
可哀相ね…

後で何か美味しいものでも作ってあげましょう

「劉備軍に遭遇した場合はどうしましょうか？」



「本隊ならば、距離を置いて追尾しなさい  
……支隊ならば、粉碎すれば良いわ」

「御意！」

……劉備軍とは一度戦いたかったのだ。腕が鳴る」

「姉者、本隊とは戦うなと華琳様は仰つたのだぞ？分かってい  
るか？」

「……おお！なあ秋蘭、『腕が鳴る』とは、腕の何処が鳴るのだ？ど  
んな音がするのだ？」

「「「「「  
……………」」」」」

その場を私達の沈黙が支配する

……春蘭、あなたは少しお勉強しましょうね  
……主に空気を読む勉強をね……

~~~~~

S I D E 〱 夏侯淵 〱

妙だな……

華琳様の命により、彭城へ威力偵察に来ているのだが、人氣が全
く
ない

彭城を目の前に私達の部隊が展開しているにも関わらず、だ

いや、確かに人気はあるのだが、兵士の気配を感じない…
一体どうなっているのだ？
あまりよくない予感がするな…

「誰かおる！」

「はっ！」

「我々は一旦本隊と合流する

一部兵を監視として残し、後は我々についてこい」

「はっ！」

「あつ、おい秋蘭どうしたんだ？」

「劉備軍の様子があまりにもおかしい

普通どんなに愚鈍であれ、本城前にこれだけ兵を展開しておいて無
反応なのはありえん

一回華琳様と合流し、どうするのか聞こう

季衣、華琳様は今何処までいらっしやってる？」

「んー、ここから一里ぐらい後ろにいるみたいですよ」

「わかった。ではそこまで下がるぞ」

……
……
……

「華琳様、報告します」

「ええ」

「彭城に工作部隊を放った所、城内に人気はなかったと報告が」

私はさっききた兵士からの情報をそのまま伝える

「……そう

こちら各関所に人気はなく、兵糧もなかったわ
てつきり本城での決戦を望んでるのかと思ってたけど……」

華琳様の所も同じような感じが

「そんな！華琳様に認められた英傑が逃亡だなんて……」

稟がそう言うが、起きてしまったのだからこればかりはしょうがない

今は劉備達が何処に逃げたか……

「風はどう思うかしら？」

「……ぐー」

………寝てる

「……風、起きなさい」

「……おお」

「で、風？あなたの所感は？」

「んー、劉備さん達の逃亡先ですか？

……多分なのですが………」

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

今俺達の目の前には関羽を先頭に劉備軍がいる

どうも、お引越しのようだが…

「よ、関羽！久しぶりだな」

まあ、挨拶は大事ですよ

「孔融か

すまないが、今は急いでいるんだ」

おや？関羽さん余裕ない表情ツスね？  
何かあったのか？

「ああ〜！孔融さんだ！」

……この声は…

「こんな時まで私の白蓮を追ってきたのかな？それともまた愛紗ちゃんを誑かそうとしたのかな？かな？」

黒桃香様ご降臨……

「はわわ……もしかしてあなたが桃香様の言っていた孔融さんでしゅか？」

「あわわ……誰でしゅか？」

……なんか小動物まで降臨したぞ？

「俺は孔融文學。よろしく

で、なんか切羽詰まってるみたいだな？どうしたんだ？」

「あわわ……わ、私は鳳統土元でしゅ」

「はわわ……わ、私は諸葛亮孔明でしゅ」

……癒し系だ……

恋並の癒し系がここにいるぞ……

「あ、あの、実は……」

そして諸葛亮が説明してくれた

今曹操に追われていて、益州にある蜀という土地に逃げる途中だという事

ここまでの経緯を教えてもらった

途中、劉備が何か言っていたがそれどころではなかった

「そうか……」

なあ、殿は俺達に任せてくれないか？」

月達を預けた劉備達がピンチなら、月達も当然ピンチだ  
なら、手を貸さないワケにはいかないだろう

というか、俺が月達を助けたいんだから理屈じゃねえな……

「」「」「……え？」「」「」

その場で話を聞いていた皆が俺を見る

………そんなに変な事言ったか？

第31話（後書き）

そつだ！次はナナシの恥ずかしいセリフ集をやるう！

……いや、多分まだやらないッスけど

### 第32話（前書き）

ようやくテンション落ち着いた作者です

最近積みラノベと積みゲーが多い作者です

それでも頑張っていきたいと思っている作者です



## 第32話

~~~~~

SIDE 曹操

劉備も愚者ではなかったようね

まさか蜀に逃げるとはね…

まあ、この曹孟徳から逃げきれればの話だけど…

さつき先行部隊として、秋蘭、春蘭、霞、季衣を出した
出した命令は

『劉備軍の足止め』

これで劉備軍に追い付くのは天のみが知る、と…

……………あの時風が言ったのは…

『北は曹操、南は孫策、東は海

ならば西の荊州あたりが無難かと思いましたが、そこですと魏と国境を挟んですぐですので、一時凌ぎにしかならないと

だから、ちよつと遠いですが、内乱が示唆されている蜀に行くのではないかと』

つまり、内乱の混乱に興じて蜀入り、そのまま成都を押さえ、拠点を盤石にするという計画なんでしょうね

劉備……無能なだけのヤンデレではないよね

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

劉備軍の皆は俺が曹操軍迎撃に協力するって言ったら、かなり驚いてた

「そ、そんな事で白蓮ちゃんの事を許してもらえなくても思ってるんですか!？」

「劉備、今真面目な話だから邪魔すんな」

「…なっ!？」

自分でも中々に怖い声が出たと思う

なんていったって、今回は月達の命がかかってる  
ここで劉備と遊んでいる時間はないのだ

「私達は助かるが……」

関羽が齒切れ悪く言う  
どうやら理由がわからないらしい

「べつ、別にあんた達の為じゃないんだからねっ！？月達の為なんだからっ！？かつ、勘違いしないでよねっ！？しっ、しかたなく殿やるだけなんだからねっ！？」

……正直に月達の為とか答えるのがなんとなく恥ずかしくて、ついツンデレ口調になってしまった

ただ、関羽はこっちの心情を読み取ったのか

「……………恩にきる

今殿の部隊は恋と鈴々と星がだ。月達は行列の中程にいる」

関羽、良くできた子！

じゃあ、月達にちよっち挨拶しよっと

……  
……  
……

行列の先頭から中程まできた所で月達を発見した……

……したんだが、なんと月、詠、華雄はメイド服だった！！

それに見とれていると、華雄が俺と孔融隊を見付けたようだ

俺は手を振っていると、月と詠もこちらに気付き、月はこっちに走

つてきて…

「おっ？月、久しぶり…っ！？」

馬に乗っているはずの俺にダイブし、馬から落とされた

「！？！？」

ななしは、こんらんしている

「ゆ、ゆゆ月さん！！！！？」

「ナナシさん…会いたかった…」

どうやら再会の抱擁のようだ

「ごらーっ！！月に何やってんのよっ！！」

「ふっ…」

月に続いて詠と華雄もこっちにきた

「孔融様、我々は先に殿にいきます

……………少しはゆっくりしても構いませんので…ボソッ

亮に耳打ちされる

……………たつく…気い使い過ぎなんだよ…

「元気だったか、月」

~~~~~

SIDE 亮

月さんは孔融様にとって特別な女性
ならば、少しは時間を作ってあげたい

そう思う事に何らおかしい事はないでしょう

さて、先に殿の方々に事情を説明しますか…

………

………

…

殿には三人の武将の方がいた

多分彼女達が殿を任された武将で間違いないのだろう

「失礼します

私は孔融様直属の孔融隊長代理の羽延といます

ここが殿の部隊でよろしいでしょうか？」

そして挨拶と同時に頭を下げるのも忘れない

これも孔融様に教わった事だ。他の隊員も頭を下げる

すると、頭の上からどこかで聞いた事のあるような声が聞こえてきた

「おや？お主は伯珪殿の所でナナシ殿の私兵になった者ではないか？」

声の方を見れば、趙雲様がいらっしやった

「趙雲様？」

「おお、覚えていたか」

「忘れるわけがありません

あの時、趙雲様と共に孔融様が幽州に来てくださったからこそ今の私があるのですから」

「そうかそうか〜！

ところで、ナナシ殿は何処にいるのだ？」

「まだ列の中程ではないでしょうか」

多分まだ月様達といるのではないのでしょうか？

「……………はっ！？」

そつえば何故主達がここに？」

……………今更ですか…

「先程偶偶この団体を発見し、そこに孔融様が見知った顔を見付け、何をしているのか事情を聞いた所、曹操に追われているとの事

孔融様が月様を助ける為にと殿を手伝う事に「

「それは心強い！」

「して、趙雲様そちらのお二人は？」

「鈴々は張飛なのだ！」

「……………呂布」

「なんとっ！！！」

彼女達がああ張翼徳と呂奉先…

「失礼しました

改めてまして、私は羽延と言います

趙雲様とは幽州にて顔見知りになりました

今は孔融様と共にいます」

遅れながら自己紹介をする

「おー、お兄ちゃんは孔融お兄ちゃんの知り合いなのかー」

「……………ナナシまだ？」

どうやら孔融様とも知り合いのようだ

なんて顔の広い方なんだ

しかも呂布様に至っては真名も交換している様子

その後しばらく私達は他愛もない話で時間を潰した
まあ、話題は専ら孔融様についてだが

「申し上げます！」

と、多分曹操軍に放っていただろう斥候が報告にきた

「後方より砂塵を確認

夏侯の旗が二つ、張、許の牙門旗を確認しました」

「どちらとの接触までどのぐらいだ？」

「おそらく約二刻後には……」

思ったよりも曹操軍の進撃が早いですな…

孔融様はまだですか!?

まだイチャついているのですか!?

と、流石に遅い孔融様に若干のイラつきを感じていると、

「悪い！待たせたなっ！」

なんかやたらニコニコした孔融様が到着した

~~~~~

SIDE ～ ナナシ…



……いや、メイド服の月に抱き着かれながらメイド服の詠に罵倒され、メイド服の華雄にその様子を微笑まれるっつー、なんかシュールな状態で、流石にそろそろ殿に行かないといけないから、月にどうしたら離してくれるか聞いたら……

「へう……じゃあ、耳元で……『愛してる』って囁いて、接吻してください……」

……それを二十回して欲しいです」

とか目茶苦茶恥ずかしい事を言われた

まあ、したけどな！

だって、前世含めてこんな美少女にこんな事言われた事なかったんだから仕方ないだろ？

いや、言う度に真っ赤になる月はめっちゃ可愛かったけど！  
その度にメイド服の詠に（以下略

んで、ようやく今殿の部隊のトコまできたんよ

「悪い！待たせたなっ！」

「孔融様、遅いです」

亮に怒られた……

まあ、俺が悪いんだが

「ホントに悪い！」

んで、星達が殿か？」

「うむ」

しかし…再会の挨拶より先に仕事の話とは…」

「しゃーないだろ？時間ないんじゃないの？」

「お兄ちゃんが遅いからなのだー！」

張飛にも怒られた…

しかもまた俺が悪いし…

「……まあ、いいや」

星、関羽の所に行つてくんねえか？」

「……？」

「殿に兵を割き過ぎたら、今度はお前等が蜀入りする時の戦闘で勝てねえだろ？」

「ふむ、確かにそうだな」

しかし、何故私なのだ…？」

えっ…？

なんとなくなんだが、そんな事言える空気じゃないっばい？

「や、星を信用してるからだよ」

星なら最小限の兵数でも最大限の成果を得られると思ったんだが、違つたか？」

これで納得してくれるか…？

「つまりナナシ殿は私に将来の相手としても信頼していると？  
そういう事ならば、ナナシ殿の指示に従おう」

そう言うと星は自分の部隊を引き連れて、関羽達の下に向かった

……………アレ？なんか変な勘違いっていうか、解釈してね？

……………まあ、気にしたらきつと負けなんだろう

「……………で、今どんな状況なん？」

さて、気を取り直して頑張りますか……………

第32話(後書き)

……また月イベントを作ってしまった……orz

いつになったら恋ルート入れるというのだ……

### 第33話(前書き)

お気に入り400件突破!!!!!!

これも読者の皆さんのお陰です！

より一層精進していくので、これからますますしくお願ひします！

### 第33話

状況はこうだ

見えた牙門旗は夏侯が二つ、張、許の四つ

恐らく本隊ではなく、先行部隊だろう

約一刻程で接触予定…

……でもまあ、

「接触しても手は出されねえと思うぞ?」

俺がそう言つと、その場にいた皆が首を傾げた

……ねね、お前一応文官だろ…

「じゃあ、一個問題

曹操の持つ一番の武器は?」

どうせ接触まで気を張る必要もないんだ

だったら、この時間で曹操の強さの秘訣を知ってもらってもいいだろう

……そしてその弱点もね

「クルクル姉ちゃんの武器はあの鎌じゃないのか?」

張飛が一番早く答える

…でも残念、その武器じゃないんだよね

「合ってるけど、違うよ

俺が今言った武器ってのは『武を競う武器』じゃなくて『その人の強さの秘訣』みたいなものだよ

まあ、もっと砕いて言うなら『その人の売り』だね」

「つまり、クルクル姉ちゃんの強さの秘訣って事なのか？」

「うん、そのまんまだね」

まだ首を傾げる張飛と……ねね

……お前はそろそろいい加減わかれよ……

「……………っ！……………霸道」

恋が何かに気付いたらしく、解答を言う

「はい！恋正解

では、続けてもう一個問題

曹操の霸道の意味を答えよ

多分これは逃げるかどうかの時の判断材料になったんじゃないかな？」

「……………はっ！？ねねは分かったのでs……」

「分かったのだ！クルクル姉ちゃんなら町の人を徒に傷付けないっ

て、朱里とかも言ってたのだ！」

「なっ！？ねねが最初に分かったのですぞ！？鈴々はズルしたのです！」

……まあ、ねね憐れとしか…

「まあまあ

つまり曹操の目指す霸道つてのは、人の風評とかを大事にするワケよ」

「「「……………?」「」

今度は二人仲良く首を傾げる張飛とねね

なんでそれが強さの秘訣に繋がるかわからない様子

「……………良い事すると人が集まる」

ボソツと恋が言う

「「?……………あつ、ああ（おお）〜!」「」

それでようやく二人も理解する

「つまり良い風評なら、自然と人はその太守の下に行きたがるし、その逆も然り

んで、その風評を一番に考えてる曹操さんが、もしここで無防備な町人を抱えている俺等に攻撃をしたらどうなるでしょうか？」



「「「……………」」」

流石に皆俺の言いたい事がわかったようだ

「だから多少なら大丈夫なワケ

まあ、それでも後続の憂いは断たないといけないわけだけど」

「でも、それなら何処で迎撃したらいいのだ？」

張飛は言う……………」

…が、それは俺が聞きたい

なんせこちとら未だに、この大陸の土地とか地名には疎いんだ

「よし、そこで若干空気となってる亮君、何か意見はあるかね？

具体的には迎撃に向いた場所とか迎撃に向いた場所とか」

「つまり私を試しているのですね？

このぐらいできなければ、孔融隊長代理の肩書きは名乗れないぞ、と

わかりました。私に任せて下さい」

あるえ〜？

俺わかんないから丸投げしただけなんだけどな〜？

なんか少し良心が痛んだり？

「では、僭越ながら私の意見を言わせて頂きますと…

この先二刻程の所に長坂と呼ばれる橋があります

そこならば橋の前後どちらでも迎撃に向いているかと…

どうでしょうか、孔融様？」

……えっ？なんで俺に聞いてくるの？つーか最終決定権俺ツスカ？

……しかし成る程、橋か…

橋なら確かに迎撃に向くな…

最悪、俺等孔融隊のみで橋前で迎撃、橋落とすで劉備達には追い付けねえだろ

「まあ、そうだな

とりあえず布陣の例として、俺等孔融隊のみで橋前で迎撃、橋落とすってのもできるしな」

「……………（フルフル）

…………… ナナシ危ない」

「そうなのだ！そんなのお兄ちゃんが危ないではないか！」

「むむむ…そんなカツコイイ役割はやらせませんぞ」

三人共心配してくれる

……まあ、一人だけ心配つつーか妬み的な感じがしたが…

「まあ、今のは一例だよ

後は橋の後に待機して、橋渡ってる所を弓兵に射るとか」

「ねねはそれに賛成なのです！」

間髪入れずにねねが後者の案を支持する

卑怯万歳ツスカ…

「三人はどう思う?」

俺は亮、恋、張飛に聞く

「……………いい」

「流石は孔融様!そんな外道な手段は普通は使わない!  
でも、そこに痺れる憧れるっ!!」

「鈴々もそれで良いと思うのだ」

……………亮、お前すっかり変わっちゃまったな…  
色んな意味で…

「じゃあ、基本方針はそれで  
後は俺が合図したら全体反転するって事で」

……………まあ、ピッタリくっつかれたら弓で射るなんてできないんだが  
な…

俺はもしそうなった場合に備えて他のパターンもシミュレーション  
する事にした

~~~~~

SIDE 夏侯淵

「申し上げます！
前方に砂塵を発見！

旗は立てていないのでわかりませんが、劉備軍で間違いないかと思われます」

「わかった」

斥候の報告を受け、この後に取るべき行動を考える

誰がいるかはわからないが、まずは殿の部隊を削ぐしかない

だが、華琳様の覇道の為ここで衝突するのは決してやってはならない

「なあ、淵ちゃん？」

「ん？どうした霞」

だらけきつた声で霞が呼ぶ

「多分まだ劉備軍は動かへんと思うで」

……？

「どついつ事だ？」

「つまり、迎撃してくるならそれなりの場所を選ぶって事や
確かこの先に長坂つちゅー橋がある
迎撃するならそこや」

「向こうもこっちと同じって事や」

「……ああ、なるほどな」

つまり劉備も町人達の事を第一に考える為、へたな場所で戦闘して一般人に被害は出せない、と

「ならば、その時が勝負か……」

くくくくく

S I D E 〱 ナナシ 〱

「申し上げます！」

「後ろから砂塵だろ？
こっちも確認した」

「孔融様、どうなさいますか？」

「どうもごうもない

さっき言った通り、橋渡つて迎撃する
奴やつさんも同じ考えだろうしね」

そう言つて後方を親指で指す

さて、今列の半分程が橋を渡っている
丁度月達らへんか？

「じゃあ、一丁暴れますか…」

俺は後方の砂塵を見詰めて言う

恐らくあと半刻あれば全員渡りきるだろう

その後は防衛戦

時間稼ぎできれば勝つ

………はあ、俺ホントにこの世界きてからこんな戦闘ばっかだよ

第33話（後書き）

そうだ！

これを記念して一刀君を壊した番外編をやろう！

……番外編ばっかな作品だな……

第34話(前書き)

三国志の地名とか土地勘的なものについて勉強しようかと思った今日この頃……

まあ、嘘ですけど！(笑)

第34話

つー事で今皆橋渡ったトコ

ただし、俺と孔融隊、恋と張飛は橋を渡ってはいない

「全体、反転！」

俺の合図で各部隊が反転する

「牙門旗を掲げよ！」

孔融隊がそれぞれの牙門旗を掲げる

立ち上がる牙門旗は『張』『呂』『孔』の三つ

……だが、それぞれの旗の意味する名は誰もが知ってる猛将…

ならば負ける道理などあるまい

~~~~~

SIDE 霞

「牙門旗を確認しました」

予想通り橋渡って反転したで

……ん？

橋の前にまだ兵がいる？

あんまり良い予感がせえへんな…

「牙門旗の印はっ!？」

「はっ!

『張』『呂』『孔』であります」

「恋かつ!？」

いや〜、嬉しいわ〜

虎牢以来やな〜

「……霞よ、喜んではいられないぞ」

「淵ちゃん、恋とやるのはウチやで？」

邪魔したらシバくで？」

「……いや、そういう事じゃなくてだな…」

あつ、ああ…そゆ事が

「もちろん本気でいくから心配すんなって

目的だつてちゃんとわかっとするさかい」

「……旗をよく見てみる」

ん？

なんか淵ちゃんの空気が重い？

ウチはもう肉眼で見えるようになった牙門旗を確認した…

……して、さっきよりさらに笑顔が強くなった

「ナナシか！？ナナシなのかつ！？」

「それしか考えられまい

しかも橋の後ろでは弓兵が弓を準備している

恐らく橋を渡ろうとすればアレの餌食になるな」

「ええやん、ええやん

そんならどうでもええやんか！」

それよりも今ウチは、ナナシと恋のどっちと戦るか考えなあかんねん

はあ〜どっちと戦ろうかな〜

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

今俺の前には夏侯姉妹、許緒、そして霞がいる…

「よお、霞

お前は魏に行ったんだな」

「そういうナナシは今は劉備軍にいるんやないか」

「んにゃ。ちやうねん

ここに居るのはたまたまよ

ここで敵対してるのは月の為」

どうせ月っつってわかるのは霞だけだろう

「月っ！？月は今劉備軍に居るのかっ！？」

「詳しく知りたいなら、恋から聞きな

恋、っー事で霞の相手頼むよ」

「……………(コクッ)」

「で、夏侯姉妹のお二人さんは俺が相手してやるよ

あつ、一応言っておくが、橋の向こうには弓兵が弓構えて待ってるから、渡りたいなら覚悟するよつに」

そうやって釘を刺す

ちなみに橋の前には孔融隊が控えている

彼我の兵数差は10倍以上…

敵兵は約五万、こちらは約四千…

この兵数は俺が星に指示した

どちらにしろ、魏の兵数に勝てないのなら下手に兵数増やして刺激したくなかった

…………でも、

将同士なら俺等でも十分魏に対抗できるだろうとも俺は思った
なら、こっちの有利な舞台に引つ張り出すのが戦場の常

つゝ事で、一般兵の動きをまず封じる

「全身から矢を生やしたいってんなら、別に俺は止めねえけどなア
？」

まあ、それ以前に孔融隊を突破できるならな

今孔融隊員は、恐らく恋でも一撃では勝てないだろう

まあ、二撃目きて終わるけど

それでも恋相手に一合持つんだから、その辺の一般兵には遅れをと
らんだろ

「孔融、私達は劉備軍の本隊に用がある
通してはくれないか？」

夏侯淵は聞いてくる

多分今いる魏の兵達の中で俺の強さを理解しているのは、霞と夏侯
淵だけだろう
だからこそ、できれば俺と戦闘はしたくない
そんな感じだろう

「却下

俺にも引けない理由ってのがあるんだよ」

「……そうか

霞、呂布を任せる。手加減なんかするんじゃないぞ
季衣、張飛の相手を。お前の方が強いと証明してやれ
姉者は私と一緒に孔融を
一般兵は後ろに下がっている」

夏侯淵はそう指示した

指示したが、こっちがそれに合わせる必要は全くない

……んー、この中で一番弱いのは許緒かな？

「亮っ！こっちこい」

「お呼びですか？」

「うをつ！？」

真後ろにいたし…

心臓に悪いやつぢゃな…

「お前に許緒の相手を頼みたい
作戦は『いのちをだいに』だ
頼むぞ？」

「お任せ下さい」

「張飛、恋、二人で霞を頼む

二人掛かりなんだから無傷で捕まえるぐらいやれよ？」

亮がどれだけ持つかはわからんが、許緒相手ならそこそこ持つだろう

そしたらその時間に霞と夏侯姉妹を潰せばいい

……まあ、それが理想だけど、そう簡単にいかないのが現実ってものなんだよね

「よし、曹操本隊が到着するまでにここ片付けて橋渡るぞ！」

「おうなのだ！」

「……………（コクッ）」

「御意」

じゃあ、いきますか……

~~~~~

SIDE 夏侯惇

「なっ！？あいつ秋蘭の指示した通りの組み合わせじゃないぞ！」

「姉者、向こうには向こうのやりたい事があるのだから気にするな」

生意気な奴だ！

……北郷並に生意気だ！

というか、季衣に一般兵を当てるなど何考えているのだ？  
ありえん……

「季衣！そんな一般兵なんぞ、さっさと片付けて、張飛をぶちのめせ！」

「……姉者よ、それでは結局孔融の言った通りの組み合わせだぞ……」

「そんな事知らん！」

季衣が舐められているのだぞ！？  
許せん！」

~~~~~

SIDE 〱 亮 〱

今私は許緒という者と対峙している

力や速さはきつとあちらが上だろう

だが、回避能力や捌きの技術はこちらが上……

そして私は勝つのが目的ではない

『いのちをだいじに』

孔融様からの作戦だ

これを守っていればいい

「来い！許緒！」

亮VS許緒の戦闘が始まった…

~~~~~

SIDE〜恋〜

恋は鈴々と一緒に霞とやる……

「じゃあ、こんな形なんは不本意なんやけど……恋、張飛、いくで  
！」

「……………来い」

「いくのだ！」

こちらでも恋&張飛VS霞の戦闘が始まった…

~~~~~

SIDE ナナシ

なんだかんだで、こっちの思惑通りの組み合わせになってくれた
ラッキーなのかな？

「じゃあ、俺等もやるか…」

かかってこいよ、夏侯惇、夏侯淵……」

「無論だ！いつかの借り、今ここで返してやる！

覚悟しろ、孔融！」

「姉者、援護は任せてくれ

……孔融、私も洛陽での借り、ここで返させてもらおう」

「悪いな、そいつはもう返品期限は過ぎてんだ
つー事で、そいつは持ち帰ってくんない」

俺も夏侯姉妹との戦闘が始まった

第34話(後書き)

そういえば、勢いで三国志繋がりの三極姫とやらを予約した作者

……まあ、ハズレでもいいですね？

第35話（前書き）

総合アクセス数、70万突破！

お気に入り登録、400件突破！

総合評価、1000突破……はしていません
もう少しですね…（苦笑）

これも読者皆さんが応援してくれたお陰です！

本当にありがとうございます！

誤字脱字、設定のミス、矛盾点等、まだまだ未熟な作者ですが、これからもよろしく願います！

では、本編どうぞ！

第35話

~~~~~

SIDE 許緒

もー！なんなんだよ、こいつ！

さっきから攻撃はしてこないし、ボクの攻撃は全部逸らすし！

「お前はボクと戦う気あるの！？」

「ある」

とか、こんなやり取りもすでに四回目だし…

…もうこいつ嫌い…

べじちから亮は問題無いようだ

~~~~~

SIDE 霞

くっ……強い……

っーか、いくら強い奴との戦闘が楽しくても、限度っちゅーもんがあるわっ！

恋だけが相手でもウチのが分が悪いつちゅーのに、張飛まで一緒に相手にするとか楽しむ余裕なんかない……っ！？

「ちよっ…、恋！？」

今急に攻撃速くなったで？まだそんなに速くなるんかいなっ！？」

しかも、斬撃はさらに重くなってる……っ

「……………ナナシがこっち見てたから」

若干……いや、結構頬を朱に染めて言う恋……

「ははあ〜ん？恋れんが恋こいかいな？

ええやん、ええやんか！」

いや〜、恋にもそんな相手ができたか〜

……まあ、相手は一人しかいないだろうけど……っちゅーか、ナナシって言うってたやんか……

「ウチもそういう相手欲しくなってきたな〜

なあなあ、ウチが勝ったらナナシ、魏に来ないかな〜？」

「……………（フルフル）」

……あけない」

「うーん……あっ、もしかしてサラシの姉ちゃんは孔融お兄ちゃんが好きなのか？」

「……………っ！?!？」

なっ、ななななな何言ってるんよ!?!ウチ別にそんなんやあらへんし?」

まあ、まだ一刀に身体は許してせえへんけど、だからといってナナシにっつのは……………ブツブツ

こっちはいつの間にかガールズトークになっていた!

まあ、一応時間稼ぎはできてるからいいのか……………?

~~~~~

SIDE 〳 夏侯惇

「避けんじゃない!」

「ふざけんなっ!？」

地面陥没する攻撃なんか避けるしかねえじゃねえか!」

こいつさっきからこればっかりだ!

秋蘭も援護してくれているが、その全部を刃も何もついていないただの棒で叩き落としている

「大体なんだ、そんなただの棒なんて使いおつて！  
背中の大剣は飾りか！？」

「そのただの棒に悪戦苦闘してるのはドコの誰だよ……」

呆れ混じりにそんな事を言う孔融

バカな私だって流石にあの棒がただの棒でない事ぐらいわかる  
だが、そんな事でこの魏武の大剣が負けていい理由にはならない！

今こいつを倒すには……

「秋蘭！私がいなくなった後、華琳様を支えるんだぞ！」

「なっ！？あつ、姉者！何を言っているんだ！」

「今こいつを倒さないと、ここを突破できない！」

私一人の命でそれが叶うなら本望だ！

……いくぞ孔融！我が死力を尽くした一撃、受けてみよ！」

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ 〱

「……………いくぞ孔融！我が死力を尽くした一撃、受けてみよ！」

どうやら夏侯惇は捨て身で俺と相打つらしい

……………くだらねえ

何が曹操の為だよ……

てめえが死んだら、その曹操が悲しむんじゃないのかよ……

それに一刀だって悲しむだろう

「……………こいよ」

こいつには教えなきゃなんねえみたいだな……

てめえの命の重さってやつを

俺が朧月を仕舞い、紅蓮を構えた時、夏侯惇が俺に近接してきた

「はあ~~~~っ！！！！！」

恐らく夏侯惇の渾身の一撃に紅蓮を合わせ、七星餓狼を弾く

確かに、力強く、気持ちの入った一撃だったが、こちらの手応えは十分だ

魏武の大剣の得物は大きな放物線を描き、夏侯惇の遙か後方……夏侯淵の近くに落ちた

「姉者ーっ！！！」

夏侯淵がこちらに走ってくる

……だが、距離がある

「当然こうなるのも覚悟の上だろ？夏侯惇」

俺は七星餓狼を飛ばし、そのまま夏侯惇の足をかけ、俯せに押し倒し、背中を足で押さえた状態で問う

「無論」

即答した

潔いこつた

……だが、それが俺には許せなく、紅蓮を真っ直ぐ突き落とた……

「あつ、姉者あああゝっ！……！」

「んなつ！？」

「ナナシ！？惇ちゃん！？」

「春蘭様！？」

夏侯淵の叫びに霞、許緒が戦闘を止めてこちらに注目した

そして何が起こったのかを悟り、それぞれ似たニュアンスの言葉を発する

「慌てんなバカ

殺してなんかいねえよ」

そう、俺は『紅蓮を真っ直ぐ突き落とした』が、夏侯惇には当てて

いない

夏侯惇の顔ギリギリのトコに『紅蓮は真っ直ぐ突き刺さって』いた

……………にしても、こいつ…

死ぬ覚悟があると言った時からずっと肩越しに俺を睨み続けていやる…

それも現在進行形で、だ

大した精神力です事…

「あつ、姉者あ……………」

夏侯惇が生きてると知って、夏侯淵は安堵し、そのまま膝から崩れ落ちた

「さて、夏侯惇？俺がお前を殺さなかった理由がわかるか？」

「はんっ！そんなの貴様が殺す度胸がないからだろう？」

この状況でこれだけの口がきけるとは…

「それもあるが、俺はお前に言っておかないといけない事があつてな……………」

そう言いながら、俺は夏侯惇を仰向けにして、頬をひっぱたいだ

「っ……………！？」

最初は意味がわからなかった夏侯惇も、頬に熱を感じ、何をされたかを理解した時、ようやく頬に痛みを感じた

俺はその夏侯惇の襟元を掴み、怒鳴りつけた

「てめえ、何命を粗末にしてやがる！？てめえが命張ってどうにかなるとでも思ってたのか？ああ？

ふざけんじゃねえぞ！てめえはな、今までその手で殺してきた人間の分も生きる義務があんだよ！

そんな人間がこんなトコで簡単に捨て身になってんじゃねえよ！

俺達は何の為に生きてる？考えた事あるか？

俺はな、死なない為に生きてるんだよ。その為に時に動物も狩った。

植物も食らった。何人もの人を殺した。だから俺はその散っていった命の為に今を精一杯生きてる

後ろ指さされようと、誰に何と言われようと、這いつくばってでも生きてやる！

お前はどうか？そんな事考えた事はあったか？自分の為に散っていった命の為に生きようとしたか？ああ、どうなんだよ！？」

俺はここまで一気に言いきった

なんか同じ事を繰り返したかもしれないけど、とりあえず言いきった

俺の剣幕に押されたのか、押し倒されていた時の、あの鋭い眼光は無く、目はあちこちに泳いでいた

今ここにいるのは魏武の大剣ではなく、（多分？）年相応の小さな小さな少女だった……

「それによ……」

俺は夏侯淵の方を見て、本来まだ到着していないはずの少女を見付け、その到着の早さに少し驚き、そして笑みを浮かべた

俺は夏侯惇の方を向き、声のトーンを落とし、一番言いたかった事を言った

「お前が死んだら、あいつら目茶苦茶悲しむじゃねえか」

そう言っつて、顎をしゃくる

それにつられ振り向いた夏侯惇は今度こそ涙を流し、夏侯淵と……曹操のいる所に走って行った……

「……………ナナシ？」

恋が霞達の事を目線で問い掛けてきた

「邪魔だから曹操んトコ戻らせて」

「……………(コクッ)」

恋が何かを霞に言っつと、霞と許緒は戻って行った

……………さて、俺は曹操さんになんて言い訳しましょうかね

(ナナシは絶対、曹操に何かしら言われると思っているようだ)

……………じゃあ、何故あんなお節介したの？)

(うっせ、天使^{あまつが})

俺だってイラッてきてやったんだよ…
若干後悔も反省もしているよ)

(そんなナナシ君も悪くはないかも?)

(うっせ)

第35話（後書き）

今回はちょっとぴりシビアス（シビア+シリアス）だったかな？

まあ、ナナシの熱い言葉に近いものを作者は原作プレイ中に感じた
ワケですよ

ではでは、また〜

第36話(前書き)

忘年会&新年会の誘いがきたぜ! やっほーい! / (*・・・)(**

.....金さえあればね... orz

第36話

曹操が夏侯惇達に何か言っている

多分さっきの捨て身になった一件とかについてだろう

…まあ、ドコから見ていたかはわからないが…

話が終わったのか、曹操はこちらを………つーか、俺をガン見して夏侯姉妹を連れて俺の所までやってきた

「さっきは春蘭が世話になったわね」

「なんの事ざんしょ？」

とぼけてみる

まあ、無駄だけど

「……はあ。つーか、ドコから見てた？」

「秋蘭の隣だよ」

………こんにゃろ、とぼけてんじゃねえよ…

「……くすくす。冗談よ

貴方が春蘭をひっぱたいだ所からね」

って事は俺の恥ずかしいセリフ全部聞かれてたっ!？

……っーか、そんなに近くなら気付けど俺……

「……で？あんたはまだ劉備を追うのか？」

「無理ね

今回は徐州を手に入れただけで十分よ」

「…その言葉の信頼性は？」

「曹孟徳の魂に誓って」

言葉とは裏腹に俺を見る目はハンターのそれだ……

まあ、劉備軍に手を出さないのは本当らしいから恋達には行ってもらうか

「恋、張飛、お前等兵纏めて本隊の所戻っていいぞ

どつやら曹操さんは今はお前等よりも俺に用事があるみたいだしよ
「？」

言葉の後半は曹操の方を向いて言った

「……………気をつけて」

「お兄ちゃんありがとうなのだ！」

「おっー！」

そして二人は橋を渡って、ねねに事情を説明して行ってしまった

「で、俺に何の用だ？」

~~~~~

SIDE〜曹操〜

「で、俺に何の用だ？」

「私……」

「却下」

……

「私まだ何も言ってないのだけど？」

「どーせ、仲間になれとかそんな事だろ？」

「そんなん却下だよ」

「……そう」

「でも私は諦めないから」

「……自由」

「ところで、貴方はこれから急ぎかしら？……そうでないなら風達が会

いたがつてるわよ?」

凧達なら孔融を魏に呼び込めるかもしれないしね……

「んー、凧達か?」

久しぶりだし、俺も会いたいかな?……」

「じゃあ、決て……」

「でも、今回は止めとくわ」

またセリフを中断させられた……

「……なんでかしら?」

流石にそろそろ私の堪忍袋も切れそうよ?

「んー、凧達に誘われたらコロッツと魏に入っちゃいそうだからね」

それが目的なのよ

「つーか、そんな事よりそっちのお二人さんも俺に用事あるんじゃないの?」

そうね

まずは春蘭達の用事を終わらせた後にまた……

「そうね

でも、繰り返し言うけど私はまだ諦めていないからね」

「はいはい」

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

曹操しつけーっ！

天の御遣いいるんだから俺いなくても十分じゃねえか…

「な、なあ、孔融？」

そんな（心の中で）曹操に文句を言っていると、夏侯惇（？）が声をかけてきた

……えっ！？マジあの夏侯惇？

「さ、さっきはすまなかった！」

しかもいきなり謝られた

えっ？なんで？

「や、やゝ、なんで自分謝られてるんですかね〜？」

「私はバカだから今まで何も考えず、目の前の敵を倒す事しかしてこなかった

それに華琳様や秋蘭達の事も自分がどれだけ想われているかも考え
なかった

それが責様……孔融のお陰でよくわかった」

??

つまりどゆ事？

「つまり姉者は責殿に謝罪と謝礼をしたい、という事だ」

「んー、俺のあの言葉に対してって事？」

「う、うむ」

つてもな〜

俺そんなに大層な事言った覚えはないし、俺の主観100%なセリフ
だし…

「それについては私からも何かしたいと思ってるわよ？

なんせ私の大切な春蘭の命を救ってくれたのだから」

救ったつっつか、奪わなかったただけだけど…

「んー、じゃあ、貸し二つって事でいいよ

何かしらの時に返してくれればいいから」

何故二つかって？

夏侯惇と曹操の分って事で

曹操はなんか思案しているのか、ちょっと難しい顔していたが、俺
はそろそろ江東に向かいたかったのでお暇しようと、声をかけた

「じゃ、つー事で……ボソッ」

小声で

だってまた構われたくないし

「待って」

……今度は何ですか…

「これから貴方達は何処に行くのかしら？」

「別に曹操さんには関係ないッスよ……」

「気になるじゃない

あの孔融文學がこれから何処に向かうのか」

めんどくせえ…

「江東だよ」

「江東？孫策にでも会いに行くのかしら？」

わかってんじゃねえかよ…

「まあな

士官するかどうかはまた別問題だけどな」

「あら？本当に？」

少し嫉妬するわね」

白々しい…

「じゃー！」

もう相手すんのめんどいからそそくさ行く事にした

「あつ、そつだ曹操？言い忘れた事あつたわ」

これだけは言っておかないとな

「あら、何かしら？」

「前に言った事覚えてるか？」

『一対一の状況がなくても無理矢理作ってなんとかする』
つてやつだ

俺は今回十倍以上の兵力差をひっくり返した

つまりアレは別にホラでも何でもなく、ホントに何とかできるって
事だ

これで俺がお前んトコ入ったら、魏の一人勝ちになるのも領けんだ
ろ？

以上、俺の強さの証明終了

亮！いくぞ！」

そつ一気に言つて曹操達と別れた………というより逃げた

……江東にいる孫策を目指して…


~~~~~

SIDE 曹操

孔融……

最後の最後であんな事を……

あれはつまり私に対する挑戦ね……？

『俺がお前の覇道に立ち塞がってやるから、何とか乗り越えてみせろ！』

多分、こんな感じね

いい度胸ね……

……ふふふっ

絶対に私は覇道を極めてみせるわ！

首を洗って待っていなさい、孔融文挙！

曹操はどうやら孔融の最後の余計な一言で、さらにやる気を出したようだ！

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

ブルブル…

「うをつ!?!?」

「孔融様? どうなさいました?」

「あつ、いや、何でもない」

今なんかめつちや悪寒きたぞ?

「はあ、そうですね」

多分曹操だな

つて事は変な勘違いしてんだろつな…

『俺がお前の霸道に立ち塞がってやるから、何とか乗り越えてみせろ!』

とか、こんな感じ

………はあ

俺はそんなオラオラ系じゃないっつーの…

第36話（後書き）

ようやく次で呉に行くぜ…

まだ呉に土官するかは決めてないけどな！

……俺はドコにナナシを持っていきたいのだろうか……（泣）

第37話(前書き)

連続投稿記録ならず！

残念！

つてかキャラ動かすの大変過ぎ……

第37話

つゝ事で、江東に到着したぜ！

えっ？手抜き？もつと道中の描写を語れ？

そんなに大した事なかったぞ？

立ち寄った町で、孫策達と孫策派の農民が協力してサクラ一揆を起こして、何もわかってない袁術が孫策達にその鎮圧を頼んで、一揆と孫策達に挟まれて詰んだつてのを聞いたぐらい

な、あんま大した事ないだろ？

えっ？そこんとこ詳しく？

まあ、とりあえず孫策達呉は独立して、ようやく家族一緒になったつて事

まあ、んな事はどーでもいいじゃないか

俺これから用事あるんだから

………

………

…

「たのもー」

はい、という事で今俺は孫策達、呉の将がいるつー城に来ています
え？なんでこんなトコに来てるのかって？
そりゃ孫策に会いに来たからに決まってんじゃない

「なんだ貴様は？」

警備の兵が俺達孔融隊を訝しげに見てきた

「人に名前をきく時はまず自分から名乗るものだって教わらなかったか？」

「貴様、無礼な奴だ……」

だが、貴様の言う事も一理ある

俺の「……」

「俺の名前は孔融

別にお前の名前には興味ないから、とりあえず誰か將に俺の名前伝えてきてちょ」

あつ、噛んだ……

「……………貴様……………」

あつ、もしかして名乗りたかったのか？

「じゃあ、甲乙さんでいいよ

甲乙さん、將の誰かに俺の名前伝えてきてよ」

「きつ、貴様あつ……」

あつ、キレた
だって思ったより長旅で疲れてたんだから、このぐらいしょうがないよ？ね？

「どうしたのじゃ？騒々しい」

あつ、なんか出てきた

「こ、黄蓋様！？」

い、いえ、この無礼な輩が将の皆様にご会いと宣いまして……」

おつ？なんか偉い奴っぽい…？

「ほう……」

お主名前は何という？」

はあ……

この城の人間は揃いも揃ってこんなんばっかか…

「人に名前をきく時はまず自分から名乗るものだって教わらなかつたか？」

とりあえずさつきと同じ事を言った

「お？おお…」

それはすまなかつた

儂の名は黄蓋。字を公覆という
して、お主の名はなんという？」

「俺の名は孔融。字は文挙

先程は無礼な物言い失礼した

自分の今後の身の振りの為に勝手ながら、呉の将……できれば孫策殿にお目を通して頂くべく推参した次第」

俺はできる限り丁寧な物言いをした

えっ？俺だってこのぐらい言えるよ？

「ほう……」

お主が孔融か……」

値踏みするような目を向けられる

オイコラ、あんまりいい気分しねえぞ？

「ああ、いや、すまん……」

策殿に会いたいのだろ？儂が案内しよう」

ありゃ？意外にあっさり？

「ありがとう

亮！？ちよっち待機ヨロ

多少なら自由行動も許可する」

「御意」

亮に指示出して、心置きなく孫策に会える……かな？

「さて、黄蓋さん？よろしくお願いします」

「うむ」

……

……

…

そして俺は黄蓋さんに連れられて、孫策がいるらしい玉座の間に来た…

「あら〜？」

……えっ！？もしかして孔融！？」

玉座の間に入った途端にそんな声が聞こえてきた

「そういう貴女は孫策さんではありませんか」

「覚えててくれたのね
嬉しいわ〜」

「…ええ…まあ」

そりゃ、あんだだけ殺気バリバリの初邂逅なら印象バツチリでしょうよ……
もちろん悪い意味で

「……ふーん」

孫策にも舐めるように観察される

「オイコラ、あんまりいい気分しねえぞ？」

あつ、やべっ…

今度は口に出ちった…

「きつ、貴様！よくも姉様にそんな口を…っ！」

……あつ、孫権いたんだ…

空気だったわ…めんご

「ああ？孫策が先に失礼な態度とったからだろ？多少の事ぐらい流せよ…

……後、甘寧？気持ちはわからんでもないが、ちょっとぐらい抑える？

じゃないと、勘違いして暴れ回るぞ？」

陰から殺気飛ばしてきてる甘寧に釘を刺す

「……ちっ」

舌打ちしましたよ！？

「……はあ

で、孫策？少しお前と話したいんだが？」

「それは二人つきりで、って事かしら？」

「んなっ！？そんなの認めるわけないじゃない！」

おーおー、孫権そんな言葉遣いできるのね
てつきりお堅い言葉遣いしかできないものと思ってましたよ

「つつても、あんまり人に聞かれたくないかな……
もしなんなら両手両足縛ってでもいいよ？」

別に何もする気ないしね

「……………ふーん、別にいいわ
悪いけど皆外してくれる？」

「し、しかし姉様！」

孫権も強情だね

「おい孫権？」

お前少しは空気読めよ

「……………キツー！」

わあーい！

睨まれたよ……

「わあーった、わあーったよ
じゃあ、この場で言うよ……」

正直あんまり人数いると嫌なんだけどな……

「じゃあ、孫策、あんたにこれから三つ質問をする
あんたはこの質問に嘘偽り無く答えてくれ」

「ええ」

即答してくれる孫策
嬉しいこった

「じゃあ、まず一つ

今のこの世をどう思う?」

「別にどうとも

私はただ呉の民と共に有れば満足よ」

「他国に攻められたら?」

「迎え撃つだけよ」

「……………二つ目

孫策伯符、お前の目指す道の先にあるのは?」

「孫呉の未来」

……………こいつ

「じゃあ、最後の質問だ

……………今日の下着の色は?」

さっきまでと同じトーンで俺は言った

ちなみにこの質問の意味はない

喋ってる内に質問が二つだったのに気付いたが、今更撤回できずに

テキスト言ったら、これだった

「下着なんて着けてないわよ」

孫策もさつきまでと同じトーンでそんな爆弾を投下した

この質問をした時、例外を除き周りの面々は石化した

「ウンよ」

そりゃそうだろうよ……

「なっ、ななななんだ、貴様っ!!」

あっ、孫権石化解除してる

「蓮華、いいじゃない

彼、凄く面白いじゃない」

あっ、ウケた

「あ……いや、まあ、失礼しました

まあ、とりあえず最初の二つの質問で、貴女の大体大まかな人物像を掴めました」

「へえ……どんな感じに？」

「孫権と同様に俺が仕えてもいいと言える人物」

孫策は最初ポカンとした顔をし、そして笑顔になってこう言った

「じゃあ、孔融文學は孫呉に仕えてくれるのかしら？」

それに俺は答えた……

「一応そのつもりでここに来ました」

ってね

第37話（後書き）

呉のキャラ空気になったの多過ぎ……

次ではちゃんと動くはずなんで、それで許してください……

第38話(前書き)

書く事ねえー！

あつ、SIDE、くはナナシの呼び方とかそんな感じッス
真名だったり、じゃなかったりするのこそういうワケッス

第38話

~~~~~

SIDE 孫権

「私は反対です！」

孔融を呉に加わえると姉様が決めて、今遠出していない亞莎と穩を除き全員が玉座の間にいる

その中で私は先の発言をした

「私も蓮華様に賛成です」

思春も賛成してくれる

「ほら！思春も反対なんですよ！」

私は姉様にそう言ったが

「って言ってもね……」

孔融が呉に来てくれれば、他国に対しての牽制にもなってくれるのよ？」

「それだけじゃ意味ないではないですか！  
実際に戦闘できなければ……！」

そうよ！

牽制だけが仕事なら、攻められた時に何もできないじゃない！

~~~~~

SIDE 孫策

「……はあ

ねえ、蓮華？貴女、孔融の強さ覚えてないの？」

個人的にも会った事あるんじゃないか？

それに洛陽でのアレも知ってるでしょうに……

「そ、それは……

たまたまです！きつとたまたま偶然上手く立ち回れたんです！」

また目茶苦茶言うわね……

どれだけ孔融嫌いなのよ？

「ええそうよ！

思春の本気ならきつと……」

蓮華がそう言ってる間、玉座の間には重い沈黙に包まれていた

そろそろ止めないとマズイわね……

「ちょっと蓮華お姉ちゃん！
それは孔融に失礼だよ！」

だが、シャオが先に止めてくれた

「シャオは黙ってて……」

「……うるせえよ」

そしてとうとう孔融が口を開いた……

~~~~~

SIDE ～ ナナシ～

ああ……こいつらめんどくせえな……

「……うるせえよ」

ここまで言われちゃあ、流石の俺も我慢できねえよ

キレちゃダメだ……キレちゃダメだ……

……世界が平和でありますように

(おれ ば?)

(ちげえって

つか、しゃしゃり出てくんなって)

「おい孫権?

てめえ今たまたまだの偶然だの言いやがったが、てめえの信頼して  
る甘寧や孫策はたまたまとか偶然で捌かれる程温い攻撃だったと思  
ってんのか?」

「……………くっ」

「『くっ』じゃねえよ

思ってるのかどうなのかきいてんだよ」

「ちよ、ちよつと孔融?

私は別に構わないからそんなに殺気出さなくても……」

「あんたの為とかじゃねえよ

俺は自分の武がたまたまとかで流されたのが許せねえだけだよ  
お前も武人ならわかるだろ、黄蓋?」

言葉後半は黄蓋に向かって言う

流石に自分の戦闘スキルを偶然等と言われるのは我慢ならねえよ

「……………確かにそれはな」

「甘寧、あんたはどうなんだ?」

「……………」

……だんまりかよ

「まあ、そこはもういいよ

孫策？この場にいる将で一番強いのは誰？

俺が手合わせして見せてやるよ」

「はい！はいはい！なら、私さ…」

そう言つと孫策が勢いよく手を挙げたが、黒髪メガネに止められた

「雪蓮、ダメに決まってるだろう」

「ぶーぶー、めーりんのケチー」

「なあ、メガネさん

俺も戦るなら孫策と戦りたいんだが…？」

「貴様、冥琳にまでそのような口をっ！」

「だって俺孫策、孫権、黄蓋、甘寧しか名前知らないし」

まだお互い自己紹介する前に孫権が反対って喚き出したし

「そついえばそうだったな

私の名は周瑜。よろしく」

と、黒髪メガネさん改め周瑜さん

「シャオの名前は孫尚香

シャオって呼んでね」

さっき孫権を止めてたちびっ子

……つか、シャオって真名じゃないのか？

「私は周泰といます  
では、また」

いつの間にか現れた黒髪のちびっ子が挨拶（？）してまた何処かに消える

……忍者なのか？

「これでここにいる将は全員終わったわよ」

次は俺の番ですね、わかります

「ああ、悪いな

多分皆知ってると思うが、一応名乗るな

俺の名前は孔融。今日は一応呉に士官するつもりでここに来た

まあ、若干一名反対の奴がいるが、とりあえずよろしく」

まあ、これが呉の将とのファーストコンタクトだったわけだ

~~~~~

S I D E 〱 甘寧 〱

蓮華様は奴の事を嫌っている

まあ、第一印象がアレならば仕方ない事だろう

私は蓮華様に従おう

……だが、今回はできれば孔融には呉に来て欲しいのが本音だ

孔融の武はそれ程までに惜しいものだ…

実際に武を切り結んだからこそわかるが、あの強さは異常だ

アレはもはや個人で何とかなるようなものではない

それが向こうから呉に来るといふのだ

ならば素直に受け入れた方が孫呉の、蓮華様の為になるはずだ…

……それでも私は蓮華様に従うがな

どうやら皆中庭へ移動するようだ

多分雪蓮様と孔融の手合わせだろう

できればこれを見て蓮華様も賛成してくれると良いのだが……

〱〱〱〱〱〱〱〱〱

S I D E 〱 ナナシ 〱

はい

つー事で今中庭にて孫策さんとの手合わせが決まりました

現在中庭の中央にて孫策と向かい合い、戦闘開始の合図を待っているトコであります

まあ、俺は武器無しの手を使わないっつーハンデ有りだけど

とりあえずそれで孫策に勝てば呉の将になれるらしい

だが、ただ勝てばいいのではなく、孫権を納得させるような内容でなければならぬ

……………めんどくせえ……

「ねえ、思春？」

孔融って、これで勝てるぐらい強いのか？」

この場で唯一俺との戦闘経験がある孫策と甘寧、この内の甘寧に孫尚香が問う

「……………ああ

少なくともこの状態でも、呉の将全員でやらねば勝てんたろうな」

……………めっちゃ過大評価されとる！？

「へえ……

じゃあ、雪蓮姉様は勝てないのか？」

「なに、今回は策殿が勝つ事が目的ではない
孔融の戦闘能力を皆で見るのが目的じゃ」

横から黄蓋さんが話に加わる

最初、いきなり目の前に現れた自分には圧倒的に足りない二つの双
丘に目を奪われた孫尚香だったが、すぐに視線を中庭の中央に戻す
まるで俺の一挙一動を逃さないかのように……

「では、始めるぞ？」

両者構えて……始めっ！」

そして、孫権の合図によって俺の呉入りテスト（のようなもの）は
始まった……

~~~~~

S I D E 孫策

「では、始めるぞ？」

両者構えて……始めっ！」

蓮華の開始の合図と同時に私は駆け出していた

瞬きの間に間合いを詰め、南海霸王を奮つ

もちろんこれは模擬刀の南海霸王だ

でも、当たり所が悪ければケガぐらいはする

それでも私は孔融目掛けて全力で振った  
洛陽での孔融を見れば、これぐらい簡単に避けると踏んでの事だ  
そして孔融は予想通りに避けた  
そのまま追撃の体勢に入る前にもう一回剣を奮う…  
ただし、これは孔融の体勢を崩す為の布石  
本命はこの後の蹴り…っ！

「はあああーっ！もらったーっ！！」

そして私の狙い通りに、片足が地面着いただけの体勢を崩した所へ  
渾身の蹴りを放つ

完璧な間合いで、完璧な速さだった…

……だが、孔融にはそれすら読まれていたのか…？それともこの  
ぐらい孔融にとって隙でも何でもなかったのか…？

右足だけが地面に着いていて、尚且つ身体が前のめりになっている  
状態で、地面を右足でのみ蹴り、蹴りのさらに上をいくように跳び、  
私の後ろに着地する

その瞬間背後に悪寒を覚え、振り向くよりも先に前に転がりながら  
距離を置く

距離を置いてから振り向くと、自分が立っていた地面が割れていた

……

……冗談じゃないわよ

「んー、よく避けたね？」

まあ、避けなくてもあんまり痛みとかなかったと思うよ？  
体勢崩して押さえ込みで終了ってだけだったけど」

あの威力で？

バカじゃないの？

まあ、私じゃなくて地面を狙った技なんでしょうけど…

けどあんな攻撃もできるのね……

俄然戦る気が湧いてきちゃった

うふふっ……

「さあて、まだまだいくわよ……」

そしてこれからって時に孔融が……

「あつ、待って」

あれ……っ？

「何よ、折角燃えてきたトコなのに……」

「……孫権気絶してる」

……えっ？

第38話（後書き）

穂と亞莎がいないのはなんとなくで、意味はありません

ってか、キャラとかどうですかね？

読者の皆さんから見合ってますか？

第39話(前書き)

やゝ、最近めっきり二日に1話ペースになってる作者ッス

俺ガンバレ!

### 第39話

孫策との戦闘途中で孫権が気絶して戦闘は中断

現在意識を取り戻した孫権を交え、再び玉座の間に集まった俺達

そして俺と孫策はなんで孫権が倒れたのか、責任の擦り付けをして  
いた

「やっぱり孫策の殺気に当てられたんじゃない？」

と、俺が言えば…

「孔融が地面破壊したからじゃない？」

孫策がこう言う

さっきから話が進まない……

もう埒が明かない！

…と、言う事で、

「孫権（蓮華）！さあ、どっちのせい？」

~~~~~

SIDE↳孫権↳

気絶してしまった……

しかも原因が……ここ、孔融の武を目の前で見て、か、感激してしまっただけ……

……とても皆に言えない

しかも今姉様と孔融がどっちのせいかと揉めている

どちらかといえば孔融のせいなのだが、言うわけにはいかないし……

「孫権（蓮華）！ さあ、どっちのせい？」「

そしてとうとう矛先がこっちにきた……

「えっ、あついや……あの……」

考えの纏まっていない私はしどろもどろになる

……が、そこで思わぬ助け舟が出た

「まあ、俺としては孫権の倒れた理由なんて、どうでもいいんだけど

それよりも、結局俺は合格なのか？」

「……ええ、そうね」

私にはそう言うしかなかった…

~~~~~

SIDE ナナシ

孫権から合格通知をもらい、晴れて俺は呉の将となった

「じゃあ、呉の仲間入りしたわけだから、俺の事はナナシって呼んでくれ

皆の真名は各々が預けたい時に預けてくれればいいから」

そう皆に言う

「はいはい！

シャオの真名は小蓮だよ！

シャオって呼んでね」

孫尚香……いや、シャオが一番にそう言った

「ああ、よろしくなシャオ」

だが、他の将の方々は流石にそこまでは、俺の事を信用してないよ  
うだ

まあ、妥当っちゃ妥当だな

「で、孫策？」



俺はこれから何すればいいんだ？」

「そうね〜…」

じゃあ、私とて…」

「その前に孔融は何ができるのだ？」

孫策がなんかくくでもない事を言おうとしたのを、周瑜が遮って俺の能力について問う

「まあ、皆も知ってると思うが、武官は余裕でできる」

俺は、周りが頷いたのを見て続ける

「後はまあ……文官って程じゃないが、頭はそこそこ良いぞ？知識もそれなりにあるつもりだ」

とりあえず、この時代にはない文化、戦闘の知識なら売る程あるからな

「ほっ……」

では、この案件についてどう思う？」

と、周瑜が竹書を持ち出す

内容は………

「………なあ？ホントにこんなんくるのか？」

「実際にいるのだから、くるのだらう」

と、溜息混じりに周瑜は言う

「だからって、

『最近新しい料理がなくて困っています  
何か新しい献立はないのでしょうか？』

って、バカじゃないのか？

客なら、そんなん町の店に言えばいい事だろうが  
料理人なら、自分で考える！」

「まあ、そう言ってやるな

で、天下の孔融殿ならどうする？」

メシだろ？

んー…、この時代に無く、且つこの時代でも作れる……

……アレ？結構難しくね？

「んー、まあ、とりあえず料理人に新しいメニュー……献立を教えるか  
な？」

「えっ！？孔融ってば料理できるの？」

孫策が驚きの声を上げる

……俺そんなに料理できないように見える？

「まあ、そこそこは？」

「なんで疑問形なのよ……」

へえ〜…じゃあ、料理美味しかったら、私真名預けちゃおっかな〜」

「雪蓮っ！」

孫策がそんなとんちんかんな事を言い出し、周瑜が嗜める

「だって、私は最初っから真名預けていいと思ってたのに、冥琳が視線でダメって言うてくるんだもん」

「当たり前だ！」

んー、あんまりそーゆー事は本人前にして言うてほしくないかな？

「はぁ……で、孔融よ

具体的にはどうするつもりなのだ？」

「んー、じゃあ、まずは俺の料理を皆に食ってもらおうか」

~~~~~

S I D E 〱 シャオ

ナナシってば、強くて頭も良くて、もうすごいカッコイイ……！！！！
一目惚れかも……キヤーツノノ

んで、今そのナナシが私の為に料理してくれるって事で、今皆で厨房に来ていま〜す

ホントはシャオもお手伝いしたかったんだけど、ナナシが、

『初めての共同作業は閨でな』

って言ってもうきゅーっ

ナナシ素敵〜

愛してる〜

(上記はシャオの完全な暴走です
実際は、

『今から作る料理は、お前にはわからんと思うから待ってる
ちゃんとお前用のも何かしら作ってやるから』

と、ナナシは言っておりました

以上、皆のアイドル 天使あまつかでしたっ)

~~~~~

SIDE〜黄蓋〜

儂も策殿と同じで、もう真名を預けても良いのじゃが……

まあ、ここは大人の女性という事で、静観しようかの……

それに……どうやら料理をするみたいだし

さて、孔融よ

お主はこの黄蓋を満足させられるかな？

~~~~~

SIDE 周瑜

自分で料理すると言い出した事だが、こつも手際良く材料を用意してくるとは……

まあ、流石に買い出しなんかは、土地勘のある者が買いに行ったが……

だが、今厨房での孔融の動きは、素人ではないだろう事を容易に思わせる動きだ

この様子なら、簡単な料理でもそこそこの味が期待できるだろう

さて、どんな料理が出てくるのか今から楽しみになってきたな……

~~~~~

S I D E 〱 甘寧 〱

蓮華様に変なモノを食べさせたら殺す

……………と思っていたが、案外までもそんなものができそうだ

しかし、油断はしない

少しでも変な食材を使えば、その瞬間殺す

〱〱〱〱〱〱〱〱

S I D E 〱 孫権 〱

私だって料理とは火力と愛情が命という事ぐらい知っているわ

……………という事は孔融は誰に愛情を込めて作っているの？

姉様？シャオ？それとも他の誰か？

……………もしかして、私？

そ、そんな…………… / / /

〱〱〱〱〱〱〱〱

S I D E 孫策

へえ……

武力、知力、それに料理……

ホントに何でもできるのね……

どうせならお酒に合うのも作ってくれないかしら？

でも、ホントに良いわね……

シャオがお熱みただし、なんだかんだで蓮華も気になってるみたいだし、私も狙ってみようかしら？

さて、呉の将が期待とかその他色々なもんを込めた目でナナシを見詰める

ナナシは期待に応える事ができるのかっ！？

### 第39話（後書き）

孫権とかの心情描写が少ない気がする……？

同時に複数キャラ動かすのは難しいツス……



## 第40話(前書き)

今日、書き置きが20話程溜まっている夢をみた

……………現実みて少し泣いた

気を取り直して！

今日は三極姫発売日！

なんか地雷っぽい気もするが、とりあえずプレイするぜえい！

## 第40話

俺は今、呉の将皆から注目される中、この時代に無く、且つ、この時代で作れる料理というかなりの難易度の料理を作っている！

……………マジ勘弁してくれよ……

まあ、一応いくつか候補はあるんだがな

とりあえず海が近くにあるから、刺身とか海鮮丼とかが候補の一つだが、これらは鮮度を保つのが問題ある  
その辺は追い追いかけるって事で、今回はパス

他には同じ刺身系列って事で、馬刺しとかか？

なんか気分的につつか、とりあえず今回はパスしたいな……

つー事で、今回選んだのは……………

~~~~~

SIDE〜周泰〜

どうも

前話の最後に一人だけ視点がなかった周泰です

……いいんですけどね？私は隠密ですから……

でも、今ちよつと良い事がありました！

なんと、孔融殿が私に一番に味見をさせてくれるそうです！

「はいよ、周泰」

わあーい！とつとつ届きましたよ！さあ、どんな料理なんでしょう
か？

と、いざ料理の前に座った私は首を捻りました
一緒に周りに集まってきた将の皆さんも同じです

「……孔融殿？これは何でしょうか？」

目の前にあるのは白いご飯と汁物、そして野菜の上に焼いた肉（？）
でした

「それは豚の生姜焼き定食って言うんだぜ？」

ぶたの、しょうがやきていしょく？

「この肉は豚なの？」

横から見ていた雪蓮様が問いかけます

「じゃあ、それ以外何が豚なのか教えてくれよ」

はあ……

「じゃあ、これは何の汁物なのでしょうか？
何やら凄く濁っているように見えるのですが…」

「それはみそ汁

ラーメンでも味噌ラーメンってあったろ？

その味噌を使った汁物

今回具には豆腐とえのきを使ってる」

はあ……

もうホントに私達の知らない料理のようです…

……ですが、先程から食欲の沸くような香りがこのお肉からしてきます

「では味見係いきます！」

まずは、このお肉を箸で掴み、口に運びます

「！？！？！？！？」

運んだ瞬間、今まで食べた事ない風味が口一杯に広がりました

「明命！？大丈夫！？」

その表情を雪蓮様が苦悶の表情と勘違いしたのか、心配してくれます

……しかし、それに対応するよりも先にしなければならぬ事があります

「孔融殿！この豚肉はどのように調理しているのですか！？」

「秘伝のタレに豚肉浸して、焼いて、皿に盛ってタレかける以上」

秘伝のタレ？

そんなもの持っていたのでしょうか？

「どこに秘伝のタレなんて持っていたの？」

と、今私の思った事をやっぱり雪蓮様が問いかけます

「……今ここで作りました！ウソついてごめんなさいです！

で、その生姜焼きを食いながらだご飯が進むから、試してみ？」

言われるがままに肉を食べ、そしてご飯を食べる

「これは……ご飯が進む味ですね！」

肉の旨味が白いご飯と上手く合い、どんどん箸が進む

「あつっ！！」

明命、シャオの分も残しておきなさいよー！

あつ！？そうでしたっ！

こんなに自分一人ばかりが食べるなんて……

「シャオ、お前にはちゃんと用意してあっから、ちよっち待ってる」

「はいはい！私？私？」

「孫策……お前もか……」

「じゃあ、お前にも何か作ってやるからちよっち待ってる」

「はあ……」

「この短時間で他にも作っていたとは……」

「孔融殿凄過ぎです……」

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

さて、ホントはお新香とか作りたかったんだが、塩が貴重なのでパスした

シャオにはデザート用の果物の蜂蜜漬け出した

孫策には……どうしよっか？

どうせツマミ系だろ？

うーん……

……

……

：

「お待たせ

じゃあ、孫策にはこれね」

俺は迷った末に天ぷらもどきを作った

天粉が無いので、小麦粉を水で溶かし、天粉もどきを作る

中華フライパンに油を溜めて、大体180〜200 を目安に温めて野菜とかを適当に切って、天粉もどきを着けて揚げた

あとは天つゆがないから、代わりに醤油をお湯で薄めて、大根おろし添えて終了

一応味見はしたからそこまで酷い出来ではない

ちゃんとした天ぷらを知ってる人なら、違和感バリバリだと思うが、まあ、これはこんな料理と考えれば、いけるはずだ……多分

そして孫策の試食タイムだ

「これはなんていう料理なの？」

「天ぷら（笑）」

孫策の質問に対し、俺はテキトーな回答する

まあ、それっぽい味にはなってるから間違いではあるまい

「ふーん……」

どうやって食べるのかしら？」

「そのつゆに大根おろしを入れて、それに浸けて食べばいい」

「じゃあ、頂くわ」

そう言つて、孫策は南瓜の天ぷらを摘み、つゆに浸け、口にする

そして一言…

「料理人シエフを呼べっ!!」

こう叫んだ……

~~~~~

SIDE 孫権

姉様やシャオには作つて、私には無いの!?
なんでよっ!

「ねえ、思春?

私、孔融にここまで嫌われるような事したかしら?」

初対面の時の態度のせい?

孔融が呉に入るのを最後まで反対していたから?
それとも武についてあんな事言つたから?

わからないわ……

「孔融は死ぬべきだと思います」

「いや、そこまでは思ってないけど……」

本当に嫌われているのかしら？

そんな事を考え悶々と悩む孫権

しかし、実際は孫権が空気過ぎてナナシに忘れられていたからだ！

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

む？

何やら視線感じる

俺はその視線の元を探り……

「ひいつ!?!」

悲鳴を上げた

皆が生姜焼きや天ぷら、果物の蜂蜜漬けに夢中になってる中、その二人は離れた所で俺をじっと見ていた

方や殺気を隠そうとせず

方や何かを訴えるかのような目で

……あっ！

その時、ようやく俺はその視線の意味を理解した

孫権達の分……ってか、孫権の事忘れてた…

やべえ……どうしよう…

だし巻き卵でも作って機嫌をとるか？

うっし、じゃあ、そうしよう！

という事で再び厨房に向かい、だし巻き卵を作る

今までで一番気合いと根性と（料理を作るという意味で）愛情を込めて……

……

……

…

そして出来上がってすぐに孫権達に持って行った

「遅れてスマン

これ、だし巻き卵なんだが…  
遅れた分、他の料理より（料理を作るという意味で）愛情込めた  
ぜひ、食ってくれ」

俺は謝りながら、だし巻き卵を勧めた

「なっ、ななななんて事を言うんだ… / / /  
そ、そんな（お前の事を想って）愛情込めたなんて… / / /」

ん？孫権テンパってる？

ああ、いや、アレは遅くなった事を怒り過ぎて逆に自分にはこない  
と思つてた所に自分にもきて驚いてるのか

……それってテンパってるんじゃない？

まあ、そんな事はいいや

「さあ、食つて感想聞かせてくれ」

「かつ、感想（これで俺とずっと一緒にいてくれるか）？」

別に感想ぐらいでそんなテンパる事ないだろうに

しかし、この愛情やら感想の相違のせいで今後の二人の関係がやや  
こしくなるのだが、それはもうちょっと先のお話



## 第40話（後書き）

料理については作者がこんな感じだろうと思い、こうなりました

多分実際はもっと複雑かと思います

まあ、これはこんなもんだ

と、思ってもらえると助かります

いつもこんな駄文に付き合って頂き、ありがとうございます

## 第41話（前書き）

遅くなって申し訳ありません！！

察しの良い方はわかるでしょうが、三極姫を購入後、ずっとやってました

申し訳ありませんでした！

しかも序盤孔融文學に勝てずに何回かリセットしました

なんか色々すみませんでした！

## 第41話

あの料理を奮った日の翌日…

俺は呉の将達と真名を交換した

それはいい

別に嫌な事ではないし、どちらかといえば喜ばしい事だ

……でもなんで交換理由が、

『料理美味い!』

なんだ……?

もしかして呉にとって、俺の価値とは料理が殆どなのか?

これは俺泣いていいんだよね?

……まあ、それは置いといて、俺にも早速仕事ができる

『大料理試食会の開催』

『新兵の調練』

『呉将との(拒否権無し)手合わせ』

この三つだ

試食会は明々後日開催らしい

……えっ！？急過ぎじゃね？

必要な食材とかどうなの？的な話をしたら、

『町にある一般的な食事処でやるから、特別な材料は使わない様な料理にしてね』

と、雪蓮に言われた

新兵達については亮始めとした孔融隊に任せた

まあ、とりあえずこれで数ヶ月後には新兵達も使えるようになってるだろう

問題は最後の拒否権無しの手合わせだよ……

絶対雪蓮とか毎日

『ナナシ〜！手合わせしましょ』

とか言ってくるよ……



試合会に強制手合わせか……

……鬱だ……

「はあ……」

思わず溜め息が漏れる

「貴様……私との鍛練中に溜め息とは、随分と余裕だな？」

その言葉で現在、思春との手合わせ中だった事を思い出す

そして思春にはどうやらその溜め息は別の、悪い意味にとられていたようだ……

ちなみに思春と真名の交換は思ってたより、抵抗なく終わった

どうやら俺の武に対してはそのぐらいの敬意を払う価値があるらしい……俺への敬意とかは？

「えっ！？いや、違いますよ！？思春さんに言ったんじゃないツスよ！？」

だが、この態度がさらに気分を悪くさせたようだ……

「ほう……？そのふざけた態度はケンカを売っているとみていいのだな？」

俺はこのパターンを良く知ってるぞ？

これは俺の話は全く聞き入れてもらえず、相手の気の済むまでやら

てたい放題のパターンだ……

こういつ時にいつも決まって現れる女神はいずこに……？

「だんまりか？まあ、それもよからうつ…  
ならば一生喋れ」……」

「あら？思春にナナシ？」

女神三度目

キタ (。(。 ( !!

「蓮華！良く来てくれた！  
俺は心から歓迎するぞ！」

~~~~~

SIDE 蓮華

特に何かあるわけでもなく、私は城内を散歩していた

すると、中庭に出た所で金属同士のぶつかり合う……そう、武のぶ
つかり合う音が聞こえてきた……

近づいて覗いて見ると、丁度一段落ついたので、二人は何かを話している

そしてその二人は、共に呉の将の中でも抜きん出た武を持つ人物であり、私にとって色んな意味で大切な人物だった……

「あら？思春にナナシ？」

思春…

私の護衛兼相談役

幼い頃より私と共に過ごしてきた、頼れる呉将の一人

ナナシ…

呉将の一人にして、大陸一の武を持つ

そして……私に、けっ、結婚しようと言ってくれた男性……ひと／／／

）

蓮華の勝手な思い込みです

実際のナナシは料理の感想を聞いただけです

「蓮華！良く来てくれた！

俺は心から歓迎するぞ！」

えっ！？

そんなに私に会いたかったの？

「そ、そんな…… / / /
急にそんな事言われても困っちゃうじゃない…… / / /
私にだって心の準備というものが……ゴニョゴニョ」

「……？」

……あつ、そつだ！蓮華も一緒にやらないか？」

「や、やる……？」

そ、そんな……いきなり三人でなんて…… / / /
せめて最初は閨で二人つきりがいいわ……キヤー…… / / /

「何を勘違いしてクネってんのか知らんし、特に知りたいたいと思わ
んが、手合わせの事だぞ？」

……えっ？

……手合わせ？

「で、ですよね」

……やだ、私ったら何勘違いしてるんだろっ……

~~~~~

SIDE〜思春〜

蓮華様、なんで今来るのですか…？  
もう少し遅ければこやつを殺せたのだが…

まあ、これからいくらでも機会はある  
せいぜい夜道には気をつける事だな…

「……………あつ、そつだ！蓮華も一緒にやらないか？」

……………その前に蓮華様をあの男から離さなければな…

「蓮華様、実は少々相談したい事がありました…  
ここではあれですので、こちらへ…」

「えつ…！？あつ、ちよつと思春？」

私は抵抗する蓮華様を連れて城内に戻っていく

……………蓮華様、申し訳ない…

……………

S I D E 〱 ナ ナ シ 〱

なんか思春がいきなり蓮華連れてどっか行っちゃった  
手合わせ終了でいいのかな？

さて、ならどうしようかな……

……

……

…

悩んだ挙げ句、明々後日の試食会の下見をする事にした

まあ、今日は町ではどんな材料が使われているかのチェックだな

とりあえず近くにあった店に入る

「らっしやーい」

中には店主一人だけだった

今の時刻は昼時を過ぎぐらいだったが、それにしても客の何人かはいてもいい時間だった

観察してみると、ここ数時間客が来たような形跡はなかった

「注文は？」

オーダーを取りに来る店主

どうやら全て店主一人で切り盛りしているようだ

メニューに目を通し、店主に問いかける

「なあ、店主？この店にあるのって、全部コレなのか？」

「おう」

「……………だが、皆食わず嫌いで手を出そうともしないお陰で最近開いたこの店ももう畳もうかと思ってたよ……」

確かに……………

「コレは正直文化の無い人々からしたら、ありえないと思うだろう」

「もう一ついいか？」

「どうやってコレを運んだんだ？」

「いくら海に近いとはいえ、道中腐ってしまわないか？」

「ここに来るまでに所々井戸があつて、そこでコレを冷やしながらかここに運ぶ……………まあ、大体一日あればここまで運べるで、ここまできたら店の裏にある湧き水で冷やしておく……………これなら腐る事はなかったぞ」

「……………つまり道中にそこそこの温度の綺麗な水が、一定感覚であるからこそできる方法って事か……」

「店主、あんた運いいな……」

「いや、運が良いのは俺か？」

「はあ……………？」

「どうしたんだ坊主？」

「騙されたと思って、明々後日の朝までに今から言つのをここに持

ってきてくれ

そしたらここを畳む必要なんてなくなるぜ

つか、繁盛し過ぎで困るようにしてやんよ

「……………」

俺はどういう事なのかわかってない店主に説明した

明々後日の料理試食会の事、俺の思惑を……

最初はわかってなかった店主も俺の話聞いてく内に、顔を輝かせ  
てきた

「でも、それで大丈夫なのか？」

「俺に任せろよ

店主は明々後日の朝に言われたモン持ってこいって

「……………すまないな」

そして俺は店を出ようと、立ち上がった所で…

「そついえばあんた名前何ていうんだ？」

店主にそう言われた

「……………孔融文挙

これから俺の名前をよく聞く事になるだろうから、覚えとけ」

そして今度こそ俺は店を出た





## 第41話（後書き）

ああ  
…

今回は指が進まなかった…

話自体は大した事ないのに結構大変でした……

## 第42話（前書き）

更新遅れに遅れ、申し訳ございません！

言い訳ではありませんが、遅れましたのは今回の話が思った以上に難しく、そして連日バイト等で時間が取れなかった次第でございます

一応今日中にもう1話投稿する予定でございます……多分

では、本編どうぞ

## 第42話

そして試食会当日……

俺は会場となる店に行く前に注文していたブーツを取りに行った…

「店主いるかー？」

店の戸を開け、呼びかける

すると、奥から巨大な瓶を台車に乗せて店主がやってきた

「孔融様、わざわざ申し訳ないです

これが言われていた品になります」

何故いきなり様付け！？

つか、丁寧になり過ぎじゃね？

「おいおい、よしてくれよ

なんでいきなりそんな態度変えんだよ？」

「いやしかし、孔融様は話を聞けば、その武は一騎当万！かの呂布奉先をも凌ぎ、洛陽では各諸侯の武の代表を同時に相手できる程のもの！二つ名に『死神』と呼ばれ、どの諸侯も注目している

……と、一昨日付き合いのある商人から教えて頂きました」

「俺はそんなつもりで覚えとけって言ったんじゃなかったんだがな

……

まあ、いいや。とりあえず俺はもう行くわ

後からちゃんと店主も来いよ？」

俺はそう言っただけで会場に向かった

……

……

…

そして会場に到着する

そこには今日の為だけに作ったのであろう、簡単にではあるが、キッチン的なものがあり、少し離れた所に食材が置いてある台があった

……気付いているかもしれないが、あの店主が扱っていたのは『生の魚介類だ』

どうやら店主は元漁師で、よく船の上では生の魚介類を食していたらしい

そして、あの店ではそれを刺身のようにしてメニューに載せていたが、中々異文化の物は受け入れられずにいた

だが、俺は生の魚介類は人気があると踏んでいる

ただ輸送方法だけが問題だった

そしてそれが解消されたならば、俺はその『異文化』を『文化』に変えてみせよう

さあ、間もなく開催時間だ

~~~~~

SIDE)シャオ)

ぶー、ぶーぶー

最近ナナシが捕まらなくて、つーまーんーなーいー！

そりゃ、今日の為の準備で忙しいのかもしれないけど、ちょっとはシャオに構ってくれたっていいじゃないのー！

だから、今日は絶対、ぜえ〜ったいナナシの手料理食べるんだ！

という事でシャオはようやく会場に到着した

どうやら事前の告知のお陰で中々人が集まっている様子
それをペツタンコでまるで二次g:(ギロツ)…:ゲフンゲフン
それをその愛くるしい小柄な身体を活かして、人の間をすいすい進
み最前列までやってくる

「……………えっ？」

そして見たナナシの料理は想像していたものと違っていた

……………いや、確かに前に振る舞ってもらった料理もちらほら見える
だが、試食用の卓に大々的に置かれているのは大きな皿

その皿に乗ってるのは白く細い何か、その上に葉っぱ、そして何かの切り身らしきもの……

そして最後の膳を並べたナナシが試食会の開催を宣言した

「皆の者！集まってくれた事感謝する！

俺の名は孔融。字を文举という

少し前にここ呉の將に加えてもらった。よろしく！

さて、今回の試食会だが、今までにない料理を、という事で作らせてもらった」

それがあの何かの切り身？

「これは生の魚の切り身だ

食べ方はこれを醤油に浸けて食べる。それだけだ

皆には馴染みの無い食べ方だろうと思うが、これも経験だと思って挑戦してほしい！

もちろん他の料理も楽しんでくれると嬉しい

以上、長々と失礼した」

そうナナシが言った後、試食会に来ていた人々が膳に手を付け始めた

「……………はっ!？」

シャオもこうしてられない!

そしてシャオも試食している人混みの中に入っていった……

~~~~~

SIDE 蓮華

今日はナナシが今までにない料理を振る舞う日だ！  
実は楽しみで昨日はあんまり眠ってない

だが、そんなウキウキランランな蓮華が会場に到着した時には、すでにそこは料理を求める人やレシピを訊ねる人の戦争になっていた

……

「……なっ!？」

私はこの光景に思わず絶句した

「やや!？もしかして孫権様ではないですかな？」

人混みにまだ慣れてない私に試食会に来ていたお爺さんが話し掛けた  
てきた

「……ええ」

「おお!では、孫権様も孔明様の新しい料理を？」

「ええ!

……でも、これだけ人がいては大分待つのでしょうか？  
どうすれば……」

後半啖くように零す



「ならば、これをお食べ下さい  
私はもう随分食べましたので」

と、お爺さんが手に持つ膳を渡してくる

「い、いや、しかしそれではお爺さんの分が……」

しかしお爺さんはいやいや、と首を振る

「私はもう十分食べました

孫権様は今来たばかりじゃろう？」

ならば、やはり孫権様が食べるべきじゃ

「……では、戴い」

あまり断つてもお爺さんに失礼かと思い、出された膳を受け取る

そしてその膳を見て首を傾げる

「これはこのまま生で食すのか？」

「その醤油に浸けての

なんでも『刺身』とかいう料理らしいですぞ」

私はその刺身をまじまじ見詰め、いざ食べようと一切れ箸で摘んだ  
瞬間、

「おっ？なんじゃ、食べないのかえ？」

ならば、妾が食してやるぞぞ」

そう言つて八チミツのような色の髪をしたちびっ子がいきなり刺身を横取りしていった

「あっ!？」

私は何かを言う前に刺身を横取りした不届き者を見て、私は更に激昂した

「なっ!？え、袁術!! 貴様あつ!」

そこにいたのは私達孫家をバラバラにした張本人、袁術公路その人だつた……

## 第42話（後書き）

いや〜…、難産でした…

どうでしたでしょうか？

一応時話の内容は大体決まっているので、16:00までに投稿する予定であります

### 第43話（前書き）

明けましておめでとございます

今年もこの作品共々よろしく願います

さて、言い訳タイムです

実は12月31日、更新予定でしたが、バイト先から急遽昼から入ってくれと連絡を受け、昼からバイト

それで年を跨いだワケなのですが、その日のバイトの時、油缶で指をさっくり切ってしまい、縫う事に……

5日には抜糸予定なのですが、余り動かしてはいけならしく、思うように文字を打つ事ができず、またバイトのシフトがロングばかりで、なかなか時間がとれずにこんなに日にちが……

とりあえず、本編をどうぞ

## 第43話

袁術公路

孫堅文台を殺し、その娘姉妹をバラバラにした張本人  
自分の欲望に忠実かつ我が儘、おまけに身体付きも幼い、心身共に  
子供のアホっ娘

先日、孫堅の長女の孫策にクーデターを起こされ、呆気なく失脚  
その後孫策の気紛れにより、二度と現れない事を条件に供の張勳と  
共に生き長らえる

~~~~~

S I D E 蓮華

「袁術よ……よくのこのこと顔を見せられたな……」

元々姉様が許した事自体あまり間違いだと思っていたのだ
そこに約束を違えて姿を見せた袁術
これはもう殺してくれと言っているようなものだろう

「蓮華様、殺りますか？」

いつの間にか隣にやってきた思春が言う

「そ、そそそ孫権！！！！？」

そして私が誰かを認識した哀術はガタガタと震え始めた

「七乃ー！？七乃ーっ！」

張勳を必死に呼ぶが、人混みの喧騒に掻き消される

「今までの行いといつまでもこの地にいた事を恨むのだな」

そう言つて思春が武器に手をかけた時

「…っ！？」

思春の足元に包丁が飛んできた

それを後ろに飛んで避けた思春が飛んできた方面を睨みつける

そこはいつの間にか道が開け、ナナシが包丁を投げた体勢のまま立っていた……

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

急に周りが静かになり、そしてそれに比例してとある一角が騒がしくなってきた

ようやく一段落してきたのもあり、その一角に近づくと蓮華と思春がなんかちびっ子をイジメ(?)てたそれだけなら流してたかもしれないが、思春が得物に手をかけたのが見えた

流石にそれは止めねばならない

という事で俺は思春とちびっ子の間…丁度思春の足元当たりを狙い手に持っていた『何か』を投げた

……まあ、それが包丁だと気付いたのは投げた後なワケでして…

………や、やっちまった…

「おいナナシ、貴様っ！」

今何をやったのかわかっているのか？」

わかってるからこそ自己嫌悪してるのでありますよ………  
30秒前の自分をぶん殴ってやりたい…

「そうか、貴様はこいつが誰なのか知らないのだったな…」

と、思春がちびっ子を指差しながら言う

「こいつこそ蓮華様のお母君である孫堅文台様を殺し、蓮華様達姉妹をバラバラにした張本人

雪蓮様の気紛れで生かしてもらっていたが、二度と我々の目の前に現れないという条件でだ

そしてこいつはそれを破った

ここで殺されても文句は言えまい！」

つまり復讐か？

でもいくら根が深かろうと、ここには老若男女町の人に来てるんだぞ？

そんな事町の人に見せるわけはいかないだろ…

「うるせえ、甘寧興覇！」

この場で扱っていい刃物は包丁だけで、使っているのは料理人たる俺だけだ！」

……俺はまたテンパってワケワカラン事を…

だが、勢いで言った言葉でも思春をたじろがせるには十分だったらしく、思春はもちろん蓮華も二の句が告げなくなる

「つーか、復讐とかくだらねえ事してんじゃねえよ…誰得だよ…」

そこで再び畳み掛けるが、

「くだらない……？母様の敵討ちがくだらないですって……？」

どうやら『くだらない』発言は、蓮華の押しではいけないスイッチを押してしまったようだ

「だつてくだらないだろ？」

お前がここで袁術殺したとして、孫堅が還ってくるのか？  
還ってくるならやってみろよ

こねえだろ？だからくだらない、無駄な事は止めとけって」

と、今まで事の成り行きを見ていた思春が口を挟んできた



「黙れえ！！  
貴様に蓮華様の気持ちなんぞw…」

「わかるわけねえよ！

俺は蓮華じゃねえんだから当たり前だろが！

でもな、ここには老若男女集まってんだぞ？

こんなトコで平然と人殺せる人間に誰がついてくる？

ここにいる人達はそんな指導者を望んでんのか？」

「そ、それはそうだが……」

俺の言葉に再び黙る思春と蓮華

「……………」

まあ、こいつの事は俺が何とかしとくから任せてくれよ」

俺は何やら立ったまま気絶してる器用なちびっ子（袁術だっけ？）  
の頭に手を置き言った

「貴様を信用しろと？」

思春が殺気割増の目で言ってくる

「んにゃ

信用も信頼もしなくていいから、ここは俺に任せてくれ

じゃあ、ここは蓮華達に任せっからよろしく！」

そう言つと、俺は蓮華達の答えを聞く前に気絶してるちびっ子連れて  
城に戻った

~~~~~

S I D E 〱 張勳 〱

「お嬢様あゝ！何処ですかあゝ！」

もう！勝手に歩いていくから迷子になっちゃうんですよ

まあ、そんな迷子で困ってるお嬢様も可愛いんですけど

実は張勳の予想の斜め上をいく事態になっているのだが、それを知るのもう少し先の事

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

とりあえずちびっ子を俺の部屋まで連れてきた  
全く起きる気配がないから水でもぶっかけてやるつかと思っただら、  
突然目を覚ました

「ぶにゃ………？」

「起きたか？」

「ぴいーっ！？」

「……こいつ失礼じゃね？」

「落ち着け

別に取って食おうなんて思ってねえし、孫権も甘寧もいねえよ」

安心させる為に言ったんだが…

「そ、孫権とな！？ま、まさか孫策までいるのかえ！？」

「いねえよ！」

「……ホントに疲れるちびっ子だ

「七乃ー！七乃ー！」

やべえ……

こいつマジめんどくせえ……

「とりあえず少し黙れ」

ゴツンッ

「ぴいっ……！？」

拳骨かます

「簡単な質問するから、はいなら首を縦に、いいえなら首を横に振れ  
正直に答えれば悪いようにはしない  
わかったか？」

…コクッ

「お前は袁術で間違いないな？」

コクッ

「お前が孫堅文台を殺し、孫策姉妹をバラバラにしたのか？」

……コクッ

「さつき『七乃』とか叫んでいたが、それは連れか？」

コクッ

「今何処にいるかわかるか？」

フルフル

「もし殺されずに済むなら、何でもするか？」

コクコク

「じゃあ、雪蓮…孫策のトコ行くぞ」

フルフル

「これからお前の事を許してもらいに行くんだよ

そんなに怯えるなって」

「……………う、うむ」

「そついや、お前の真名は？」

「……………美羽」

「美羽か…」

俺はナナシ。よろしく」

さて、後は雪蓮のトコ行って交渉して七乃とやらを探して一段落かな？

ナナシはそう考えていたが、まだ問題は残っていた……

~~~~~

SIDE〜蓮華〜

「もう！一体どこはどうすればいいの！」

「蓮華様、落ち着いて下さい」

「ああ、もう！」

試食会会場に残された蓮華と思春

彼女達の戦い（ナナシの代わりに試食会の閉め）はこれからだった

……

第43話(後書き)

最近思うようになった

学校の授業中の方がアイデアが浮かぶ……

第44話(前書き)

いつも投稿遅くなってしまい申し訳ないツス…

突然ですが、作者は明日成人式なる行事に参加する事になっています

なんでも、二十歳になった成人と呼ばれる人々が袴やスーツ等といった正装をして、お酒を呑んで騒いで暴れるらしい……

怖い式典らしいツス……

では、本編どうぞ

第44話

玉座の間にて

俺と雪蓮、冥琳そして美羽の四人が今いるメンツ

最初玉座の間に美羽を連れてきた時、普段通りの俺にニコニコの雪蓮、頭を抱えんばかりにこめかみを押さえてる冥琳、そして脅えまくりの美羽という形だった

「で？ナナシ？」

私の記憶が確かなら今お前は新料理試食会なるものに出ている、ここにいないはずなのだが？」

そしてとりあえず全ては話を聞いてからって事で、上座に雪蓮、冥琳、下座に俺、美羽が着いてから冥琳が口を開いた

「そっちは蓮華と思春に任せた

まあ、こっちをぱっぱと終わらせても一回行くけどな」

「当たり前だ！

……………まったく…あんまり問題を増やさないでくれ…」

「それで？なんで袁術ちゃんがいるのかしら？」

ここで初めて雪蓮が口を開いた

……………ニコニコしてるのが逆に怖いッス…

「実は町で……（第43話参照）」

「端折って回想シーンを作らないの」

「……………」

「袁術ちゃんがいる理由は？」

……………めんどくせえ

なんでこんな時に限って説明以下略ができないだ……………

（それは作者が第43話の投稿遅れたからよ）

（作者って誰だよ……………

しかも俺関係なくね？）

「……………はあ

試食会中に蓮華と思春がこいつと揉めてて、しかも思春がその場で殺そうとしたから連れてきた」

それでも端折ったが、雪蓮や冥琳ならわかってくれるだろう

「あの子達町中で殺そうとしちゃったの？」

「だからこうして連れてきたんだろうが

っ！かあの二人はちゃんとその辺教育しとけて」

「そつね……………」

「で、次なんだけど……」

なんで袁術ちゃんと真名で呼び合ってるのかしら？」

なんか一番重要な事のように雪蓮が言ってきた

俺はここに来る途中に美羽に話していた事と同じ事を言った

「『袁術』は死んだ。今ここにいるのは『美羽』だ」

だから孫家と美羽の間に確執はないんだ

そんな意味を込めて雪蓮達を見る

「そんな方便が通るとでも？」

そんな意味を感じたかどうかはわからないが、冥琳がジト目で問いかけてくる

「じゃあ、逆にききますが、孫策伯符は今も尚袁術公路を殺したいですか？」

いや、もしまだ殺意があるなら、当時いくら気紛れで生かしたと言っても、今日ここに連れてきた時に首跳ねてる

違いますか？」

と、俺は雪蓮に問いかける

「正直袁術ちゃん殺したトコで母様が還ってくるワケでもないし、今そんなに袁術ちゃんを殺したいワケじゃないのよ？」

……でも、そういうのとは別にどうしても割り切れない気持ちってあるじゃない？」

今はまだ気持ちの整理ができてないから、そういうのは難しいかな……」

最後は雪蓮にしては珍しい、少し影のある悲しい笑顔だった

……そりゃそうだ

よくよく考えてみれば、俺は親の仇であり自分達の敵である『袁術公路』という人物を、全く別人の『美羽』として見てくれと言っているのだ

普通は許容できないだろう

「の、のう、孫策……？」

ここで、ただ脅え震えていた美羽が口を開く

「妾は…、孫堅を殺した事もそなた達をバラバラにした事は、今も後悔はしておらん……
でも、反省はしているのじゃ」

これが俺が美羽に言った事のもう一つで、

『どんなに言い繕ったトコで、元々これは無理を承知のお願いなんだ
だったら、自分の正直な気持ちを言え
言い訳なんていらぬから、本当の事を隠さず言ってみろ
そしたら後は俺が何とかしてやるから』

って、部屋でちゃんと言い聞かせてきた

そして今美羽は自分の正直な気持ちを雪蓮達に話している

「あの時は妾も生き残る為に必死じゃったし、今もそうじゃ…
こうして孫策達を前にしていると怖くて震えてくる…
多分孫堅も似たような気持ちじゃったんじゃない？
…でも妾はまだ死にとくない…」

美羽は震えながらも話しているが、雪蓮達はまだ無表情のまま
そりゃそうだ
まだ肝心な一言を言ってないんだから

「じゃ、じゃから……」

…「じ、じめんなさい！」

~~~~~

SIDE 雪蓮

へえ……

あの我が儘姫の袁術ちゃんが謝るなんてね…  
流石は天下の孔融文挙ってトコかしら？

ん…私もナナシ欲しくなっちゃったな  
魏にいる天の御遣いとやらは『魏の種馬』って噂だし、ナナシにも  
『呉の種馬』になってもらっちゃおうかしら（未定事項）…？

……とか、まだちょっとだけ早い事（ここで未定事項だったものが決定事項に変更された）を考えてると、

「孫策……？ダメかの……？」

何も言わない私を見て不安になったのか、袁術ちゃんがぶるぶる震えながら尋ねる

まあ、ナナシには今後しばらく私の奴隷やつてもらおう事で手打つとして…

……問題は蓮華と思春の反応よね…

チラッと冥琳を見ると、

「雪蓮の好きなように決めるといい」

だってさ

「……じゃあ、袁術ch……」

「美羽だ」

私の言葉をナナシが遮って訂正する

「……そうね…じゃあ、美羽ちゃんには一旦席を外してもらって、ナナシと三人で少しお話したい事があるの……  
誰かおる！」

「……そ、それは妾を許してくれるのかえ……？」

私の言葉にビクツとして反応した美羽ちゃんが確認してくる

「ええ、そうよ

ただその事でナナシとお話あるから、少し外してもらっわ

今から案内する所が今後の美羽ちゃんの部屋になるから覚えておいてね？」

そこまで言った所で、丁度良く案内人がきた

「悪いけど、部屋まで案内してくれる？」

場所は適当に任せるわ」

「御意」

そして案内人に連れられて玉座の間を出る所で、私は付け足すように言った

「ああ、そうそう

私の事は雪蓮でいいわよ」

私に続いて冥琳も

「私も冥琳で構わない」

~~~~~

SIDE ～ ナナシ ～

さて、最後に雪蓮達も真名を預けた所で……

「ナナシ」

「……はい」

雪蓮に名前を呼ばれ、姿勢を正す俺

「言いたい事はわかるかしら？」

「わかるようなわからないような……？」

これはホントの事

「じゃあ、はっきり言ってあげるわね……

ナナシはこれからしばらく私達の奴隷ね」

これはウソであってほしい事

「……………え？」

「まあ、今回の事は仕方ない
諦める」

冥琳がフォロー（？）入れてくれるが、納得できるはずがない

「あのお……雪蓮さん？」

奴隷ってのはいかなものでしょう？」「

「大丈夫よ

とりあえず私と冥琳だけだから」

とりあえず……………？

「それよりも蓮華達は大丈夫なの？」

「……………あ

どうやら美羽を助けた代償は思った以上に大きくなりそうだ……………

第44話（後書き）

今更ながら作品タイトルがおかしいと思った……

第45話(前書き)

こんな作品ですが、待っていた皆様！更新遅れてしまい、申し訳ございません！

しかし！できれば皆様の感想等頂けると、モチベも上がって更新速度も早くなるかと思われます！

(結局作者のせい…)

さて、では本編どうぞ

第45話

~~~~~

SIDE 蓮華

「やはり奴は殺してしまおう…」

思春が先程から同じ事を呟いている

私達は今ナナシ主催の大試食会の会場にいる

それは別におかしい事ではない

寧ろ、ナナシの料理を楽しむに於て来たのだから、いて当然である

………ただし、ここにナナシがいて、私達が試食会を楽しむ側なら、だ

私達が袁術をたまたま見付け、殺そうとした時、ナナシが現れて私達に説教し、そのまま色々押し付けて袁術を連れて何処かに行ってしまった

そこはまあいい

こんな町人がたくさんいる所で殺そうとした事は、こちらに問題があったから

今問題は……………

「孫権様、この『刺身』とはどのように調理しているのですか？」

「孫権様あーっ！この『味噌汁』の調理法を教えてください」

等々の料理の調理法についての質問だ

これはナナシがいなければ答えられない

一体ナナシはいつ帰ってくるのだ……………？

流石に蓮華達も我慢の限界のようだ！  
急げ、ナナシ！

~~~~~

SIDE 張勳

「お嬢様あーっ！」

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

今俺は急いでいた

それはもう全力で、全速力で

やがて目的の場所にて目的の二人を見付け、俺は一層足を速めた

近くまで来ると二人はどうやら質問攻めにあっているようだ

俺は人垣を掻き分け、二人の前まで行き、そして土下座をした

「二人共、本当に申し訳ございませんでした！」

それも跳んで、空中で回転する、所謂『J u m p i n g   D O G E  
Z A 』だ

ただでさえ土下座はやった方もやられた方も居た堪れない気持ちになるのだ

ここまでやれば流石に許してもらえらるだろうと、そう俺は考えていた  
だが、頭の上から聞こえてきた声は中々に現実の厳しさを教えてくれるものだった

「遅い！」

と蓮華様

「殺りますか、蓮華様」

リン…

と思春様

思わず様付けになる俺

……って、思春様得物抜いてますよね？

「や、まっ、ちょっとお待ちになってくださいっ!？」

「問答……無用っ!」

思春はこつちの話など聞くつもりがないのか、既に抜刀していた

「待て思春」

が、そこは蓮華様が収めてくれ」…

「我々先程こやつにこんな町中で得物を抜くなと言われたではないかだが、このまま許すのは私も納得できないよってナナシにはしばらく私達の言う事には逆らえない、という事にしようと思っただが……それでどうだろう?」

ってくれてねえーっ!

寧ろ悪化してる!?

っーか、蓮華様若干黒くね?

「奴隷ですか……」

思春様も奴隷なら…みたいな顔してないでください!?

そして思春は再び蓮華様の方を向き

「家畜などの方がナナシにはお似合いかと」

「……………なるほど」

思春様ーっ!?

そして蓮華様もなるほどじゃないですよっ!?

……………ああ、なんか久々（星以来か？）に酷い扱いになってきた…

「まあ、それは冗談だとしても何か申し開きはあるか？」

「…ちっ」

蓮華様は意外にあっさり普通に戻ったが、やはりまだ怒っている模様…

……………そして思春様は本気で舌打ちしてましたよね？

「いや、今回は俺が悪かった

だから、特に申し開きはないよ」

「よし、ならば死ね」

「思春!」



は、話が進まねえ……

つか、今も町人みんな注目してんのに気付いてもねえし……

「……なあ？とりあえずここでこの話するの止めね？

ほら、皆見てるしさ……？」

俺がそう言つと、ようやく二人はこの状況に気付いたらしく、そそくさと城に向かって行った

あの思春ですら、頬に朱が差して……いませんでしたね、はい

まあ、俺はまだこのシメをやらないといけないんだが……

「皆っ！待たせた！」

俺は軽く段になっている所に乗って、皆に聞こえるような大きな声で言った

「ちよつと私用で抜けてしまった

すまない！

……だが、どちらにしろそろそろお開きの時間のようだ……

皆……特に各料理店の店主には残念だろうが、それは俺も同じ事

またこのような機会がある事を切に願う

……さて、最後になってしまったが、今日俺がお披露目した『刺身』という料理についてなのだが、詳しく聞きたい人は彼に聞くといいだろう」

俺は言い終わると同時に最前列にいらつた刺身屋（仮）の店主を段の上に連れて来た

「知ってる人もいるだろうが、店主は最近この近くに店を構えたが、客足が悪く近々閉店しようと思っていたそうだが、俺の知る限り彼の店にしか『刺身』は取り扱っていないだから今後『刺身』をご要望の時は彼を訪ねるといい」

そこまで言うと店主に一言、ガンバレと言い、後の事を試食会スタッフの兵士に任せ、大急ぎで城に戻っていった…

店主のどもりながらも、一生懸命説明と質問に答えていく声をBG Mに……

~~~~~

SIDE 陸遜

今日は亞莎ちゃんで行ってた遠征からようやく帰ってきました

「久しぶりの呉の空気はいいものですね、亞莎ちゃん」

「はい！」

亞莎ちゃんも心なしか、いつもより笑顔のような気がしますし、やっぱり人間自分の家が一番という事でしょうか？

そんな春麗らな事を考えていたせいでしょうか？

十字路に差し掛かった時、曲がり角から飛び出してきた人と正面衝

突……

「っ！？…おっととと……」

…する直前にその人が身体を捻って、体勢を崩しながらも避けて……

「あだっ…！？」

…転びました

「穏様！？大丈夫ですかっ！？」

亞莎ちゃんが慌てて寄ってくる

「私は大丈夫ですけど…」

そう言いながら避けて転んだ人を見た

勢いが強かったのか、はたまた将又体勢が悪かったのか、或は両方か……

見事に『大の字』で俯せになって倒れていた

しかも、丁度水撒きした後だったのか、そこだけ地面が泥になっていて……なんとというか凄い事になっていた

「あ、あのおく…？大丈夫ですかあ…？」

流石に声をかけないわけにはいかず、声をかける

すると、ピクツと反応したかと思うとガバツと起き上がり、私達の方を向いて慌てて

「すみません！ぶつかってないですか？ケガとかしてないですか？

泥とかかかってないですか？」

と、何度も頭を下げる

私も亞莎も呆気にとられて、何も反応できなかった

「あつ、いや、私達はぶつかっても泥もかかっていませんので、大丈夫ですよ」

しばらくして私は言った

「やゝ、ホントにすみません

自分結構急いでいたもので、つい確認もせずに飛び出してしまつて……

注意一秒、怪我一生とはよく言ったものですよねゝ…ナハハゝ…」

「……………はあ
それよりも何やら急いでいたようなのですが、大丈夫なのですか？」

何やらよくわからない事を言っていたが、亞莎ちゃんの一言で顔を青ざめ（泥だらけだけど）、

「そうだったっ！！

……………ああゝ…、このお詫びはいつかしますんで、今日はここで失礼します

何かあればお手数なんですけど、雪蓮……………孫策の城まできて、『孔融に用事がある』と言っていただければ、できる範囲でお詫びさせていただけますんで！」

そう早口で言うと、孔融（というらしい？）人物は城まで走って行ってしまった

「……風のような人でしたね」

亞莎ちゃんはそう言うが、私はそれよりも『孔融』という名前が気になっていた

確か洛陽で雪蓮様や思春さん達を含めた九人の武官を相手に、大立ち回りをした人物ではなかっただろうか？

それに……

「……あつ、さっき一回雪蓮様の事真名で呼びませんでしたか？
！？」

亞莎ちゃんがそういえばって顔で言いました

そう……そして雪蓮様の真名を呼び、城にいるとも言っていましたね
……

これは面白くなりそうですね

おそらく陸遜の予想は当たるだろう

なんせ、ナナシにはもう一件出会いと、その後の受難が待っているのだから……

第45話（後書き）

いつの間にかPV1000000件&登録件数5000件&総合評価
1000pt突破！

皆様、ありがとうございます！

記念して次回は、

『ナナシの恥ずかしいセリフ特集〜君の瞳に乾杯〜』

をお送りしたいと……おっと、ナナシが来たようだ

アディオス！

番外編 ナナシの恥ずかしいセリフ集 君の瞳に乾杯1 (前書き)

最初に言っておきますが、このシリーズの番外編に出てくる原作キヤラは、本編のコピーみたいなものとして考えてください

つまり、ここで登場する原作キヤラがこの番外編で何を見て、何を知っても本編に影響及び関係はなく、平行的なものとして読んで下さい

では、どうぞ

番外編 ナナシの恥ずかしいセリフ集 君の瞳に乾杯！

天「はぁーい
皆のアイドル、天使ちゃんだよあまつか

今回はナナシの恥ずかしいセリフをプロローグから少しずつピックアップして、面白可笑しく発表していくよーっ！

で、今回の番外編は特別ゲストとして、こちらの皆さんに来てもらいました〜」

曹「魏の曹操孟徳よ

今日は孔融の恥ずかしいセリフが聞けるそうね？楽しみだわ」

惇「魏武の大剣、夏侯惇元議

今日は華琳様の護衛でここにきた

ついでに孔融の弱味を握ろうとも思う」

淵「夏侯淵妙才だ

面白い事があると聞いて華琳様に連れてきてもらった」

筍「筍イク文若よ

華琳様のいる所に筍イクあり、よ！」

楽「楽進文兼だ

今日はその…… ナナシ様に会いたくて……」

一「そして、魏のトリを飾るのは……俺、『魏の種馬』こと、天の御遣い北郷一刀だ

今日は親友の黒歴s…ゲフンゲフン…もとい！恥ずかしいセリフを聞いてできるなら弱味を握ろうかと思つて、参加させてもらったよろしく！」

呂「……………呂布奉先

……………ナナシと会つ」

董「へう……………董卓仲頼です…

ナ、ナナシさんの格好いい言葉が聞けるって聞いて……………」

賈「賈馱文和よ

ナナシのセリフなんかには興味ないけど、月が来たいつて言つから一緒に来ただけよ！」

趙「我が名は趙雲子龍

ナナシの恥ずかしいセリフとやらが聞けると聞いて、面白そうだからきた」

策「孫策伯符よ

良い酒の肴があると聞いてきたわ
つまらなかつたら、ナナシは奴隷ね」

黄「儂は黄蓋公覆

伯符殿と同様、酒の肴を求めてじゃな」

尚「シャオは孫尚香だよ

ナナシがシャオに甘い言葉を呟いてくれるって言つから、楽しみなんだ」

天「そして、今回の恥ずかしいセリフを全て喋つた孔融文挙本人の

総勢14人で送りたいと思いまーす

あつ、今日ここにきていない人は、仕事が忙しくて城に缶詰めになっ
ていまーす 残念ですなー」

孔「ふごーっ、ふごーっ!!!?」

天「ちなみにナナシには両手両足を鎖で縛って、口には猿轡をさせ
てもらってます

何故なら恥ずかしさの余りに発狂して暴れそうだから」

曹「そうね……どうせなら邪魔無しで楽しみたいものね……」

孔「ふごーっ!?!?」

策「ふごふご言ってるナナシも可愛いわね」

董「可愛い……へう……」

天「……あのおく、そろそろ先進みたいので、進んでいいですか?」

惇「うむ!進めるが良いぞ!」

淵「……姉者……」

天「はいはい!そろそろ始めますよ?」

最初は……なんと!第1話で、こっちの世界にやってきた時に私と
の会話の中になりました!

赤ん坊姿で頑張ってたセリフが、これだ!」

そう言っあまじかて天使は、ここにいる皆から見えるように巨大なテレビを

取り出し、空中に浮かべた
そして、そこに赤ん坊姿の孔融が映る……

『大事なのは名前じゃなくて、お前の中身じゃねえか』

一同『……………』

孔「（…殺してくれ……）」

策+黄「あっはっはっはっ
」

曹「ぶくく……」

天「いや、このセリフには不覚ながらこの天使^{あまつが}、胸キュンしてしまいました……
そして、この後に孔夫婦が来た時の第一声が……」

『おぎゃーっ、おぎゃーっ』

董+楽+尚「か、可愛い……」

「ぶっ……面白い（笑）」

孔「（天使と一刀殺す…）」

天「はい！では、じゃんじゃんいきましょー

……あゝ…、次もやっぱりクサイセリフですな〜

ギップルもびつくりですよ〜

では、見てみましょう！」

モニターに17才の孔融が真面目な顔で母、孔勾と話をする姿が映っていた

『最初は自分が非凡であるからなのかと思った。でも、それでは何か違う。母さんの自分を見る目にはそんな色眼鏡…自分に付いている付加価値で注いでいる愛情ではないものを感じました』

『母さんは母さんです。血の繋がっていなくても、自分の母さんに変わりないです。だから、笑ってください。自分は母さんの笑顔が好きなんですよ?』

筍+賈+一「……………えっ!?誰?」

策「ちょ…ゴメン、ナナシ

わ、私もう…ぶ、ぶぶっ…」

黄「わ、儂ももう…ぶ、ぶぶっ…」

どうやら二人共、余りの面白さに酒が呑めなくなるぐらい腹筋を使っているらしい

孔「（天使マジ殺す……）」

趙「ふむ……これが『ぎゃっぶ』というものか……」

天「次いつてみよーっ

次は第3話にて、趙雲子龍さんとの手合わせ中ですね
今回ののはどちらかといえばイタイセリフですね……」

『それに比べればこのぐらいの槍はEASY MODEだ』

孔「ふごーっ！！（それは心のセリフだろーっ！！）」

天「あー…どうやら先程のは手合わせ中に思っていた事だそうですね
口に出さないトコに悪意を感じますね」

ちなみに『EASY MODE』とは、簡単過ぎって意味ですね」

孔「ふごーっ！ふごーっ！！（これ以上！引っ掻き回すなーっ！！）」

趙「……ほう？」

ナナシ殿にとつてみれば、私の槍なんぞ『いーじーモード』ですか…
………そうですかそうですね？なんせ孔融文拳といえば大陸一の
武と言っても過言ではないでしょうから、その孔融殿にとつてみれ

ば何の官位ももらっていない私など、確かに『イージーモード』なのでしょっな……」

孔「(あ……………ヤバイ)」

趙「くっくっくっ……………」

天「あ……………趙雲さんがなんか壊れてきたので、とりあえず今回はここまでという事で

……………多分これから趙雲さんがナナシをボッコして、グダグダになると思っんで……………」

趙「フッフッフ……………」

趙「フッフッフッフ……………」

その後ナナシは縛られたまま趙雲にぶちのめされました

ちゃんちゃん

続く！

番外編 ナナシの恥ずかしいセリフ集 君の瞳に乾杯！ (後書き)

思った以上に話が進まなかった…

ホントなら第20話までの恥ずかしいセリフを投稿するはずだったのに…… — —

そして！

話の性質上、過去投稿したのを遡りながらチェックしてきたのですが、出るわ出るわ拙い文章、おかしい文章、おかしい日本語、矛盾点、そして誤字脱字等々……

ああ……、修正する時が楽しみだ…… (; ;)

ちなみに色々修正するのは作者が春休み入ってからです

第46話(前書き)

やゝ…、まあ、色々あったんですよ…

バイト、レポート、小テスト、ケータイ壊れたから機種変したら、
操作がまだ慣れずに余計遅くなり…

それでも！

この作品は完結まではしっかりもっていくんで、安心(?)して下さい！
さい！

第46話

さつきみたいなお事もあるから、俺はできるだけ急ぎ且つ、事故のないように走っていた

だが、一度起きた事が二度と起こらないという保障は何処にある？

まあ、つまりはそういう事だ

一応確認しておくが、俺は周囲に気を付けていたし、事故のないように安全走行をしていた

まわりくどくなってしまうたが、何が起こったのかというと……

またぶつかつた

言い訳するなら、あれは回避不可だった

ほら、クエストでも上位にいけばいかなり強力モンスターと回避不可な戦闘になる事だつてあるだろ？

そう、そういう事だ

安全走行で走っていた俺の横を、子供達が鬼ごっこでもしているのか走っていた

先頭の子供は後ろを見ながら走っている為、前から馬車がくるのが見えていない

もちろん俺はいくら急いでいるからといって、あの子供を助けられないという選択肢はない

よって、俺は先頭の少年まで行き、

「ほら、危ねえだろ」

首根っこを掴んで持ち上げた

最初何が起こってるのかわかってなかった少年は、クエスチョンマークを浮かべていたが、前を見た時に馬車を見付けてようやく状況がわかったようだ

「遊ぶのは結構だが、周り見て遊ばないとケガするぞ？」

それにあの馬車だつて大変な事になっちゃうかもだろ？」

と、俺は優しく諭した

少年はわかったのか、俺にぺこりと頭を下げて他の友達とどっかに行ってしまった

もちろん今度は前を向きながら

……ここまではよかったんだ

俺は子供達を見送った後馬車の従者さんに軽く手を上げ、さて今度こそ城に向かうかと振り返った瞬間……

「キヤーツ！？どいてくださあーい！！……いや！やっぱりどかないでえーっ！！受け止めてえー！むしろ私を守ってーっ！！」

彼我の距離凡そ30？程の位置で、なんかめちゃくちゃな速度で走ってくる女の人に叫ばれた……

……いや、これは無理だな

この距離でどうやって回避するんだよ…

とか考えている内に女の人は俺にぶつかり、俺はせめて（俺が）ケガしないように地面に倒れた

……だって今の俺、いくら偽零時迷子（とか言ってたよな？）だからって、ちよつとのケガが即死しかねないくらい危ないし

~~~~~

S I D E 張勳

もう何なんですか！？ありえないですよ、バカですか？バカなんですか！？何なの？死ぬの？

なんかお嬢様が呉で料理大会的な何が開催されるのを聞いてきて、食べたいとか言つて無理矢理呉に来たと思つたらはぐれちゃうし

そりゃ、最初は……

『流石はお嬢様です！命の危機があつたばかりなのに美味しいかどうかもわからない料理の為に呉に戻るなんて、命知らずにも程があります！』

とか言つちやっただけど、いざ来てみたらお嬢様は早々はぐれちゃうし、探し回つてたら孫策さん見付けて、しかも向こうも気付いて何故か凄い笑顔で追っかけてくるし！

逃げ回ってたら、小石に躓いて道の真ん中に突っ立っている男の人に突撃しちゃうし……

「不幸だーっ!」

~~~~~

SIDE 孫策

ナナシが外に駆けて行っちゃって、ヒマになったから私も町に遊びに来たら……

「……あれ？張勳じゃない？」

まだ試食会の余韻か、人の多い大通りに見覚えある帽子が見えて、それを追っかけて来て、肩を叩きながら挨拶した

「張勳 ちゃお」

一応言っておくけど、もうナナシに言った通り、美羽ちゃん達に対して思う事はないわよ？

ホントにただの挨拶のつもりだったのよ？

「えっ?……あっ!?!キヤーツ!」

「……え?ちよ、ちよっとお!?!なんで逃げるのよ?待ちなさい

「！」

でもそれを知ってるのはあの場にいた四人だけだ

だから、それを知らない張勳が逃げ出したとしても仕方ない事だろう
しかしそれを知ってか知らずか…、或いはそんな事は考えてすらお
らず、ただなんとなく追っかけてるだけなのか……

まあ、どちらにしろ二人共混乱していてそれどころではないのだろ
う……

~~~~~

S I D E 〱 ナ ナ シ 〱

俺は自分の身体にケガがないかを確認し、ぶつかってきて未だに俺  
の上で伸びている女性を押し退け、どうしてこうなったのか原因を  
探した

まあ、とりあえずこの女性は確定だとして……

でも、この女性も誰かに追われてたみたいな事を言ってたし……  
で、キョロキョロしてたら目が合った。雪蓮と

「雪蓮？なんでこんな所にいるん？」

「え〜と……張勳見付けたから、保護？してあげようと思って声か  
けたら逃げ出しちゃって……」

走って追い掛けてきたらこうなっちゃった テヘッ

「テヘッ じゃねえよ…っ！か、張勳って、こいつもしかして美羽の言ってた七乃って連れか？」

「なあ、雪蓮？こいつの真名もしかして七乃って言わないか？」

「よくわかったわね

でも、真名なんて勝手に呼んだら首チョンパよ？」

「こいつも美羽と同じ扱いにするんだ、今からは真名も何もカンケーねえよ」

と、雪蓮と話していたら、

「み、お嬢様は無事なんですかっ!？」

「うおっ!？」

気絶してたはずの張勳が目を覚まし、俺の襟首を前後左右上下にガンガン揺すった

……………気持ち悪い……………

「お嬢様はっ!?!お嬢様は今何処にっ!?!」

「シェイク！超俺シェイクされてるから！  
っ！か、ブレイク！ブレイクブレイク！」

俺はあまりに激しくシェイクされた為、声を出す事ができず、され

るがまだだった

「ああ〜……!!お嬢様が……お嬢様成分が足りない……  
さあ、さあさあさあ!!お嬢様は何処につ!?!」

……さ、酸素が……

「ちょ、ちょっと張勳!?そんなに揺るとナナシが死んじゃうか  
らっ!?!」

意識がブラックアウトする寸前で雪蓮が助けてくれる

「……………はっ!?!」

「……………苦しかった……」

だが、助かったと思ったのも束の間、

「そ、それでお嬢様は!?!」

「美羽ちゃんなら今は私達の城にいるわよ」

「……………えっ?」

またシェイクしそうな勢いの張勳を雪蓮が拾う

そして当然ながらそれにビックリの張勳

……………はあ……

多分俺が城に着くまでに説明しなきゃいけないんだろっな



と、雪蓮の意味ありげな流し目を受けて思う俺だったとを

第46話（後書き）

恥ずかしいセリフ集はまだまだストックあるんで、これからもちよ  
くちよく投稿していくつもりであります

何かご意見、ご感想ありましたらよろしくお願いします

## 第47話(前書き)

今回は連続投稿できた……

このまま連続投稿できるかはノーコメント……「」( ) ( ) ( )

ではでは〜

## 第47話

~~~~~

SIDE 張勳

右を絶対に見付かりたくなかった孫策様、左を大陸一の武と言われ
る孔融さんに挟まれて、孫策様の城に向かう

……なんでこうなってるのでしょうか？

……

……

…

孔融さんに城に来るまでの道のりで今お嬢様がどうなってて、私が
どうなるのかを教えてくださいました

なんでも名前を捨てるのと呉に仕えるのを条件に、その条件内であ
れば私達を自由にし、もちろん孫家から命を狙われる事はなくなる
という

……最初はウソかとも思いましたが……

孫策さんが隣にいるのにそれもないと考え直し、でもそうすると私
達は何の為に生かされてるのでしょうか？

孔融さんの話では、色々仕事をしてもらいたいとの事でしたが、それまでここまで本当の事でしようか…？

だって、私なんかよりよっぽど優秀な軍師である周瑜さんもいますし、その私が言うのも何ですが、お嬢様に限ってはただの我が儘さん（あつ、でもそこが可愛いんですけどね）ですし……

とまあ、そんな事を考えている内にいつの間にか玉座の間の入り口に着いてしまいました

「あつ、そつだ。なあ、張勳？」

扉を開ける前にまるで今思い出したかのように声をかけてきた

「多分今玉座の間には孫権、甘寧、周瑜がいると思うんですけど、張勳には美羽にやってもらった事と同じ事をやってもらおう予定なんだが……」

それは城までの道中で聞いてました

心の込もってない謝罪なんかするより、今自分がどうしたいのか、どう思っているのかを誠心誠意真心込めて言えば、後は孔融さんがなんとかしてくれる、と

そしてこれから私の名前は『張勳』ではなく、『七乃』になると

「ただ、美羽の時と違って相手が良くも悪くも感情的になりやすい孫権だ

多少はそこんトコ考えるよ？」

つまり、よく考えて言葉を選べって事ですよね？

「じゃあ、いくわよ」

孔融さんの話が一段落ついた所で、孫策様が声をかける

じゃあ、ちゃっちゃと終わらせてお嬢様に会いにいきますか！

~~~~~

SIDE ナナシ

今玉座の間には元々いた蓮華、思春、冥琳、美羽、そこに俺達三人  
が加わり、合計七人になる

美羽の事は一緒に説明した方がいいだろうと、冥琳が気を利かせて  
くれたようだ

流石は呉の大軍師！

「お嬢様っ！！」

「な、七乃っ！！」

二人はどちらからともなく走り寄り、再会の抱擁をする

その間蓮華と思春のこめかみがピクピクしていたのをできれば見逃  
したかった…

冥琳でさえ頭を抱えかねないぐらい酷い顔してるし

「……………で、そろそろいいかしら？」

たっぷりもったいつけてから蓮華が口を開く

正直めっちゃ怖いッス……………

「はい…」

「な・ん・で！袁術と張勳がここにいるのかしら？」

蓮華が怒気を孕んだ声を挙げる

「それを説明する前に訂正させてくれ

ここにいるのは『袁術』と『張勳』じゃなくて、『美羽』と『七乃』  
だ

そこんトコも少しは冥琳から聞いてるだろ？」

「少しはな……………」

だが、ここで貴様から納得のいく説明をしてもらおう」

やれやれ……………」

思春も相当ご立腹らしい

「二人には今までの名前も立場も捨ててもらって、これから呉の為  
に働いてもらう」

そうすれば誰も死なずに事が片付く」

「冥琳からもそう聞いたが、それで私達が納得するだけでも思ってい

るのか？」

納得してくれないな」とは思っていました

「思っちゃいけないけど、何でそこまで頑なに拒む？」

さつき町で話した時は、美羽を殺さない事に一応だけ納得してくれたら？そしたら七乃も同じ事なんじゃねえのか？」

「アレはかなり強引に、しかも途中で終わった話ではなかったか？」

……思春さんの言う通りですね

「まあ、とある側面から見れば、そういう見方もなきにしもあらずなワケでもあるのだが……」

「ああ〜っ！もうっ！！まどろっこしいわねっ！言いたい事あるならしっかり言いなさいよっ！」

ついに蓮華がキレた

まあ、説明も何もせず、いざ説明となるとグチグチグチグチ言って、全然話が進まない

そりゃ誰だつてキレるわな……

「じゃあ、はっきり言うが、美羽達を殺したトコで、何も利点がないんだよ

強いて言うなら孫家にとっての敵を討てる事だけだろ？

だったら、生かして孫呉の役に立たせた方が建設的なんじゃねえんか？」



「……………」

蓮華は何も言わない

黙って俺の話を聞いている

きっと頭の中では色んな考えが渦巻いているんだろう

「もっと言うなら、一応現孫呉の王である雪蓮とその片腕の大軍師冥琳は、この話に理解を示してくれたぜ？」

「……………」

蓮華はまだ喋らない

まあ、蓮華もアホなトコはあるが、バカではない

恐らく頭では理解しても理性が納得しないのだろう

こつちもわかっていた事だが、やっぱり蓮華には簡単に切り替えられないものなんだろうな…

「じゃあ、少し大義名分つつーか、納得せざるを得ない理由を与えてやろうか？」

ここで俺の提案に乗ってくれないなら、俺は呉を抜ける」

俺がそう言った瞬間この場にいるほぼ全ての人間が俺を見る

「ちよ、ナナシっ!？」

今まで傍観者だった雪蓮ですら思わず身を乗り出す

「俺は頭の固い奴は嫌いじゃないが、固過ぎる奴は嫌いなんだよある程度臨機応変に考えを変えられねえと、このご時世生き残れないからな

俺は孔融隊の命を背負って呉に来たんだ

その呉の次期王が使えねえって思ったら、すぐ他当たるぜ

まあ、尤も？俺の提案を蹴って、それ以上の案があるなら話は別だがな

「きつ、貴様あつ!!！」

思春がとうとう我慢の限界に達したのか、鈴音を抜いた

俺のすぐ隣にいた美羽達は思春の隠そうともしない殺気に当てられ、今にも気絶しそうだ

「口で言い負かせられたら今度は実力行使か？

主が主なら従者も従者か……」

俺はさらに挑発的な言葉を投げかける

「……………(ブチッ)!!！」

何かが切れる音がし、思春が鈴音を構えたまま俺に肉薄する

俺は動かさずその様子を眺める

まあ、多分ギリギリでも避けられるし、それになにより……

「貴様あ!!！死ねえ……………」

「思春！止まりなさい！！」

鈴音が降りかぶられた時、蓮華の思春を静止させる声が響く

「……………っ！！！？」

蓮華が止めてくれると思ったしね

……………まあ、タイミング的にはギリギリだったけど…

「思春、少し考えたい事があるの

付き合ってちょうだい」

そう言うと、思春を連れて玉座の間から出ていった

「……………わかりました

ナナシ……………貴様は蓮華の用事が終わったら必ず殺す！！」

思春はめっちゃ睨んでから出て行ったけど

ちなみに美羽達は思春がこっちにきた時にもう気絶していた

「冥琳は思ったよりも落ち着いてるな

雪蓮なんかめっちゃビビってたのに」

「むうー！ビビってないよーだ！」

「まあな

にしても、わざわざ嫌われ者になる必要もなかったんじゃないか？」

「でも、蓮華の頑固さには誰かがいつかはやらないといけない事だ  
つたんだ  
それが『今』であって、たまたま『俺』がやっただけ  
そんなに大層な事じゃないよ」

~~~~~

S I D E 冥琳

ナナシのあの挑発の言葉の数々……
あまりに不自然だとおもったら案の定…

自ら嫌われ者になるのは誰にでもできる事じゃない
特に今回みたいに王族相手なんて、普通に考えればできるワケがない

だがそれをこの目の前にいる男はやった
それも相手から全く目を逸らさず、自分の意思で自分の意見をしっ
かり言う……

やはりこの男は普通とは違うな、と冥琳は思った

第47話（後書き）

しまった……

ボインメガネポワポワ軍師とツルペタメガネ軍師を出し忘れた……
そしてここんトコ出番のない黒髪ロングツルペタンな忍者っ娘……

ちゃんと出番は考えるから、この不甲斐ない作者を許しておくれ……

閑話休題（前書き）

この話はタイトル通り閑話休題です

読まなくても本編に影響ありませんが、読んでもらえると作者は嬉しかったりします

理由は最後にわかります

ではでは

閑話休題

天「最近、作者弛み過ぎじゃない？」

作「な、何の事でしょう？」

ナ「確かにな」

天「だつしょ？つーか、ナナシの設定自体に問題バリ有りなワケだし」

ナ「そもそも俺前世でどんぐらい強い設定だつたんよ？」

作「い、一応その世界で五指に入るくらい？少なくとも一対一で、遅れをとるような相手はいなかった………設定」

ナ「うはーっ。、ちょーてきとー」

天「読者舐め腐ってますね」

作「それは言い過ぎじゃないですかい？」

ナ「いや、言い過ぎではないな

つーか、恋姫換算してどのくらいなん？

ぶつちやけ落陽の時なんてガチ死ぬかと思っただんだけ？」

作「まあ、アレは正直やり過ぎたかなとは思っただけど、そのくらい強いつて事ですよ

恋三人係りならナナシでも負けるんじゃないかな？ってトコ」

ナ「でも特別つてもんがない強さなんだろう？」

作「まあ、オールマイティーに強いんだから、いいじゃんか
ちなみに今現段階で前世に戻ったら、個人戦世界最強争いできるぜ
？」

ナ「って言っても、前世の事は皆（読者）わかんねえだろう？」

天「まあ、確かにね

皆（読者）にもわかるような例えってないの？」

作「今のナナシの強さ、ね……

んー、そうだね……

恋姫で例えるなら、ガンダールヴの能力持ちの恋ってトコかな？

あとはそれに＋体術がある」

ナ「ガンダールヴとか……

全然恋姫違うじゃん……」

作「でもわかりやすいだろ？」

ナ「ゼロ魔わからない人いたらどうするんだよ……？」

天「ガンダールヴっていうのは、MF文庫J出版、ヤマグチノボル
先生の『ゼロの使い魔』に出てくる主人公の付加能力で、あらゆる
武器を使いこなし、武器を持てば体が軽くなり戦闘能力が上がると
いうものである」

ナ「なんで天使あまつかが説明してんだよ……」

天「テヘツ」

ナ「つーか、それだと結局あんまりチートじゃないのな？
普通転生物つて、チートがデフォじゃないの？」

作「や、一応最強物であつて、チートではないから
それに次に転生した時に少しチートになる予定あるし」

ナ「……えっ？」

天「だつてあんたはまだまだ天界とか魔界とか神界を楽しませない
といけないんだよ？」

番組が視聴率取れなくなるまで転生しまくってもらうから、そのつ
もりでよろしくね」

ナ「初めて聞いたんですけどっ！？」

作「初めて言ったからな」

ナ「つーか、いつの間に放送範囲広がってる！？」

天「まあ、私も気付いたらこんなになつてたからね
やゝ、有名人ですね？」

ナ「こんな形で有名人になつても嬉しくないわっ！？」

天「そんな事よりも、本編とかでたまに出てくる私の名前の表示が
『天使あまつか』なのはどうにかなんない？」

もう普通に『天使』でよくない？」

作「やく、今更変えるのもどうかと思わない？
それにこっちの方がわかりやすいし」

天「そうなのかね……」

ナ「なあ、今日はもうこのままグダグダ喋ってるだけなのか？」

天「じゃない？だって特に議題にする事もないでしょ？」

作「そうだね」

ナ「じゃあ、もうお開きでよくね？」

俺、あんたらと違って滅茶苦茶忙しいんだから」

作「そんな態度とっていいのかな？」

俺がその気になれば、その忙しさを数倍にまで跳ね上げる事だって、
ナナシをトラブルに無理矢理巻き込む事だってできるのだぞ？」

天「私だって、あなたに不利になるようなギブアンドテイクを強制的に発動させる事だってできるのよ？」

ナ「……………なんだその職権乱用は……………」

作「まあ、いいじゃないか！」

天「そうよね

でも、そろそろオチを付けて次話に繋げない？」

作「おいおいおいおい

それは作者がまだ次話のプロットしかできてないのを知っての発言か？

これはもうケンカを売ってるとみていいんだな？」

ナ「それはお前がちゃんと仕事（？）しないのが悪いんだろ……」
作「まあ、それは置いて……

実際問題、もう今日はお開きにするか

そんで、ここで各キャラに対する質問とか作者に対する質問、こんな話を読みたいとかいう読者の皆さんへの回答のコーナーにしようと思う

どうだろうか？」

天「手抜きですね」

まあ、発想自体は評価しない事もないですけど、問題は読者さんからのご意見ご感想がくるかどうかですよね」

ナ「それだけじゃないぞ？

その要望に作者が応えられるだけの文才があるかどうか……」

天「それは今後の作者に期待ですね」

じゃあ、という事で今日はここまで」

ナ「最初からグダってたが、まあ、結局このコーナーは読者さんからのご意見ご感想要望に応えるコーナーになるって事になりました」

作「そついう事で、再見」

閑話休題（後書き）

何も書く事がねえ……

……というのはウソですが、正直本編も含めネタが不足しています
……

ゲームもっかいやり直すか……

第48話(前書き)

やべえ……リアルな生活がヤヴァイ……

その心は！

試験中　なのに小説執筆(現実逃避) 〓試験ヤヴァイ

そして、金欠……

アレ？詰んだ……？

第48話

「まあ、とりあえず二人の身の安全は保証されたワケだが……」

と、蓮華と思春が出て行ってから俺は美羽達に言う

「っていつか、やっぱりあの言い方はちょっと卑怯じゃない？
そりゃ確かに私よりも頭が硬いけど」

「雪蓮、それは少し勘違いしてるぞ？」

俺はあの時本気でここを出ていくつもりだった」

「それでも、なんだかんだで結局は呉に残るつもりではあったのだ
ろっ？」

「おいおい……冥琳さんよ、俺がそんな矛盾してる事を考えてたど
も？」

「わかるさ」

どうせ何か適当な理由をつけて呉に残って、蓮華様を変えてくれる
予定だったのだから？」

「……………その根拠は？」

「だってナナシはもうこの呉が気に入っているのだから？
蓮華様の事だって気にして、あんな事を言ってしまうぐらいなのだ
からな」

……正直甘く見てた

周瑜公謹がここまでキレるとは思ってなかった

「俺は頭の良い奴は嫌いじゃないが、冥琳は少し苦手だな」

「自分の考えを読まれるからか？」

……わかってんじゃんか

「ぶーぶーっ！二人だけの世界作ってないで、私にも構って〜構ってよ〜！」

やれやれ……

我等が王はどこまでも我が儘なようだ

「じゃあ、後で一緒に酒でも呑むか？」

「いいの？」

雪蓮がキラキラした目で見てくる

「ダメに決まっているだろ！」

まあ、こんな何でもないような日常の掛け合いが好きで、呉にいろワケだな

「美羽、七乃」

俺は雪蓮と冥琳のいつものじゃれあいをBGMに、美羽達に話しかけた

「とりあえず二人で一部屋な？」

あと、仕事とかに関してはまだこっちから連絡するから、部屋でじつとしててくれ……………誰かある！」

「はっ！」

すぐに玉座の間の外に控えていただろう兵がくる

「二人を部屋に」

「御意」

兵が二人を連れて行ったのを確認した後、雪蓮達を見ると……………

「最前線で暴れ回る仕事なら、喜んでやるわよ？」

「そんなの認めるわけないだろう！」

……………まだまだ続きそうですね

それでは、と言って俺はとりあえず部屋に戻って美羽達の仕事でも探すか、と玉座の間を出ようとしたトコで、その二人はやってきた

……………

~~~~~



SIDE↳陸遜↳

さあ〜て、孔融さんはいるのかな〜？

遠征から帰ってきてきて陸遜の頭にあるのは、遠征の報告ではなく、さつき町でぶつかりそうになった孔融さんの事

まあ、亞莎ちゃんがしつかり報告してくれませしね〜

そして孔融の事を聞く兼報告の為に玉座の間に行く

玉座の間の前でも聞こえてくる雪蓮様と冥琳様のいつものじゃれあい  
その事に妙な嬉しさを感じ、笑みをこぼしながら玉座の間への扉を  
開く……

「……あら〜？」

そこにいたのは探そうと思ってた孔融文挙その人だった

「お？」

あらまあ、こんなに早く会えるなんて運がいいですね〜

「こんにちは〜、孔融さん」

「……あつ、ああ〜……さつきの！」

その節はすみませんでした」

どうやら孔融さんは気付いてなかったみたいですね  
まあ、思い出したので許してあげましょう

「いえいえ」

あつ、私達の自己紹介がまだでしたね  
私は陸遜といいまーす。字は伯言でーす  
孫呉にて軍師やらせてもらってまーす

「わ、わた、私は呂蒙です。字は子明といいます  
私も、軍師やってます

よ、よろしくお願いします!」

亞莎ちゃん緊張しますね」

「これはこれは、わざわざすまない  
改めて自己紹介しよう

俺は孔融。字は文举

今はここ呉に仕官している

何分仕官してきたばかりなんだ

わからない事とかもあると思うが、これからよろしく」

「知ってますよ」

落陽での戦闘見させてもらいました」

「わ、私もです!」

こんな感じで話していたら、いつの間にか冥琳様がこっちに気付いたみたいですね

「おお、穩、亞莎戻ったか  
早速だが報告を頼む」

「はいはい」

じゃあ、ぱぱっと報告済ませちゃいませうかね

~~~~~

その頃、魏の玉座の間では曹操と軍師三人による軍議が行われていた

S I D E 〱 曹操 〱

「さて……袁紹を倒し、北方の憂いがなくなった私達はこれからどうするのが一番かしら？」

そう軍師三人に問いかける

「はつ。もう大陸の主な勢力は、我等が『魏』、劉備達の『蜀』、そして孫策達の『呉』の三つに絞られました
劉備は益州を治めるので手一杯の様子……」

そして孫策は元々自分達で呉の土地を治める事が目的……こちらから手を出さなければ、動きはないかと思われ
よってここは内政に力を注ぐべき時期かと……」

……稟らしわね

確かに北方にはまだ袁紹側の豪族がチラホラいる
それを制するのも必要な事なんでしょう

でも、軍師が三人もいる理由は物事を様々な角度で見る為……

「桂花と風はどうかしら？」

「はっ。今の勢力なら呉を叩くべきかと」

「風も同じく」

「理由は？」

「内政の方はどうしても時間がかかっちゃまうだろ？」

でも、あんまり時間かけると呉と蜀が同盟を結ぶ可能性がある
蜀より呉を先にするのは、呉……というより、呉にいるナナシに時間
与えちゃいけねえと思っとな」

風………というか宝ケイが言った

………まあ、宝ケイでもいいのだけれどね
皆凄い目で見てるわよ？

でもそうね………

『あの』孔融に時間を与えてはいけないのはわかるわ
蜀を攻めれば、下手すれば孔融が加勢にくる可能性もあるわけ……
それは流石に無いと………思いたいわ………

「わかったわ」

一通り考えを纏め、一言間を置いてから……

「これから我等は呉を叩く！」

我等の力を孫策達に思い知らせよ！」

玉座の間中に聞こえるような声で言う

「稟！」

「はっ」

「春蘭、秋蘭、霞に兵を纏めるように」

「御意」

「桂花！」

「はいっ」

「斥候を放ち、呉の様子を細やかに持つてくるように」

「御意っ」

「風は他の將にこの旨を伝えてちょうだい」

「はいっ」

三人がそれぞれの仕事の為に玉座の間を出て行った後考える

（さて、賽は投げられた……

後は吉が出るか凶が出るか……)

「まあ、私の霸道に凶等はあるはずが無いのだけど」

そしてそう呟くと、曹操も自らの仕事の為に玉座の間を後にした

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ 〱

んー、蓮華達の件どうしよっかな？

俺は寝台に寝ながら考えていた

正直若干言い過ぎた感は否めないが、蓮華の成長の為に必要な事  
だったしな……

難しいな……

…コンコン

ん？来客か？

てか、ノックなんて文化あったんだ？

「入ってます」

…ガチャ

……どうやら来客は、人が入っているのを確認しても中に入るようだ

どんな不届き者なのか顔を見てやろうと、体を起こす

そこにいたのは……

## 第48話（後書き）

やゝ、まあ、こつこつ『引き』ってどつどつしょ？

今回、書き方も微妙に変えたのですが、何か読者さんから見えて思ふ事はありましたか？

もしあれば感想もらえると助かります



## 第49話(前書き)

朝でも夜でもコンバンワ

作者のそばつゆです

先日付パソコンがダメになり、ゲームができずにモチベがありえないぐらい低空飛行です

正直、何でもいいから感想をもらってモチベを上げないと更新がさらに遅れる、と作者は暗に感想を催促してみる

ウソです

できれば感想欲しい程度です

## 第49話

はたして扉の先にいたのは――

「……………雪蓮？」

そこにいたのは孫呉の王、その人だった…

「どうしたんよ？」

冥琳と一緒に陸遜達の報告聞いてたんじゃないのか？」

「そんなつままないもの、冥琳に全部任せてきたわ」

つままないって…………

あんた一応呉の王なんでしょうが…………

「はあ…………」

で、何の用ざんしょ？」

「んー、コレしない？」

と言って、雪蓮は樽とお猪口を出した

酒樽って、雪蓮あんた…………

「まあ、別に構わないケド…………

じゃあ、冥琳に見付からないような場所行くか」

そう言っただけはこっさり部屋をあとにした

~~~~~

SIDE 蓮華

昨日あの子の事を考えた

私の方が間違ってたのか？

でも敵討ちのどこがいけないのか？

それに袁術達を呉に招き入れるなんて……

思春は終始ナナシに対して怒りを隠そうともせず、兎に角ナナシが悪いと言っていた

それに姉様も冥琳も納得したってのが理解できない

何故？なぜ？なぜ？

そんな事を机ですっと考えていると、思春が部屋にやってきた

「蓮華様、昨日帰ってきた穩達の報告書です」

「ありがとう」

しかし思春は報告書を置いても部屋を出る気配がない

確か思春はこれから水兵の訓練だったはずだが……

「思春？」

「蓮華様、やはり昨日の事でしょうか？」

しかし昨日申し上げた通り、ナナシが全面的に悪いのであって、蓮華様は悪くありません」

昨日から言われてる事だが、疑問は晴れない

私が黙っていると、とうとう思春が我慢の限界に達したのか、大きな声をあげようと息を吸い込んだ時、渦中の人物が現れた

「よ、蓮華……に思春もいるのか、丁度いいや

どうせ二人共俺に話あるんだろ？

ちよっと付き合え」

そう言っすぐ部屋から出て行った

……

……

…

そしてナナシに着いて来た結果、川辺についた

「……」

話をするの？と言つ前に川に投げられた

幸い川はそれなりに水深があつたからか、ケガらしいケガはなかつた

「なつ…！？」

「はい 思春も水遊びしましょうね」

そして思春まで投げられた

「きつ、貴様っ！！」

「そんな怒るなつて

水も滴る良い女が台無しだぜ？」

「うるさいっ！殺してやる！」

だが、ナナシの次の言葉で思春は鈴音に手をかけた所で止まってしまつた

「お前等主従は少し悩み過ぎなんだよ

少しは肩の力抜いてみ？今までとは違つた景色見えっから」

そう言つて、おもむろに足元にある小石を拾つて、川に投げた

すると小石は川の上を何回も跳ね、やがて沈む

「11回か……」

蓮華達もやってみ？」

何を言いたいのがよくわからなかったが、思春と話し、とりあえずやってみる事にした

ナナシはあんなに簡単にやっていたのだ
私だってできるだろうと、思春と挑戦したが……

「何故、できない……」

思春が珍しいくらいにがつくりしている

「あつるえ〜？ 思春さん、元河賊なのにできないんですか？」

「くっ……」

そして挑戦する思春

いつしかその光景を見ていた私の隣にナナシが座る

「たまにはこんな時間もいいもんだろ？」

いつもいつもむっつりしてんじゃなくてさ、こうやって何もしないでゆっくり過ぐすの」

そうね……

こうやって何も無い日……も……？
あっ……！！

「私、仕事っ……！！」

「ああ、それなら冥琳に俺達三人共今日の仕事を無しにしてもらっ

だから大丈夫

まあ、明日その分忙しらしいけど」

そう…

でもなんでそんな事をしてまで、今日休みにしてもらったの？

さっきの話の為？それとも私達の息抜きの為？

「ほら、また難しい事考えてるだろ？

んな事考えないで、たまには自分の思う様やりたい様やってみたい様やってねえと思うから言っけど、さっきのお前等、めっちゃ素の表情だったぜ？」

また考え始めてた所にそうナナシの声がかかる

ふと見るといつの間にか思春もこっちにきていた

「立場上、常には無理でもたまにはこうやって小難しい事考えないで遊んでみるよ

ちよつと目線変えるだけでこんなにも世界は輝いて見えるんだから」

そこまで言っつて、ナナシは川辺に寝転がる

「だが、貴様のせいで明日の仕事は増えてしまったのだから？
それはどう責任とるつもりだ？」

「んー、まあ、皆明日頑張るって事で」

そんな思春とナナシのやりとりと、川辺の穏やかな空気に当てられたのか、いつしか私も横になり、そして眠っていった……

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ 〱

あの川辺の日から数日、蓮華達は相変わらず硬いが、少しずつ息の抜き方を覚えてきた様子

そうそう

あの日の夜中に蓮華が部屋に来て、美羽達の事を害意がないなら呉に置いてもいい、なんて言いに来た

……次の日の仕事の量に、思春と二人でめっちゃ睨まれたが…

で、今俺が何やってるかと言つと……

「もう！ナナシはもっとシャオに構わないといけないと思うんだよ  
」！  
」

「まあ、ちゃんとここまでの案件を片付けたらな？」

「知らない。シャオそんなの知らないもーん！」

俺の部屋でシャオの子守り兼勉強の先生的な事をやってます

やれやれ……



困ったお姫様だ

「なあ、シヤオ？」

勉強したくない気持ちもわかるが、せめて基本的なトコはできるよ  
うになってくれよ……」

「……っーん」

はあ……

こつこつのはあんまり進まないんだが……

「俺、勉強とか基本的な事もできない奴とは遊びたくないな……

あつ、そうだ

亞莎のトコに手伝いにでも行こうかな」

「ぶーぶーっ！

わかったわよ！やればいいんでしょ！？」

はあ……

穩が俺に教育係を任せたのはわかったが、もうちょい何とかかなな  
かったかね？」

これじゃ、シヤオが自主的に勉強するなんてないんじゃないかね？

あつ、亞莎達とはこの間、改めて自己紹介兼真名交換した

呉の仲間なんだから真名で呼んでほしいんだと

まあ、それはそれとして……

「じゃあ、問題出すぞ？」

歩兵隊、騎兵隊、弓兵隊がそれぞれ1000人ずついます  
各部隊はそれぞれ4部隊に分けられ、その分けられた部隊にそれぞれ将が2人、副将が2人、その補佐が1人付きます  
それぞれの部隊に、他の人より3倍食べる人と、他の人の半分しか食べない人が20人ずついます  
この時、1ヶ月遠征するものとして、最低限必要な全体の兵糧の量はいくらか」

「……………うにゃ？」

「じゃあ、シャオはこの問題ができるまでご飯無しね」

「にゃーっ！！」

「こんなのわかるわけないでしょ！」

まあ、かなり面倒なのは確かだよな

「大切なのは解答ではなく、そのに行き着くまでの過程であり、考えるという行為なのだ！」

つまり、わかんなくても頑張って考えなさいって事なのです」

ちょっと偉そうに言ってみる俺

「シャオはもうダメ……………」

だが、シャオは机にとつぶしてしまった

まあ、何もメリットのない勉強なんて退屈なだけだしな…………

「あっ、じゃあ……………」

この問題が解けたら、俺ができる範囲でならシャオの言う事何でもきいてあげよう」

そう言った時のシャオの反応は凄かった

「ホントっ！？ホントに何でもしてくれるの？」

「ああ、もちろん

ただし、自分の力で解けたらな？」

「よし、こうしちゃいられないよー！

じゃあ、ちょっと集中したいからシャオ自分の部屋行ってるね  
そう言っただけで部屋まで飛んで行ったシャオ

口で問題言ったのに覚えているのか……？

まあ、いいか

それよりも俺は俺の仕事を片付けよう……

「ナナシいるかしら？」

思った所で来客ですよ……

「雪蓮、今から俺は仕事しようと思ってたんだが……？」

言外に酒は無理ですよー？という意味を込めてだったんだが、どうやら真面目な用事らしい

「会ってほしい人がいるの」

はて？

まだ会っていない将でもいたのだろうか…？

とにかく雪蓮について行くか

そして雪蓮に連れてこられたのは……

## 第49話（後書き）

昨日はバレンタインでした

皆さんはチョコ貰えましたか？

作者は非リア充なので貰えませんでした

リア充爆発しろ！

そんな言葉で埋め尽くされてた一日でした

まあ、まったく関係ないですね、はい

## 第50話（前書き）

気が付けばもう本編50話〜そして全話60話〜

ここまでこれたのも皆さんのお陰です

本当にありがとうございます

今回は結構シリアスになっただはず……

一応シリアスな話の予定であります

## 第50話

雪蓮に連れてこられた場所、そこはいつか蓮華達を連れてきた所とはまた別の川辺だった

「なあ、雪蓮さん？」

ここには誰もいないんじゃないか？  
待ち合わせ場所間違ってるか？

流石に空中を指されて、エア―友達（将）とか言われると困るので、  
言ってみたが、

「ここにね……」

雪蓮の思いの外真面目な声にこれ以上何も言えずに押し黙る

「ここには母様がいるの」

雪蓮の母親って事は孫堅文台だったか？

って事はコレが孫堅さんの墓？

あまりに質素じゃね？

「母様はあんまり派手なのが好きじゃなくてね……」

「いいんじゃないね？  
むしろこんな贅沢な場所にあるなんて、お前の母さんは結構欲張り  
だったんじゃない？」

俺は努めて明るい声で言う

「え？」

「だってそうだろ？」

春には新しい命の芽生えを真っ先に見付けられて、夏には虫の声を  
聞きながら清々しい緑に囲まれ、秋には当たり一面の紅葉を飽きる  
程見渡せて、冬には真っ白な雪化粧の雪景色を…だろ？  
これ以上ないくらいの贅沢じゃねえか」

「っ！！」

ええ、そうかもね

お母様ったら、欲張りね……」

そう言いながら雪蓮は持つてきた杓で川の水を墓にかけながら、

「ねえ、お母様？私紹介したい人がいるの

彼、孔融文挙っていうのよ

彼のお陰で呉の空気が良い方に変わったわ

知ってる？以前はあんまり笑わなかった蓮華が今では色んな表情を  
するようになったのよ？」

その時の雪蓮の顔は今まで見た事がなく、でも不思議とこれも雪蓮  
の素の表情なんだと思えた

「さて、と



ナナシも何かお話してみる？」

気付いたら雪蓮のお話は終わっていて、俺に変わってくれるという

「じゃあ、ちょっとだけ」

そう言つて孫堅さんの前に立つ

「初めまして。雪蓮からも紹介あったけど、改めて自己紹介を  
姓を孔、名を融。字を文举言います

今呉に厄介になっていて、微力を尽くしています

とりあえず俺が呉にいる限り、呉の皆は何があっても守りますから、  
安心してください

それでは……」

……ちよつとかつこつけすぎたか……？

まあ、いいや

「じゃあ、帰ろぜ？雪れ……っ！！！！？」

「うん？」

振り返つた時に見たのは、少し朱色に染まった頬で首を傾げる雪蓮  
と……その雪蓮の背後、死角から放たれた………矢

ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！

雪蓮はこの事に気付いていない

もう矢はすぐそこまで迫ってる

このままだと雪蓮が死ぬ……？

ふざけんな！

ここまで考えた時にはもう行動し始めていた

ここまでの思考時間、0・0001秒

「雪蓮っ！！！」

「えっ！？」

雪蓮の名を叫び、腕を思いっきり引き自分の体を矢と雪蓮の間に入れる

ここにきてようやく雪蓮は自分に何があったのかを理解したが、もう全ては遅かった……

「……っ！！！」

そう遅かったのだ……矢に気付くのも、迎撃するにも……

……そして、雪蓮が何かを叫んでいたが、もうそれも俺には届かなかった……

~~~~~

SIDE 雪蓮

最初は何が起こっているのかわからなかった

ナナシに思いっきり引っぱられ、前のめりに倒れた

ナナシを振り返り初めて状況を理解した

振り返った時に見たのは、背を向けたナナシの右胸に刺さる矢と、
顔面に降りかかるナナシの血

私は命を狙われ、そしてナナシが身代わりになった……

「ナナシっ!!」

でも、叫んだ時にはもうナナシの身体は崩れ落ちていた

その瞬間、目の前が真っ赤に染まる

「姉様っ!?!」

今、叫び声が聞こえましたがどうしました……ナナシっ!?!」

「雪蓮様!!」

どうしました!?!」

蓮華と思春が森から出てくる

多分私とナナシがこっちに来るのが見えて、付けてきたのだろう

まあ、今はそんな些細な事なんてどうでもいい

「蓮華、思春!

落ち着いて聞いて?他国より侵入者が入って、今さっき私を狙ったけど、ナナシが身代わりになってくれて助かった

思春は全力で侵入者を見付け殺しなさい

蓮華は周りを警戒させなさい

私はナナシを連れて城に戻るわ」

「御意!」

「っ!?!?……は、はいっ!」

何処の国の連中か知らないけど、ただではすまさないわよ……

蓮華達が行った後、小声でそう呟き、城までの最短距離を急いだ

……
……
……

「……残念ですが矢の先に毒を塗られていたらしく、もうすでに……」

城の医者に診せた時、開口一番そう言われた……

「ウソ……でしょ？だって問題解決したら何でもしてくれらるって言ったじゃない！
なのに……なのになんで勝手に死んじゃうのっ！？」

……シャオ

「小蓮殿……」

のう、ナナシよ……儂だつて新しい料理を教えてもらつ約束があつたのだぞ？覚えておるか？
それにこんな老いばれより先に逝くとは……」

……祭

「……のう……七乃？」

ナナシが死んだなんて嘘である？
妾達に仕事を見付けてくれるんじやろ？
のう、七乃……」

……美羽

「お嬢様……」

……ええ、きつとそのうちひよっこり目を覚ましますよ、きつと……」

……七乃

「隊長ーっ！！なんで、なんで勝手に死ぬんですかっ！
俺に…俺達孔融隊に生きる覚悟を持ってって言ったのは、隊長じゃな
いですかっ！！
なんで…なんで……」

……………亮

ナナシの部屋にいた全ての人の悲痛の声があがる

そして会話が途切れた時に蓮華達が入ってきた

「皆！ナナシの容態はっ！？」

「蓮華様…」

ナナシさんはもう、その……」

平気そうに答えてる穏も実はそんなに大丈夫ではなさそうだ

「そ、そんな……」

「蓮華様……」

亞莎に至ってはあまりの事に声も出ないようだ

「……………ねえ、冥琳？」

私の…私達のこの怒りは何処にぶつけなければいいのかしら？」

「そんなもの決まっているだろう……？」

こんな事をした国、人、全てにぶつければいい！！」

どんな時でも冷静な冥琳ですら、今日この時は珍しいくらいに怒りを露にしていた

……と、その時明命が何かを抱えて部屋の戸を開ける

「失礼します！」

雪蓮様の暗殺未遂及びナナシ様の殺害の実行犯の内の一人を連れてきました」

その瞬間、部屋が殺気で溢れた

そして誰よりも早く反応したのは、なんと亞莎だった……

「お前が！お前がナナシ様を殺したのか！」

なら、同じ事をされても文句を言う資格はないな？

まずはその両手を二度と弓の握れぬように石で何回も何回も何回も潰し、ナナシ様を狙ったその目を焼きごてで潰し抉り抜き、海に捨ててやる

楽に死ぬると思つなよ？」

………亞莎怖い

でも皆同じような気持ちなのだ

ただ、聞くべき事は聞き出さなければならぬ

………修羅になるのはそれからでも遅くはない

「おい！貴様ドコの国の者だ？」

思春が鈴音を突き付け、本気で脅しをかけている

まあ、何がどうしようとかいつは死ぬ運命だけど

「あつ、そういえば他の連中は？」

もう捕まえたんでしょ？」

「はいっ

そいつ一人を除いて全員殺しました

それと、装備を見るにこいつら魏の兵ではないでしょうか？」

明命の報告

そう

なら、もうこいつには用はないわね

「もういいわ

あなたもう死になさい」

私はその男に言い放つと、明命が男を引っ張り部屋から出ていく

「申し上げます！

呉のの国境内に魏軍が展開しているのを確認しました」

明命と入れ違いになるようにそう一人の兵士が報告にきた

どうやら相手さんは最初からやる気みたいね…

「皆！ナナシの敵討ちよ！兵を出せ！

魏軍を討ち滅ぼせ！一人残らず生きて返すな！」

「「「「おおーっ！！！！」「」」」

もうこの場の怒りを抑える気がある者などいない

あるのは圧倒的な怒りと復讐のみだ

ねえ、曹操？あなたが何をしたのか教えてあげる……

第50話（後書き）

最後のメがめっちゃ難産でした…

多分今まで一番…

何かご意見等ありましたら一報よろしくお願いします

第51話(前書き)

リアルな生活がヤヴァイ作者です

特に金銭的なものと学校的なもので

~~~~~

## 第51話

~~~~~

SIDE 曹操

遅い……あまりにも遅いわね

「まだ孫策は動かないのか？」

この質問も、もう二度目だ

あまりにも愚鈍な王なら倒す意味なんてないわよ

「呉軍、展開始めました！」

そう、ようやく……

「皆、突撃準備をしなさい！」

私は霸王として孫策と一つ舌戦を交えてくるわ」

さて、ここまで遅れて何を言葉に乗せてくるのか楽しみね……

曹操はまだ知らない

孫策がここまで遅れた原因を

自分の、魏兵が何をしたのかを

~~~~~

SIDE 雪蓮

隊より数歩前になると、曹操が前に出てきた

まるで『貴女との舌戦の為よ』と言わんばかりに

あくまで白を切るのね

「遅いじゃない孫策？」

あまりに遅くて居眠りしそうになっちゃったじゃない」

「……………」

「あら？何も言わないの？」

私はそこで初めて口を開く

脇に置いといたソレを投げて

「ちょっと鼠退治をしててね……………」

ねえ、この鼠に見覚えないかしら？」

ソレを見て曹操の眉間にシワが寄る

「この鼠ね、呉の敷地内に侵入しただけじゃなく、私を暗殺しようとしたの

話はそれで終わりじゃなくて、私を庇ったナナシ……孔融が代わりに矢に射られたの…

しかも矢には毒が塗ってあったらしく、ほぼ即死だったのよ」

「なっ!？」

「もう話す事はないわ

………曹操、貴女達無事に呉の領地から出られると思わない事ね」

そこまで言い放ち、隊に戻る

~~~~~

SIDE 曹操

「どづいつ事よっ!？」

戻るなり今あった事を将全員に問い詰めた

「誰が孫策の暗殺なんて命じたの!？」

しかし皆首を横に振る

私は曹猛徳、霸王曹操なのよ!

霸王が進むのは霸道!こんな…こんな汚された霸道なんて望んでない!

「風には少し心当たりがあります」
反董卓連合の後、補充の為に入れた兵の一部の質の悪い兵達が怪しげな動きをしていました」

「それは本当!？」

秋蘭、問い詰めてきなさい」

「はっ!」

……

……

…

ほどなくして秋蘭が数人の兵を連れ戻ってきた

「報告します

風の言った通り、彼等が独自の判断でしたそうです」

「春蘭!今すぐこやつらの首を跳ねよ!」

「はいっ!」

そして全員が跳ねられたのを確認してから今度は将全員に告げる

「皆!撤退準備を始めよ!

凜と桂花でその指揮を!

春蘭、秋蘭、霞で殿を務めよ!

ただし、決して戦闘はするな!

もうこの汚れた聖戦に意味などない！」

「「「「御意っ！」「」「」」

全員の返事後、自分の撤退準備を始める

まさかあの孔融が死ぬなんて…

私はその事に尋常じゃない動揺を感じていた…

「「「「「」」」」」

S I D E 〱 亮 〱

私達孔融隊は、皆孔融様に見出だされ、鍛えられ、そして生き残ってきた兵だ

孔融様は私達一人一人を個人として見ていたし、立場的な都合こそあれ、基本的には皆同じように接してくれた

多分私達孔融隊はあの人の為ならば、皆命を差し出す覚悟を持っているだろう

なのに！なのになのに！

私達は無力で、何もする事ができず、あの人を死なせてしまった

孔融様は私達に教えてくれた

『死ぬ覚悟よりも、生きる覚悟を持って』

と

そう言つて死んでしまった

多分私達はこの後呉の一部隊として取り込まれるのだろう

別にそれ自体構わない

ああ、構わない……が、その前にやる事ができた

魏軍の皆殺し

きっと孔融隊全員の総意だろう

……そして孫策様の突撃命令が下る

私達孔融隊は人数が少ない為、奇襲、そして遊撃として本隊とは別行動

間もなく撤退を始めた魏軍の横っ腹に突撃する

魏兵は抵抗はするが、撤退が主目的の様だ

が、そんな事は知らない

私達の目的は魏軍の皆殺しであり、相手が撤退しているからといって手を緩める意味がない

「死ねっ！孔融様の仇っ！」

孔融隊のあちこちから上がる声

孔融隊初めての攻撃的な戦闘

孔融様は決して教えてくれなかった攻撃的な戦闘

今私は心底後悔している

『何故、攻撃的な戦闘を教えてくれなかった？
何故、防御法しか教えてくれなかった？』

「死ねっ！死ねっ！死ねっ！！」

後悔は後に悔やむと書く

今更だな……

今はできるだけ魏兵を殺す事に専念しよう

~~~~~

一方、魏の方でも孔融の死は動揺を生んでいた……

S I D E 〱 凧

なんで、ナナシ様が……っ！？

あの時、町を、私を、皆を守ってくれたナナシ様がなんで……？

群がってくる呉兵をいなしながら考える

信じられない事だし、信じたくない事でもある

しかし、死兵となって突撃してくる呉兵を見れば、嫌でも信じざるを得ない

「……………ナナシ様っ……………」

凧は涙を流しながら闘っていた……

〱〱〱〱〱〱〱〱

S I D E 〱 霞

死兵となった呉兵を捌きながら考える

もちろんナナシの事や

呉兵の様子や、孫策の様子から言って、ナナシが死んだのホンマみたいやけど……

ナナシが毒程度で死ぬんか？

実際手合わせしたからこそわかるが、そんな柔な鍛え方をしていたとは思えへん……

ホンマのトコどうなんやろ……？

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

目覚めはいつも唐突に……

おはよう俺、そしておやすみ睡眠欲

「知らない天井だ……」

なんせ天井及び壁一面に天使のブロマイドあまつが的なものが貼ってあるのだ

正直気持ち悪い事この上ない

「それだけボケられれば問題ないわね」

この展開にもあまり驚かなくなった

慣れって怖いな…

「……………ここは誰？私はドコ？」

「や、新しくボケればいってもんでもないから」

やれやれ……………

現実逃避すらさせてもらえないのか……………

「じゃあ、俺はなんでこんな（気味悪い&趣味悪い）トコいるんだ
あまつが？天使さんよお？」

「括弧で隠しても本音駄々漏れだからね？

……………つと、その前にどこまで覚えてる？」

「んー…、あつ、もしかして…俺雪蓮庇って死んだ？」

「半分正解半分外れね

矢だけじゃなくて、矢に毒塗ってあつたし

それに、あんたには『似非零時迷子』ってテイクがあるのを忘れた
の？」

ああ…そんなんあつたね…

アレ？でもあれって確か……………

「似非零時迷子って、一日一回のみだろ？

矢と毒って別じゃないのか？」

「良い質問ですね」

池上さんか！

「そうなんです。本来なら遅効性の毒だから別々に効果を適用するトコなのですが、貴方の場合はそんな毒ですら一瞬で身体を巡る為に、矢と毒が1セットとしてかぞえられたわけなのです」

「…………理由はわかったが、何故池上??」

「キャラ作り」

酷過ぎる…………

「…………あれ?じゃあ、俺もしかして死んでない?」

「そうなんですよね」

今はメモリ4MBのあなたの頭のCPUが、そこんところの同時処理できなくて応答なし状態なわけよ」

4MBのメモリって…………

GBですらないのかよ…………

「ちなみにVistaの32bitよ」

「起動すらできねえじゃねえか!!」

……………もういい加減こいつの相手は疲れた…

「で、つまる所、俺は復活できるのか?」

兎に角早くこの不気味な空間から抜け出したくてそう言ったら、奴は……

「ええそうよ？」

だってまだまだあなたの物語は終わる未来なんて視えないもの」

とか宣いやがった……

第51話（後書き）

約丸々1話出番無しだった主人公

次は頑張ってくれるかな？かな？

第52話(前書き)

ようやくリアルの生活が一段落ついた作者です

さあて、もうすぐ春休み！

プロローグから修正し直さないと…… () ()

第52話

~~~~~

SIDE 冥琳

魏軍が撤退していく

それを追う呉軍の死兵達…

本来なら、一将の為にここまで国の兵が感情的になる事はないのだが……

「…まあ、それだけ人望があつたという事か……」

特に最前線で人間台風のように暴れている雪蓮なんて凄いものだ

争いとは何事においても、『頭は冷静に、心は熱く』と相場が決まっているが……

雪蓮の場合は『頭も心も燃え盛る炎のように』という感じだな……

とはいえ、この状態も長くは続くまい

何故なら人間の体力は無限ではなく有限であり、もしこのまま進んでしまえば途中で力尽きるのは目に見えている

ましてや孫呉の戦いはこれで終わりではないのだ

ここらが潮時だな……

魏軍はそろそろ領境に入るといった所……

「よし、では雪蓮達を止めに行くぞ！」

周瑜隊、ついてこい！」

私はこれ以上は無益な戦闘を止める為に隊を率いて最前線に向かった……

~~~~~

S I D E 雪蓮

ここらが潮時なのかもね……

いくら『戦狂い』と言われ、興奮状態の私といえど『進む時』と『退く時』の区別ぐらいつくわ

……でも世の中理屈じゃない事もあるわけで……

それが今この時だ！

「殺せつ！逃げる者を殺せ！投降する者を殺せ！孔融の死を奴等の穢れた血で償わせろ！」

頭でわかってはいても、理性では納得できても！

心で納得できるわけないでしょうっ！！

そしてイイカンジにノってきたトコで冥琳が最前線：私の隣までくる

「なあに、冥琳？

今丁度イイトコなんだけど？」

「雪蓮、そこまでだ

これ以上追撃しても我等に利はない」

どうやら冥琳は冷静に軍師の仕事をしにきたようだ

「じゃあ、このまま逃がすの？

そんなの『私』が納得するだけでも？」

『私』を殊更強調して言う

「納得してないのはお前だけじゃないんだぞ………？」

わかってる

冥琳だつて感情のまま、怒りのまま暴れ回りたいんだ

でも、軍師という立場からそんな事はできない

軍師とは、いわば軍の国の頭脳

その頭脳が感情的になってしまったら、その組織は簡単に足下を掬われて崩壊する

だからといって、ここで私が…私達が納得して『はい、止めます』
なんて事できるはずがないし、するつもりもない

冥琳も立場的に辛い立場なんだろう……

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ 〱

「……我、降臨なり」

「……………（しーん）」

たまにお茶目してみれば、部屋に一人きりのナナシ

目が覚めたのに誰もいないこの不幸……

「鬱だ……………」

（まあ、しょうがないんじゃない？

今丁度あんたの弔い合戦してるトコらしいし？）

（えっ！？

何ソレ、聞いてないんですけどっ！？）

（ああ、あんたの仮死状態が死んだと勘違いされたらしいよ？）

（火葬されなくてよかったな、俺

で、皆は何処にいるかわかるか？）

(……あんた最近私の事を便利屋だと勘違いしてない?)

(まさかつ！大事な便利……じゃなかった。作者的に動かし易い……でもなかった。えーと……そうそう！大切な友達(?) だと思ってるよ(?!))

(なんかあんたの本音がよーーくわかった気がするわ……  
まあ、いいわ。教えてあげる

あんた……正確には孫策を狙った奴は魏の兵で、今魏軍と戦闘中)

(ヤバくねえかつ!?)

(そうね、ヤバいかもね

で、ヤバかつたらどうするの?)

(そんなの決まってるだろ!)

(そう……

でも助けに行くなら、ちょっと装備して欲しいものがあるの)

(……なんだ?)

あまつが  
天使から?

俺はその事実だけで警戒レベルをいきなり上げた

(そんなに警戒しなくてもいいわよ

今回の第2死神長が『最近シリアスばっかで空気が重いから、ギヤグを入れる』って言って渡してきた物だから)

( …… 違う意味で警戒する必要が出てきたんだが？ )

( まあまあまあ )

そして天使が<sup>あまつが</sup>手渡してきた物とは……………

~~~~~

S I D E 蓮華

先日の一件で、ようやく…………… ようやくナナシを本当の意味で好きになれた所なのに…

なんでその矢先にナナシが殺されなきゃいけないんだっ!?

「あ……………っ!」

そんな事を考えながら闘ってたのがいけなかったのだろう

足下に転がっていた魏兵の死体につまずき、体が倒れていく…

だが、体は倒れる事なく何か柔らかいものに支えられた

何かと思い、ソレを確認しようと顔を上げるとそこには……………

「……………ネコ？」

~~~~~

SIDE ～ ナナシ ～

突然ですが皆さんはドラゴンクエストなるゲームを知っているだろうか？

残念ながら、わたくしナナシは存じません

何故ならわたくしのいた世界ではない、一刀さんの世界にあったゲームだそうです

そしてその中にある『ぬいぐるみ』なる鎧(?)をご存知でしょうか？

ネコの姿を型どった全身を覆うふわふわなやつなんですよ

ええまあ、『ぬいぐるみ』という名前なのに着ぐるみなんですけどね

勘のいい人はもう分かったでしょうか？

そうなんです

わたくしナナシは今『ぬいぐるみ』を装備していますのです

天使さんあまつかからこの『ぬいぐるみ』を受け取った後、この戦闘を止め



る為に戦場に駆け出しました

するとどうした事でしょう！

蓮華さんが前のめりに倒れそうではありませんか！

……………そろそろ普通の話し方に戻していい？  
この口調ツライんだよね…

俺は蓮華の前に回り込むと、そのモフモフな身体で受け止める

モフッ…………

「……………ネコ？」

困惑した表情の蓮華に片手を上げて応える

蓮華は石化

周りの兵達は何が起きたのかわからないといった表情

『……………（しーん）』

一瞬敵も味方も静まりかえる

だが、それも一瞬であり、そこに現れた乱入者によって破られた

~~~~~

S I D E 〱 明命 〱

今はナナシ様の弔い合戦でした

そう、でした！

私達の部隊は蓮華様達の近くで戦闘していたのですが、そこで見てしまったのです……

巨大なお猫様を！！

その姿を見た瞬間、私の何かが切れました
普段なら戦闘中ならここまで取り乱す事は……ああ、もう我慢できせんっ！！

「お、おおおお……っ」

あまりの事態に私の脳は少し混乱しています

何故なら、『お猫様』の一言が出てこないのですから

「お猫様ああああ~~~~~~~~っ！！！！！！！！！！」

そしてとうとうそれが爆発しました

第52話（後書き）

後半はもっと違う感じになるはずだった……

どうしてこうなった？

ちなみに作中のぬいぐるみはドラクエ？を元にしてるのであしからず

そつえば最近、恋と星（作者一番のお気に入り）を出してない気がする……？

出番はいつになるのやら……

第53話(前書き)

作者実は今滅茶苦茶金欠なのです

給料日まであと2週間ちよいで残金356円……

これは引き込もって小説執筆しとれ!と、神様からの啓示だな……

第53話

ども、朝でも夜でもコンバンワ　モフモフなナナシです

実は今極地的に大変な事になってまして……

何があったのかと言いますと、さつき蓮華が転びそうになったのを助けたのですよ、俺withぬいぐるみで

そしたらまずそこでの戦闘が一時的に収まり、その場にいた人達の視線が集まりました

そして近くにいたのかわかりませんが、ネコラーたる明命さんが『お猫様ああああ〜〜〜っ！！！！！！』と叫びながら突進してきました

そこまではまだいいのです

問題はその騒ぎを聞き付けたのか、呉の将や兵、そして孔融隊の皆さんまで集まってきてしまった事です

戦闘は全て収まったようなのですが、その代償は呉の誇る数万の兵や将達、孔融隊からの視線with殺気でした　なう

と、成分の半分が優しさでできているナナシさんは説明するのです

………未だに明命はモフモフしてます………

~~~~~

S I D E 雪蓮

冥琳と話してる時に伝令がきた

『孫権様の所に得体の知れない何かがありました』

ナナシを失って、蓮華まで失っては私はきつともう立ち直れなくなるだろう……

本来ならばそんな事ではいけないのかもしれないが、気兼ねなく話したり、バカできる友人、異性としても気になっている人が目の前で自分を庇って死んだ

それは孫策伯符の中では、決して小さな事ではなかった  
さつきまでだって、暴れていないと皆の前でも泣いてしまいそうだった

そんな思いは一度で十分過ぎる

だから、すぐに冥琳と共に蓮華の元に向かった

そしてそこで見たものは……

思春に鈴音を突き付けられた謎のモフモフと、それを庇っている  
命の姿だった……

「お猫様には指一本たりとも触れさせはしません！」

本気の目で明命、魂の叫び

「どけ明命！殺すも殺さない事もないのも、まずはソレの正体を暴いてからだ！」

思春……それはつまりどうあってもあれを殺すという事じゃないかしら？

「姉様……」

「蓮華！？大丈夫だったの？」

そんな茶番（？）を見てみると、蓮華が人垣からひよっこり現れた

「ええ……」

でも思春達が……」

そう言つて、二人と一匹（？）を見る

どうも睨み合いばかりで先に進まない

しょうがないわね……

危害を加えるような気配は感じないし、少しお話ししましょうかね

そしてそのネコ（？）に近づくと

「あつ、おい雪蓮！」

「大丈夫よ、冥琳

……ねえ、ネコ（？）さん？



貴方のお名前はなんていうのかしら？」

するとネコ(?)は……

天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ！孫呉の民が俺を呼ぶ！！

私達はその声の主を知っている  
でもそれはありえないはずだ

孫呉と大陸の平和の為に還ってきた！

だけど、その声は今私達が一番聞きたかった人の声だった……

姓は孔！名は融！字は文举！

その名はもう呼ぶ事ができないと思っていた名……

そこまで言つとネコ(?)は腕を背中に回し、器用に背中にある何かを真下に下ろしていく

そして背中に開いた穴から出てきたのは……

「ああ……、まあ、その、なんだ………ただいま？」

ナナシはそう言った……

~~~~~

S I D E ～ ナナシ～

ぬいぐるみから出て外の空気を吸い込む

「ああ～…、まあ、その、なんだ……………ただいま？」

そして、啞然呆然驚愕している皆に向けて言う

言った瞬間、将達皆に飛び付かれた

その中でも蓮華の反応は素晴らしく、『ただいま』の『だ』辺りで駆け出し、全部言い終わった時には俺にしがみつき、名前を連呼していた

「ナナシ！ナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシナナシ！！」

蓮華怖っ！？

かと思えば反対側にはいつの間にか雪蓮がいて、背中にはシャオが乗っていて……………

まあ、早い話がもみくちやにされたワケなのでして…………

「ちよっ！？お前らっ、どけてっ！……………っ！？！？ちよ、誰だ今変なトコ触ったやつ！？ぎゃあーっ！って、そこに体重かけ……………ん……………」

俺はそこで意識を手放した……………

……
……
……

目が覚めると目の前に飛び込んできた圧倒的な、

肉

「い、こぼれるっ!？」

思わずガバツととび起きる

その圧倒的な肉は雪蓮の胸で、当然こぼれる事はない

「ナナシっ!?!?目が覚めたの!?!？」

そう言っつて雪蓮は抱き締める

……!?!?!?

何故抱き締められてるの……??

「大丈夫?ナナシ、あのあと私達にもみくちゃにされてそのまま気絶しちゃったの……」

……えっと、ごめんなさい！」

状況がよくわかってなかったトコに蓮華は説明してくれる

「あつ、いやまあ、大丈夫だから気にすんなって」

……っか、起きるなり何バカ言ってるの俺は…

「では、起きた所早速で悪いのだが、どうして助かったのだ？
医者は手遅れだと言っていたぞ？」

冥琳が会話に入ってきた

多分知識人として不思議だったんだろう

まあ、俺も自分の事じゃなかったら不思議でしかたなかったんだが
……

雪蓮達からも視線で問われ答える事にした

「大した理由じゃないさ」

ただし、正直に似非零時迷子なんて言えるはずがないので、誤魔化
したが

「死神が毒程度で死ぬワケないだろ？」

……それに…皆の声が聞こえたしな…」

とかちよつとクサイ台詞も言ってみる俺

復活してから登場の衣装がぬいぐるみって、若干間抜けだったから

ちよつとかつこつけたかつたんだよ、文句あるか？

（文句はないけど、そのセリフゲツチュしたわ）

（なんだ別にあまつか天使なんて呼んでないぞ？

帰って風呂入って寝ろ）

（……そんなにぬいぐるみ嫌だったの？

あれは私の第2死神長のせいなんだから私に当たらないでよね？）

（はいはい

で、何できたんだよ？）

（忘れてると思ったから一応事後報告しにきたのよ）

（……何だよ？）

（……番外編 ナナシの恥ずかしいセリフ集ネタ……）

（あつ……って、ええっ！？マジでっ！？アレまだ続いてたの？）

（そんな人気なくていつの間にか雑誌でも段々後ろの方で連載されてるマンガみたく言わないで！

）

（だって、続き全然連載ないからもう打ち切りになったのかと思うじゃないか！）

（そんなに力込めて言わないの！
ただ単に作者の怠慢なんだから

で、さっきのあなたのセリフ貰ったから

(……………リアリー?)

(またあなたの過去に黒歴史が刻まれたわね……………)

(oh……………ジーザス……………)

「……………シ? ねえ、ナナシってば!」

蓮華の呼ぶ声で我にかえる

「……………なんでしょう?」

「顔真つ青よ? 大丈夫?」

「多分大丈夫じゃないかもしれない……………」

「……………?」

まあ、こうしてこの日の午後は過ぎていった

雪蓮によれば明日は丸々一日使って、『ナナシ、復活の宴』なるものをやるらしい

……………どこの宗教みたいな名前と思ったのは俺の気のせいだろう……………

第53話（後書き）

今回は途中、センタリングしたいトコがあったのですが、できませんでしたね〜

——

やっぱり面倒でも一文字ずつやらないといけないのか……

第54話(前書き)

宴だ！酒だ！

えんナントカさんごめんなさい……orz

第54話

『ナナシ、復活の宴』

今玉座の間にはそんな垂れ幕が掲げてあった

まあ、それはいいと思う

昨日もやるような事を言っていたし

ただ、宴開始の時間がおかしいだろっ!?

今現在の時刻、日の出から数十分程

侍女の話によれば、雪蓮が自ら夜中の内に準備を進め、日の出と共に起きていきなり酒盛りを始めたそうなので、現在その雪蓮はというと……

「酒が足んないぞ〜!〜まだ飲み足りないぞ〜!」

……すでに酔ってらっしゃいます

ってか、飲み始めの時間早過ぎでしょ…

「……私が見通しが甘かった……」

隣で冥琳が頭を抱えてるのを見れば、その雪蓮の行動がどれ程のものなのかわかるだろう

「冥琳……」

ちなみに後起きてる将は思春と明命ぐらいなもので、他の将はあと一時間ぐらいで起きてくるだろう

えっ？俺？

俺は雪蓮に叩き起こされた

なんか主役がないと宴ができないとか言い出して起こされた

で、現在俺と同じ様に起こされた祭と二人で酔っぱらいと化している

「おお！ナナシ殿ではないか！

ほれ、こっちきて一杯やろうじゃないか！」

「……いや、朝から酒はちよつとな……

昼過ぎぐらいからなら一緒にしますよ」

そう言うてはぐらかす

すると祭も仕方ないのおとか言つてまた飲みだす

おいおい……

まだ朝方もいいところなのにそんなハイペースで大丈夫なのか……？

~~~~~

SIDE 冥琳

昏過ぎ

未だに続いている雪蓮と祭とナナシ（ナナシは巻き込まれたようだが）の酒盛りを見て思う

雪蓮や祭には困ったものだ

と

日の出と共に酒盛りとは……どれだけ酒好きなのだ……

……まあ、今日限りの無礼講としておこう

何せ、ナナシが生きて嬉しなのは私だって同じなのだからな

「冥琳様あ〜？」

私もあ〜、書庫に入っていていいですかあ〜？」

「ダメだ」

だが、穩を書庫に入れてもいいというわけではない

何故なら、穩は書物で欲情してしまうからだ

最近はそのもあって、書物に触れさせる機会を極端に減らしているのもあり、今書庫に入れてしまった時の穩の欲情は想像したくもない

そして、もしそうなってしまった場合、誰が穩の相手をするのかといえは……まあ、ナナシになるのだが……

それで丸々一日潰れるのは目に見えてるわけだ

結論

穩は書庫出禁だな

~~~~~

S I D E ～ 亞 莎 ～

ナナシ様が無事で本当によかったです

この喜びの気持ちをナナシ様に伝えたいと思い、ナナシのいる所に向かったのですが……

「おお！亞莎じゃないか！

よし！一緒に呑もうぞ！」

……祭様に捕まってそのまま酒盛りに参加する事に……

なんでこうなっちゃったのでしょうか……？

それでもナナシ様と同席できたのは嬉しかったです

「亞莎、ゴメンな……」

「いえいえ！ナナシ様が謝る事じゃないですし……」

「そう言ってもらえると助かる
でも、今度何かで埋め合わせするよ」

はあう！？

ナ、ナナシ様が誘ってくださってる！？

「ほ、本当ですか！？あ、ありが……」

嬉しくて嬉しくて、お礼の言葉を言おうとした時、

「もう！二人で良い雰囲気作ってないで私達にお酌しーなーさーい
いー！」

雪蓮様の駄々っ子のような言葉でかきけされる

「はいはい、わかったよ！

………あつ、亞莎今何か言いかけたろ？何だったんだ？」

「なっ、なんでもないですっ！！」

ナナシ様はまだ遠い……

~~~~~

SIDE↳蓮華↳

姉様が朝から酒盛り…

昼過ぎにはナナシや亞莎も巻き込まれ…

そして夜には私まで……

っていつか！

「姉様一体どれだけ飲めば気が済むんですかつ！？」

私の説教にも姉様は悪びれもなく、

「んー、浴びる程？」

とか言う始末

「もう浴びる程飲んでるでしょっ！？」

亞莎なんて酔い潰れて寝てしまっているし

ナナシはまだ大丈夫なのかわからないけど、目が合つと目でこっつ言  
つてる

『…………タスケテ』

と

「まあまあ、蓮華様良いではないか

適度な酒は美容と健康に良いのじゃぞ？」

祭はそう言うが、朝から晩まで飲む酒のドコが『適度な酒』なのだ  
らう？

流石にそう思わずにはいらなかった……

~~~~~

SIDE ナナシ

酔い潰れた亞莎を部屋に送る名目である混沌空間カオスから抜け出す

運び方はもちろんお姫様抱っこ

えっ？なんでかって？

背中に当たる亞莎の微かな胸の感触……いや、それ以上に背負った時
に首筋に当たる亞莎の吐息が辛かった……

年齢〓彼女いない歴（もちろん童貞）の俺がそんなに耐えられるワ
ケがない！

まあ、お姫様抱っこもそれぞれで辛いんだけどな……

『辛』と『辛』という字は似ています

今の俺を表す言葉にこれ以上のものはあるだろうか？

てな具合で、亞莎の部屋の前に到着

亞莎は……

「……………すう…すう…」

まだ夢の中にトラベリングだそうです

やれやれ…

女の子の部屋に入るのは抵抗があるが、こればかりは不可抗力だ
と思う……………思いたい！

や、だってもうホントにこういう『女の子らしい女の子』ってのは
扱いが難しいから困る

えっ？雪蓮とかは？

雪蓮はもうどっちかつつーと、『親友』ってカテゴリだよ

あゝで、話を戻すが、亞莎をどうやって部屋に戻すか

まあ、周りに侍女も見付からない以上自分でベッドに連れていくし
かないんだが……………いや、でもこのままここにいるワケにもいかない
し……………

とか部屋の前でグダグダ考えてたのがいけなかったのだろう

廊下の向こうから歩いてきた思春に見付かり…

「……貴様、亞莎の部屋の前で亞莎を抱えて何をしている？
まさかっ！？寝ている亞莎を部屋に引つ張り込んで、『魏の種馬』
ならぬ『呉の種馬』にでもなるつもりか？どうなんだ、ああん!？」

両手が使えない状態で首筋に鈴音が突き付けられる

思春さんこえ〜っ!!

って、えっ？『魏の種馬』って？

「いやいやいやいや

俺そんな事しませんよ!？」

っーかそもそも『魏の種馬』って何の事よ?」

「なんだ知らないのか

なんでも魏には『天の御遣い』という男がいて、そいつが魏の女性
を手当たり次第に種付けしているそうだぞ?」

一刀の野郎……

こっちは女性経験皆無なのを知っての狼藉か?

正直に言おう、

羨ましい!!

だって同じ男としてなんか負けた感じがするじゃないか!

「……へえ、魏にはそんな外道みたいな奴がいるのか…」

一刀、俺の中で外道にランクダウン

「貴様も私の中ではその『外道』に入っているぞ？」

そう言つて思春は俺から亞莎を奪い、部屋に入つていった

「……………えっ？」

今思春は何て言つた？

俺も一刀と同じ外道……………？

鬱だ……………

あまりにも鬱なので、城壁の上にも行つて宴のラストでも見ながら気分転換でもしましょうかね……………

……………

……………

…

す、すげえ……………

宴もたけなわになるところか、酒の量増えてねえ？

なんかまだ雪蓮と祭の笑い声聞こえてくるし……………

あつ、明命と穩も捕まってるし

んー、そういえば今日シャオ見てないなあ……

おっ？ありや蓮華と一緒にじゃないか

蓮華も上手く抜け出せたみたいだな

まあ、たまには姉妹で飲みたい時もあんだろう

にしてもここって広場一望できていいな……

……カタン……

とか思っていると後ろで物音が聞こえた

「……誰だ？」

振り向いて見るとそこにいたのは呉の苦勞人こと、冥琳さん

「私だ」

「冥琳は雪蓮達と飲まないのか？」

「あれと同じように飲んでいては明日に支障をきたす

……まあ、尤もあのお氣楽トンボは明日も明後日も明後日も明後日もずっとずつつつつつと！仕事はしないだろうけどな！」

冥琳もキてるな……

「まあまあ、押さえて押さえて……な？」

「……まあ、そうだな
アレの事は今更言った所で治るものでもないしな
ところで、ナナシはここで何してたんだ？」

「風に当たってる」

「そうか……」

「ここは風が気持ちいいからな」

「……さて、私は下を収めてくるとしよう」

「ナナシもあまり長居して風邪引かないように……ゴホッ……ゴホッ
……」

「おいおい冥琳が風邪なんじゃないかー？」

と、笑って終わるはずだった
普段通りなら

この暗闇で見えたのは奇跡か偶然かはたまた必然か

振り向いた冥琳の口元に黒い何を拭ったような痕が見えた

「おい、冥琳」

「それ血じゃないのか？」

「……えっ！？いや、違うぞ？」

誤魔化す冥琳を無視して、口と拭ったと思われる部位を見る

「まんま血じゃねえかよ！」

「病気か！？いつからだ！？雪蓮とかは知ってるのか！？」

俺は冥琳に刺激を与えないように無理矢理横にする

「落ち着けナナシ

もうこれは医者にも治らないと言われている

私も諦めているしな

もちろん雪蓮も知っているさ」

そんな……

「ホントに助かる方法はないのか？」

「ない

自分の体の事は自分が一番良く分かっている

もう治らない事も、もうあまり長くない事も、な」

「……………どのくらいだ？」

「もってあと二ヶ月だな

早ければ一ヶ月もたないな」

「……………そうか」

そう言っただけで二人の間に沈黙が落ちる

そしてそれからどれだけ時間が経っただろうか？

冥琳が口を開く

「なあ、ナナシよ……

今日の事は他にはもちろん、雪蓮にも黙っていてくれないか？」

「……わかった

……でも、ひとつだけいいか？」

「なんだ？」

「もしその病気が治るなら治したいか？」

そう言うと冥琳は短くフツと笑い、答えた

「それだとまるで治る方法があるみたいに聞こえるのだが？」

あるんだよ

でもそうは言わない

「質問の答えになってない」

何故ならその代償を聞いてしまえば冥琳はもちろん、雪蓮達だって
反対するだろうモノだから

「そうだな…

そりゃ、治るなら治ってほしいさ」

その言葉が聞ければ十分だ

俺は冥琳をその場に残し、人気のない所に向かった……

第54話（後書き）

冥琳の病気の時期がわからなかったからここでやった

後悔も反省もしていない

最終的にハッピーエンドになればいいと思います

あと、美羽さん、七乃さん、ごめんなさい
すっかり忘れてました……

第55話(前書き)

ようやく春休みだ

そして修正しなければ……orz

第55話

人気のない林のさらに奥までやってきた

ここまでくれば宴の音も聞こえず、また逆も然り

「おい、どうせ『視』てるんだろ？」

出てこいよ……あまつか天使」

はたから見れば俺は頭の可哀想な人に見えるだろう

だが、第三者はおらず、また実際にいるんだから可哀想だとは思われまい

(はいはい！)

呼んだかしら？)

「周りに誰もいないんだ
姿見せろよ」

「ぶーぶー」

これって結構めんどくさいんだよ？」

ホントにめんどくさそうあまつかな天使

「んな事知らねえよ
さっさと本題いくぞ」

「つーか、どーせ視てたんなら俺の言いたい事ぐらいわかるんじゃないんか？」

「あたし、あんたじゃないからそんなのわかるハズないでしょう?」「
あくまで白を切るのね……」

「じゃあ、言つてやるよ
代償なら何でも払うから冥琳助ける」

ならこつちだつて単刀直入に言つてやった

「あんたバカ?

そんなのできるわけないでしょうがっ!」

もちろんここでキレるのは折り込み済み
だから俺は予め用意していたセリフを言う

「それができるんだよ、俺がとあるカードをきつちやえばな」

「ああ〜ら?なら、そのカードとやらを見せてもらおうかしら?
ゴミみたいなカードだったらただじゃ済まさないわよ?」

結構マジトーンの天使あまつか

「俺の命」

そんな天使あまつかに対して俺は短くそう言う

「……は?」

わけわかんないといった風の天使あまつか

「今や、俺の行動はお前らの世界では一大エンターテイメントとして、かなり人気のある娯楽の一つなんだろう？」

「……ええ、そうよ」

今天使あまつがの頭の中は混乱しているだろう

次に俺が何を言うかによっては、もしかしたら自分の立場が危うい事になると思ってるのかもしれない

「例えばの話をしよう

ドキュメンタリーの主人公が不慮の事故で死んだら観客はどう思う？
きつと『……ああゝあ』と落胆したり、『……えっ？』って、驚く人がほとんどだろう

じゃあ、大きな戦闘で格好良く死んだら？

この場合はほとんどの人が『格好良い』と思うだろう

なんせ、そういう風に見せる死に様だったのだから

ここで天使あまつがに問題だ

今言った二つの例、主人公が死ぬ事とは他に共通点がある
それは何でしょうか？」

「それと周瑜公謹の件の繋がりがわからないんだけど？」

どうやら天使あまつがはさっさと結論を言えと仰る

「まあ、そんなに慌てるなって

正解はどちらも最終的には観客は納得してくれる、だ
じゃあ、逆に観客が納得しないシチュエーションは？
そんなの簡単だ

『主人公の自殺』」

「つまりあんたが自殺すればこのドキュメンタリーを見ている人達は納得しない、と
で？それが何で脅しになるのかしら？」

これは正直賭けだ

それもリスク（今後サポートを受けられない可能性）の高い
だが、リターン（冥琳の命が助かる）も高い
なら乗らないワケがない

ローリスク、ローリターンばつかの人生なんてクソ食らえ
そんなの人以下の家畜の生活だ

「わからないか？」

納得しない人達はそのドキュメンタリーの責任者にクレームをつけてくる

もちろん責任者ってのは上の立場、つまり今回だとお前の上司になるわけだが…何事にも例外が存在する」

ここまで言った所でようやく天使の顔あまつがに焦りの色が見える

「その例外は唯一俺と接触できて、俺と交渉できる立場にいる人物
…つまり、お前だ」

「あんたもしかして私の事脅してる？
そんな事で私があんたの言う通りにするとでも？」

まあ、普通はしないだろうね……

「知らないのか？」

俺は無理を通して道理を引っ込ませるんだぜ？」

そう言って、短剣を頸動脈に当てる

「似非零時迷子忘れてない？」

「二回やればいい」

「……………」

「……………」

「……………二ついいかしら？」

「自由」

しばらく沈黙した後、そうあまつか天使が言ってきた

「一つ、周瑜公謹はあなたにとって命をかける程の人物なのかしら？
二つ、他の兵達にも命があれば真名もある
他の兵達が同じ様な事になったら今と同じ事をやる？
やらないならその違いは何？」

「三つじゃねえか……………まあ、いいや
多分三つ纏めての回答になるかもしれないけど、俺はどんなに武が
強くとも一人の人間で、できる事は限られている
救える人だつて多くない

だから悪いと思うが、他の一般兵よりも冥琳や雪蓮達みたいにこ
く一部の交流ある将じゃないと命はかけないさ」

「随分我が儘な主人公ね」

「現実的と言ってくれ

……で、結局治してくれんだろ？」

「代償は……」

「任せる

命でも何でも好きにしろ」

「じゃあ、今何にするか言っわ

あなたに求める代償は……」

……

……

…

あまつが
天使と別れ、再び宴の場に戻ってくる

ってか、未だに酒盛り続いでる事が凄え……

つか、雪蓮と祭はまだ潰れてないの!?

「あつ、ナシッ!

こっちきて一緒に飲もおよ」

その上まだ飲むのっ!?

「儂もまだまだ飲むぞお!」

祭もまだ飲むのっ!?

「…………お前ら元気過ぎだろ…」

俺が呆れて言うと

「いやいや

儂が若い頃はこの数倍は飲んでいたぞ?」

「あら、私だってまだまだいけるわよ?」

…………こいつら化け物かよ…

「俺そんな飲めねえって…………」

そう言っつて俺は二人の席に座ってちびちび飲む

そして飲みながら周りの惨状を見て吹き出しかける

美羽とシャオがハチミツ水をどちらが多く飲むか、とかいう非常に不毛かつ意味不明な事をやってる

それぞれのお目付け役的なポジションの七乃と蓮華はというと……

「続けて蓮華、尻文字いつきまゝす」

「蓮華様、素晴らしいです!」

……………見なかつた事にしよう

つか、思春は何やってんだよ……
止めるよ……

じゃあ、七乃は何処に……ってあつ、美羽達用の八チミツ水作ってる……

まあ、良く考えれば七乃が美羽から離れて何かするなんてほとんどないしな

ふと、後ろを振り向いてみると、宴の端っこでぬいぐるみをモフモフしている明命を見付けた
傍らには好奇心からか、チャック部分を物珍しそうに弄ってる穩もいる

そんな一部黒歴史になるような惨状を見つつ考える

一刀情報によればそろそろ赤壁の戦いが始まる……

魏との戦闘なんだからかなり大規模なものになるのは猿でもわかる

だが、こちらには圧倒的に兵数が足りない

長坂橋の時でさえ約50万人いたんだぞ？

あれから魏が兵を募らないわけがない

つまり最低でも50万人は集めないと話にすらならない

正確にはわからんが、多分今呉の総兵数は30万人いかないんじゃないか？

ここから導かれる答えは……

『蜀との同盟』

……あのヤンデレと同盟？

まあ、あちらとしても呉が潰されれば次は自身の所にくるのはわかっているだろうから、流石にバカな事はしないだろうが……

それでもやっぱり決め手に欠ける……

仮に同じ兵数になっても、兵の熟練度は魏の方が圧倒的にとはいわなくとも高い事は事実だろう

前世ならとりあえず重火器とか持たせれば、ある程度はカバーできたんだが……

やっぱりこの世界に火薬がないのは厳しいな……

ん？

じゃあ、無いなら作ればいいんじゃないか！

間に合うかどうかはわからないが、まずは冥琳に相談だな……

~~~~~

S I D E へ あまつが 天使 へ

初めてのあたし視点で小躍りしたい程嬉しい！……んだけど……

ナナシの無茶な注文のせいで鬱になりそう……

でもまあ、あたしも頑張った方だよな？

代償だってナナシの……

「天使<sup>あまつか</sup>、話を聞かせてもらおうか？」

……ああ……やっぱり死神長的には見逃せないですよな……

「何の事でしょう？」

「とぼけるな！」

貴様、ナナシに独断でギブアンドテイクをしたそうじゃないか？

しかもテイクが相当ふざけた内容のようだが？」

うっは

めっちゃ怒ってらっしゃるよ……

こりゃ、下手な事言ったらクビになっちゃうね

「いや、一応私なりに考えあつての事ですよ？」

「聞かせてもらおうか？」

……ほとんどヤクザだよ……

「ぶつちやけた話、『似非零時迷子』なんてチートじゃないですか？  
だから、視てる人達が飽きないように『身体の耐久力だけ普通の人と同じ』にしたんですよ」

「それがどういう事かわかっているのか？」

「ええ、もちろん」

『普通の人<sup>が</sup>耐えられる範囲内であればどんな攻撃を受けても生きてられる』でしょ？」

「それを視聴者は納得するとても？」

「さあ？」

でも、あのナナシの覚悟を視ていたなら、納得してもらわないと困りますよ」

「……………ならばよい」

責任はお前が持つように

これからもより一層頑張りたまえ」

そう言つて死神長は消えてしまった

「……………怖かった……………」

つーか、ナナシのせいだとんだとばかりよ

あいつには責任とつてもらつて魔界パフェDXジャンボverでも奢ってもらいましょうか

そう毒づく<sup>あまじか</sup>天使だが、その顔には不満などは一切なく、代わりに笑顔が浮かんでいた

## 第55話（後書き）

……ええ〜…冥琳死亡回避はこんな感じでしょうか？

一応作者的にはこれですっきりできたのですが、読者の皆さんはどうでしょう？

厳しくないコメント期待したりします（苦笑）

## 第56話（前書き）

皆さん、お久しぶりです

作者のそばつゆです

一応今までの所で、指摘していただいた修正箇所を修正しました

他にも何かありましたら指摘してもらえると作者は泣いて喜びます

では、本編どうぞ

## 第56話

宴が明けて翌日

俺は自室で朝から問い詰められていた……

「ナナシ！お前一体何をしたっ！？」

問い詰めてるのは言うまでもなく呉の大軍師、冥琳さん

その冥琳さんは朝いきなり部屋に入ってくると、寝ている俺の上に馬乗りになって襟をガクガク揺すって叩き起こし、先の事を宣った

「……………はて？何の事でしょう？」

昨日ちよつと遅かったからもう少し寝させてくだs……」

「質問に答える！

昨日急に身体の調子が良くなったから、不思議に思い医者にも診てもらったのだ

そしたら、医者でも不思議な事に私の身体には異常が見られなかったそうだ

……………昨日お前は何をした？」

有無を言わさない冥琳の迫力に俺は後頭部の髪をかきながら体を起こす

すると冥琳もベッドから降りて話を聞く体勢になる

「大したなんて事してないさ  
ただちよろつと祈祷しただけ」

「ふざけるな！

ただの祈祷で私の病気が治るとでも？

本当の事を言え」

冥琳は尚も食い下がる

「つーか、治ったんだから別にいいじゃん、そんな細かい事」

「いいわけあるか！

……私は…私と雪蓮の二人はお前に命を救われたんだぞ？

それを細かい事扱いして……」

このままはぐらかしても埒があかないと思い、ぱっぱと話を終わらせる事にした

「俺は別に特別な事やって助けたわけじゃねえよ

雪蓮の時はたまたま俺が刺客に気付いてたからで、お前の時はたまたま俺に助けられる手段があったから

ほら、大した事じゃないだろ？」

「大した事だろう！

それに私が聞いているのはどうやって私を助けたのか、理由じゃなく手段を聞いているのだ」

「だから祈祷だって

知らないのか？死神の祈祷は一生に一回奇跡を起こすんだぜ？」



流石に冥琳もこれ以上は無意味と思ったのか、何も言わなくなり溜め息をついた

「……はあ……じゃあ、もう追及はせんよ……  
そのかわりに一つだけ言わせてくれ」

「はいはい？」

「私より先に死ぬなよ」

そう言つて冥琳は部屋から出ていった

やれやれ……

冥琳のせいでまた死ねない理由が増えてしまった

~~~~~

SIDE〜雪蓮〜

宴から翌日の今日

私孫策伯符は玉座の間にて非常に困った事になっていた……

それは………一日酔い

「それは姉様の自業自得でしょう？
さあ、昨日の分の仕事してください」

「蓮華が冥琳みたくなっただけ……」
「姉様っ！」

と、カワイイ妹とじゃれあっている

「雪蓮様、魏の曹操さんと蜀の劉備さんから竹書が届きました」
「それがやってきた」

「そういうのって普通冥琳に見せるんじゃないの？」

「……いえ、姉様。本来ならば国の王が目を通すのが常です」

「あらそうだったっけ？」

ペロツと舌を出しておどけてみせる

「それで穩よ、竹書には何て書いてあるのだ？」

いつの間にか玉座の間に来てきた冥琳が穩に促した

「はいはい……ええとですね、まずは魏からですね

『此度の戦、こちらとしては本来なら正面から英傑同士、正々堂々とした聖戦をするつもりであった

だが、勘違いしたこちらの部下が先走った事をしてしまい、結果孔

融という有能なる将を暗殺してしまった事を深く謝罪したい
お詫びとして、そちらから攻めの姿勢が見られるまで魏から呉への
攻撃は一切しないとここに誓う

そしてこの竹書と共に愚かな元部下全員の首を届けさせておく

曹操猛徳』

だそうですよ」

へえ〜…

いかにも曹操が好きそうな戦理由ね

「穩、蜀からは？」

「劉備さんからはですね……………これって読まないのダメですか？」

読もうとして渋る穩

「そんなに変な事が書いてあるのか？」

「変というか何というか……………」

じゃあ、とりあえず読みますね〜？

『孔融さん、死んじやっただって？それはよかつて…じゃなくて、
嬉し…でもなくて、ええつと…そうそう、お気持ちお察しします
？）

劉備玄德』

「「「「……………」

……………劉備って子はナナシと仲悪いのかしら？

あまりに対極な竹書の内容に、玉座の間の皆は絶句するしかなかった……

~~~~~

S I D E 〱 ナ ナ シ 〱

あの後、冥琳が部屋から出ていった後大変だった……

二度寝する気にもなれず、しょうがないから朝食でももらいに行くか、と着替えを始めた時、タイミング悪くシャオが部屋にやってきたしかもズボン履き替えてる時に来たもんだから、もつづるさいのなんの……

しまいには脱ごうとしますから余計に体力使った

お陰で朝から結構グロッキー状態だ

ただでさえ昨日の疲れが残ってるのに……

そんなグロッキーな俺が朝食を摂ったのはついさっきの事

今は今日の分の仕事をもらう為、冥琳を探しているところ

……つーか、なんで朝来た時に聞かなかったんだろ、俺……

んで、今警備の兵に聞いて玉座の間に向かった事が判明

丁度扉を開けようとした時にそれは聞こえてきた

『孔融さん、死んじゃったんだって？それはよかつて……じゃなくて、嬉し……でもなくて、ええつと……そうそう、お気持ちお察しします（？）』

劉備玄德』

……もうね、これくらいの事じゃ驚かないよ？

多分竹書とか送ってきたんだと思うけど、その竹書でさえ本音駄々漏れだとか、内容があまりに酷いとか……

とりあえず、どっちにしろ冥琳に会わないと先に進まないの、玉座の間に入る

「おはーっす

冥琳いるか？」

「もう昼だがおはよう

何の用だ？」

「今日の分の仕事をもらいに来たんだ」

「ほう……それは感心な事だ

何処かの誰かにでも見習ってもらいたいものだな？」

そう言つて冥琳は雪蓮をジト目で睨む

「そうです姉様！

二日酔いなんてバカな事言つてないで仕事してください！」

……あつ、流石に二日酔いにはなったのね……

「……大きな声出さないでよ  
頭に響くでしょう」

人はそれを自業自得と言っらしいですよ？

……と、いつものやりとりをしている俺らだが、皆さっきから俺の方をチラチラ見てくるのだ

特に蓮華と雪蓮が

「……ね、ねえナナシ？

今ね、魏と蜀からあなたの事で竹書が届いたの」

ああ……なるほど……

多分毒で死んだ事になってる俺と呉に対しての謝罪文とかかね  
それで俺はタイミング悪く蜀の方のみ聞いたワケね

「それで、魏はしっかりした内容だったんだけど……もしかして蜀には嫌われてる？」

まあ、そう思われても仕方がないよね

「まあ、蜀につつーより劉備にだね……」

できれば彼女の事はあまり思い出したくない……  
トラウマって、きつとこういう事をいうのだからね

「ぶむ……」

それだと少し厄介だな……」

冥琳がそう思案顔で呟く

「もしかしてそれは同盟的な意味で？」

「……っ!？」

「……えっ？」

冥琳、蜀と同盟するつもりだったの？」

蓮華が冥琳の反応を見て驚いている

「ちよつと考えてみればわかる事だろ、蓮華

今大陸に残ってる諸侯は魏、呉、蜀の三つ  
じゃあ、この中で一番強いのはどこだ？」

「……えっ、私!？」

そんなの我等が孫呉に決まってるでしょう?」

蓮華はそんな事を当たり前のように宣った

「蓮華、そりゃ私だってそう思いたいけど、冷静に考えて?  
今呉の兵数はどんなにかき集めても30万人いかないのよ?  
蜀だって似たようなもの……」

それに対して魏は約60万人はいるわ  
この差は結構なものよ?」

「しかし姉様!

蜀が同盟に応じてくれるかどうかわからないではないですか」

「いや、魏は一国による天下太平を目指している  
つまり、魏が呉を滅ぼせば、蜀も同じように滅ぼされる  
だから、蜀としても同盟は考えているはずなんだ」

ただ…

と付け加え

「ただ、問題は劉備玄德と孔融文挙の仲の悪さだな…  
俺としては何の蟠りもないんだが、あちらがな…」

「理由を聞いても？」

「知らん……と言いたいが、生憎な事に俺の存在自体が気に入らな  
いらしい」

「……それはまあ、何というか…」

流石の冥琳もこれには閉口するしかなかったらしい

「まあ、それはそれとして！

魏と蜀に返答するんだろ？」

特に蜀には同盟の話も持って」

俺は話を反らすべく、劉備の話から進めた

「そうだな…」

魏はともかく蜀にはちゃんとした人材も派遣しなければな…」



まあ、多分俺が行く事になるんだろっけどな………に

## 第56話（後書き）

さて、ここでアンケートです  
決して手抜きではありません  
手抜きではありません

大事なので二回言いました

アンケートなのは他でもありません

最後の『……………』の部分

ナナシがどっちに行くかです

えっ？両方？

書きたいの山々なのですが、時間系列的な問題で難しいのです  
ただし、アンケート結果が多かったならば、作者は頑張ります

皆さんのアンケート協力よろしくお願ひします

## 第57話（前書き）

皆さん、地震及び津波は大丈夫でしたか？

そばつゆは関東にいたので食器関係と部屋の被害で済みました

この非常時に何投稿してんだ？と自分でも思いますが、こんな時だからこそ皆さんに娯楽を、と考えての事なのです

では、本編どうぞ

## 第57話

「じゃあ、これから蜀に向かう人材を決めたいと思う  
自薦他薦問わないから誰かいないか？」

そう、冥琳が言う

とりあえず俺はパスだな！

あのヤンデレさんの所に自分から行くなんで、俺は人生諦めてるワ  
ケでもドMなワケでもない

「無難に亞莎と穩ではどうじゃ？」

祭が発言する

ちなみに今この場には先程の面子＋祭、穩、亞莎、思春、明命の総  
勢9人だ

美羽と七乃には町を警邏（とうけい）という名の厄介払い（やくがい）してもらってる

「ふむ……」

ではそれで決まりだな……」

「あ……できれば亮も一緒じゃダメか？」

「羽延もか？」

それはまたどうしてだ？」

「いや、特に理由らしい理由じゃないんだが、あいつにも色々経験してもらいたいからな」

「今後の経験の為、か……」

別にいいんじゃないか

私は特に反対する理由はないな

二人はどうだ？」

そう言つて穩と亞莎に振る冥琳

「私は別にいいですよ」

人数いた方が賑やかで楽しいですし」

「わ、私も大丈夫です」

二人も快諾してくれた

じゃあ、後で亮に言っておくか

「ん、ありがとう

亮には俺から伝えておくから、出発の日にちとかはそっちから伝えてくんね？」

「了解した

で、次なんd……」

「あつ、それとな冥琳

魏に行く使者なんだが、俺がやってもいいか？」

「……………え？」

俺が何気なく言ったその一言で確かに時は止まった

「ん？皆どうした？」

「どうした？じゃなーい！

あなた魏に何されたかわかってるのっ！？」

蓮華が珍しく吠える

「んー、一応？」

「一応？じゃないわよ！

あなた殺されかけたのよ？」

「んな事言ったって、やったのは魏のバカな兵達だろ？」

「ーか、曹操は返事の使者に粗相するような奴じゃねえだろ」

「それは……………そうかもしれないけど……………でも！」

尚も食い下がる蓮華……………というか皆に言う

「いいか、よく考える？」

俺が考え無しに魏に行くなんて言うと思うか？」

「では、その考えとやらを聞かせてもらおうか？」

若干ジト目気味の冥琳が言う

「……………冥琳さん、もしかして怒ってらっしゃる？」

「ええっと……………冥琳さんもしかして怒ってらっしゃいます？」

「当たり前だ！」

今朝言った事をもう忘れたのか？」

『私より先に死ぬな』……………ね

「や、そういうワケじゃないんだけど……………  
つか、皆勘違いしてね？」

別にこのまま行くわけじゃなくて、一応一般兵として変装して行くつもりだし、俺ならただ使者で終わるよりも有益な情報とか掴めるかもだろ？」

俺の言う事に一理あると思ったのか、周りからの視線の強さが和らぐ

「……………でも私はナナシに行つてほしくない……………  
もうナナシに危ない事はしてほしくないの……………」

それでも蓮華は俺に行つてほしくないと言う

まあ、俺には前科（？）があるからなんだろうけど

「蓮華……………なら約束しよう」

そう言つて俺は蓮華に紅蓮と朧月を渡す

「……………約束……………」

「ああ、約束だ

俺の大事な得物を蓮華に預ける  
預けるんだから俺はまた受け取らなければいけないよな？  
魏から帰ってくるまでお前が持つててくれ  
んで、帰ってきたら必ず返す事  
これが約束……できるよな？」

「……………うん」

すると、涙目気味だったがしっかりと頷いてくれた

それを確認して、周りを見渡す

「雪蓮達もそれでいいよな？」

「私は無事に帰ってくるのなら……冥琳は？」

「私もだ

だが、必ず無事に帰ってくるのだぞ？」

他の面々を見ても同様の反応をしてる

ならこれで問題は消えたか……

「よくなーっい!!」

……そういえばまだシャオの説得も残ってたのか……

玉座の間に勢い良く入ってきたシャオを見てゲンナリした



また説得しなきゃいけないのか、と……

~~~~~

SIDE 冥琳

またナナシは私達に心配をかけるような事を……

まあ、ナナシが何の根拠も無くあんな事を言い出すわけがない
今回もきつと言ってた通りの、少しでも魏の情報を無事に持って帰
ってくる事だろう
だから、そこはもうあまり心配していない

問題は皆が各自仕事しに行った（雪蓮はいわずもがな）後にナナシ
に注文された事だ

「ちよつと前」

「冥琳、ちよつといいか？」

「ん？どうした？」

ナナシには魏に行く為の準備があり、仕事は他に回した為、特に仕
事で云々はないはずだが

「蜀と同盟結んだら、呉蜀共同で作成して欲しい物があるんだ」

「作成して欲しい物？」

「いや、製造と言った方がいいかな？まあ、そこはいいか……」

「ほう……」

「どんな物だ？」

「『火薬』と呼ばれる兵器だ

こいつがあるのとないのと差は、ある程度の兵力差ぐらい簡単にひっくり返せる程だ」

「そんな凄い物があるのかっ！？」

そのナナシの『かやく』とやらの説明に、今までにない知識に対しての知識欲と対魏への期待が生まれる

「ああ……」

だが問題があつて、こいつは作るのに時間とそれなりの知識が必要で、尚且、数も必要だ

正直、同盟結んで直後から作業しても魏との決戦に間に合うかどうか……

なるだけ最優先でやってくれるか？」

「ああ、わかった

して、それはどうやって製造するのだ？」

「ちよつと長いから竹書に書く」

そう言つて竹書に製造法を書いていくナナシ

それを見て引つ掛かりを覚えた

「なあ、ナナシよ

一つ質問してもいいか？」

「ん？作り方でわからない所でもあったか？」

「私でも聞いた事もないような兵器、そしてその製造法を何故ナナシが知っている？」

そう

この『かやく』とやらは私の知識に無く、そして恐らくこの大陸でも知ってる者はいないだろう

何故そのような物をナナシは知っているのだ？

「大したタネがあるワケじゃないさ

俺は呉に来る前に天の御遣いに会った事があり、そこで色々聞いたんだよ」

ナナシはあっけらかんと答えた

「すると魏もこの『かやく』を用いるのではないか？」

「それはないな」

だが、私の当然とも思える疑問を即否定した

「その理由は？」

「孔融文挙と天の御遣いの頭の出来の差別にあつちも頭が悪いワケじゃねえけど、俺は……自分で言うのもあれだが、ずば抜けて頭が良いただそれだけだ」

あの時はそう言って締めくくられた

にしてもこれだけの量を聞いただけで覚え、そして自分の知識にしまつとは……

ナナシが味方で本当によかつたと思う

~~~~~

SIDE 〱 ナナシ 〱

冥琳に火薬の事聞かれた時、一瞬心臓が止まるかと思つた……

一刀のせいにしちゃつたけど、こればかりはしょうがないよね？  
まあ、実際一刀じゃ火薬の原理なんてわからなそうだけど

さて、亮に今後の事を伝えにいつてきますか……

そして俺は孔融隊の宿舎に向かって行った

## 第57話（後書き）

と言う事で魏になりました

アンケート結果では1：6でした

アンケートにご協力してくれた方々、いつも作品を見てる方々、ありがとうございます

これからもたまたまアンケート（手抜きではないですよ？）やるかと思いますが、よろしくお願いします

## 第58話（前書き）

東北は天災後も原発や今後の生活面での不安等、大変な状況が続いています

特に原発の件は被災者の方々だけでなく、場合によっては東日本全域に影響を及ぼし兼ねません

その中でわりかしいつも通りの生活をしている自分に腹ただしい思いがします

そして、そんな生活をしているからか、いくら口で良い事を言っても、それが全て薄っぺらにしか聞こえてこないのも歯痒いです

だったら、いつも通りバカみたいな作品を投稿していくか！  
と思います

## 第58話

~~~~~

SIDE 亮

いつものように孔融隊宿舎で隊の皆と馬や武器の整備をしていた
本当ならこの後町の警邏をするはずであったが、孔融様が用事があると私を尋ねてきた

「どうしましたか？」

「ああ、なんつーか悪いんだけど、亞莎と穩と一緒に蜀に行つてくれないか？」

「……はあ

それはまた理由を聞いても？」

蜀といえば元主である公孫贛殿がいる州ではないか

……それに孔融様を毛嫌いしている劉備殿も……

「まあ、魏との戦に備えて蜀との同盟の為にな……
それとお前にちよつち劉備への伝言を頼まれてほしい」

「はあ………了解しました

その伝言とは？」

「多分劉備は俺の部下とかそういうのだけで色々わけわからん事言ってくると思うんだ

そしたら一言、

『魏を放っておけば、お前の大好きな白蓮も殺される

呉と同盟するならばそんな事には絶対にならない』

って、伝えてくれ」

「つまり劉備を脅す、と？」

「まあ、似たようなもんだな

落陽で一回会ってるから大丈夫だろ？」

確かに会いましたが、もうできれば劉備殿には会いたくないのが本音でも孔融様の頼みならば！

「ではその役目、慎んで承ります
いつ出発なのですか？」

「ああ、それは穏か亞莎が決めるらしいから、それに従ってくれ」

「畏まりました

では、私は準備にまいますので、これで失礼します」

「おう

じゃあ、よろしく」

そう言っつて孔融様は宿舎を後にした

……では私も準備をしますかね……

~~~~~

SIDE 〱 シャオ

もう！

なんでナナシはシャオと一緒にいる時間短いくせに魏なんて行っちゃうのかなっ！

もしかして私、あんまり愛されてない……？

「ねえ、明命はそこにとどろくと思うっ？」

「えっ？」

何の事ですか？」

「だから、ナナシはシャオの事を愛しているのかどうか、よずっとその話してたでしょ！」

「……はあ……」

してなかったような気がします、ナナシ様が小蓮様を愛してるかどうか、ですか……」

「うんうん

で、どう思うっ？」

「正直に申しますと、こればかりはわかりはわかりませんが、直接聞いてみるのはいかがでしょう？」

「うーん……」

それができればいいんだけどね……

乙女心は複雑なんだよ」

「はあ……そうですか……」

「あっ、そうだ！」

明命隠密得意でしょ？ ナナシにちょっと探ってみてきてよ」

「えっ！？ わ、私ですか！？」

無理矢理！ 無理ですよ……」

「大丈夫よ！」

それにもかしたらあの『ぬいぐるみ』みたいな物も見付かるかもしれない……」

「全力でやらせていただきます！」

そう即答して明命は文字通り飛んで行った

これでナナシの気持ちもわかるかな？

まあ、何だかんだ言ってもナナシはシャオの事好きなのに変わりはないんだけどね！

じゃあ、なんで明命に探らせるんだ？とかは言わないでやってください  
きつと複雑な乙女心が起こした小さな暴走なんですよ

~~~~~

SIDE ナナシ

「と、いう事で悪いんだが鎧一式貸してくんない？」

亮と別れてから今度は兵の宿舎を訪ねていた

理由は魏に行く時に使う一般兵士用の鎧一式を借りる為

「……………別に構わないですけど、本当に気を付けてくださいよ…？」

それはきつとこないだの事を言っているのだろう

「そんなに心配しなくて大丈夫だって

俺がそう簡単に死なないのはわかっただろ？」

もちろん心配してくれるのは嬉しい

ただ、周りの皆が皆心配していると『俺、そんなに心配されるような人間？』って不安になっちゃうから

「孔融様がそう言うなら……」

そうしたやり取り後、鎧一式を受け取って、じゃ、魏に行くかって時、ソレを感じた

ソレは俺のする行動一つ一つを逃す事なく、まるで俺の呼吸まで見透かすかのように『監視』していた

……他国の斥候か？

いや、そんな事はどうでもいい

問題はそこではなく、『俺が監視されている』という事が問題だ

まだ他国、特に魏には俺の生存は知られてはマズイ……

……どうする？

力強くで取り押さえるか？

気付かない風を装って油断した所を捕まえるか？

それともさりげなく明命達に合図をするか？

……いや、ここは様子見だ

そもそも魏の斥候なんて曹操が許すはずがない

とか考えてると、ソレの主はさらに接近してきた
もちろん隠れながらだ

「何用だ？」

流石にこれ以上の接近はマズイと思い、声をかける

「……………っ!？」

接近は止まったが、出てくる気配がない

「……………にゃあ…にゃあ…」

「…なんだ、ネコか……………って、んなワケあるか!」

あまりのアレさに思わずノリツッコミしてしまったが、これでわかった事がある

アレは他国の斥候ではない

何故なら、斥候の類いなら、今この時点でネコの真似なんてバカな事やらずに、こここの脱出か目撃者(俺)の排除をするハズだからだ

「……………なあ、誰だかわからんがとりあえず出てこいよ」

「……………はい」

素直に出てきたのは、なんと呉が大陸に誇る隠密さんこと、明命だった

「…えっ? 明命?

なんで俺尾けてたん?」

護衛にしては不自然だったし…

「そ、それは……………」

すると明命は言い難そうにもジモジする

「そんなに言い難い事か？」

「ええ、まあ、少しだけ……」

そう言う間も少しバツの悪そうにしている明命

まあ、誰にだって言い難い事の二つや三つあるだろう

………きっと俺の尾行なんて意味不明な行動の理由だってそうなんだろう……

「あつ、いや、でもですね！」

急に大きな声を出す明命

「ん？」

「決してナナシ様の迷惑になるような事ではなくてですね……？
乙女の事情というか、なんていうか……」

ようは言えないって事か……

「……ああ、じゃあ、無理に言わなくてもいいや
それよりいつまで尾けてくるんだ？」

俺はもう魏に向けて出発する準備も出来、あとは着替えればいいだけ

ちなみに今俺が向かってるのは着替える為の更衣室

これが意味するのは……………THE・覗き

「……………っ！？っ／／／」

明命もようやく意味がわかったようだ

「と、いうワケだから、特に用があるんじゃないんならまたにしてくれないか？」

「（コクコクコクコク）」

まだ赤い顔…というか頭を凄い勢いで縦に振る

「じゃ、悪いな」

そう言いながら軽く片手を上げて更衣室に向かう

〕〕〕〕〕〕〕〕

SIDE〕明命〕

危ない所でした……………

あのまま尾けていたらナナシの着替えを……………っ／／／

……でも、なんでナナシ様気付いたのでしょうか？

私の隠密行動は、自分で言うのもなんですが、完璧だったはずですが……

……むむっ！？お猫様の気配がします！

……あっ、お猫様発見っ！！

明命は気付いていない

尾行がバレたのは、

その猫に対する異常なまでの

嗅覚がナナシに向いていたからだった

第58話（後書き）

次で魏か蜀に行ける

どっち先に行くか……

第59話（前書き）

ああ〜
…

プロット
予定にないイベントが書いてる内に浮かんでくる……

そしていつの間にか日にちは経っていくのであった

しょうがないじゃない

だってそばつゆが作者だもん

みつお

第59話

~~~~~

SIDE 亮

呂蒙殿や陸遜殿と共に蜀へ向かう日の朝

「亮、おはーっ」

孔融様が訪ねてきた

しかもまだ夜も明けきっていない時間に

「おはようございます

珍しいですね、この時間は鍛練してるかと記憶してましたが…」

そう

孔融様はあれだけ強いにも関わらず、毎朝よつぼどの事が無い限り鍛練を欠かした事がない

それも誰にも見付からないように深夜か早朝にこっそりと

何故知ってるかというと、以前、公孫賛殿の所でその鍛練を偶然見付けた

「ありや？バレてたか……」

これまた珍しく少しテレたように笑う

そこである時より疑問に思ってた事を訊ねる事にした

「孔融様はもはや大陸で一、二を争う武を持っているのに何故隠れてまで鍛練をするのですか？」

「んー、じゃあ、逆に聞くが、武の才能があるからといってその才能に胡座をかくような奴と、全く武の才能はないが、必死に武を磨く奴

この二人はどちらの方が戦場で生き残れる？」

逆にそんな問題を出された

孔融様はいつも答えを言うのではなく、こうやって『どうしてか？』を考えさせる

そして今までそれは私達孔融隊に生き残る術を与えてきた

「それは…その二人の戦場での条件が同じですか？二人の武は？」

「ああ、武器も防具もな…」

二人の武は才能あつた方が高いとする」

「ならば、才能ある方が生き残るのではないのでしょうか？」

「理由は？」

「普通に考えて他の条件が同じなら、武が強い方が生き残る確率は高いと思います」

「それはハズレだ  
戦場で一番生き残る奴は『臆病者』だ  
何故だか覚えているか？」

これは孔融隊ができてすぐに投げ掛けられた問題だ  
もちろん覚えている

「常に自分が生き残る事しか考えていない、からです」

それはつまり自分がどうすれば生き残れるかを本能でわかっている  
からだ、と以前孔融様は仰っていた

「そうだ

で、次点に生き残る確率が高いのが『往生際が悪い奴』だ  
ここまでで俺が言いたいかわかるか？」

「……いえ、全く」

正直、皆目見当もつかない

「生き残るだけなら『武』も『強さ』も必要ない」

「あっ！」

言われてみればそうだ

確かに必ずしも生き残るとは『勝つ』事ではないのだ

「ここで話を戻そうか

先の例で挙げた二人、特に後者の才能のない方だな

こっちは確かに強くはないが、必死に武を磨いて、強くなるうとし

ている

この二人の間には決定的な差がある……  
それは……『生への執念』」

「生への…執念……」

「どういう事だかわかるか？」

「言葉通りの意味ではないのですか？」

「まあ、まんまそういう事だな

んで、こいつは底辺から上がってきた奴にしか持ち得ない物だ  
才能は何であれ、元から持っている奴と持っていない奴はいる  
だが、それを開花させるのは各々個人の努力であり、実際に差があ  
るとすれば才能の有無ではなく、努力或はやる気の部分……」

「つまり孔融様は才能がなくとも、常に鍛練をしてる方が戦場で生  
き残る、と、そう言いたいのですか？」

「そうだ

んで、最初の質問に答えるが、ここまでで努力する奴としない奴の  
差は理解したろ？」

「じゃあ、もし才能があり、かつ死ぬ気で鍛練する奴がいたらどうだ  
？」

「…そ、それは……」

「俺は自分で武の才能あるとは思っちゃいない」

「いやいや……流石にそれは嘘ですよ」

なんか孔融様がいきなりわけわかんない事を言い始める

「いや、それがウソじゃなくてホントの事なんよ

俺は10才の時から強くなる為にできる限りの事をしてきた

それこそ今やっている鍛練と同じような事とかな……

それを俺はほぼ毎日7年間やってきた」

7年前からって……

「なんで10才の頃から鍛練してたんです？

7年前なら、朝廷もまだ安定していたし、焦って武を磨く必要なんてないでしょう？」

「死にたくないから」

「……？」

「例え今安定していても、いつ不足の事態が起こるか分からない  
もしかしたら、あの時やっておけば……なんて後悔してる間もなく死  
ぬかもしれない

だから、俺は生き残る為にできる事ならどんな汚い事だろうとやる」

「それが生への執念ですか？」

「俺にとっての、な」

正直、凄過ぎた……

僅か10才でそれだけの自分の考えを持ち、そして実行するだけの  
行動力……



……これも一種の才能ではないだろうか？

「して、孔融様

何の為にお互い出発の朝早くに来たんですか？」

確か孔融様も一緒に出発だったと記憶してましたが……

「ん？………あぁっ！！

そうそう、お前に頼みがあったんだよ」

「何でしょう？」

「美羽と七乃も連れてってくれ」

「………はっ？」

思わず間拔けな声が出た

「いや、多分これから魏と最終決戦だろ？」

それまでに少しでもあいつらには修羅場を潜ってもらわないと、いざって時に役に立たないんじゃないか、皆困るじゃんか」

……つまり蜀に行くのはそれだけで修羅場になると……

「わかりました

二人とは正門で待ち合わせでよろしいですか？」

「おう

じゃあ、俺はあいつら起こしてくるわ」

「……もしかして伝えてなかったのですか？」

孔融様の言い回しに不安を覚えたが

「んにゃ。そんな事ないって」

よかった

流石にそんな事は…

「当日にいきなり伝えてどんな反応するか見たかったから」

確信犯！？

「まあ、その辺はどうだっかっていいじゃないか  
どっちにしる急な事態に対応できなきゃ、これから使えない人材に  
なっちゃうだろ？」

これから…？

「これから魏との衝突以外で何かあるのですか？」

「ん〜？」

ああ、これは俺の予想だけだな、この魏との全面戦闘が終わったら  
きつと になると思うんよ」

「……………えっ？」

それはあまりに衝撃的な予想だった……

~~~~~

SIDE 〽 穩

さあ、いよいよ出発ですよ

昨日は蜀に着いてからの段取りを亞莎ちゃんと一緒に冥琳様に最終確認しました

その時改めて思ったのですが、やっぱりナナシさんは凄いですよね

あの『かやく』ですか？

あんな凄い威力を期待できる兵器なんて私知りませんでしたよ

「陸遜様、おはようございます」

今日からしばらくですが、よろしくお願いします」

「あつ、亮さん

おはようございます

こちらこそよろしくお願いしますね」

集合場所にはもう亮さんが来ていた……二人程増えて

「あの〽、そちらのお二人さんは？」

「美羽様と七乃様ですか？」

孔融様が今朝方一緒に連れて行って色々経験させてやれと」

またナナシさんの思い付きですか……

「了解しました」

美羽ちゃん、七乃さん、よろしくお願いしますね」

「……ふにゆ……zzz……」

「馬上でも寝れるなんて流石です！お嬢様！

あつ、陸遜さん、おはようございます

もうナナシさんったら酷いんですよ？

明け方いきなり部屋に来て

『今日お前ら二人も蜀に行ってもらおうから』

ですよ！

どう思いますか？」

……ああ、やっぱりナナシさんですか………というか、

「亮さんもなんですけど、なんで真名で呼んでくれないんです？」

七乃達はもちろん、亮だって呉將の皆と真名交換は済んでいる

それなのに七乃達も亮も真名で呼んでくれない

それを穩は言ったのだが……

「だって実はそれは口実で、真名呼んだ瞬間『くびちよんぱ』なんて嫌ですもん」

「いえ、私はまだ真名を呼べる程信用されていないので」

と二人は答える

んー、真名交換してるのに呼ばない方が失礼だと二人はわかっているのでしょうか？

「よっ！

皆揃ってるか？」

と、そこで呉兵の鎧を纏ったナナシさんが到着しました

「まだ亞莎ちゃんが来てないですね〜」

「お、お待たせしました〜っ！」

「あっ、来たみたいですね〜」

「よし

じゃあ、揃ったし行くか！」

ナナシさんが短くそう言って私達は正門を出ました

第59話（後書き）

あれ？

予定ならもう蜀或は魏でイベント起こしてるはずなのに、なんでまだ呉を出発した所なの？

意味わかんない……

第60話(前書き)

いや、本編60話ツスよ!?

びっくりドンキーツよ!

そして見てみたらなんと、さらにビックリ!

累計アクセス数1,500,000超えて、お気に入り登録も70
0超

本当に皆さんのおかげでここまでくれました!

これからもこの作品をよろしく願います

第60話

~~~~~

SIDE 関羽

玉座の間

今蜀の人は桃香様、朱里、星、そして私  
目の前に呉からの返信の使者がいる

陸遜伯言、呂蒙子明、羽延元瑜、袁術公路、張勲……

ただの返信の使者にしては面子が豪華過ぎる…

返信だけならそれこそ普通の兵でもいいはずだ

「遠路はるばるありがとうございます

今日はお疲れでしょうから、部屋に案内しますので、また明日改め  
て挨拶とお話をお伺いしますね」

朱里がそう言う

「んー、わかりました」

では、また明日改めてまして」

そして今日はお開きとなった



「朱里、呉からの使者の顔ぶれ……どう見る？」

呉の使者全員が玉座の間を離れた所で朱里に問う

「……………恐らくですが、同盟の話をする為ではないかと」

同盟？

「ええ……？ナナシさんの『いた』呉と同盟？  
ありえな～い」

「桃香様！自重して下さい！」

我々は孔融殿に長坂橋での大きな借りがあるんですよ！」

「はあ～い」

……………全く、何故孔融殿の事となると何故こつも……………

「多分それだけではありませんまい」

「星？」

気付くと星がすぐ近くまでやってきていた

「あの中にいた羽延という者……  
彼は孔融隊の者だ」

「じゃあ、彼も殺し……」

「桃香様！」

今度は朱里と被った

「桃香様、孔融さんとの確執は今更しようがないとしますけれども、今は蜀の運命をも左右する大事な時なんですだからお願いですから自重してください」

「……はあ〜い」

全く桃香様は……

~~~~~

SIDE〜亮〜

「本当に亮さんからナナシさんの事言うんですか？」

部屋に案内された後、私達五人は陸遜様の部屋に集まり、明日の事について打ち合わせをしていた

その中での議題で出た内の一つが、『孔融文學の生存』だ

これは同盟するにあたり、最も重要かつ最も強力なカードだ

これを伝えるタイミングや伝え方次第で同盟が決まると言っても過言ではないだろう

そしてその場にいた誰も（美羽以外）がそれを理解していて、その重要な役目を誰がするのかを話し合っていたのだ

「ええ、構いません

元より孔融様もそのつもりで同行させたのだと思いますし」

だが、この役目を負うのはそれなりのリスクがあった

「でもでもですよ？

もし劉備さんがその事を聞いて怒っちゃったりしたどうします？」

それは同盟作戦の失敗と同時に、亮達が死ぬかもしれない事を意味していた……

「いえ、そこら辺は大丈夫です

それについては孔融様から秘策を預かっています」

「じゃあ、お任せしてもいいのですか？」

ここでようやく話し合いに入ってくる呂蒙様

「ええ

ですから呂蒙様と陸遜様は同盟の細かい調整と『かやく』に関して
お願いします」

「はい！

任せて下さい！」

と、力強く言う呂蒙様

ちなみにこの間美羽様達は何をしていたのかというと……

「美羽様？」

大丈夫ですか？」

「りゅ、劉備とやらが睨んでたぞえ……」

「きつと美羽様が気に入らなかったんじゃないですか？」

「ひーっ！？（ガクブルガクブル）」

「大丈夫ですよ

きつとまた何とかなりますよ」

「そ、そうかの？や、やっぱり……」

主様が何とかしてくれるじゃるか？」

「ええ！きつとまたナナシさんが頑張ってくれますよ」

……というやり取りをしていたそうなの……

~~~~~

その頃のナナシは……

SIDE ～ ナナシ ～

「幸せは」

歩いてくれない

だから歩いて行くだね」

一日一歩 三日で三歩

さ～ん歩進んで二歩さ～がる」

………魏への道中で歌っていた………

~~~~~

SIDE ～ 亮 ～

夜が明け、私達は再び玉座の間に集まっていた

ただし、昨日と違うのは蜀の今いる将全員が揃っていた事だ

よくよく見ればかなり豪華な面子である

まず玉座に蜀の王・劉備

蜀の古参でありまた蜀の武の中心である関羽、張飛が脇に控える

逆脇には蜀の頭脳であり呉にまでその名を轟かす名軍師・諸葛亮

そしてその影のように目立つ事はないが、やはり蜀の頭脳の一部である鳳統

私達を挟むような位置に立つ趙雲と馬超

少し離れた所に弓の名手・黄忠と嚴顔が待機している

そして間の入り口を固めるように立っているのは人中の呂布

下手な事をすれば私達では到底勝つどころか生き残る事すら無理だろう

だが、孔融様ならきつとこのような時には『面白い』と言っだろう
ならば、私が萎縮するわけにはいかない

「おはようございます、蜀の皆様

早速ですが、こちらの要件からお話してもよろしいでしょうか？」

先手必勝

これも孔融様が教えてくれた事だ

どうしても勝ち目のない戦に立ち会ったなら、奇襲奇策先手必勝、
どんな事をしてでも相手に考える隙を与えず、自分の呼吸に引き込
め、と

自分の呼吸ならば、逃げる事も容易く、状況によっては勝てぬ戦に
も勝てるかもしれない

だからこそこの外交で主導権を握るのは大事なのである

「ええ、ではどうぞ」

昨日と同じく諸葛亮殿が言う

「では……いきなりですが、我々呉と同盟を結んではもらえませんか？」

「えっ？」

驚きの声は陸遜様と呂蒙様

それはそうだ

ホントは私は孔融様の事についてのみ伝えるはずで、同盟に関しては陸遜様と呂蒙様が伝えるはずだったのだから

そして逆に蜀の面々は予想していたのか、随分落ち着いていた

そして美羽様達は言わずもがな

予定通り何もしないでもらっています

「私達が呉と同盟する利益は何でしょう？」

「諸葛亮殿、それは私が説明するまでもなくわかっているのではないですか？」

諸葛亮殿は、きっと蜀の中では誰よりも早く呉との同盟を考えていただろう

その諸葛亮殿がこんな事を本当に聞いてくるわけがない

「あ、あの！」

魏に対抗するには呉も蜀も協力しないとダメだと思います！」

「何故そう思う？」

例えば蜀と魏が同盟をして呉を攻め、その後蜀対魏でも私達は構わないぞ？」

しかし、呂蒙様のそんな言葉は趙雲様に否定される

「それは嘘ですよ」

と、そこで陸遜様が初めて口を開く

「だって呉と魏の兵力差は凡そ倍ぐらいで、蜀さんも兵数は呉と大して変わらないですよね？」

で、そうしたら呉も蜀も単独じゃあ魏に対抗できないじゃないですか

それに魏の曹操さんは皆仲良く思考じゃないですしね」

まだ渋る様子を見せる蜀将

……いや、渋るといふよりこちらの情報を引き出そうとしているの
できるだけ自分達に有利な条件で同盟できるように

だったらこちらから手の内を見せてあげようではないか

今持てる最大最高の情報を

「時に劉備殿、貴女は確か公孫賛殿を溺愛していたと記憶しています」

「白蓮ちゃんは私の嫁だもん

当たり前でしょう？」

何やら他の蜀将が『あちゃー』って顔をしていますが続けます

「呉だけでは魏に勝てない、それは蜀にも当てはまりません。そこはいいですね？」

「……………続けてください」

……………あれ？

劉備殿の周りの空気の温度が下がったような……………？

「……………え、ええ

もし各々個別に魏と当たっては敗北は必至
そうなれば公孫贛殿が魏に殺されてしまいかも……………」

「そうなったら私は曹操さんを家畜の慰み物にしてから殺す」

冷たい空気を纏いながら言う劉備殿

……………腹痛がしてきました

「……………まあ、そう結論を急がないで下さい

しかし、呉と同盟する事によってそんな事態は万に一つも起きなくなりません」

「その理由は？」

同盟したいが為の方便だったら……………」

……………いや、もう本当に辛いです

チラッと美羽様達を見てみると、美羽様は立ったまま気絶していて、七乃様がそれを支えています

「ええ、承知しています
では理由ですが、それは同盟するに当たって……いえ、そもそも前
提条件が間違っています」

これには蜀将全員が疑問の顔を浮かべている

「何せ、今現在も孔融様は生きています」

だから、私はできるだけ簡単な言葉を選んで言った

第60話(後書き)

次ぐらいにはナナシさんも魏入りできるよね……？

第61話(前書き)

最初に謝っておきます

ごめんなさい

理由は最後まで読めばわかるかと

異論反論は感想にて甘んじてうけます

第61話

~~~~~

SIDE 関羽

孔融殿が生きている……？

それが本当ならば呉と組み、魏との戦になっても何も不安要素はなくなると言っても過言ではない

「羽延殿、それは本当の事か？」

「むしろ関羽殿、貴女は孔融様が毒矢などで死ぬとでも？」

「え？」

最初意味がわからなかった

普通は誰でも毒矢なんかで射られたら死ぬんじゃないか？

「孔融様は死神です

毒矢程度では殺す事なんてできません」

「その話は信憑性がありません！」

確かに桃香様の言う通り信憑性はない

でも恋や星はその言葉を聞いた時、他の将とは違う意味で一瞬ではあるが目を見開いた

「そればかりは私達の目が死んでいないのが何よりの証拠、としか言いようがありません」

……ふむ

どちらにしろ呉と組まねば魏とは戦えん

それは呉としても同じ事

ならば孔融殿がいればめつけもんとして考えるべきか……

朱里と雛里はどう考えているのか……

そこまで考え朱里達の方を見る

「そうですね……

孔融さんがもし本当に生きてるのであれば、この同盟はこちらにとってもより望ましいものになるでしょう

では、同盟の件、結ぶ方向で話を進めましょう」

「ええ……

別に呉と組まなくったつ……」

「桃香様！本当に自重してください！

もう事は桃香様の個人的感情で済ましていい大きさではないんですよ……」

……まったく桃香様は……

「劉備殿、一つよろしいですか？」

羽延殿が桃香様を呼ぶ

言葉が丁寧なわりにその目にははっきりと怒りの色が見てとれた

「劉備殿と孔融様にどういった確執があるのかはわかりませんが、一つだけわかった事があります

それは劉備殿、貴女は王の器ではない」

その瞬間私と星、そして紫苑が動いた

「貴様、今何を言ったのかわかっているのか？」

「もちろんです

訂正する気もありません」

「ちよ、ちよつと亮さん!？」

「陸遜様、こればかりははっきり言わないと今後呉にとっても良くない事が起こります」

「言い残したのはそれだけか？」

「いえ、まだです

貴女方がそういきり立つのもわかります

何せ、自らの王をバカにされたのですから

でも、今は公式的な場であり、個人の感情を出していい場面ではありません

しかも、この同盟を結べなければ十中八九呉も蜀も魏に滅ぼされてしまうという大事な場で、貴女方の王はよりにもよって『孔融文拳が嫌いだから同盟はしたくない』と言ったようなものです

これでは貴女方ももちろん、劉備殿を信じてついてきている人々全

員が可哀想だと思い、先の発言をしました  
私が間違っているとお願いならば、遠慮なく首でも何でも跳ねても  
らって結構です」

…くっ!?

確かに羽延殿の言う事は正しい  
正しいが……

「羽延殿、確かに貴殿の言う事には一理も二理もある  
だが、それでも感情的に許せぬものもある  
それはわかるな？」

星……

「ええ、ですから私の事は好きにしてもらって結構です  
その覚悟を持つての発言ですから」

「……少しだけいいですか？」

「……桃香様？」

桃香様が羽延殿に近付く

「今のは貴方個人の考えですか？それとも孔融さんからの伝言です  
か？」

「私の個人的考えです  
でもきつと孔融様と同じ考えでしょう」

「……そう」



それつきり桃香様は何も喋らない

「桃香様？」

「ちよつと一人で考えたい事ができちゃったから部屋に戻るね  
朱里ちゃん、後の事よろしくね？」

そう言つと桃香様は玉座の間から出て行つた

「えっ！？あつ、桃香様！」

私も慌ててそれに続く

後ろからは朱里が戸惑いながらも同盟について話す事が聞こえる

「桃香様、急にどうしたんですか？」

部屋の扉に手をかけた所でようやく桃香様は止まつた

「愛紗ちゃん、私ね？確かに白蓮ちゃんの事好きだよ？でもね、それ以上に孔融さんに会つた時、『あつ、この人には何をしても勝てない』つて思つたんだ……」

突然何の事だかわからない

でも桃香様が何かを伝えようとしてるのはわかる

「よくわかんないよね？自分でも自分が何を言いたいのかわかんないもの

とにかく孔融さんは全てにおいて私より凄いつてわかつちやつたん

だ…

武も知も器も……

だからきつとあの時、初めて孔融さんと会って白蓮ちゃんと再会した時、白蓮ちゃん取られるんじゃないかと思ったんだ……」

……ようやくわかった

孔融殿を毛嫌いする理由

それは……

「今思えばただの嫉妬だったんだよね……

でも、それでも白蓮を、愛紗ちゃん達を取られたくなかったんだ……」

そしてそれが段々引っ込みつかなくなり、桃香様の一部となっていた、と

「でもそれもさっきの羽延さんの一言でわかったんだ

どんなに頑張っても私は孔融さんより上にはなれないって

孔融さんとは器が違うんだって」

「そんな事はありません！

私は……私達は桃香様だからついていくのです！

他の誰でもない桃香様だからこそ！」

「……うん

わかってるよ？

私と孔融さんは違うし、私は私のまま頑張ればいいんだって……」

「それなら……そう思っているならいいじゃないですか！

何が問題なんですか!？」

「私だって！私だって愛紗ちゃん達の役に立ちたいの！  
いつも頼ってばかりの皆からもっと頼られるような王になりたいの  
！」

それは桃香の魂の叫びだった

いつもほわほわしてる姿からは想像できないくらい必死な姿

きつとこれが桃香様の本音

なら、私もそれ相応に接する必要があるだろう

「桃香様、私達は桃香様に頼られて悪い気はしません  
それでも桃香はもっと頼れる王になりたいというのなら、私はもち  
ろん他の将達も協力します  
それに孔融殿に頼めばきつともっと立派になれますよ」

「でも、孔融さんは私に教えてくれないと思う  
今まであんなに色々言っちゃったから」

確かにそれは桃香様の言う通りだろう

でも孔融殿は桃香様を苦手にこそ思ってはいるが、嫌っていない  
なら、頼めば何とかなると思う

「じゃあ、孔融様にその気持ちやぶつけてみてはどうです？  
孔融様はそういう真っ直ぐな気持ち、嫌いじゃないですよ？」

「…えっ!？」

突然の声に振り向くと、そこには羽延殿がいた

「いや、私は同盟の細かい調整には役に立たないものでして…  
で、劉備殿はどうします？孔融様に相談するのであれば私も協力しますよ」

「羽延殿……」

「それ、本当……ですか？」

「孔融様は本音には本音を返す人です  
もし劉備殿が本音でぶつかっていくのならば、孔融様もそれなりの  
対応をしてくれますよ」

「じゃ、じゃあ………!!」

その時の桃香様は久しぶりに心から笑っているような気がした

第61話(後書き)

あれ？

まだナナシさん出てきてないッスよ？

いつになったら進むんだ……

## 第62話（前書き）

就活始まった……

できるだけ投稿できるように頑張る次第ではありません

## 第62話

こんちゃーっす！

自分、姓を孔、名を融、字を文學と申します

ただしそれは今や封印されし禍いをもたらす名……

今の我が名はルーイン・ブラムス・ヘルゲイナス

ソロモンの72柱からも外された最厄の魔神……

……ゴメン、調子こいた

あまりにもヒマだったからやってみたかっただけだよ、中二病ごっこ

っーか、なんだよ最厄の魔神って！

災厄じゃないのかよ！

とか一人ポケッツコミしていると町発見

「少し人と触れてこの荒んだ心を潤そう……」

そう呟いて町に入っつた

……  
……  
……

町は思ったよりも広く、また賑わっていた

「おばさん、肉まん二つ頂戴な」

近くにあった屋台に寄る

「はいよー」

あんた見ない出で立ちだけど、旅の者かい？」

「ん？ああ、まあ、そんな感じ」

「運が良いじゃないか

今丁度数え役満 しすたあずのらいぶがあるんだよ」

「数え役満 しすたあず？」

何だそれ？

「あんた知らないのかい？

あつきれた、本当に外からきたんだね……」

んな事言ったって知らないもん知らないし

「そう言われても知らないもんはしゃーないし……  
で、何なんです？」



両手を挙げ降参のポーズでおばさんに言う

「おい、かあちゃん！

俺あ、そろそろ天和ちゃん達のらいぶに行くべ  
後、店の事よろしく！」

その時、多分旦那と思わしき人が店先に出てきた

手にはそのらいぶとやらのチケットのような竹書を持って

「あつ、あんた丁度いい所に！

ちよつとそれ貸しな！」

「あつ！？」

言うतすぐにそのチケットと思わしき竹書を奪い、俺の所まで持っ  
てきた

「ほれ、これでらいぶに行ってきたな」

「はい？」

「ああつ！？」

「折角の機会だ

この穀潰しは仕事しないでらいぶらいいぶって……  
だから、こいつで行ってきな」

「そうか？」

でも何か悪いんじゃない？」

「いいんだよこんな穀潰しもたまには店番ぐらいしてもらわないと」

「よくないよ！」

俺が苦勞して手に入れた『ぷらちなちけつ』を！？」

「…と、言ってますが？」

「…か、これで俺が貰うって流石に結構罪悪感沸くべ？」

「いいからいいから」

そう言っただけ押し付けるように渡すお婆さん

「じゃあ、ここまでされると逆に悪いんで貰っておきます」

まあ、俺も流石にここで断るのも悪く思い、その『ぷらちなちけつ』と『とやらを受け取る』

そして会場の場所を聞き

「はいよ！」

じゃあ、行ってきな！」

その言葉を背に俺はらいぶ会場に足を向けた

会場が近づくにつれ、周りの男率と熱気が上がっていった

周りの話を聞くに、どうやら『数え役満 すすたあず』というのは

今人気のアイドルグループ名で、今日はそのライブらしい

こんな時代にねえ……

いや、逆にこんな時代だからこそか……

そして会場に入り、チケット……というか普通より半分程薄い竹書を見て、自分の席を探す

「おっ？大分いい席じゃねえか」

どうやら席は舞台に対し最前線のと真ん中

確かにこれはプラチナチケットだな

旦那さん、本当にゴメンな

俺は心の中でさっきの旦那さんに謝る

そして間もなくしてライブは始まった……

「みんな大好き——！！」

『天和ちゃん——！！』

「みんなの妹——！！」

『地和ちゃん——！！』

「とつても可愛いー!!」

『人和ちゃーん!!』

どうやらこれはこのライブの決まり文句らしい

全くの素人である俺がそんな事わかるワケもなく、アウエー空気

しかも周りの目が『なんでテメエやんねんだあ?』みたいな感じで俺さらに肩身が狭くなる

まあ、前世も含め、こんな娯楽味わった事がなかったから、丁度良い機会だろう

そう思い、色々な所を見る事にした  
すると面白い事に気付いた

所々に曹魏の旗や兵が見え、そしてあの歌ってる三人の服にも魏の牙門旗の刺繍が小さくあった

なるほど

曹操はやっぱり頭がいい

こうやって人気のあるアイドルが魏に属していれば、その追っかけとかが魏に入ろうとする

それにより人が増え、国力が増え、国が大きくなっていく

所々に見える魏の牙門旗やら兵達はその宣伝って所か

そんな事を考えてる内にライブも佳境

盛り上がりも最高潮に達していた

だが、最初からライブを観ていたワケでもなく、周りの空気と裏腹に俺の心や体は盛り上がってこない

……もうここに用はないかな

俺はライブを最後まで観ていけないという暴挙をなして会場を後にした

~~~~~

S I D E 〳 人和

「姉さん達、今日もお疲れ様」

「人和もね」

らいぶは大盛況の内に終了した

それなりに満足感も充実感もあったが、ただ一つだけ気になった事があった

「っていつか、あの一番前にいたお客さん何なの！」

「あつ、それ私も思った！」

私達の踊りを観てるわけでもないのにキョロキョロしてるし、途中で帰っちゃうし」

天和姉さんと地和姉さんの言う通り

一番いい席にいながらるくらにらいぶを観ずに帰っちゃったお客さんがいたのだ

いつも通りのらいぶをしたつもりだったはずなんだけど……

「天和様、皆様に会いたいという人が来ていますが」

見張りの兵が来客を告げる

「ふあん、かな？」

「ええ、ちーは今日もう疲れちゃった」

「ちょっと地和姉さん、ふあんさーびすも大切な仕事でしょ？」

「はあ〜い……」

「じゃあ、いいよね？」

今そっちに行くから少し待っててもらって

「畏まりました」

「はいじゃあ、準備して」

「はいはい」

そうやっていつも通りに過ごしている内に私達はさっきの事を忘れていった……

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

今日で魏のバカみたいな兵数の多さの秘密が多分わかった

これだけでも来た意味はあったといえるだろう

……あれ？

俺もう帰ってもいいんじゃない？

ウソです

ちゃんと曹操さんに会いに行きますよ？

~~~~~

「……でもその前に腹ごしらえするか……」

もう夜もいい時間になってきた

出発は明日の朝でもいいだろう

実はあの肉まん以来何も食べてない

「一報亭、ね……」

目に付いた店先の名を読む

「まあ、この際何でもいいか」

結構腹が減っていた事もあり、席に着くなりオススメを適当に注文
……しようとして手が止まる

別に大した事ではない
どうしたのかと言うと……

「………残りの金が少ない」

一応言っておくが、金が足りないワケでもないし、一報亭の料理が
高いワケでもない

ただ単純に俺の手持ちが少ないだけだ

「………焼売一人前とご飯お願いします」

できるだけ安くかつそこそこ腹に溜まりそうなものを選んだ

そして注文し終わった時、店にどこかで見た事ある顔が入ってきた

「今日もお疲れーっ！」

「地和姉さんもう少し静かに
他にもお客さんいるのよ」

「お姉ちゃんもお腹ぺこぺこだよ〜」

「天和姉さんも……」

……あゝ、ライブの時の三人組か
確かグループ名は……

「あつ、数え役満 しすたあずだ!!」

他にいた客が叫ぶ

そうそう、そんな名前だった

「ほら、大事になっちゃうじゃない……」

どうやらあのちっこいメガネが三人の纏め役みたいだが、ペタンコ
サイドテールとほわほわボインが自由人過ぎるようで、制御ができていない

可哀想に……

冥琳も雪蓮の相手をする時はあんな感じだったしな

そんな他人事だが、少し同情の籠った目で観察していると、料理が届いた

一旦観察を止めて料理を味わう事にした

まず焼売を一つ何もつけずに食べる

「おお〜…これは中々…」

噛む毎に皮の内側にある肉の旨味と……これはニンニクか？よくわからないが、隠し味が良い具合に交わり何とも言えない旨さを醸し出している

これは値段分以上に価値あつたな……

とか一人感想を洩らす

「天和ちゃん！握手してくれ！」

「地和ちゃん！俺の名前を呼んでくれ！」

「人和ちゃん！笑顔見せて！」

……外野でこんな五月蠅いのがいなければもっと旨かっただろうがな……

「いや！むしろ俺を罵って！」

っーか……

「お前らうるせえよ！」

メシぐらい静かに食べねえのか！」

あまりに五月蠅く、そして意味不明なセリフを言う奴らに我慢ならなくなり、つい叫んでしまった

だって、ここ飯屋だぜ？

いくらアイドルがきたからって、場をわきまえろって話じゃんか

「んだと、てめえ！」

そういつつもりで言ったのに騒いでたバカ共はなんか逆ギレしてくるし…

ああ、やだやだ……

だから面倒事は嫌いなんだよ

第62話（後書き）

中途半端ツスね……

まあ、次の展開はだいたいできているので、すぐに投稿できるかと
思います……メイビー

第63話(前書き)

そつえば、最近短編集やってない気がする……

読者の皆さん的にはこのまま本編投稿の方がいいですかね？

ちなみにそばつゆは本編の方が楽です

第63話

~~~~~

SIDE 地和

「あつ、あんたさっきの失礼な男！」

一報亭で今日のらいぶの打ち上げをする事になって、いざ一報亭に入ったらふあんに見付かつてうるさくなっちゃった時、そのらいぶを途中で抜けた失礼な奴が出てきた

「ああ？俺は別にお前に失礼な事なんてしてないぞ？」

「一番良い席にいたくせにらいぶをろくに観ずに途中で帰っちゃったじゃない！」

すると男は少し考える素振りを見せ、こう言った

「あつ、悪い……」

ぶつちやけあんま興味なかったわ」

「はあ！？」

ちよつと本当に意味わかんないんですけど！

「や、だって……」

「おい！てめえ、俺達の事無視して地和ちゃんといちゃいちゃしてんじゃねえよ！」

ちよつと！？

「別にいちゃいちゃなんt…」

「や、別にこんなんといちゃいちゃなんてする気がないし」

こんなん！？

「ちよつとあんた本当に失礼じゃない！？」

「まあ、そんな事より今は食事中に騒ぎまくってた不届き者の事だろ？」

そんな事！？

「不届き者だと！？」

てめえ、本当に死にたいらしいな！」

「なあ、とりあえず店の中だと他のお客さんの迷惑になるから、外出るよ」

確かにお店の人の目が厳しくなってきた

「おう！じゃあ、外でケリ付けようか」

そう言うと文句を言っていた男達は連れだって店の外に出て行った

「さて……あつ、すみませーん  
ご飯おかわりお願いしまーす」

が、失礼男はそのまま席に着いて続きを食べ始めた

「ちょっとあんたは行かないの？」

「だって俺は飯食いにここ来たんだぜ？」

外行ってもらったのは静かに飯食えねえじゃん」

とあっけらかんと言う失礼男

「つーか、お前らも飯食いに来たんだろ？」

折角だ、一緒にどうだ？

丁度お前らに話があつたし」

「えっ？」

「私達に話、ですか？」

人和が前に出てくる

きつと失礼男の表情から、真面目な話だと読みとつたのだと思う

あの姉さんすら姿勢を正す程真剣な表情だ

「そんな身構えんなって

お前ら曹魏の将か何かだろ？」



「将ではないけど、まあ、概ねそんな所ね  
それがどうかした？」

失礼男の質問に答えていく人和  
こういう時の人和は末っ子なのに本当に頼もしいと思う

「先日、魏が呉に侵略しようとしただろ？」

んで、その時に曹操の意に添わない一部の連中が呉将・孔文舉を暗  
殺した」

へえ〜…侵略しようとして、なんか知らないけどすぐに戻ってきて  
たけど、そんな事があつたんだ

「詳しい経緯は知らないけど、そんな事があつたのは聞いている  
それで？」

「その後曹操はその暗殺に関わつた連中を例外なく極刑  
その首を塩漬けにしてお詫びと謝罪と共に呉に送つた」

「曹操様ならそうするでしょうね  
で、あなたはその返事の為の使者つて事かしら？」

「」名答

んで、お願いなんだが、曹操の所まで連れて行ってくれないか？」

何、その子供みたいなお願い？

「あんた子供じゃないんだから、そのぐらい一人で行きなさいよ！  
ちー達だつてヒマじゃないんだから！」

「そうね」

まだ私達はらいぶが残ってるし、残ってなかったとしてもそのぐら  
いは使者なんだから、自分でやってほしいところね」

「いや、恥ずかしながら実は道がw…」

「てめえは何で外に出てこねえんだよ!？」

失礼男が何かを言いかけた時、さっき外に出て行った男達が手に角  
材や酒瓶やらを持って戻ってきた

「ああ、……で、何だっけ？」

……そうそう、恥ずかしい話なんだが、曹操がいる城までの道がわ  
かないから、案内して欲しいんだよ」

失礼男は男達を一瞥した後、何事もなかったかのようにさっきの続  
きを話し始めた

「てんめえ……」

流石にこの態度には男達も我慢の限界を超えたらしく、角材を振り  
かぶり……

「あつ、危ないっ!!」

だが、その角材が失礼男を襲う事はなかった

失礼男が当たる直前に振り返り、その角材を掴み取ったのだ  
そしてそのまま角材を握り潰し、呆れながら言った

「俺は今何してる？」

飯食ってるよな？ 食事中は静かにする

ガキでもわかる事だよな？

で、おたくらはその邪魔をしようとしてるワケだ」

「だ、だったらどうしたって言うんだよ！？」

男は完全に腰が引けていたが、それでもまだ気丈に言い放った

「失せろ」

たった一言

たった一言の言葉にこれ程の恐怖を覚えた事を地和は今までなかった

黄巾党時代に対峙した武の化け物、人中の呂奉先……

現在、地和達張姉妹が所属する大国曹魏の王、曹孟徳……

いずれも殺気、カリスマ、そのベクトル（力の方向）は違えど、スカラー（力の強さ）は勝るとも劣らないものだった

だが、この一言は地和……いや、天和や人和にとっても初めて感じた本物の死……

先の二人をも軽く凌駕する程の死のスカラー量……

直接言われてない地和達ですら死を感じたのだ  
直接言われている男達にどれだけ影響があったのかは安易に予測が  
つく

そしてそれを裏付けるかのように男達は…ある者は失禁し、またあ  
る者は立ったまま気絶し、泡を噴いて倒れる者までいた

「んじゃ、静かになった所で話の続きだけど、案内頼めない？」

そう言つて地和達に正対した時には、もうさっきまでの失礼男に戻  
つていた

「……………えっ？

ええつと……………」

そのギャップに話を振られた地和は戸惑い、しどろもどろになる

「じゃあ、その代わりに条件があるのだけど、いいかしら？」

そこでフォローに入る人和

「俺ができる範囲でなら」

~~~~~

SIDE 〳 人和 〳

「ちよつと人和！
本当に引き受けるの？」

「ちー姉さん、これは私達にとつても悪くない依頼よ」

そう

私達は道案内を引き受けた

そして条件として私達の護衛を提示した

明日の明朝に町の出口待ち合わせにして別れた
今は予約していた宿屋の一室で、ちー姉さんと天和姉さんとさっき
の事を話している

「…？どういう事？」

「天和姉さんも聞いて？」

あの人を護衛にする事でまず道中私達の身の安全は確保される」

背中を向けていたのに、死角からの角材を振り向き様に片手で受け
止め、そのまま握り潰す程の握力

そして、それをできて当たり前のように振る舞い、場を支配した

これ程の人物が武官でないはずがない

「そりゃそうかもしれないけどさ……」

それをわかっているも釈然としないちー姉さん

でも、もう一つの理由なら納得してくれるでしょう

「じゃあ、もし彼を曹操様に紹介したらどうなる？」

そう言うと天和姉さんが何か閃いたらしく、座っていた寝台から立ち上がった

「はいはい！」

きつとあの人を欲しがる！」

「ええ、そうね

言葉にあれだけの支配力を持てる人物を曹操様が見過ごすはずがないもの

呉の使者ではあるけど、あの時の事を私達が説明すれば必ずと言ってもいいくらい、引き抜こうとするわ」

そう言うと私も含め、姉さん達が身震いする

きつと『あの』失せる発言を思い出しているのだろう

「あつ、そっか！」

優秀な人材を連れてきたご褒美でちー達の活動予算が上がるかもしれないんだ！」

「もしかしたら、それに上乘せして個人的にも褒美がもらえるかもしれないしね」

「よぉ〜し！」

じゃあ、早速曹操様に早馬で知らせないと！」

まだらいぶ会場に兵士さん達残ってるよね？」

「それは私がやっておくわ、天和姉さん

姉さん達は明日の準備をして早く寝ておいて」

「「はぁーい！」」

返事を聞いて、私は部屋を後にする

さっきはこの道案内に消極的だった姉さん達も、報酬の話を出すと
とたんにやる気を出した

「……ふふ、現金なものね」

でも、私も姉さん達の事は言えないわね

そう呟いてふと思い出す

「そういえば、彼の名前を聞いてなかった」

まあ、それも明日聞けばいい事でしょう

私はあんまり深く考えず、らいぶ会場へ歩を進めた

第63話(後書き)

やっべえ……

人和の口調難しい……

やっぱりナナシ主観が一番楽に書けるわ……

以上、ダメ発言でした

第64話(前書き)

昨日はエイプリルフル！

皆さん、ウソはちゃんとききましたか？

作者はちゃんとききましたよ

『俺、ちゃんと今日中に次話投稿するぜ』

って、自分自身に

はい、じゃあ、白けた所で本編どうぞ

第64話

曹操んトコまでの道案内を頼んだ明朝

待ち合わせの町出口に俺はいた

まあ、普通にその場にいるだけで大層な事は何一つない

「おまたせ」

何して時間潰そうかと考えてると三人がやってきた

先頭にちっこいメガネ、そして続いてペタンコサイドテールとほわほわボインがそれぞれ馬を引いてる

「あれ？そっぴや、お前ら魏兵付いてないの？」

「ええ、その分あなたに期待してるから」

……なんか、いつの間にか俺過大評価されてね？

「ねーねー、それよりもあなたの名前、何ていうの？」

そっぴや自己紹介してなかったっけか

っーか、俺何て名乗ろうか……

「あぁ……、実はワケあって名前を名乗れないんだ

だから好きに呼んでくれて構わない」

曖昧に誤魔化す事にした

「あつ、じゃあ、私達と同じだね」

とほわほわボインが言う

同じ？

つて事は名前を名乗れない？

「天和姉さん！

あんまり言わなくていいの！」

そしてそれをたしなめるちっこいメガネ

「なあ、同じってどういう事だ？」

そう言うと、ちっこいメガネが言わんこっちゃないという風にため息をついた

「あんまり言いたくないんだけど、私達の場合は名前を名乗れないんじゃないくて、真名しか名乗れないの」

ん？どゆ事？

「まあ、わからなくても無理ないでしょうけど…

ちなみに私は人和

これから短い道中だと思うけど、よろしく」

と、ちつこいメガネ改め人和

「ちーは地和よ

ちなみにあんたの事は失礼男って呼ばせてもらうから、そのつもりでね」

ペタンコサイドテール改め地和

「はいはい！

私は皆のお姉ちゃん、天和だよ
よろしくね！」

ほわほわボイン改め天和

……ふむ

名前の件はよくわからんが、これが真名だったのはわかった

なら、それなりの態度を取るのが筋ってもんだろっ

「ああ、三人共よろしく

で、一つ訂正してもいいか？」

「何かしら？」

「名前、名乗れないって言ったけど、そっちがワケありとはいえ真名を名乗るんなら、俺も真名を名乗ろうと思う」

「気にしないでいいから

これに関しては私達の事情があるだけだから」

人和はそう言うが、そういうワケにもいかない

「まあまあ、そういうワケにもいかないだって
真名を名乗られたら、真名を名乗る
それが筋つてもんだ
そうだろ？」

「……………そうね

じゃあ、あなたの名前を教えてくださいら？」

「俺の真名はナナシ

ただ、できればここにいる面子以外の目がある時は真名で呼ばない
でくれるか？」

霞や凧達、それに風や稟…一刀に恐らく曹操達だって俺の真名を知
ってるだろう

……………あれ？

そしたら俺の真名、魏の将ほとんどにバレてね？何で？

「わかったわ

じゃあ、そういう時は何て呼べばいいの？」

「そうだな……………じゃあ、皇帝と書いて『皇』（みかど）って呼んでくれ」

「失礼男のくせに随分立派な偽名ね？」

「そのぐらいデカイ男になりたいって願いを込めてだ
っーか、偽名なんだから何でもいいじゃんかよ」

「それもそうね
じゃあ、行きましようか」

自己紹介で意外にも時間をくっていたらしい

少しずつ町に賑わいが出てきた

「よし

じゃあ、改めまして、これからちよつとの間だけどよろしくな」

そして俺達四人は町を後にした

~~~~~

SIDE 〱 曹操 〱

自室で内政に関する書類を整理していた時、その知らせはきた

「曹操様！数え役満 しすたあずから早馬が届きました」

天和達から？何かしら？

「わかったわ、通して頂戴」

「はっ」

そうして通されたのは、数え役満 しすたあずの護衛兼雑用係とし

てついて行った兵

「申し上げます

人和様より言伝てを曹操様に」

また無駄遣いでもしたのかしら？

「続けて」

「はっ

『先日の呉侵略戦の件で魏から送った使者に呉から返事の使者が私達と合流しました

彼の者は、曹操様の欲しがりそうな人材でもあります

今私達と共にそちらに向かっています

急ぎだった故、口頭で失礼します』

と人和様が」

今彼女達が公演してる場所から考えると……2日しない内に到着するわね

「そう……わかったわ

確かに一字一句間違はなく聞いたわ、ご苦労様

あなたも今日は休みでいいわ」

「御意っ」

部屋から出て行ったのを確認してもう一度考える

『曹操様の欲しがりそうな人材でもあります』

私の欲しがる人材？

呉の将で欲しい人材といたら、件の孔文举、それに宿将黄公覆、大軍師周公瑾、ぐらいかしら？

でも二人共有名な将だから、人和達でも名前を知ってるし、何より返事の使者にくるような人材じゃない……

無名の将か兵かしら？

「まあ、どちらにしる会って見ればわかるわね……」

相手が使者であるのにその事を考えずに、もう引き抜きのを考えてるのは流石は霸王曹孟徳といったところか……

~~~~~

SIDE 〱 凧

「沙和！真桜！警邏ぐらいちゃんやらさないか！」

今北郷隊の私達三人で町の警邏をしている

町はいつも通り平和で、変わりはない

それなのに目の前の平和が霞んで見えるのは、やっぱり私の気のせいではないだろう

こうやって真桜達を叱る声にもハリはない

でも、それは二人や他の将達にも言える事だ

だからそれを言い訳にする事なんてできない

「凧ちゃん、凧ちゃん！

ここのお菓子美味しいよ」

「そんなに急がなくてもええんやないか
町は平和そのものなんやし」

二人も気を使ってくれている
本当は二人も辛いはずなのに…

だからこそ私はそれに甘えるわけにはいかない

「駄目だ

ほら、警邏も後少しなんだから、最後までやってからな」

「おーい、皆ーっ！」

すると、城の方から隊長がやってきた

「隊長、お疲れ様です！」

「ああ、凧もお疲れ

……沙和と真桜も……まあ、いつも通りだな……」

「ほら、隊長だって呆れているじゃないか」

「まあまあ、たまには息抜きも必要だって
風だっていつもそんな気を張ってたら疲れちゃうだろ？」

「隊長！」

ですが、沙和も真桜も休んでばっかでろくに警邏をしません！」

「それなら別にいつも通りやないか？」

「ね〜」

「なお悪いじゃないか！」

はあ〜…

ホントにこの二人には…

「あつ、そつだ

明日か明後日辺りに呉から返事の使者が来るみたいだぞ？」

「……隊長〜、『空気』読める？」

「今のは沙和もないと思ったなの〜」

「…えっ？」

「……あつ、風スマン……」

「…いえ、そんなに気にしないでください
かえってこちらが悪いみたいですし……」

そう、これは別に魏の将が犠牲になったワケではないのだ

だから、こんな風になっているなんて許されない事…

なのに…

……………どうすればもっと強くなれますか、ナナシ様……………

第64話（後書き）

ようやく次でナナシの魏入り…

何やってくれんのかね？

第65話(前書き)

以下、戯れ言

就活をしていてふと思った

リア充に就職するにはどうしたらいいんだ!?

はい、本編どうぞ

第65話

町を出て一日ちよいで目的の、曹操のいる城下町が見えてきた

「へえ、やっぱり結構栄えてんだな……」

思った以上に栄えてる町を見てそう呟く

「曹操様頑張って治めてるもん」

当然といった風に言う天和

「数え役満　しすたあずの皆様、お疲れ様です！」

多分迎えの兵だろうが大きな声で俺らを呼び、駆け寄ってくる

でもそんな事したら……

「おっ！天和ちゃん！おかえりーっ！」

「地和ちゃんも待ってたよーっ！」

「人和ちゃんもまたご飯食べにおいでーっ！」

……ほら、囲まれちゃったじゃんか

っーか、進めないし……

「……どーすんの、コレ？」

「そこは大丈夫よ
いつも町の警備隊が規制して通れるようにしてくれるから」

人和がそう言うと、道の向こうからその警備隊とやらがやってくるのが見えた

そして、その中に懐かしい見知った顔を見付け、兜を深く被り直す別に恥ずかしさ等からではなく、単にバレない為にだ

「天和、地和、人和、おかえり
元気だったか？」

「うん、ちー達は元気だったよ
一刀も元気だった？」

「まあ、ぼちぼちね
……そちらが呉からの使者の人か？」

一刀が地和達から俺の方に向く

さあ、まずは第一関門だ

「自分、故あって本名と顔は明かせませんが、呉からの返事の使者として来ました、皇と申します」

「あっ、俺は北郷一刀
一応、天の御遣いって呼ばれてるけど、あんまり気にしないで普通

にしてください

……それに此度のナナシ…孔融さんの件は、こっちに非があったし…
心からお悔やみ申し上げます」

「あなたが天の御遣い様ですか…

お噂はかねがね……

孔融様とは真名で呼び合う程の仲とお伺いしています」

「あれ？

ナナシに聞いてたのか？」

「ええ

そこで御遣い様の事も聞いてました」

俺がその本人だけどな

「それは何か照れるな…

ナナシとは一応敵国だったけど、俺にはこっちで初めてできた男友
達だったから、もっと仲良くなっていければなって思ってたから…

…」

「……………」

その時、俺は何も言えなかった

俺にとってもこっちの世界で同性の友達は初めてだとか、ホントは
『俺がナナシだ』って言いたかった

でも、それは任務の事を考えるとできない事だった

俺にはそれが今一番辛かった

「……悪いな、湿っぽくなっちゃったな
じゃあ、今から華琳…曹操の所まで案内するよ
おーい、凧ー！後の事頼んだぞー！」

「了解しました、隊長！」

一刀が言うと、凧が返事をする

……凧もいるのか

じゃあ、尚更顔を晒せないな

そう思うが、やっぱり久しぶりに凧を見てみたい

そう思ってしまうのもしょうがない事で……

つい、凧の声の方を見てしまう

そして見たものは、俺らが通る為の道を空けている凧と沙和と真桜
だった

三人を見た感想は元気そうであった、だ

どうしても顔が弛んでしまう

そしてもう一度凧達を見た時、凧と目が合ってしまった

俺は慌てて顔を逸らしたが、余計不自然に思われたかもしれぬ

が、丁度野次馬の影に隠れた為、凧の視線から外れる

……もし、凧に俺がナナシってバレたら、どんな反応するのかね
……

~~~~~

SIDE 凧

数え役満 しすたあずの皆が帰還し、警備隊はその規制をする事になつた

だが、私にはただの規制ではなく、もつと何かが起こる、そんな気がしていた

そして、それは隊長に呼ばれて起こつた……

「おい、凧！後の事頼んだぞー！」

「了解しました、隊長！」

そう隊長の方を向いて返事をした時、恐らく例の呉の使者を見て驚いた

ナナシ様と似てる氣……？

そしてもう一度確認しようを見ると、今度は目が合った

その証拠に使者は慌てて顔を逸らした

そして目が合った時に感じた気……

今度はほぼ間違いなくナナシ様と同じだと感じた

気とは人それぞれ特有のものであり、一人として同じ気を持つ人は  
いない

私は魏の将全員とナナシ様の気はちゃんと覚えていた

特にナナシ様は命の恩人であり、初めて心から恐れ、尊敬している  
人だから、絶対に間違えない

気付けば規制の仕事をせずに、隊長と共に向かって行った城の方を  
茫然と見詰めていた……

~~~~~

SIDE 曹操

玉座の間

今日の前には数え役満　しすたあずの面々と一刀、それに件の使者
がいる

玉座の両脇には春蘭、秋蘭、それに桂花がいる

「天和、地和、人和、らいぶと呉の使者の案内ご苦労様
今日は一刀の奢りで好きな物でも食べなさい」

この曹操の発言に

「本当ですかっ!？
やったーっ!」

地和が喜び、

「はいはい！私は一報亭の焼売がいいな」

天和が希望を言い、

「姉さん、それはいつでも食べられるでしょ？
だから今日はもっと高い物にしましょ」

人和がしたたかな事言う

「って、華琳っ!？俺何かしました!？」

そして一刀が嘆く

「あんたは存在が罪なのよ！
わかったらさっさと出てけ、全身精液孕ませ種馬能無し男!」

本当にこのやりとりには退屈しないわね

と、事の成り行きを見ていると笑い声が漏れてきた

その声の方を向くと呉からの使者が顔を俯かせ、口を手で押さえて笑っていた

その様子にはもちろん、春蘭達や、さっきまで言い争いをしていた一刀や桂花、天和達まで彼を凝視していた

「…いや、申し訳ない

ただ、面白かったものでつい…

いつもこんなに賑やかなのですか？」

その事に気付くと彼はそう言った

それに私は少なからず驚いた

使者とはいえ、敵国の王や将を相手にしている最中、『笑う』事ができるだろうか？

それも面白いからという理由のみで

…なるほど

人和の言伝では満更ウソでもなかったみたいね

「まあ、いつもこんな感じね

…じゃあ、一刀達四人は下がっていいわ」

そう言うと四人は一礼して玉座の間をあとにする

四人が間から出て行ったのを確認してから、私は切り出す

「私は曹魏の王、曹孟徳

此度の件、本当に申し訳なかったわ」

そう言つて玉座から立ち、頭を下げる

「華琳様！？そんな頭を下げなくても……」

「春蘭、ここは頭を下げなければいけない所よ

……ああ、そういえばこちらの紹介してなかったわね
今話してたのが夏侯惇、その隣にいるのが夏侯淵、で、こっちにいるのが桂花

一、二日の間だとは思つけど、よろしくね」

「ご丁寧にどうも

自分、故あつて本名も顔も明かせませんが、皇帝と書いて皇と呼んでください」

と、使者…皇は言つた

「おい、貴様！

華琳様の御前で、本名も顔も明かせないだと！
失礼じゃないのか！

頭のものぐらいとつたらどうだ！」

「あ、姉者……！？」

春蘭にしてはまともな事を言う

なんせ、秋蘭があまりの驚きに絶句している

桂花だつてあり得ないものを見る目で春蘭を見る

かくいう私だつて内心では驚いているのだ

……だが、皇はそんな事は意に介さず言う

「夏侯惇殿、正体を明かせぬのは故あつての事

それで納得できぬのであれば力づくにでもすればいいでしょう」

「ほう……」

ならば、お望み通り力づくでその被り物を取るとしよう……」

そう言つて春蘭は七星峨朗に手をかけ……

「春蘭、止めなさい

……貴方もあまり春蘭を刺激したいでもらえるかしら？」

そう私は少し言葉に怒気を込めて言う

「いえ、自分本気でしたよ」

が、事もあるつにそんな事を言う皇

もちろんこんな事を言われて黙っている春蘭ではない

「……やはり、貴様は死にたいらしいな……」

と、一度は仕舞つた七星峨朗に手をかけた時、皇が「ただし……」と付け加えるように言った

「ただし……今ここで俺を斬るつて事は相応の覚悟が必要だぜ？」

その一言は今までの口調とはまったく違う、自信に満ち溢れたもの

だった

「春蘭！止めなさい！」

「し、しかし華琳様！」

「いいから仕舞いなさい

……それよりも貴方はどういっつもりであんな事を言ったのかしら？」

……くだらない理由なら私が直々に引導を渡してあげるわ……

「あなたたちでは自分を斬る事ができないから」

口調がまた戻った……？

「へえ……、それはどうしてかしら？」

この理由いかんによつては……斬る

「難しい事ではありませんよ

曹操殿、貴女は呉に謝罪として使者を送った

そうですよね？」

「ええ、そうよ

バカな部下の不祥事をお詫びする為だね」

「と、いう事は、魏が呉に頭を下げているのと同じ

つまり自分は呉から魏に『きてあげてる』というわけなのです」

「へ、へえ……？結局何が言いたいのかしら？」

流石に私でも、自分の顔が引きつっているのがわかる程……

そろそろ堪忍袋の緒が切れかけてきている

「そんな呉の使者がワザワザ魏に来ているのに、その使者を下の立場にいる魏の者が斬る………風評的にどうでしょう？」

言葉の端々に悪意を感じたが、なるほど……

その事を考えればあの強気な態度も頷ける

「それに自分は魏に来る前に、二週間で戻らなければ、魏に殺されたものとして考えておくようにと、孫策様達に伝えてきました
そうなると余計に曹魏の風評に問題がでるのでは？」

あの竹書での約束の事ね

……本当に凄いわね、彼は

いくら殺されないとわかっていても、それだけの胆力……中々ないもの

そして気付けば、先程の怒りは鳴りを潜めていた

……これは人和の言った通り、本当に私の欲しがる人材だわ……

「………そうね、あなたの言う通りだわ

………というわけだから春蘭、決して手を出してはダメよ」

「……わ、わかりました」

多分よくわからなかっただろうけど、頷かなければならない空気を
感じとったのだろう

「……あなたも、大分油断できない性格ね？」

そう言うと、彼は鼻で笑うかのように言った

「貴女には言われたくありませんよ

さつきから鷹や鷲みたいな目で、自分の事を観察しているでしょう？
自分が呉からの使者だと理解しているのに、隙あれば引き抜こうと
している所がまた夕子悪いですね？」

「……っ!？」

「……本当にあなた油断できないわね……」

あんな少しの間でそこまで観察してるなんて……
ますます欲しくなってきたわ……

「いえいえ、曹操殿は優秀な人材を集めるのが趣味と、孔融様から
聞いておりましたので、すこしカマかけてみただけですよ」

暗に自分は優秀である、とねえ……

……にしても孔融、あなたは彼に何て話をしているのかしら？

その後、形式的な話を少しした後、彼に期限ギリギリまでいてもら

う事に頼んだ

最初、私が頼んだ時に春蘭と特に桂花が猛反対したが、精々長くて一週間程度と言ったら渋々ながら納得してくれた

私がそこまでして彼を引き留めた理由は、私が彼を気に入ったから

その理由を聞いた時の彼は「そうくるだろうと思ってました」と、事もなげに言っていた

まるで、こうなるのを知っていたかのように……

……本当、彼は私を楽しませてくれる

だが、その楽しみが消えるのはそれから数時間後、皇があてがわれた部屋に案内され、私も公務に戻ってしばらくしてからだった

第65話（後書き）

いや、まあ、とりあえず言い訳します

本当ならもっとスマートな文章になって、読者にわかりやすくなるはずだった！

今更ですが、小説を書くって難しいですね……

第66話(前書き)

最近ガチで『リア充』に就職したいと考えている作者です

……ないかな、リア充……

第66話

それは起こった、唐突に、曹操に出会って、次の日

えっ？

なんで倒置法とも呼べないようなバラバラな言葉なのかって？

混乱してるからに決まってるからじゃないか

時は曹操と会って翌日の早朝、場所はあてがわれた俺の部屋、登場人物は当然のごとく孔融改め現在は皇

そしてこの一幕にはもう一人登場する人物がいる

それが……………曹操

「…ええと…………おはようございます?」

「ええ、おはよう

……………一晩で随分面白い部屋にしてくれたわね?

まさか城の主に襲いかかるなんて思ってもみなかったわ」

しかもその曹操はただの曹操じゃなかった!

なんと、頭から水をかぶったように全身ずぶ濡れで、その顔はまるで墨で塗ったように真っ黒だった!

「……ええと確かに自分がいけない事なのですが、一応用心の為に
ですね？」

別に曹操殿を狙ったわけじゃナイデスヨ？」

まあ、そういう事なのだ

寝首をかかれる事は心配してなかったが、顔を見られるのは結構
ヤバかったので、昨日寝る前に部屋の扉に細工をしたのだ

…… 具体的には今の曹操を見て想像してほしい

一つヒントを追加すると、扉の前約150?程の床には真つ黒な墨
の入ったタライ

そして扉の上には未だに水滴を垂らしているタライ

後は皆さんの想像に任せるとしよう

「……別にあなたに危害を加える気はなかったのだけれど……
まあ、一刀に教えてもらったのつくをしなかった私が悪かった事に
しておくわ」

ちなみに寝る時は流石に鎧一式外すが、やっぱり顔にはお面を被っ
て隠していたが……

「…それじゃあ、痛み分けて事で一つ手を打ちましょう?」

「(……ニヤリ)

ええ、そうね

…… あっ、そうだわ

人和からの報告で聞いてるわ

あなた、武の腕もたつみたいじゃない？」

「……………素人に毛が生えた程度ですよ？」

絶対よくない予感がする

寝起きの頭でもそのぐらいは予想が付く

「昨日から春蘭がどうしてもあなたと闘いたいつてきかなくてね……………折角だし、朝食後にでも軽い運動程度としてどうかしら？」

魏武の大剣・夏侯惇を相手に軽い運動だと……………？

「いえいえいえいえ！」

自分ごとき一般兵が夏侯惇殿の一撃を受け止められるわけがありませんよ」

「そんなに謙遜する必要はないわ

行き過ぎた謙遜は相手を侮辱する事に繋がるわよ？」

……………それともあなたはこの曹孟徳の見る目がない、そう言うのかしら？」

め、めんどくせえ……………

どうあっても俺は夏侯惇とやらなあかんのか……………

武器無しであの地面を抉る夏侯惇と？

……………誰か俺に不幸になるような呪いでもかけているのかね……………


~~~~~

SIDE 曹操

昨日玉座の間での一件が終わった後、凧達三人が執務室まで私を訪ねてきた

その時の凧は普段からは想像できないぐらい興奮していて、真桜達がついていなければまともに歩く事ができなかった

そしてその凧曰く、

『あの呉からの使者……彼はナナシ様……孔文挙と全く同じ氣を持っています』

そして続けて

『この世に全く同じ氣は二つとありません』

これが意味する事はただ一つ

呉の使者・皇の正体は孔文挙である

その結論を導いた時、魏の将全員を私の部屋に緊急召集させた

もちろん議題は『皇の正体について』

そこで色々出た意見を纏めた結果、『明日から彼が帰るまでにカマ

をかけ、孔文學なのかどうかを観察する』になった

そしてまずは無防備な所を訪問し、素顔を見る為に翌日早朝にこっそり部屋に忍び込んだが、結果は先の通り

きつと曹孟徳の人生の中であそこまで鮮やかに罫に嵌められたのはあれが最初で最後だろう

そして次は実際に戦闘経験のある春蘭と手合わせをさせ、二人の差異を比べてもらう

できれば霞が適任だったのだけれど、霞は別件の用事で夜まで帰れない

まあ、陰からではあるが尻に戦闘中の氣を確認させるし大丈夫でしょう……

もし、これで彼が孔融でなければそれはそれでいいけど……

問題は彼が本当に孔融だった場合ね……

……毒矢をもらい、どうして生きているのか

私が調べた結果、あの毒は間違いなく人が死ぬ類いの毒だった  
それなのに特に後遺症も見られない……

そして何故私達の前にやってきたのか……

「……今はいくら考えた所で推測に過ぎないわね……」

そう呟くともう一度人和達に詳しく話を聞きに行く事にした

「……………その前にお風呂に入らないとね……………」

今度の呟きは先程に比べ、音量はほとんど同じだったが、悔しさが込められていた……………

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

朝一で曹操が夏侯惇とバトってこい、と命令(?)してきた

ホントはもっと強気に突っぱねたかったが、全身ずぶ濡れの顔面真っ黒の曹操を見たら同情してしまった……………まあ、俺がやった事なんだがな!

「……………さて、部屋の掃除をして朝食をとって……………夏侯惇とバトル、か……………」

なんか最後ので一気にやる気が萎えた気がする

「とりあえず台所行って布巾貰うかな……………」

俺は身支度を整え、重い体と心を引きずって台所を探しに行くのだ
った

……
……
……
……
……
……
……
……
……
……
……迷った

城なんて何処も同じだろうとたかをくくっていたら、見事に迷い……
… 何故か中庭に出てしまった

「……おかしいな、ドジッ 娘属性なんて付いてなかったと思うんだけどな」

そんな事を呟くと、「……シュツ、シュツ」と自然音じゃないものが聞こえてきた

おっ、誰かいるのかな？

台所まで行き方を教えてもらうか……

そう思って音の方に行くと、そこには凧が朝練をしていた……

へえ、……、こんな朝早くから鍛練してるのか……

真面目だとは思っていたが、ここまでとは思わなかった

「……隠れてないで、出てきてください」

突然凧がこちらの方を向いて言った

「……いやいや、隠れてるつもりなんてありませんでしたよ
ただ、あなたの鍛練姿にみとれてしまいました……」

隠れる意味もないので素直に出ていく

そう言うと、凧は顔を伏せ少し悲しそうな表情をした

「……私は……私は、そんな他人行儀なナナシ様は見たくないです
っ！」

一瞬、ホントに一瞬動揺したが、表には出さない

「……はて？」

他人行儀と言っても、自分と楽進殿は昨日初めて顔を見た程度です
し、それに孔融様はもういないはずですが……？」

「……私は氣を扱えます
そして、自分のだけでなく他人の氣を視る事もできます」

あつ、だからさっきは接近に気付いたのね

「それはそれは……
楽進殿は凄い才能をお持ちなのです」

「……そして氣とは人により違うのです
同じ氣を持つ人は……いないのです」

……あつ、なんかちょっと嫌な予感

「……あなたは！ナナシ様と同じ気を持っているのです！
あなたはナナシ様じゃないのですかっ！？」

それは俺が見た事ない、凧の悲痛の叫びだった

だからこそ俺は言わなければならなかった

「……それは勘違いですよ
自分は孔融様ではないです」

この、今の凧に嘘をつくのは……辛かった

でもこれがきつと本気で嘘をつくって事なんだと思った

第66話（後書き）

……曹操、ゴメンよ……風邪引くなよ

第67話(前書き)

更新遅くなってすみませんッス？

まあ、理由は後書きで明らかになるかと

ではでは

第67話

風にウソをついて、逃げるように食堂に行く

ちなみに食堂の場所は風に聞いた

出された朝食は多分客人用なのだろうが、正直美味しいとは思わなかった

というより全く味を感じなかったと言った方が正しいか……

そして味気ない朝食をとってる時に曹操と夏侯惇がやってきた

「朝食の味はどうかしら？」

「辛くもなくしょっぱくもなく、しかし味わい深いまるで人生のよ
うな味」

評価に困った時はこんな事を言えば無難であると、前世の酒屋で習
った

「……………何それ？」

「だから、辛くもなくしょっぱくもなく、しかし味わい深いまるで
人生のような味ですよ」

「貴様！華琳様をバカにしてるのか！？」

二回言うととうとう夏侯惇が切れた

「いえ、自分は本気でそう感じましたが？」

しれっと真顔でウソをつく

「……まあ、いいわ

しえふにはそう伝えておくわ

それよりもこの後はわかってるわね……？」

曹操が言う

「麻雀でしたっけ？」

とぼける俺

「別に構わないわよ？」

面子は私と風と秋蘭とあなただけど

ちなみに私は『染め姫の曹操』って二つ名持っていて、城下の雀荘
では出禁されてるわ

それでもいいかしら？」

なんだよ、その無駄に高いスペック

「……冗談ですよ

夏侯惇殿との一戦ですよね」

「あら、そう？」

なら機会があればいずれやりましょっつ？」

「……機会があればで……」

こいつとは麻雀ぜってえやらねえ……

そう心に強く誓った

そしてとうとう夏侯惇との戦闘が始まる……

~~~~~

SIDE 曹操

昨日全員召集の解散後、一刀を一人残した

理由はもちろん孔融の事……

彼は一刀と少しではあるが、二人きりで秘密の話をしていた事がある

だから、もしかしたらそこに皇が孔融である何かがあるかもしれない

最初、孔融の秘密を何か知ってるかと聞くと、苦笑いしながらないと答えた一刀

もちろんそんな態度はこの曹孟徳には、何かあると言ってるようなもの

その晩、私は一刀を閨に呼んで『色々』やった

だが、必ず全て直前で寸止めし、これ以上してほしければ孔融の秘密を洗いざらい教えなさい、と言った（脅迫とも言う）

すると、最初はかなり我慢していたみたいだったが、ついに我慢できなくなったのか、孔融の知ってる限りの秘密を口にした

流石は魏の種馬といった所ね

……だが、いざ明かされるその秘密は私にとって信じられないようなものだった

孔融はなんと、前世の記憶を持っており、そしてその前世では一刀のいた天の国とは別の天の国にいたとか……

にわかには信じられないが、あそこまでやって一刀がウソをつくなんて、理由がない

そこで考えたのが、『何気ない会話の中で天の言葉を使い、その反応を見る』だ

もし、これで普通に反応できたら、彼は天の知識があるという事になる

そうなれば風の言っていた氣の件と合わせて、彼は孔融で間違いないでしょう

そして彼は私の言った『のつく』や『しえふ』に対して何の疑問もなく答えていた

つまりそれが意味する事は……

「さあ！やるぞ、やるぞ！  
華琳様、開始の合図を」

と、そこまで考えていると、丁度春蘭と皇の準備が整ったようだ

「ええ、それじゃ始めるわ

……両者構えて……始めっ！」

そして夏侯惇vs孔融の食後の『軽い』運動が始まった……

~~~~~

S I D E ～ ナ ナ シ ～

夏侯惇と正対し、お互い構える

……嫌な予感しかない

多分これは現世でもトップ3に入るぐらい嫌な予感だ

最悪、俺が孔融だとバレる

できればこの戦闘フラグは回避したかったが、それが無理なら仕方ない……

「…………両者構えて…………始めっ！」

曹操が手合わせ開始の合図をする

「でりゃーっ！」

俺は曹操に渡された、この手合わせ用の剣を構え、夏侯惇より先に動く

「夏侯惇殿、覚悟ーっ！」

そして普通の武将と同じぐらいのスピードで先に懐に入る

「…ふっ、この夏侯元讓の懐に入るとは見事！」

だが、それだけでは私には勝てんぞ！」

そう言いながら七星峨朗を俺に向けて振り下ろす

もちろんこれは予想通り

だから、俺も想定していた動きをする

……………どうでもいいんだけど、何で彼女はガチで殺気放ってるの？

「……………くっ……………うわあーっ！」

やあーらあーれえーたあーっ！」

夏侯惇の振り下ろしに剣を合わせ、その破壊力のまま攻撃を真下にいなす

そしてそれが地面に当たると同時に起こる衝撃波に合わせ、錐揉み状に、大袈裟に飛ぶ

端から見れば、まるで夏侯惇の一撃にぶっ飛ばされたように見えるように

計画通り…

そう、俺の計画とはボロ出す前にソッコーで負ける事

そして俺は飛んでいき、地面に着地……

「……………えっ？」

信じられるか？

着地するはずの地面が急に消えたんだぜ？

そのまま俺は地面の中に落ちていく……

「……………ぐはっ!？」

恐らく、今までの経験の中で体に衝撃を感じたのをこれほど嬉しく思った事はなかっただろう

アレはまるで奈落にでも落ちるような感覚だった

「ちよつと大丈夫!？」

「おおっ！？大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですかっ！？」

曹操と夏侯惇、そして何故かいる風が心配して穴の中にいる覗き込んできた

「…あ、ああ、とりあえず大丈夫」

そして顔を上げた

いや、ここは上げてしまったというべきか……

「」「あっ！」「」

そして何やらあまりよろしくない予感と、それと同じぐらい違和感を感じて自分の兜を触ろうと、右手を頭に持っていった

だが、俺の右手が触れたのは無情にもまだ10代でフサフサのある意味生涯のパートナーたる黒い髪の毛

あんまり確認したくないが、足元を見ると、そこにあっただのはついさっきまで俺の相棒を守り、そして顔を隠していた呉兵の兜があった

「……………」

しばらくそのまま固まっていたが、曹操の呼び声で再び上を向く

「とりあえず上にきなさい

話はそれから聞いてあげるから」

「……はい」

ここで他人の空似です、なんて言えたらどんなに楽だろう
そんな事を思った魏に来てからの初めての朝の一幕でした

第67話（後書き）

とりあえず、本編に関してはアレでいいと作者は思っています

異論反論ばっちこーい！

（ウソついた

甘口でお願いします）

そして投稿遅れた理由は、我慢できずにもう一つ作品を書き始めたからです

……もちろん最後までちゃんと書ききりますよ？

ゼロ魔とドラクエのクロスなんで興味あればどうぞ

第68話（前書き）

久々の投稿

とりあえずこれで魏編は何とか終わった……かな？

第68話

今俺は何故か玉座の間で正座している

いや、まあ、不思議でも何でもないんだが……

理由は恐らく今まで正体を隠してた事だろう

今日の前には曹操、夏侯惇、夏侯淵、一刀、霞、風、稟、凧、真桜、沙和、許緒、典偉……あれ？もしかして魏の将勢揃い？

荀イクは何故か俺の隣で正座しています

「……では、桂花？

なんであんな所に落とし穴を作ったのかしら？」

曹操が荀イクに問う

「そ、それはあの全身精液白濁孕ませ種馬下半身男を懲らしめる為です！」

そう言いながら一刀を指差す荀イク

………一刀、酷い言われようだな……

「私前に城内に罾は作らないように、と言わなかったかしら？」

曹操の目が細くなる

……正直怖い

「そ、それは……」

「罰としてあなたは一週間私の閨に来る事を禁止するわ」

曹操はそう言い放つ

……え？閨？

そんなん罰になるの？

「そんなつ！？華琳様、あんまりです！」

……めっちゃ効いてるよ……

「……で、次はあなたの番だけど」

そう曹操は荀イクの抗議の言葉を聞き流し、俺を射抜くように見ってくる

「……自分何かしましたでしょうか？」

「あら、説明しないとダメかしら？」

あわわ……周りにいる魏将の……特に夏侯惇とか夏侯惇とかの殺気レベルが上がってきた……

「私もね、あんまり将全員を集めておきたくないの……仕事もあるしでも、あなたが質問に答えてくれないと皆が納得しないの……特に風

達みたいにあなたと交流がある子達はね」

「つまりさっさと質問に答えやがってくださいませんか、と？」

「わかってるじゃない……じゃあ、最初の質問ね

あなたは毒矢をくらったと聞いていたけど？」

「秘密」

「貴様っ！！」

「春蘭！……じゃあ、次ね

なんであなたが返事の使者として魏に来たのかしら？」

「教えない」

「……なんで正体を隠してたのかしら？」

「黙秘権」

「……」

あつ、曹操のこめかみがピクピクしだした

「……あなた、さっき私の言った事が理解できなかったのかしら？」

「わかりません」

「……春蘭」

「はいっ！喜んで！」

曹操が呼ぶと嬉々として七星峨朗を抜く夏侯惇

「ちよ、ちよつと華琳！春蘭！」

それじゃあ、ナナシの思う壺じゃないか！」

「……一刀、私は今、今までにない程の怒りを感じているのよ……この曹孟徳をここまで虚仮にして、なおも平然としてるところかね……」

「でも、ここでナナシを斬ったら華琳の霸道に影響が出るだろう？だから、もうちよつと抑えてくれって」

曹操を一刀を抑える

端から見てる分には面白いが、きつと一刀にしてみればそれどころじゃないんだろうな……

と、他人事のように観戦(?)していると、俺のトコに寄ってくる影が見えた

「ナナシ様……」

凧達だった

「ん？どうした？」

「何故ナナシ様はあの時嘘をついたのですか？」

本当に悲しそうな目を向けてくる凧

それに真桜も沙和も続く

「だんまりは風があんまりにも可哀想やで？」

「そうなのー！せめて風ちゃんにだけでもちゃんと理由を説明しないとなのー！」

……ぶっちゃけ風達にこう言われると弱い……

「……なんで生きてたのかは言えないが、俺が魏に来た理由なら言ってもいいぞ」

「ほ、本当ですか！？」

「ああ、ホントに

……ただし、誰にも口外しない条件で俺と真名交換してる人に限る」

俺がそう言つと、いつの間にかこっちを見ていた曹操がもはや怒りを隠そうともせずに行った

「いいから今、この場で言いなさい！」

「ええ……だって曹ちゃん怖いんだもん」

「……ブチッ」

比喩でも何でもなく、ホントにその音は聞こえた

「……」

じゃあ、もうあなた死んでいいわ」

その目は今までのような怒りに染まった色ではなく、逆に絶対零度のブリザードだった

そんな曹操を今まで見た事がなかったのか、この場にいた全ての人間が曹孟徳を恐怖の目で見つめる程だ

あまりの恐怖に俺は右手を懐に入れてしまった

「華琳っ!?!」

一刀が曹操を止めるがもう遅い

曹操は既に玉座から立ち上がり、ドコからか自らの得物・絶を取り出し、俺の目の前にまできていた

魏将の誰も今の曹操を止められない

「言い残した事はあるかしら?」

「曹孟徳の天下もここまでか」

俺がそう言つと同時に曹操は絶を振りかぶり、勢いよく振り降ろした……

「……………っ!?!」

……………だが、それは俺の首を跳ねる事はなかった

……………気付かれたか……………?

「華琳様？」

「孔融、その手の物を出しなさい」

曹操は絶を止めた位置のままに夏侯惇の呼び掛けをスルーして、俺に隠し持つてる物を出せと言う

「……ほらよ」

俺は用意した策が全て看破された事を悟り、潔く隠し持っていた物を床に放り投げる

「……え？」

カラン……と音を立てながら転がるそれを見てこの場にいた俺と曹操以外から疑問符があがる

「……短剣……？」

それは俺の隣にいた荀イクから漏れた言葉か…

「惜しいけど違うな」

こいつは小刀つつー短剣よりもさらに短い刃物だな」

「貴様っ！」

これで華琳様に何をするつもりだった！言え！」

夏侯惇が小刀を見るに詰め寄ってきた

「そんなん決まってるだろ？」

……曹操を討つ為だよ」

「っ！」

「春蘭止めなさいっ！」

七星峨朗を抜いた夏侯惇を曹操が止める

「いえ、華琳様

こればかりは華琳様の命といえど従えません」

見ると、夏侯淵も既に矢をつがえ、俺に標準を合わせている

……っか、殺そうとしたり止めたり忙しい奴だ

「いいから止めなさい！」

……ねえ、孔文挙、最後に聞かせてちょうだい
何故あんな事をしたのかしら？」

あんな事ってのはどっちの事だろうね？

挑発した事？それとも小刀の事か？

「さあてね？」

俺が何をしたのかむしろ知りたいよ？」

この期に及んでも尚とぼける俺に曹操は考え、そして告げる

「……………そう、わかったわ……」

……悪いけど、もうあなた真に帰ってくれないかしら？」

「おや？帰ってもいいのかい？」

「ええ、むしろできるだけ早く私の視線から消えて」

そう言っつて背中を向ける曹操

俺は曹操の言葉に甘え、そそくさその場を後にした

「……あっ！」

尻が何か言おうとしてたが、それを振り切つて俺は玉座の間を、魏を後にした

~~~~~

SIDE〜曹操〜

孔融が玉座の間を出て行ってどれくらい経つたのか……

刹那のようにも永遠とも感じられる体感時間

……私は孔融に絶を振りかぶってから未だに体が震えていた

恐らく、あの時孔融の右手を気にもとめずに絶を振り下ろしていたらと思つた……

多分私は今この世にいなかったらろう

あの男はもはや私の手に負える器ではない

自分に毒矢を射った敵国に単身乗り込み、そして皆はもちろん、私や旧知の仲である凧や霞達まで騙し、最後には正体のバレたあの土壇場でわざとこの曹孟徳を挑発し、命を狙った……

あんな事を表情変えずにできる胆力と思考力、そして実行力

何故、私はあんな化け物を欲した……？

そもそも彼は誰かの下に付くような、小さな人物か？

……否

彼は……王の器を持っている

その彼が自ら降った江東の小霸王、孫呉の王、孫策伯符……

……この二人のいる呉を相手に私はホントに天下を獲れるのだろうか？

私は初めて自分の覇道の障害の大きさに恐怖した

第68話（後書き）

たまには曹操の自信をへし折るのも面白いんじゃないかと思ってや  
った

後悔は………後に悔むと書く……

まあ、斬新ではありませんよね？

第69話(前書き)

めっちゃ間開きました！

すみません！！

理由は聞かないで下さい！

お願いします！

## 第69話

俺は曹操から逃げるように呉に向かっていた

……今回俺が魏に行くにあたって考えていた作戦がある

まず、一般兵として魏に潜り込み、できるなら魏の情報を持ち帰る事

これは出発前に雪蓮と冥琳には言っていた事だから、おそらく呉のみんなも知ってる事だろう

次に主な将の無力化

これは曹操も数にカウントされ、場合によっては殺す事も視野に入っていた

ただし、こっちはタイミングと運に左右されるため、可能であれば実行するつもりだった

そして最後に……これは俺の正体がバレた時用の策だ

それは曹魏に『ゆすり』をかけることだ

ゆすりと言っても脅したりするのではなく、どちらかといえば精神攻撃のようなものだ

その時の状況によるが、基本的には魏将にこちらに攻めにくくさせるように仕向ける



今回の場合は、正体がバレた時に曹操を煽るだけ煽って、正常な状況判断能力を無くさせた

それにより曹操は一時ではあるが、本気で俺を殺そうとした

もちろんそんな事をすれば俺も死ぬかもしれないが、俺は悪くとも曹操と相討ちにできる自信はあったし、実際には曹操は直前に俺の仕込みに気付いて最後までできなかつた

そして俺の『ゆすり』はここがミソだ

ここまでの一連の中で曹操の頭の中には

『孔融に限ってはどんな状況においても油断できない』

と、そう思わせる事ができたと思う

これにより魏との最終決戦の時にも孔融という名だけでのハッターが使える

「……………まあ、これも上手くいってるかは確認できてない不確定要素なんだけどな……………」

俺は馬上で一人そう呟いた

~~~~~

SIDE 〱 亮 〱

孔融様と離れ、蜀との同盟の使者として蜀にやってきた

劉備殿は怖かったが、それも今ではどうでもよくなっていた

何故なら、そんな事を気にしてる余裕なんてないぐらいの忙しさなのだ

「羽延殿、この竹書をお願いします」

…………… 関羽雲長

蜀の將軍で、反董卓連合の時にも何回か見かけた事のある、蜀の武を支える武將

「わかりました」

今は同盟しているからもちろん味方である

「……………して、例の物はどうでしょうか？」

「…うむ

朱里達も頑張っているのだが、やはり難しいらしく、時間がかかっているようだ」

例の物とは孔融様発案の火薬の製作だ

なんでも、それがあるかかないかで格段に勝率が違ってくるらしい

「わかりました
では、何かありましたらよろしく願います」

「ああ……ではな」

そう言っつて関羽殿と別れた

まずはこの関羽からの竹書を呂蒙殿の所に持っていく

そして今このバタバタが終われば蜀の軍と共に呉に行く事になっている

いよいよ魏との最終決着である

勝つのは私達だ！

~~~~~

S I D E 〱 ナナシ 〱

(てっけて〜)

シナリオ回収の時間だよ〜)

魏から呉に帰る途中、あまつか天使が久しぶりに話しかけてきた

(久々に出てきて意味わからん事言っつな)

( ナナシ君のいけず )

で・も、それがナナシ君の愛情表現なら、私、喜んじゃうか・も？ )

( ……うぜ )

何の用だ？ )

( だから、ここは選択肢の場面なの  
セーブポイントなの )

( ……俺にわかる言語で喋れ )

( つまり、あんたは今から二つの道があるのよ )

一つは何事もなく呉に帰る道 )

もう一つは… )

( 普通に呉に帰る道で )

( ぶーぶー )

まだもう一つの方言ってないでしょう！ )

( 俺は藪蛇という言葉を知っている )

( 変化のない退屈な毎日なんて、死んでいるようなものだ )

by どうかの偉そうな誰かが言いそうな言葉 )

( じゃあ、そのもう一つの道とやらでは何が待ってるんだ？ )

( ……テヘッ )

(普通に帰るわ)

(ちょ、ちょっとよ？ちょっとだけアレなだけで、アレなのよ)

(や、意味わからんし)

とりあえず俺は普通に帰る)

(おーねーがーいー！)

(やかましいわ！)

つか、なんでそんなに食い下がる！？)

(退屈な日々イベントという名の嵐を！)

(風ですらねえのかよ！？)

ザケンナ！)

(お願いします！)

(言葉遣いの問題じゃねえ？)

(じゃあ、どうしたらもう一つの道に行ってくれるの？)

(一生ねえよ)

と、ヒートアップしてたのがいけなかった

気付くと周りを十数人の野党に囲まれていた

「金目の物と馬を置いていけ」

(てめえと話してたから絡まれたじゃねえか  
責任とれや)

(わーい言い掛かりだ)

(…ったく)

「ああ？」

無視すんじゃねえよ！」

「うつせえ！」

今はてめえらの相手してる時間ねえんだよ

ホントはあるけど

面倒くさいだけ

「んだと、この野郎……」

「お頭、こいつやっちまいますよっせ」

「おつよ」

……面倒くせえ……

シカトして行くか

「おい、てめえ勝手に行こうとするな！」

……今日はやたらと面倒なのに絡まれる日だな……

俺は一つ大きく溜め息をし、目の前の野盗達を見据える

「…………不幸だ…………」

そう呟く

ちなみに、この後おまつか天使があまりにもしつこかった為、渋々もう一つの道に行く事になるナナシだった

~~~~~

SIDE 諸葛亮

はわわ

はわわわわ…

孔明さんが蜀との同盟に当たって、こちらに製作の協力をしてきた
『火薬』

作るのが凄く難しいです…

ホントにこんな知識を何処で得たのか知りたいですよ

「朱里ちゃん朱里ちゃん」

「どづしたの？ 雛里ちゃん」

「少し気になる事を聞いて…」

……

……

…

「魏の動きが怪しくなってきた？」

「うん、なんか今まで以上に警戒が強くなって、偵察にも曹操さんの側近さんが出向いているみたいなの」

雛里ちゃんは言った事には全く違った二つの意味がある

一つは人手不足

これはどちらかといえば嬉しい事態だ

何故なら、他の重要な場面で使う人員を、言い方は悪くなるが末端でもできる偵察任務に回している事により、いざ戦闘になった時に将の差が少しでも縮まる

そしてもう一つは必要以上に警戒している事

こっちは少々厄介で、何をするにも向こうを警戒させないようになければならない

少しでも警戒させてしまつては、こつちの策の成功率が格段に下がつてしまう

できれば前者の方であつてほしいけど……

「……じゃあ、魏の偵察部隊を偵察させる部隊を派遣しましょう
今空いてるのは……」

「紫苑さんが丁度空いてますね」

雛里ちゃんが早く答えしてくれる

「じゃあ、紫苑さんと蒲公英ちゃんと後は……羽延さんぐらいかな
……?」

仮に魏が人手不足だつたとしても、蜀も人手不足なのは変わらない
のだ

ちなみに呂蒙さんと陸遜さんには『火薬』の製作を見てもらつて
いて、袁術さん達は最初から戦力としては期待していない

「あわわ〜

じゃあ、それで手配しておくね」

「雛里ちゃん、ごめんね？」

本当なら私がやる事なのに……」

雛里ちゃんだつてやる事はたくさんあるのだ

それなのに私の仕事も手伝ってもらっちゃってる

「気にしないで、朱里ちゃん

忙しいのはお互い様でしょ？」

「うん

じゃあ、お願いね」

最後にそう言って私達はまた自分達の仕事に戻っていった

何せ時間も人手も足りないのだ

どんなに急いでも急ぎ過ぎなんて事はないのだ

~~~~~

SIDE 〱 亮 〱

関羽殿と話した翌日

急にはあるが、黄忠殿と馬岱殿と共に偵察に出る事になった

「よろしくね、羽延さん」

「これは黄忠殿、本日よりよろしくお願いします

……して、馬岱殿は？」

黄忠殿と一緒に馬岱殿の姿が見えなかった為、黄忠殿に尋ねると……

「じつじついるぞー!」

「うわっ!?!」

いきなり後ろの茂みから馬岱殿が出てきた

……馬岱殿はイタズラっ子のようだ

丁度呉でいえば孫尚香様に近い

黄忠殿は……なんとというか『お母さん』という空気を醸し出している女性で、うっかりすると母さんと呼んでしまいそうだ

「改めまして、これからよろしくお願いします」

今回の任務は定軍山に來ると予想される魏の斥候部隊を先回りして  
迎え撃つ事だ

どうしてそんな事がわかったのかはわからないが、斥候からの情報を纏めて整理した結果の予想だろう

ならば、武官である私達はそれに従い、任務を全うしよう

第69話（後書き）

朱里とか雛里とか紫苑とか口調が……

これは久々に真恋やるしかないか……

第70話(前書き)

更新伸びに伸びましたね、すみませんッス

一応言い訳にならない言い訳をしますと、もう一つの方に時間をとられて、さあ、こっちを書こうと思った時にはこっちの内容を忘れかける始末……

そんなこんなで遅くなりました

すみません

## 第70話

「ふと思っただが、俺もつそろそろキレてもいいんじゃない？」

結局、あまつが天使に押し切られる形で平々凡々ではない道を行く事になった俺

だが、もともと往復ギリギリの食糧しか持っていなかった俺は、流石に腹がヤヴァイ状態になっていた

「そんな事言われても私にはどうする事もできないし……」

ホントにどうしようもない奴だ

「つーか、じゃあ、あとどんぐりで目的地に着くのでせう？  
場合によっては今からでも軌道修正して呉に帰るからな」

「んー、まあ、あと2時間ぐらいじゃないかと思うよ？」

「……ちっ、もうそんなに近くまで来てたのかよ  
で、そこで俺は何すりゃいいんだよ」

「別に何って事はないけど、そこで起こるイベントに参加してもらいたいのよ」

「どんなイベントよ？」

「ピ・ミ・シ」

……イラッ

「おいこらてめえこのクソ死神  
もしかして、てめえ俺の事バカにしてんのかコラ」

「いやいや〜そんな事はないですよ？  
でも、ネタバレは重罪だと思っわけでありまして〜」

「んなイベント名言われたぐらいで俺がそのイベントわかると思っ  
か？

こちらら知識ある一刀とは違っんだよ」

一刀といえはさっきのバケモノを思い出す

そう、バケモノだ

俺はバケモノの会っってしまったのだ

………

……

…

俺が盗賊を30秒で蹴散らし、あまつか天使に言われたルートを行こうと馬  
に乗った時、ソレは現れた

「ぬっふうう〜ん」

信じられるか？

目の前にいきなりパンツ一丁のガチムチの筋肉ダルマが現れたんだぜ？

俺はこの現実を受け入れる事ができない

それ程までに荒唐無稽な状況だ

というか、コレは敵か味方か？

場合によってはコレと闘わなければいけないんだが、生物学的な本能で拒否反応が出ている

アレと関わりたくない

「あゝら？

そおんなに身構えちゃってえ、どうしたのお？」

どうやら俺は無意識に身構えていたようだ

「…………お前、誰だ？」

だったらこのまま気になった事を聞くとしよう

このバケモノの正体を

自慢じゃないが俺は何処の国ともそれなりのパイプを持つてる

だから有名な奴なら大体わかる



まあ、途中から加わったとかだと流石にわからんが、それでもこれだけのバケモノだ

名前ぐらいは聞いた事があるはずだ

「あたしは大陸一の漢女、貂蝉ちゃんよあ〜ん  
そういうあなたは孔融でいいかしらあ〜ん？」

何やら乙女の発音が違う気がしたが、それよりもこいつは名乗って  
もないのに俺の名前を当てやがった

しかも状況からみるに、こいつは俺を待ち伏せしてたかのような気  
配がある

警戒レベルを上げる

「だったらどうしたよ？」

やんのかコラ？」

貂蝉？

知らない名前だ

聞いた事もないが、油断できない奴だ

ふざけた喋り方と見た目に騙されてはいけない

こいつは普通に強い

考えたくもないが、俺が恐らくガチでやっても勝てないんじゃない

かという程

俺は得物を置いてきた事を後悔した

「別にあたしはあなたと戦いにきたわけじゃないのよ

……ただ、あなたが普通の……そうね、皆とは違うように思えて会  
つてみたいと思ったのよ」

「普通じゃない？」

「てめえ、鏡見て言えよ」

俺は警戒を解かずに言う

もちろんもう馬から降りている

「それがおかしな事にあたしが鏡を見ると、そのたびに鏡が割れち  
やうのよ〜ん

失礼な話よねえん」

……いや、むしろ鏡空気読んでるじゃねえか

「……で、結局てめえは何しに俺を待ち伏せしてたんだ？」

「何をしにつてわけじゃあなあいんだけどねえ？

ちよ〜っとお話しようかと思っけてねえ〜」

……待ち伏せした事は否定しないのね

俺はそのままいつでも最悪の状況にも対応できるように重心を落と  
して……

「ところでえ〜…」

さっきあなたとお話してたのは誰かしらあん？」

こいつは何を言ってるんだ？

「誰って、見たまんま盗賊じゃねえのか？」

「その前よ

『何も無いような空間』に話してじゃないのよあん」

見られてたのか？

いや、むしろ気になる言い回しの方に気を付けるべきか？

「人をそんな痛い奴扱いすんな

それに、仮にそう見えただったらどうした？

ただの痛い人かもしれないだろ？」

とりあえずは様子見のジャブだ

「ぬっふうくん

まあ、確かにそう言われちゃうとそうなんだけど……

じゃあ、今もあなたの後ろにいる可愛い女の子は誰なのかしらあん？」

「！！」

その瞬間俺は飛び出した

奴は明らかに天使あまつかが見えてる

しかも、恐らく最初からだ

つまりこいつはこの世界の人間じゃない

……いや、あるいはこんなバケモノもいる世界なのかもしれないが、こいつは危険だ

俺はそう判断し、奴の目の前まで肉薄し、そのままダッキングからの渾身のボディーブローをお見舞いした

だが……

「……かつてえっ!？」

見た目から相当な筋肉の鎧なのだろう事は予想してたが、これは予想の範疇外だ

筋肉どころか金属でも仕組んでるんじゃないかねえかと思うぐらいの固さだ

「いきなりか弱き漢女に殴りかかるなんて、教育が必要ねえん

……ぬっふううっん!!」

そう言ってバケモノはその体格に似合わぬスピードで拳を放った

「……誰が、か弱き漢女だあああっ!!」

俺はその拳が俺の体に届くと同時に体を捻りいなす

そしてそのままカウンター気味の裏拳を奴の顔面に叩き……

「あゝまいのよゝん！」

奴は裏拳を空いてる腕で防ぎ、無防備になっている背中を蹴りつけた

「ぐっ!？」

俺はそのまま数メートル飛ばされた

痛む体にムチを打ち、無理矢理上半身だけでも起こし睨み付けた

「……………てめえ覚悟はいいんだろうな……………」

強がってはみるが、奴の一撃は俺では奴に勝てない事を物語っていた

「そおんな好戦的ならなくてもいいじゃないのよおん

あたしはただその娘とあなたの事を聞きたいだけよ」

……………それが一番の問題だっつーの

普段天使は俺にも見えないようにステルスか何かで姿を隠してる

ただそれは見えないだけでその場にはいる

そして天使は今まで姿を見せた事は最初の時しかない

つまり、こいつはそのステルス状態の天使が見えているという事だ

ホントにこいつは何者なんだ……………？

「じゃあ、てめえが何者だか教える  
そしたらこっちの事も教えてやらない事もない」

「言い回しが気にはなるけど、まあいいわ  
あたしはね、この外史を見守る者よ」

「外史？」

「そうね、あなたにわかりやすい例えだとパラレルワールドの方が  
わかりやすいかしら？」

成る程、わかりやすい

「パラレルワールドって何だか知らねえよ」

「あら、とぼけなくてもいいわよ  
もうあなたが元々はこの外史の人間じゃないのはなんとなく感じて  
いるから

……ただ、ご主人様みたいに違和感がほとんどないのは不思議だけ  
ど……………」

どうする？

このまま隠したまま話しを続けるか？

それともこっちもある程度話して色々聞きだすか？

さっきの話だと、どうやらこの世界の人間（？）とはまた違う括り  
のようだが……

「まったく、とんだバケモノに目を付けられたものだ……  
いいぞ、俺のわかる範囲で教えてやる」

(ちよつ、ちよつとナナシ!?)

(こいつは敵に回すより、ある程度の情報はオープンにして、できれば味方：せめて中立の立場を保ってる方がいいと判断した俺だって奴の事は全部信用したワケじゃないから安心しろって)

「じゃあ、まず何が聞きたいんだ？」

俺は天使あまつかとの会話を切り、奴と対峙する

正直、対面するだけでも目に猛毒(文字通りの意味)だが、こればかりは我慢するしかない

「そうねえ」

「じゃあ、まずはあなたは何者なのかしらん？」

初っぱなからグレーゾーンギリギリかよ!

「それは孔融文挙という意味ではなくて？」

一応確認してみる

「まあ、これでも外史を見守る身であるから、あなたの存在があまりにイレギュラーだと困るのよおん」

つまり俺が『何』かを言えっ事かよ

「別にいいけど、その前にお前その喋り方ヤメレ  
あまりにも不愉快だ」

あの毒々の…じゃなかった

あの独特のイントネーションは周りの人間を不愉快にさせる  
あんなのが見守る役とかやつちやいけないと思うんだが

「それは無理ねえ〜ん

だってこれが素なのだから」

素でそれがよっ!？

「……じゃあ、しょうがないから先に話進めるわ……

俺は元々はこの世界の人間じゃねえ

神の気紛れでこの世界に来た転生者だ」

ウソは言っていない

ただ言葉が足りないだけ

「ちなみにしつかりガキの時から転生したベテラン転生者だ  
まいったかコノヤロウ」

「そんな事があるものなのねえ〜……」

奴は少し考えて、そう呟いた

どうだ、ただのイレギュラーじゃなくてこっちはスーパーイレギュ  
ラーだ



恐れいったかコノヤロウ

大事だから二回言った

「じゃあ、もういつこいいか？

さっき外史を見守るとか言ってたが、この外史はどうなるのが正しいエンディングなんだ？」

もしかしたらこいつはエンディングを知らないかもしれない

文字通り見守る役ならエンディングを知らなくたって不思議じゃない

でも何でかわからないけど、こいつは知ってる気がした

そして俺はそれを知らないといけない気がした

こんなのただのカンであり、根拠のないものでもあるワケなのだが、そう思っただから仕方ない

「こついう事は他言しちゃいけないものなのよ」

つまりそれは知っていると解釈していいんだな？

「こつちはスーパイレギュラーだぞ？

そのくらい知っても戦局なんか大して変わらねえよ」

「そうねえ……」

「じゃあ、教えてもいいけど、この事は他言無用よ？」

俺はそれに頷き、先を促した

「まずあたしが見守ってるこの外史はご主人様が主役なのね」

「ご主人様って誰だよ

お前にご主人様とか言われるなんてそいつ終わってるな」

そう俺は相槌を打ったのだが……

「ご主人様っていうのは北郷一刀の事よ」

「って、一刀の事がよっ!？」

予想外の展開だった

いや、一応これはゲームの世界で、天の御遣いと呼ばれてる一刀が主役でも不思議じゃないのか？

「で、そのご主人様が主役なんだけど、外史にも色々あって、今は魏にいるけど、蜀や呉にいるパターンもあるの」

「ホントにパラレルワールドなんだな  
で、なんだかんだでやっぱり主役がいる所は最終的に生き残るもん  
なんだろう？」

物語ってのは大体何処でもそう相場が決まっている

「そうね

ただ、魏にいる時は……ご主人様は最終的に消えちゃうのよね」

「消える？」

「そう」

本来なら最後の闘いで魏は負けるものなの

でもご主人様は未来の知識があるから、魏を勝たせちゃうのよ

……そして歴史の変わった外史と拒否反応を起こして、その外史から消されるの」

「これはパラレルワールドなんだろ？」

だったら一刀が魏にいた結果、魏が勝ったっておかしくないじゃねえか

なんで一刀が消えなきゃいけないんだよ？」

別に一刀の肩持つつもりじゃねえけど、これはあまりにも理不尽じゃねえか？

そう思つての言葉だったが、奴は首を横に振る

「あたしもそう思うわ

でもね、それがこの外史のシナリオなのよ……」

それはつまりアレか？

一刀は自分が最初から消える事前提のシナリオをただただやってたのか？

いくらゲーム内のキャラとはいえ、一刀も他の奴らも皆生きてこの世界に存在しているのにか？

「おいフザケンナよ、筋肉ダルマ  
てめえはそれを知りつつも何もしねえのかよっ!？」

「それはあたしだって何とかしたいとは思っわよ!  
でもあたしは外史を見守るのが使命で、外史を変える事はできない  
し、してはいけないの」

そう言った奴の声は悔しさが滲み出ていた

「じゃあ……」

じゃあ、どうすればいいんだよ

俺はその言葉を飲み込んだ

いくらなんでもその言葉は感情移入し過ぎだ

その代わりに違う言葉を言った

「俺がその外史を変える分にはいいんだな？」

つまりこういう事だ

元々この世界に存在してなかった異分子（一刀）が歴史を変えるか  
ら、拒否反応を起こしてこの世界から吐き出される

だったら同じ世界の人間（俺）が変える分には拒否反応は起きない  
はずだ

「別に大丈夫だと思うけど、すでに決まってる対局をひっくり返す

のは大変よ?」

はん、それこそ問題ねえよ

「負け戦を勝ち戦にひっくり返すのが面白いんじゃないか」

そう言っつて俺は筋肉ダルマ……貂蟬と別れた

……

……

…

「アレは印象的だったな……」

「それはこっちのセリフよ

しかもあんなのに姿見られてたなんて鳥肌ものよ」

「ん?

じゃあ、やっぱりあいつは普通の人間(?)とは違うのか?」

「どう考えてもアレが人間じゃないのはわかるでしょうが!

……ああ、もうサイアク……」

あまつか  
天使には悪いが、俺は奴と遭遇したのは結果的によかったと思ってる

存在自体がアレだけど、奴の情報は貴重だった

一刀が消える、ね……

奴の話がホントかどうかはわからないが、こんな事で嘘を言ってもしょうがないだろう

それに仮にウソだったとしても、俺は俺のやるべき事をやればいいだけだ

結果的にそれで一刀が救われるならラッキーという事でいいんじゃないかと思う

そこまで考えた所でふと疑問に思った事を天使あまつがに聞いてみる

「そっさいや、お前あれから20年近く経つのに年とか姿とか変わらないのか？」

「~~~~っ!~!」

返答はステルスからのグーパーパンチだった

……………いつまで経っても女心というのはよくわからん

第70話（後書き）

今回の場面は魏ルートでの一刀の運命とナナシを絡めたカンジです

ようやく次で定軍山に入ります

……の予定のはず

## 第71話(前書き)

投稿遅くなりました！

言い訳は後書きにて行います



## 第71話

「俺思うんだけど、俺はもっとのんびりした生活でもいいと思うんだよ」

俺は怒号と矢の飛び交う森の中、匍匐前進しながら天使あまつがに言った

（そんな事言ったっていきなりこんな事になるなんて思ってなかったんだもの  
しょうがないでしょ？）

しょうがないじゃねえよまったく

イベント会場着いたつーから、様子見たてたらいきなりイベント勃発だあ？

マジシヤレにならんから

「で、俺はどうすりゃいいんだ？

普通にやりたいようにやっていいのか？」

（いいわよもう

目的はあんたをここに連れてくる事だったんだから）

「じゃあ、帰るわ」

俺は匍匐前進しながら言う

(この状態から?)

……………ですよね〜……………

(まあ、素直にこのまま傍観したら?)

うん、俺もそれがいいと思う

「おや?そこにいるのは孔融殿ではないか  
いやはやよくまた我らの前に顔を見せられたものだ」

……………最近聞き慣れたあまり今は聞きたくない声が聞こえてきた

「……………お久し振りツス、夏侯淵殿」

声の方を見ると俺に矢を構えた夏侯淵がいた

「ああ、久し振りだな  
こんな所で何をしているんだ?」

ホント俺が何してるのか知りたいよ

「何って、見てわからないか?」

「お前は本当にまた馬鹿にしたような事を……………」

夏侯淵の怒りが高まっているのが感じられる

「まあ、普通に呉に帰る途中で迷っただけなんだけど」

「ならば、それを最初に言えばいいではないか」

まあ、そうなんだけどね？

「まあ、こちらとしてもそんな事よりも折角訪れた孔融を討つ機会  
恨まずに成仏してくれよ」

そう言つて夏侯淵は矢を引き絞り……

「もしかして孔融様っ!?!」

どういつタイミングと偶然からか亮が突然森の中から現れる

「くっ……っ!?! 新手か!?!」

そしていきなりの乱入者に夏侯淵は手元を狂わせ、俺はその隙に亮  
と共に木々の影の隠れる

「久し振りだな、亮  
元気にしてたか？」

「それはこちらの台詞ですよ、孔融様  
魏はどうでしたか？」

「どうもこうも気付いたらケンカ売ってた形になってしまってたん  
だが……」

「ははは……それは孔融様が悪いのでは？」

そうか？

俺は魏での振る舞いを思い出してみる

……うむ、確かにアレは俺が悪かったな

「でも孔融様に大事がなくて良かったです」

「お互いにな

で、何でこんなトコにいるんだ？」

「魏の兵がここに来るといいう情報を入手したので、少しでも数を減らせればと諸葛亮殿達が」

なるほどね

天使あまつがが俺をここに来させたのはこの為か……

「で、順調そうか？」

「概ね想定内ですが、やはり向こうの主な将は中々捕まえられませんね」

「……じゃあ、俺も手伝うわ」

「それは心強い！

何か手は考えてあるので？」

「ない……ないが、さっきの夏侯淵とは一応顔見知りだから手が全くないワケでもない」

まあ、ぶつちやけ捕まえる方法よりもその後利用の仕方が案としてはあるんだけど

それでも夏侯淵を捕まえるぐらいなら何とかできそうかな？

「今の戦況、教えてくれる？」

俺は亮に今を教えてもらい作戦を立てる事にした

「ふむ……じゃあ、とりあえず一刻半後に森のこの辺魏兵を追いやるように火を放ってくんない？」

俺は状況を聞き、作戦を伝える

「火……ですか？」

「ああ、火だ

で、そうすると、連中はここからしか森を抜けないだろ？」

「まあ、そうなりますね

そうしたら、森を出たここで待ち伏せですか？」

まあ、それでもいいんだけど……

「もちろんそこにも兵は待機させるけど、こっちがわにも一応抜けれられそうだろ？」

……まあ、夏侯淵も流石に火放たれたらテンパって気付かないとは思いつけど、万が一それで抜けられたら笑えないから、亮にはそつちを担当してもらいたい

俺は森で逃げ遅れた奴を狩るから」

黄忠と馬岱には当初の目的通り、森を抜けたトコで待機してもらおう

「わかりました

して、こちらにはどれ程の兵を回しますか？」

「いや、そつちには亮一人だ」

俺がそう言つと、亮は驚いた顔をするが、すぐに顔を引き締める

「また何かの策ですか？」

「まあ、そんなトコだ

ここで夏侯淵達を討ち取るのは簡単だが、それ以上に効果的な案があるなら、そつちをした方がいいだろ？」

「また孔融様の困ったクセですか」

そつ亮は呆れながら言う

「おいおい、そんな言い方はないだろ

ホントなら敵も味方も誰も死なないで解決するのが一番良いんだから」

でも、必ずそんな平和な解決ができるはずがなく、だからこそ戦争というものは起こってしまう

そしてその犠牲になるのはいつも力の弱い人々なのだ

だから、俺達はできるだけ敵味方問わず被害を抑える作戦を立てる

義務がある

「まあ、私もその考えには賛成ですけどね」

そう亮は笑って賛成してくれた

第71話（後書き）

言い訳の時間ですね、わかります

先日真恋をプレイし、いざ書くかという時にケータイが破損

幸いデータは残っていたのですが、新しいケータイに変えた所、操作がちんぷんかんぷんでこんなに延びてしまいました

申し訳ありません

スマートフォンってというのは中々に操作が難しいですね



## 第72話（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

大分開きましたね〜

ただ、前にも言いましたが、完結まではしっかりもっていくので、  
気長に待っていてくださいます。

## 第72話

さて、やる事が決まれば、後はそれを成すために動くだけだ。

ついでに俺は明命や思春ばりに気配を消しながら夏侯淵達を捜索した。

作戦実行時にある程度の範囲にいてももらわないと困るからだ。

「さーで、何処に隠れてんのかね……」

日頃の行いがいいおかげか、捜索を始めてから数十分程で夏侯淵達を発見した。

……まあ、このタイミングでの発見はよかったのか悪かったのかは別問題として。

まず、よかったのは早い段階での発見で、悪い……というよりかはヤバイのはこのいつどこから襲われるかわからない森の中という極限状態において、いくら屈強な魏の兵といえども大変な興奮状態にあるという事だ。

これは大分マズイ状況だ。

こりゃ、早めに発見してよかったな……

(でも、これって下手に刺激しない方がいいんじゃないの?)

天使あまつかがそう言ってくるが、ほっとくワケにもいかないだろう。

(……まあ、できるだけ刺激しないように誘導すらしかないか……)

(策使うのって大変よね……)

いっそ、何考えずに暴れちゃえばいいんじゃない？

そうすれば、読者というか視聴者も見てて楽しい展開になるじゃない？)

(好き勝手言ってるトコ悪いんだが、そんな事言ったら身も蓋もないだろ……)

冥琳の苦勞がわかるよ、ホントに)

俺は雪蓮や祭に振り回され、さらには穩の監視や亜莎の面倒を見つつ、我が軍の軍略を考えている苦勞人を思い出す。

「……じゃあ、ちょっとくら労働して……」

……………パキン……………

……や、いくら気をつけても人間なんだから間違いはある。

でもこれは流石にないんじゃないかな……？

何が起きたのか結論からいうと、俺は中腰で移動しようとした時に小枝を踏んだ。

いくら小枝だからといっても、こんな緊張感マックスのこのタイミングだ。

流石に夏侯淵達武将はもちろん、魏兵でも気付いた。

「何奴つ!?!」

幸いまだ姿は見られてはいないようだが、そんなもの何の慰めにもならない。

こういう時はとりあえず……

(笑えばいいと思うよ)

……  
天使<sup>あまじか</sup>、うっさい!

「……に、にゃあ〜」

(いや、流石にそれで何とかなるのは周泰ぐらいじゃないかしら?)

(……いや、まあ、定番だと思って……)

「……っ! そのふざけた声は孔融だな!?  
隠れてないで姿を見せろ!」

……いや、そりゃ無理っしょ……

姿見せた瞬間、お前にやられんじゃん。

「……そうか、あくまでしらばっくれるつもりだな？  
ならば、そのまま死ね！  
弓兵、放てえっ！！！」

夏侯淵は姉同様あまり堪え性がないのか？

そんな事を思ったが、とりあえずここにいれば蜂の巣になるのは確定なので、跳躍力に頼り木の上に登り、そのまま的にされない内に木々の間を跳び、一人の将の近くに飛び降りる。

「なっ！？」

「動くな！」

それ以上動くならこいつの命は保証しねえぞ」

そう言って、俺は青い短髪の子ビツ子を捕獲した。

「琉々っ！！！」

「典韋様っ！？」

どうやら俺が適当に人質にとった将はかなり重要な奴だったらしい。

あの夏侯淵が弓を構えたまま何もできなくなっているのが、その証拠だろう。

「まあ、そう殺気立つなって、夏侯淵？

俺は別に本気でこいつをどうこうするつもりはないんだから。

……ただ、少し俺の話を聞いてもらいたいただけなんよ」

俺の言葉に夏侯淵は凄い形相をしながらも自らの弓を下ろす。

「……その代わり、琉々に傷一つつけてみる。  
私は貴様を殺し尽くしてやる!」

……その殺し尽くすのがどんな状態だかわからんが、相当ヤバイのはわかった。

「秋蘭様、私の事はいいですから早く敵を……」

「ああ、お前は余計な事言ったって。

……で、こつちからの話だけだな、これからこの森に火が放たれるんよ。

で、俺は敵も味方も無駄に兵を失いたくないから提案なんだけど、俺らに降ってくんない?」

「くだらんな!

我らが貴様らに降るだと?

寝言は寝て言え。

我らのこの身、この魂は全て華琳様に捧げる為にあるのだ!

貴様らに降るのなら地獄の業火に焼き付くされる方がマシだな!」

……まあ、半ば予想してたけどなんでこいつらはこんなにも命を粗末にするのだろうか。

「はあ……」

あのさ、前に夏侯惇に言ったの聞いてると思っただけど、もっかい言っぞ?」

俺はそこで一度呼吸整え、そして以前言った事と同じ事言った。

「お前ら簡単に命粗末にすんじゃねえよ！」

降りたくないなら、また別の言い方があんだろっ！

あんたら武官はわかんねえかもしんないけどな、作戦を考える軍師達はいつもどうやってたら一番お互いに犠牲が少なく済むかを考えながら作戦を立案してんだよ！

それをいざ作戦実行時にお前らが真っ先に死ぬような事言ってるじゃねえっ！！」

俺は二回目という事もあり、少しは感情の制御をしながら怒鳴りつけた。

「……それに何回も言うが、俺は別に脅しに来たワケでも降伏勧告しに来たワケでもねえ。

そんなにすぐ死ぬとか言うなよ」

そして少し落ち着きながらそう言うと、捕まえていた将を夏侯淵の方に押し出す。

「……いったいどういつもりだ？」

夏侯淵は訝しげな目を向ける。

「どうもごうもねえよ。

……交渉だっけ言ったろ？」

今からこの森に火が放たれる。そしたらあっちの方に俺の部下が一人いるから、そいつの指示で森を出ればこっちからの追っ手はない。

……まあ、あっちから火が回る予定だから怖いんだっけたらそっちら森を抜けてもいいが、そっちには蜀の弓兵が待機してるからオスメはしないけどな」

俺は指差し、方向を指示しながら説明した。

「……我が散々華琳様を騙してきたお前の言う事を聞くとても？」  
人質がいなくなったからか、再び弓を構える夏侯淵。

「別に信じるかどうかはあんた次第だけど、よく考えてみるよ？  
俺がああ反董卓連合みたく本気になればお前らなんて、潰すのは容易いんだぜ？  
それなのにこうやって交渉しに来てんだ。  
そこら辺も少し考えて発言してくれや」

俺の言葉に夏侯淵は弓を構えながら考え、そして口を開く。

「……貴様の望みはなんだ？」

「……どうやら少しは俺を信じてくれるようだ。

それに対しての俺の要求は軽いもんだった。

「貸し1」

「……なんだと？」

「安いもんだろ？  
この場にいる兵達も含めた全員の命を貸し1だけで救えるんだぜ？  
しかも追っ手はないっつー特典付きだ。  
どう考えてもそっちに不利な点はないハズだぜ？」



「違う！そういう事ではない！  
何故我らを貸しなどという不確定なもので逃がしてくれるのだ！  
さっきも言っただろう？貴様程の力がある者ならば我らを簡単に殺  
せるのだろう！」

はあ……もう溜め息しか出てこねえよ、こいつらには。

「お前は勘違いしている。  
いいか、夏侯淵さん？

まず俺はお前らを殺すつもりは欠片もない。  
何故なら殺す事による利益よりも不利益の方が大きいからだ。  
そしてお前らに対しての貸しは不確定要素ではなく、必ず返しても  
らえるものだ。

以上、俺はその二つの点からここでお前らを殺すつもりはない  
ご理解頂けましたか？」

「……仮に貴様の言う通りだとして……」

と、夏侯淵が話してる途中で指示した通りに火が放たれた。

「か、夏侯淵様！典章様！ひ、火が……！？」

「俺は別にここで喋っててもいいが、そうするとそっちが困るんじ  
やねえか？」

ほら、さっさと行けよ。  
つか、こっちからから抜けてくれりゃあ、俺としても言い訳できる  
から都合がいいんだよ」

俺がいい加減ウンザリしながら言うと、夏侯淵は構えていた弓を下  
ろし、兵達に指示をした。

そして俺の方に振り向く。

「この借りは必ず返す！」

……そんなやられ役みたいな事を言った。

「楽しみにしとくわ」

だから俺はニヤリと笑って言ってやった。

## 第72話（後書き）

今回はあと2話程連続投稿できそうです。

## 第73話(前書き)

次でとりあえず連続投稿は終わり。

もう一つも書かないと……

## 第73話

SIDE ～夏侯惇～

秋蘭達が出発し、しばらくして突然頭痛に襲われた北郷が倒れながらも教えてくれた。

『秋蘭達は定軍山で待ち伏せしていた蜀の黄忠達によって討ち取られる』

私は未来の話とかそういう難しい事はよくわからないが、このままだと秋蘭がいなくなるのだけはわかった。

「秋蘭！今助けに行くからな！」

……だが、現実は無情だった。

なんと目的地の森が炎をあげて燃えていた。

「なっ！？し、秋蘭ーっ！！」

秋蘭の名を叫び、燃え盛る森に入ろうとした所を部下に止められた。

「夏侯惇様！？？」

行っってはダメです！

あの炎が見えないのですか！」

「見えぬ！」

私にはあの森にいる秋蘭の事しか見えぬ！  
だから、離せえ！……」

そう怒鳴り付け、力づくで部下を引き剥がすと、そのまま森に向かおうとし止まった。

「あらあら、救出部隊が来るにはちょっと速いんじゃないかしら？」

『秋蘭達は定軍山で待ち伏せしていた蜀の黄忠達によって討ち取られる』

北郷の言葉が甦る。

「貴様が黄忠かあ！？」

森の手前には『黄』の我門旗と共に黄忠の部隊がいた。

「ええそうよ」

「森に火を放つとは卑怯な真似をしてくれる！  
そこをどけえ！」

「火を放ったのは私じゃなくて孔融って将の指示なんだけど……」

困り顔で何かを言う黄忠だったが、聞き取れなかった。

「どく気がないのならば、貴様を殺して行くまでだああああ!!」  
言うと同時に駆け出す夏侯惇。

だが、その時黄忠の元に一人の兵がやってくると、黄忠は撤退命令を出した。

「総員撤退！遅れるな！」

突然の事に驚きはしたが、道が空くのなら都合がいい。

「隊を半分に分け、半分は私と共に夏侯淵隊と典韋隊の搜索！  
残りの半分は周りの警戒をしろ！」

この土壇場で夏侯惇は今までにない冷静な判断と指示をしたが、それは残念ながら無意味に終わった。

「姉者ーっ！」

なんと自分達の側面から夏侯淵隊と典韋隊が姿を見せたのだった。

~~~~~

S I D E 　　～ナナシ～

「初めまして、どーも。

姓を孔名を融。字を文举と言います。
貴女が黄忠さんでいいのかな？」

俺は亮と撤退してきた黄忠隊と、森の外で待機していた馬岱隊と合流した。

「ええ、そうよ。

……で、こっちにいるのが……」

「蒲公英は馬岱だよ！」

黄忠と馬岱の二人がここを指揮していた将のようだ。

「そうか。

これからはお互い盟友としてよろしく」

「こちらこそ。

それで、なんであの時撤退させるように指示したのかしら？」

まあ、黄忠の疑問もわからないでもないか。

「それが想定外の事が起こっちゃったのよ。

普通森に火を放ったら火から逃げるように森から出ると思うだろう？
じゃなくて連中は逆に火のある方から森を抜けてきたらしく、せつ
かく馬岱達に陣とってもらってたのがムダになっちゃったのよ。

で、しかも斥候によれば敵援軍が近くまで来てるみたいだし、逃げ
た夏侯淵達がいつ奇襲かけてくるかわかんなかったから、とりあえ
ず一時撤退したワケよ。

それにあそこで夏侯惇達とやったトコで、あんまりうまみがなかつ
たしな」

俺がそう言つと黄忠達は納得したのか、この件について何も言わなくなつた。

「それじゃあ、これから私達は蜀に帰るけど、貴方はどうします？」

蜀に、ねえ……

いくら同盟したといつてもあの劉備がいるんだろ？

ちよつとまだハードル高いな……

「や、俺は一回呉に帰るわ。」

なんせ呉のお姫様達との約束があるからね」

魏に行く前に約束したもんな……

俺はあの日にシャオと蓮華に約束した事を思い出して言った。

「それに今は送つたメンツで上手くやれてんだろ？」

だったら、わざわざ俺が行つて和を乱す事もないしな」

俺はそう言つて呉へ目指す為、黄忠達に背を向ける。

「孔融様っ!!」

だが、亮の呼び掛けにより足を止める。

「んー？どした？」

「……いえ、これといって用があるわけじゃないのですが……どうかお気をつけて」

亮は俺に何を気をつけろというのか……

まあ、きっと魏に行った事とかその辺からくる心配なんだろうけど

……

「問題ねえよ。」

誰に物言ってやがる」

俺は笑って言ってやった。

それが本当は何に対しての『お気をつけて』だったのか、俺が知るのはまだ先の事だった……

第73話（後書き）

次回もよろしくね

ばーい

あまつか
天使

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3731o/>

真・恋姫†無双 ~ナナシ編~

2011年11月6日06時07分発行